宮城県文化財調査報告書第35集

東北新幹線関係遺跡調査報告書
－Ⅰ－

昭和 49 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
日本国有鉄道仙台新幹線工事局

序

肥沃な仙台平野を舞台とする宮城県は，古くから各時代の遺跡に恵まれ，ゆたかなその自然環境とともに，価値ある歴史環境をかたちづくってきました。
このような貴重な先人の文化遺産を保護し活用するとともに未来へ伝えることは，現代に生きる私たちの責務と思います。近年，諸開発事業が進展するにつれて，文化財の保護が県政のなかで重要な位置を占めるにいたったのも当然のことといえましょう。

このたび，この遺跡の豊富な仙台平野を南北に縦貫して東北新幹線が計画され，昭和52年春開通を目標に建設されることになりました。事前協議の段階で，極力遺跡をさけることはできましたが，それでも決定路線内の再分布調査の結果，新たに発見された遺跡を含めて27遺跡が確認されております。これらの遺跡について県教育委員会と日本国有鉄道仙台新幹線工事局は，関係各方面の御協力をえて，昭和47年度より発掘調査を実施し，記録保存をはかることに努めてまいりました。本報告書は，昭和48年度発掘調査分の成果で，関係各位の御盡力により第1分冊として刊行する運びとなったものであります。厚く深謝の意を表します。

ここに本書が，記録保存の成果として，埋蔵文化財の活用に，さらには学問研究に役立つことを切に願ってやまない次第であります。

昭 和 49 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会
教 育 長 津 軽 芳 三 郎

例　　言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書第1分冊として，昭和48年度調査分の7遺跡について作成したものである。
2. 遺跡の記載は南から順に行なった。
3. 発掘調査は文化財保護課が担当し，各学校教職員，学生補助員の方々の協力をいただいた。
4. 調査及び整理において次の方々と機関からご指導、ご助言を賜った。（敬称略）

   芹沢長介（東北大学文学部教授）
   岡田茂弘（多賀城跡調査研究所々長）
   興野義一（県遺跡指導委員）
   工藤雅樹（東北歴史資料館準備室）
   須藤　隆（東北大学文学部助手）
   安田喜憲（東北大学理学部博士課程）
   岡村道雄（東北大学文学部修士課程）
   東北大学文学部考古学研究室
   宮城県多賀城跡調査研究所
5. 石器の材質については吉田武義氏（東北大学理学部博士課程）他のご教示によるところが大きい。また青木博，大築新氏（東北大学理学部学生）には西野田，岩切鴻ノ巣両遺跡で竪穴住居跡内の熱残留磁気測定を行なっていただいた。
6. 整理協力者

   東北大学学生
   佐久間豊，辻秀人，泉武夫，笹原百合子，柳瀬和幸，河又えり子，桜井薫
   東北学院大学学生
   佐藤正人，清水毅，門間俊彦，橋本博幸，渋谷享，工藤弘之，佐藤房枝，田中礼子，門馬敦子，我妻智恵子，原志津，相沢里枝子，志間玲子，相沢史子，紫桃尚子，宍戸美智子
   宮城教育大学学生
   今野祐子
   宮城学院女子大学
   志間厚子
7. 整理，報告書の作成は，志間泰治，氏家和典係長のもとに文化財保護課調査係が行なった。

   各遺跡の整理，執筆分担は次のとおりである。〔 〕内は分担責任者

   総　　括　　ー藤沼邦彦
   山下横穴　　ー〔佐々木安彦〕田中則和
   荒屋敷横穴　ー〔佐々木安彦〕田中則和
   北台遺跡　　ー〔佐々木安彦〕丹羽茂
   西野田遺跡　ー〔丹羽茂，柳田俊雄，阿部恵〕小井川和夫，佐々木安彦，斉藤吉弘，工藤信一，遊佐二郎，熊谷幹男，中島直
   岩切鴻ノ巣遺跡　ー〔白鳥良一，加藤道男〕佐々木氏禎，小井川和夫，工藤信一，柳田俊雄，遊佐二郎，熊谷幹男，中島直
   沢乙遺跡　　ー〔加藤貞子，田中則和〕
   中の茎Ａ遺跡　ー〔加藤道男〕阿部恵

目　　次

荒屋敷横穴古墳群

1. 遺跡の環境と立地 …… 3
2. 調査の経過 …… 5
3. 調査内容 …… 6
4. 出土遺物 …… 8
5. 考察とまとめ …… 9

山下横穴古墳群

1. 遺跡の位置と立地 …… 11
2. 調査の経過 …… 11
3. 調査内容と考察 …… 13
4. まとめ …… 13

北台遺跡

1. 遺跡の位置と立地 …… 15
2. 調査の経過と内容 …… 15
3. まとめ …… 17

西野田遺跡

Ⅰ. 遺跡の位置と環境 …… 19
位置と地形 …… 19
周辺の遺跡 …… 20
Ⅱ. 調査の方法と経過 …… 21
調査の方法 …… 21
調査の経過 …… 22
報告に際して …… 23
Ⅲ. 発見された遺構と遺物 …… 25
1. 台地上の遺構と遺物 …… 25
2. 低地の遺構と遺物 …… 97
3. 表土から発見された遺物 …… 104
Ⅳ. 遺構とその出土遺物に関する問題点 …… 119
1. 古墳時代の住居跡とその出土遺物 …… 119
2. 円形周溝 …… 136

3. 平安時代の住居跡とその出土遺物 137
Ⅴ. 表土および低地から発見された遺物に関する問題点 143
Ⅵ. 遺跡の構成 150
旧石器時代・縄文時代 150
弥生時代 150
古墳時代 150
平安時代 152
Ⅶ. まとめ 154

岩切鴻ノ巣遺跡

Ⅰ. 遺跡の立地と環境 161
Ⅱ. 調査の経過 163
Ⅲ. 遺物包含層および発見遺構 166
1. 遺物包含層 166
2. 発見遺構 168
Ⅳ. 出土遺物とその考察 183
〔1〕. 土器について 183
1. 弥生土器 183
2. 土師器 183
3. 須恵器 246
4. 施釉陶器 249
5. 中世陶器 251
6. 中世以降の施釉陶磁器 255
〔2〕. 土器以外の遺物について 256
1. 祭祀遺物 256
2. 土製支脚 260
3. 土錘 260
4. 石器 261
5. 石製品 265
6. 瓦 267
7. 鉄製品 267
8. 古銭 268
Ⅴ. 調査の成果と問題点 269
(附) 中世における留守氏と岩切鴻ノ巣遺跡 270

沢乙遺跡

1. 遺跡の立地と歴史的環境 ……275
2. 調査経過と層位 ……278
3. 発見遺構と出土遺物 ……280
4. 出土遺物とその考察 ……283
5. 遺構と包含層についての考察 ……291
6. まとめ ……294

中ノ茎A遺跡

1. 遺跡の位置と立地 ……297
2. 調査の経過 ……299
3. 出土遺物 ……299
4. まとめ ……301

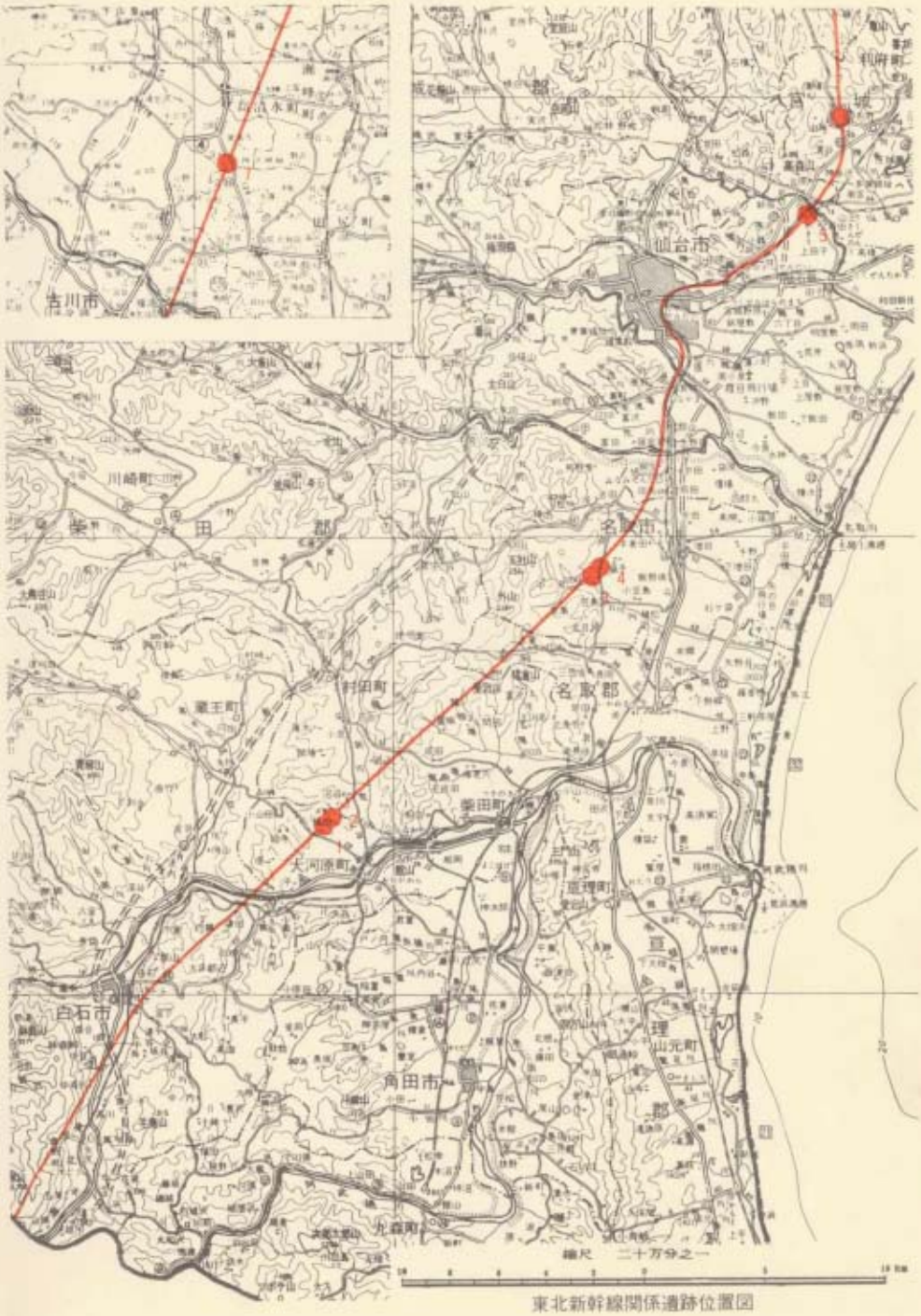
図　　版

(1) 荒屋敷横穴古墳群 ……303
(2) 山下横穴古墳群 ……305
(3) 北台遺跡 ……307
(4) 西野田遺跡 ……309
(5) 岩切鴻ノ巣遺跡 ……339
(6) 沢乙遺跡 ……365
(7) 中ノ茎A遺跡 ……371

調　査　遺　跡

調査主体者　宮城県教育委員会
　　日本国有鉄道仙台新幹線工事局
調査担当者　宮城県教育庁文化財保護課

遺跡番号	遺　跡　名	所　　在　　地	調　査　期　日
1	荒　屋　敷	柴田郡大河原町福田字荒屋敷	7月20日～7月31日
2	山　　下	柴田郡大河原町福田字山下	7月23日～8月4日
3	北　　台	名取市愛島塩手字北台	9月5日～9月9日
4	西　野　田	名取市愛島塩手字西野田捨石中・下	7月3日～12月27日
5	岩切鴻ノ巣	仙台市岩切字鴻ノ巣	1月10日～1月20日 4月25日～6月30日
6	沢　　乙	宮城郡利府町沢乙	11月1日～11月27日
7	中ノ茎A	栗原郡高清水町中茎	11月5日～11月22日



東北新幹線関係遺跡位置図

東北新幹線と関係遺跡の調査

東北新幹線にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、文化庁と日本国有鉄道との覚書により、宮城県教育委員会がその調査にあたっている。昭和46年度に予定路線の発表が行なわれたが、それに伴なって県教育委員会は、路線内に含まれる埋蔵文化財関係遺跡の分布調査を実施し、27遺跡の存在を確認した。これらの遺跡の記録保存を目的とした発掘調査は、昭和47年度に5遺跡、昭和48年度には6遺跡と順次実施してきた。

昭和48年度は、47年度からの継続調査となっていた仙台市岩切の鴻の巣遺跡から始まった。7月には仙台変電所建設敷地予定になっていた名取市西野田遺跡の用地買収が完了し、立木伐採がかなり進展したので発掘調査に入った。この遺跡は32,000m^{2}という膨大な範囲にわたっていたため、本年度内の発掘調査完了が危ぶまれていたが、夏には県内学校教職員の援助や、宮城県名取高等学校郷土史クラブ生徒諸君らの献身的作業協力が実を結び、49年1月には調査を完了することができた。学校教職員の夏季期間の援助は、大河原町荒屋敷（福田）横穴や山下（千塚A）横穴の発掘調査においても行なわれた。高清水町中ノ茎遺跡の発掘調査は、当初6月から調査を開始する予定であったが、用地買収の関係で開始が遅れ、変電所建設敷地予定と

文化財保護課

課　長		西川　十郎						
課長補佐		村上　　正						
総務係	係　長	桜井　雄二	調査第1係	係　長	志間　泰司	調査第2係	係　長	氏家　和典
	主　事	佐藤　博重		技　師	藤沼　邦彦		技術主査	佐々木茂禎
	〃	小笠原　任		〃	小井川和夫		技　術	白鳥　良一
				嘱　託	斎藤　吉弘		〃	丹羽　　茂
管理係	係　長	扇　　正人		〃	工藤　信一		〃	加藤　道男
	主　事	佐藤はちえ		〃	遊佐　二郎		嘱　託	佐々木安彦
	〃	渡辺　和彦		〃	熊谷　幹男		〃	田中　則和
				〃	加藤　貞子		〃	阿部　　恵
保護協会	書　記	蜂谷マサ子		補助員	松本みち子		〃	柳田　俊雄
					菊地　恵子		〃	中島　　直
							補助員	八幡　恒一

なっていた中ノ茎Ａ遺跡のみ、起工承諾の形で11月になって調査に入った。利府町沢乙遺跡は、当初49年度に調査する予定であったが、用地買収の進渉にともない、11月に中ノ茎Ａ遺跡の調査と併行して実施した。

これらの遺跡の状況については別章のとおりであるが、なかでも鴻の巣遺跡と西野田遺跡での成果は注目される。前者は、七北田川の氾濫によってできた堆積層中から、東北土師器の編年研究上好資料となる多くの土師器が発見された。後者では、名取平野の丘陵状台地でこれまで発見例が少なく、その内容が明らかでなかった古式土師器を伴なう古墳時代前期の集落遺構を検出することができ、さらに、性格は明らかではないが、円形周溝状の遺構が検出されて、今後への問題を提起することとなった。またここでは、県内ではこれまで出土例が少ない旧石器時代のナイフ形石器なども出土している。

発掘調査にあたっては、宮城県遺跡調査指導委員会の指導助言をいただき、また県内の関係教育事務所、市町村教育委員会、文化財保護委員会、行政区長をはじめとする地元各位に絶大な援助と協力をいただいた。とくに学校教職員の派遣を認められた県内各学校には、多大の御迷惑をおかけした。深く感謝の意を表したい。

(1) 荒屋敷横穴古墳群

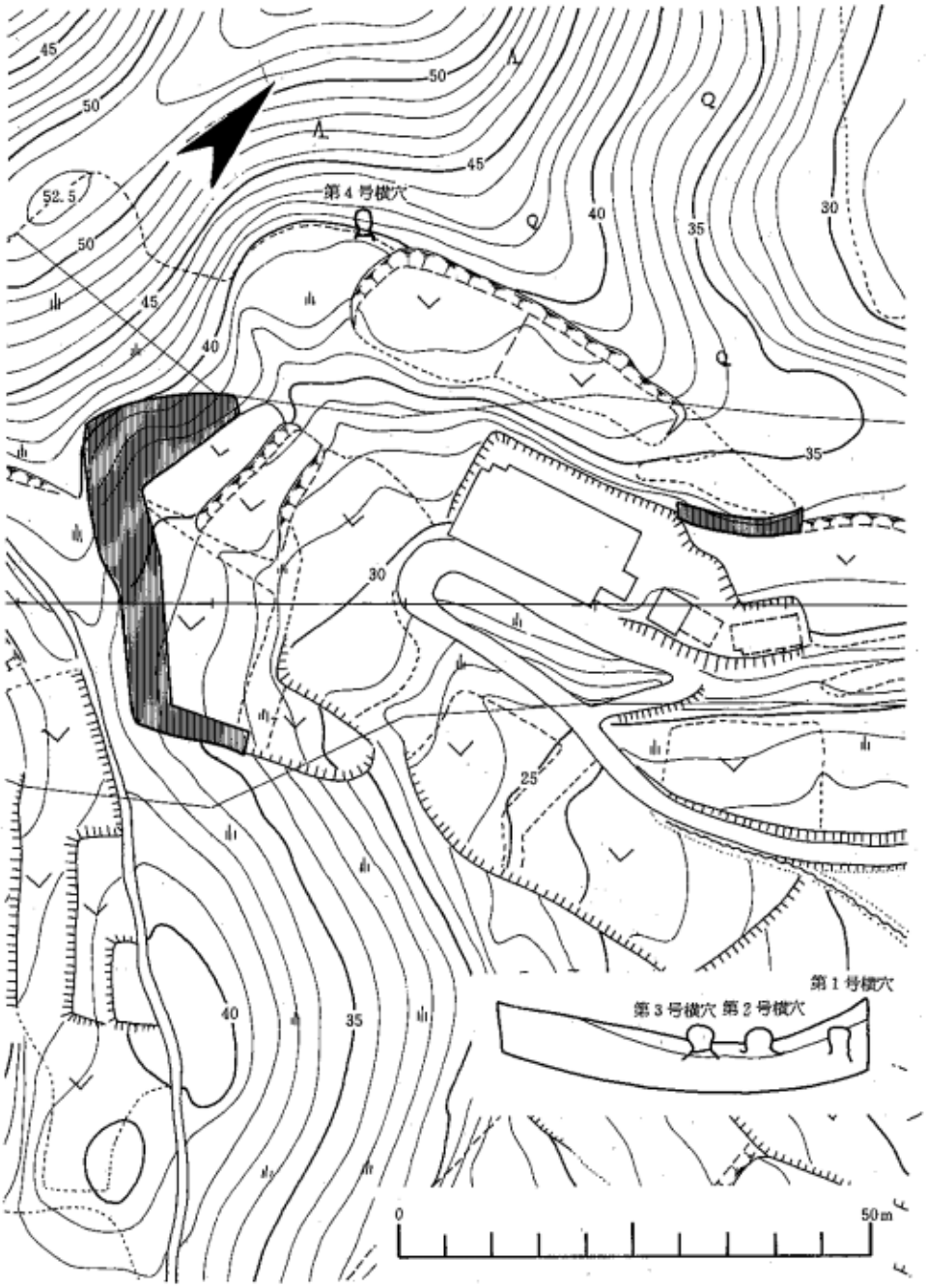
遺跡所在地：柴田郡大河原福田字荒屋敷
調 査 期 間：7月20日～7月31日
調 査 面 積：316m^2
発 掘 面 積：316m^2
遺 跡 記 号：ＢＲ

1. 遺跡の環境と立地（第1図）

大河原町西方には遠く南北に走る奥羽山脈から分岐してのびる標高100m内外の仙南丘陵がみられる。この丘陵の大部分は第3紀の凝灰岩、砂岩などからなっている[(1)]。白石川がこの仙南丘陵をぬうように蛇行して流れ、沖積平野を形成している。この平野から丘陵にかけては数多くの古墳が確認されている。全長約75mの千塚山古墳（前方後円墳）をはじめ、嶋館古墳（前方後円墳）、千塚古墳（円墳）などの高塚古墳と千塚B横穴古墳群、打越横穴古墳群、寄井横穴古墳群、道上横穴古墳群、新寺横穴古墳群、青木横穴古墳群、薬師横穴古墳群などがそれで、本横穴古墳群もそのうちの一つである。これらの古墳はこの平野の農業生産を基盤として成立したものであろう。

仙南丘陵の一部は大河原町と蔵王町の境を接する愛宕山丘陵となるが、本横穴古墳群はこの愛宕山丘陵から東方にのびる標高50m前後の起伏をなす小丘陵のほぼ中央東側に広がる小さな谷あいの南東斜面に立地している。大河原町の中心から北西に約3kmはなれており、現状は畑地と雑木林である。

第1図　荒屋敷横穴古墳群の位置と主要遺跡



第２図　地形図と横穴配置

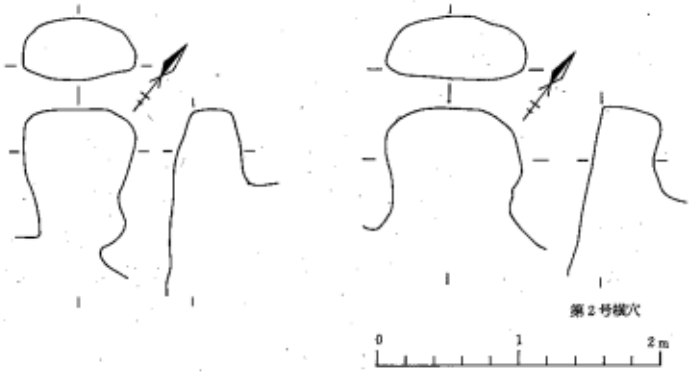
2. 調査の経過（第2図）

本横穴古墳群は昭和46の遺跡分布調査[(2)]の際、新たに発見されたもので、その際南から東南斜面にかけて凝灰岩に掘り込まれた7基の横穴古墳群が確認された。

今回発掘調査した地域にはこれらの横穴群は含まれていないが、同じ凝灰岩の崖面として連なるため、未確認の横穴古墳が存在することが予想されたので調査を実施したものである。

調査はまず、横穴古墳が埋没していると考えられた降線敷内の丘陵の尾根にそった西斜面から北斜面にかけての畑地から開始し、幅 2mのトレンチ掘りと崖面の全面発掘を行なった。また谷あいの東南斜面中央、標高 33m付近に 6 基の横穴が開口しているのが確認されていたため、付近の崖面を全面発掘した。なお 6 基のうち 3 基の横穴については地主が芋を貯蔵するために掘った穴であることが確認されたので、他の 3 基の小横穴について精査を行なった。調査面積は合せて 316 m^2 である。

調査では表土を剥ぎ、凝灰岩の面を露出させる作業を行ない遺構の検出に努めたが、トレンチおよび崖面いずれにおいてもこれらの横穴以外には遺構は検出されなかった。すでに存在の確認されていた 3 基の小横穴（第 1～3 号横穴）からは出土遺物はなかった。また路線敷外ではあるが標高 40mの南斜面にすでに開口している横穴古墳（第 4 号横穴）があり、崩落のおそれがあるため、地主の高橋倫治氏のご理解を得て、今回あわせて実測図作成のための調査を行なっ



第3図　横穴実測図

た。この横穴では前庭部から遺物がわずかに発見できたのみである。

3. 調査内容

第1号横穴（第3図）

この小横穴は高橋倫治氏宅の北東隅にあり、平面形は奥壁コーナー付近が隅丸になる羽子板形で、立面形はドーム形を呈する。大きさは奥行85㎝、幅92㎝、高さ44㎝である。左側壁は一部剥落している。横穴全体にかけて風化剥落が進んでおり、横穴内外には何んの施設もない。埋土はなく、流入土が床面をわずかに覆っていた。出土品はない。

第2号横穴（第4図）

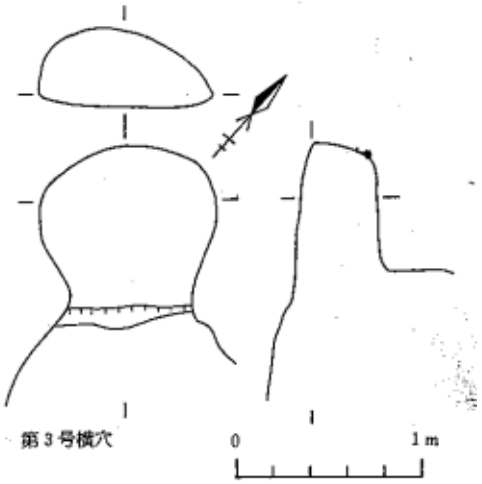
本横穴は第1号横穴の約3m西にある。平面形は奥隅丸のほぼ方形で、立面形はドーム形を呈している。奥行85㎝、幅92㎝、高さ44㎝の大きさである。横穴全体が風化し剥落が著しい。
しかし天井部には幅3～5㎝の細く丁寧なノミ痕が奥壁に向ってつけられているのが認められた。横穴内外に溝などの施設はない。埋土はなく、流入土が奥壁床面で20㎝ほどあったが出土品はなかった。

第3号横穴（第5図）

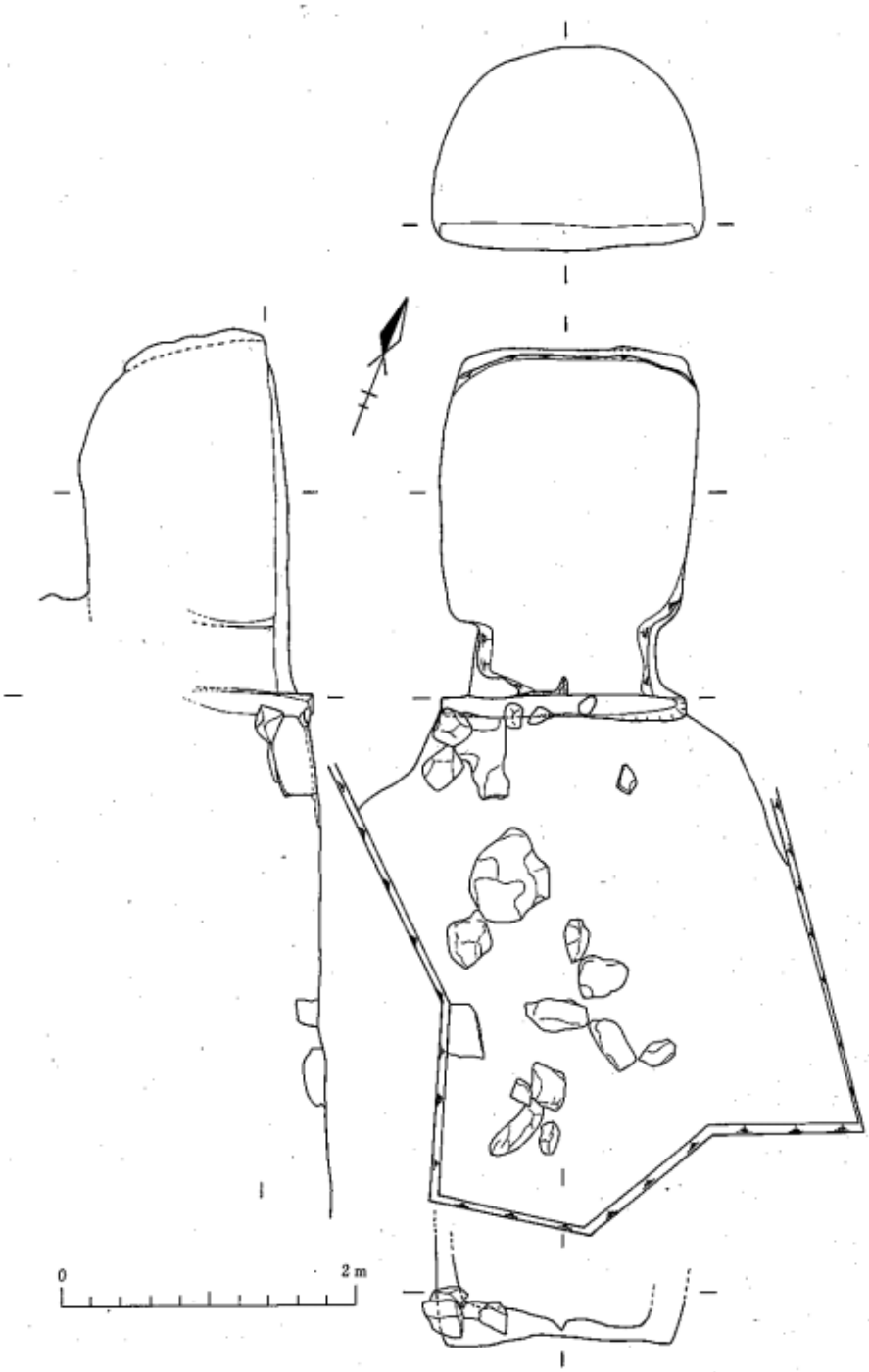
この横穴は第2号横穴のすぐ西にある。平面形は半楕円形であり、立面形はアーチ形に近い。大きさは奥行88㎝、最大幅94㎝、高さ45㎝である。横穴の保存状況は悪く、奥壁から入口にかけて風化した剥落が目立つ。しかし天井部には第2号横穴よりわずかに粗いノミ痕がみられる。入口前端に6㎝の段落が検出されたが性格は不明である。排水溝などはない。埋土はなく、流入土が床面に多少みられた程度であった。出土品はない。

第4号横穴（第6図）

第3号横穴より西へ約50m離れた南斜面にある。玄室の平面形はほぼ方形で両袖をもち、立面形はドーム形である。奥行196㎝、幅177㎝、高さ136㎝の大きさである。奥壁、床面の一部は後世に貯蔵用の穴として使用されたために削平を受けている。天井から右側壁にかけて幅10㎝のノミ痕が粗雑につけられている。玄門の天井

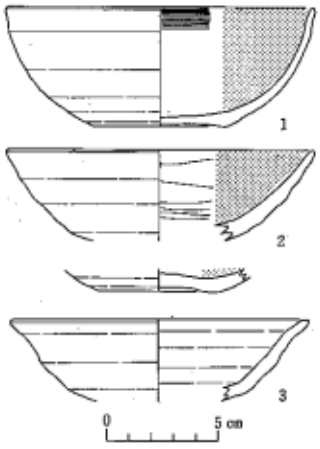


第４図　横穴実測図



第５図　第４号横穴実測図

は剥落しており、床面に近い部分で、長さ46cm、幅130cmの範囲だけが現存している。玄門前端には長さ166cm、幅14cm、深さ12cmの閉塞溝がある。羨道部、羨門部はなくすぐ前庭部となる。
前庭部には閉塞用に使用されたと思われる角礫が検出されたが、これはすでに原位置を移動していると考えられた。前庭部右側には後世に掘削された溝がある。玄室内には流入土がわずかにみられたが遺物はなかった。前庭部では土砂を除去した際に数点の土器破片が発見された。



第６図　土師器実測図

4. 出土遺物（第7図）

今回の調査で出土した遺物はすべて第4号横穴前庭部から発見された土器のみである。細片が多く不明な点が多いが内訳は土師器（坏・甕）破片と赤焼土器（坏）破片である。（実測図はすべて図上復元のものである）

土師器

〈坏〉

坏1　小破片であるが底部から口縁部まで現存している。比較的薄手の土器で、口径13.8cm、器高5.5cmである。体部は底面から内弯気味に上方に立ちあがり口縁にいたる。底部は平底である。器表面にはロクロ調整の痕が認められる。内面は荒れており、黒色処理だけが観察できた。

坏2　体部と口縁部の約1/3が現存している。口径13.8cm、現存部分で器高4.1cmで、体部から口縁部にかけわずかに内弯しながら口縁端部に達する。器表面にはロクロ調整のあとが認められている。内面に黒色処理がなされ、底面では放射状に、また体部から口縁部では横方向にヘラミガキが施されている。

坏3　底部と体部･口縁部のわずかな破片である。底部から体部にかけて内弯気味に立ちあがり口縁部に達する。器表面にはロクロ調整の痕が溜められる。底部の切離しは右回転の糸切り手法で、底面の再調整は不明である。内面には黒色処理がなされているが、器面が荒れているため、ヘラミガキの方向は不明である。

坏4　底部はなく、体部・口縁部約1/3が現存し、口径13.4cm、現存する器高3.7cmである。

体部はわずかに内弯気味に開く。器面内外ともロクロ調整で、内面のミガキ、黒色処理などの再調整は全く認められず、色調はにぶい黄褐色を呈している。いわゆる「赤焼土器」[3] である。

〈甕〉

口縁部・体部の細片だけであるが小形の甕と思われる。ロクロ調整の痕が観察される。

5. 考察とまとめ

(1) 今回調査した横穴は、構造、形態、施設などから第1～3号横穴と第4号横穴の二者に区分される。第1～3号横穴は白石市郡山横穴古墳群[4] と形態などに類似点もあるが個々の横穴の平面形はそれぞれ異なり、規模も小さく造り方も粗雑で、これらの西にある後世の貯蔵用の穴と似ている点もあり、横穴古墳とするにはなお不明な点が多い。第4号横穴は両袖式玄室、玄門、前庭の構造をもつ陸前地方に一般的な横穴古墳である。[5]

(2) 遺物は第4号横穴の前庭部から出土したものだけである。年代は平安時代に属すると思われる。出土状況からみて、後世に貯蔵用の穴として再使用された際に土砂と共に前庭部に捨てられたものと思われる。これらの土師器が本横穴の使用年代と直接関連するものであるかどうかは不明である。

(3) 今回の調査により本横穴群は路線敷内にまではおよんでいないと思われる。むしろ路線敷外である第4号横穴古墳の西側の南斜面一帯にわたっているものと推定される。

付記

1. 本横穴群は遺跡地名表での名称を「福田横穴古墳群」としていたが、今回小字名を取り、「荒屋敷横穴古墳群」と改めた。
2. 本調査および山下横穴古墳群の調査に御協力いただいた方々は下記の通りである。深く感謝の意を表したい。

調査協力員

早坂春一・高倉淳・遠藤久七・新庄屋元晴・高橋守克・後藤利喜郎・佐藤隆

調査補助員

橋本博幸

地元協力者

渡辺小十郎・富川清・高橋倫治・高橋今朝信・山田弘・高橋利平・坂口喜八・
渡辺修・渡辺良一・山田芳典・小関広志・山田勝志・山田重吉・山田忠太郎・
小野茂右衛門・山田とみ子・阿部貞子・阿部和子

調査協力機関

大河原町教育委員会

註

⑴ 「土地分類図（宮城県）付属資料」経済企画庁総合開発局（昭和47年）

⑵ 「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書第27集（昭和47年）

⑶ 宮城県多賀城跡調査研究所年報『多賀城跡』（昭和44～47年）

⑷ 「白石市郡山横穴古墳群」白石市文化財報告書第11号（昭和47年）

⑸ 氏家和典「辺境における横穴古墳群の諸問題」「日本考古学の諸問題」（昭和29年）

氏家和典「東北の横穴」考古学ジャーナル（昭和42年）

（2）山下横穴古墳群

遺跡所在地：柴田郡大河原町福田字山下
調 査 期 間：7 月 23 日～8 月 4 日
調 査 面 積：
発 掘 面 積：
遺 跡 記 号：ＢＳ

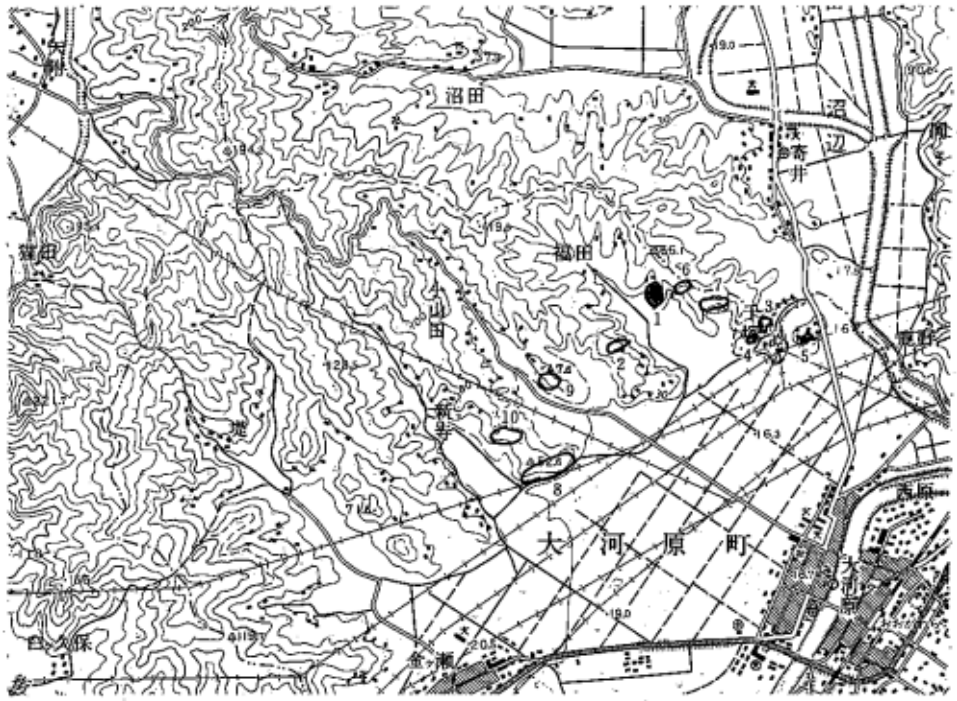
1. 遺跡の位置と立地（第1図）

本遺跡は柴田郡大河原町福田字荒屋敷にあり、大河原町の中心部より北西約3kmに位置する。大河原町の西部には仙南丘陵が南北にはしり、その一部である愛宕山丘陵の東麓、標高約25mの場所に本横穴古墳群が構築されている。現状は松林と雑木林である。

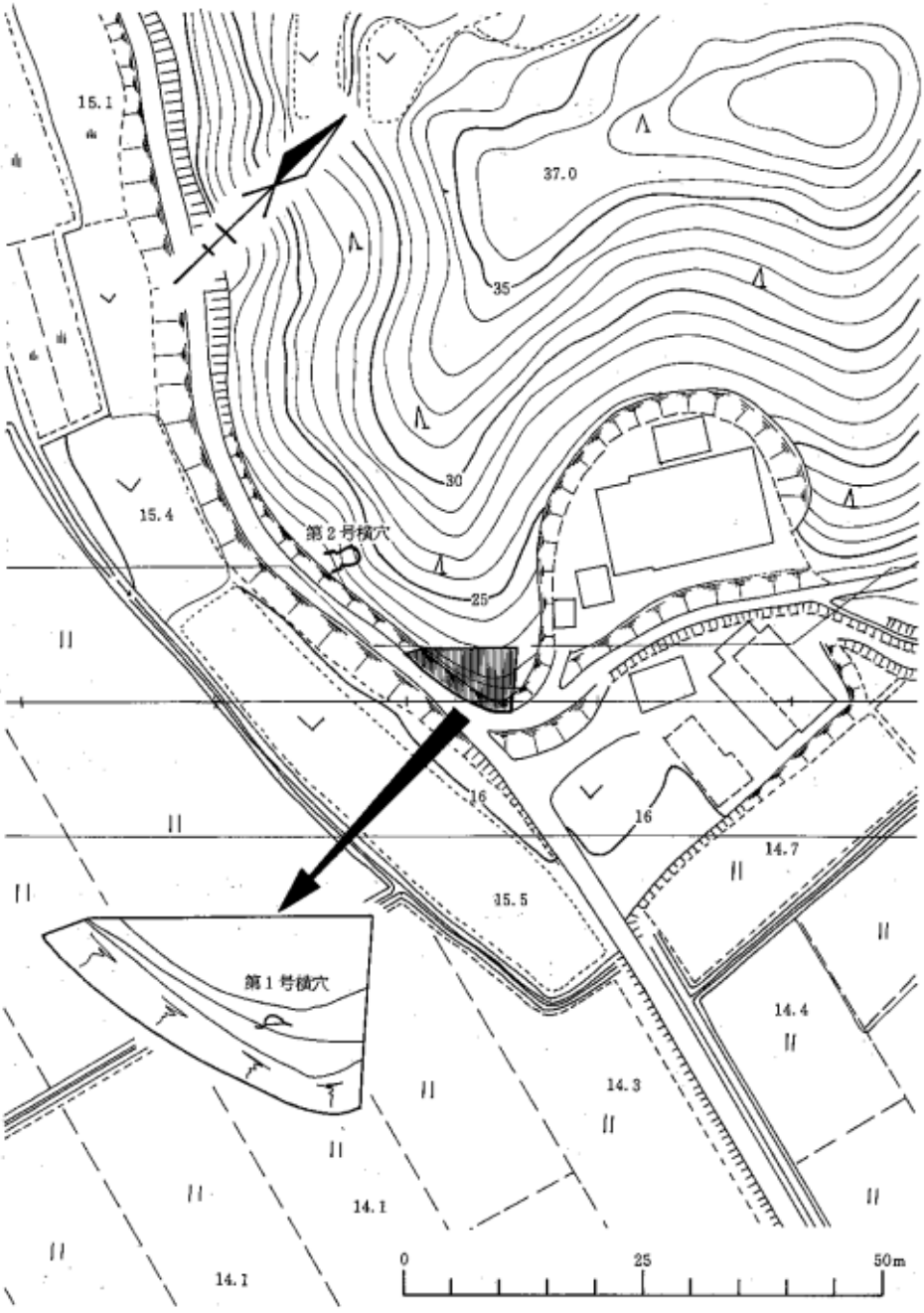
この付近には縄文時代以降、多数の遺跡がある。集落遺跡としては縄文時代の小山田遺跡、弥生時代から平安時代にわたっている台ノ山遺跡が[(1)]ある。古墳には千塚山古墳、嶋館古墳（前方後円墳）、千塚古墳（円墳）、新寺横穴古墳群、道上横穴古墳群、打越横穴古墳群がある。

2. 調査の経過（第2図）

昭和46年度の分布調査の際、今回発掘調査した地域から約10m西に離れた松林の中に、凝灰



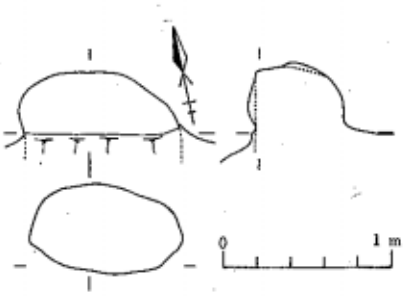
第1図　山下横穴古墳群の位置と主要遺跡（白石：5万）


15.1
37.0
35
30
25
15.4
第2号横穴
16
16
14.7
35.5
第1号横穴
14.4
14.3
14.1
14.1
0
25
50m

第2図　地形図・横穴配置

岩に堀込まれすでに開口した横穴古墳（第2号横穴）を発見した。[2]

今回調査した地域はこの第2号横穴と同じ凝灰岩の崖面が連なるため、横穴古墳群の存在が考えられた地域である。調査は東北新幹線路線敷地内の南斜面全体を発掘し、横穴古墳の有無を確認することから始まった。表土を剥ぎ、凝灰岩の面を露出した結果、調査地域の中央部斜面で小さいな横穴が一基（第1号横穴）検出されたが、他に遺構はみられなかった。



第３図　第１号横穴実測図

3. 調査内容と考察

第1号横穴（第3図）

横穴全体が非常に属化している。平面形はほぼ楕円形を呈し、天井は丸味をおびている。奥行37cm、巾91cm、高さ56cmの大きさである。天井部、床面は特に風化剥落が激しい。流入土が横穴内に半分ほど堆積していたが、出土品はない。

精査の結果、この横穴は出土品もなく、形態や造り方などからみて横穴古墳とは断定できなかった。

第2号横穴

路線敷外にあるがすでに開口していたので、第1号横穴の調査と平行して観察を行なった。玄室の平面形はほぼ方形である。玄室内の大部分は後世の改造を受けているが、玄室前端および天井部は遺存していた。奥行約218cm、内約208cm、高さ153cmの大きさで、立面形はドーム形をしていたものと推定される。玄門天井部はすでに崩落している。玄門下部から前庭部にかけては土砂が堆積しているため、羨道、羨門の状況は観察できなかった。

4. まとめ

今回の調査では横穴古墳と断定できる遺構は検出されず、横穴群が路線敷に及んでいないことが確認された。しかし路線敷の西方には既に開口した横穴古墳が発見されており、山下古墳群はより西側に展開しているものと予想される。

付記

1 本横穴群は遺跡地名表での名称を「千塚Ａ横穴古墳群」としていたが、今回、小字名を取って「山下横穴古墳群」と改めた。

2 発掘調査で御協力いただいた方々は、荒屋敷横穴古墳群の調査と同じである。深く感謝申し上げたい。

註

⑴ 「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書第27集（昭和47年）

⑵ 「東北新幹線関係遺跡発掘調査略報」宮城県文化財調査報告書第30集（昭和48年）

(3) 北 台 遺 跡

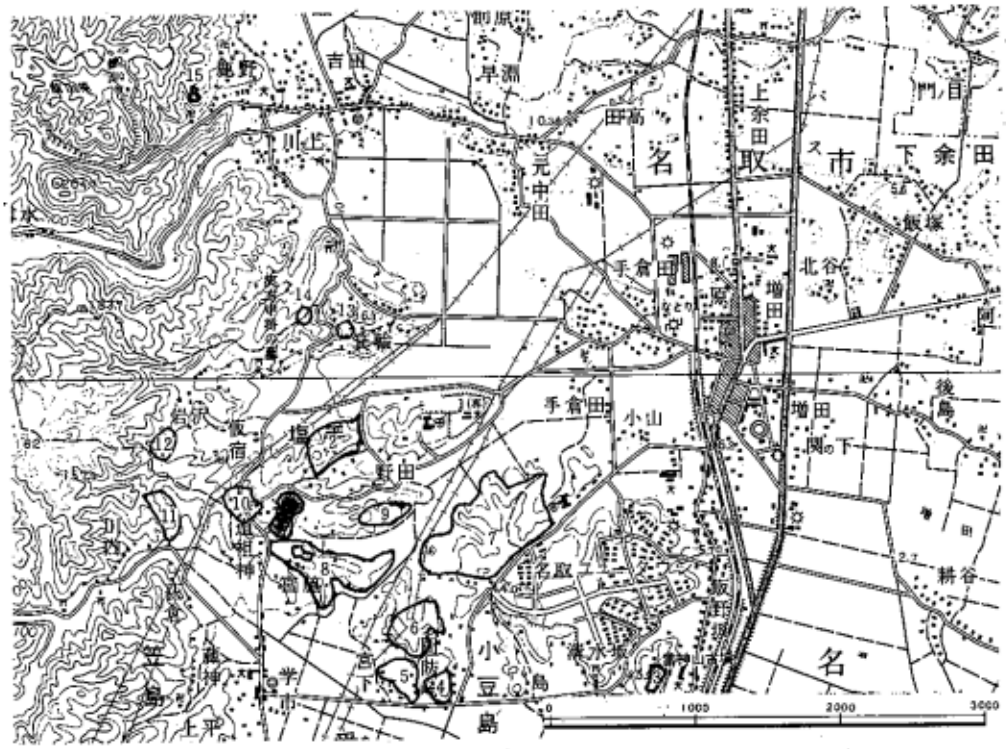
遺跡所在地：
調 査 期 間：
調 査 面 積：
発 掘 面 積：108m^2
遺 跡 記 号：

1. 遺跡の位置と立地（第1図）

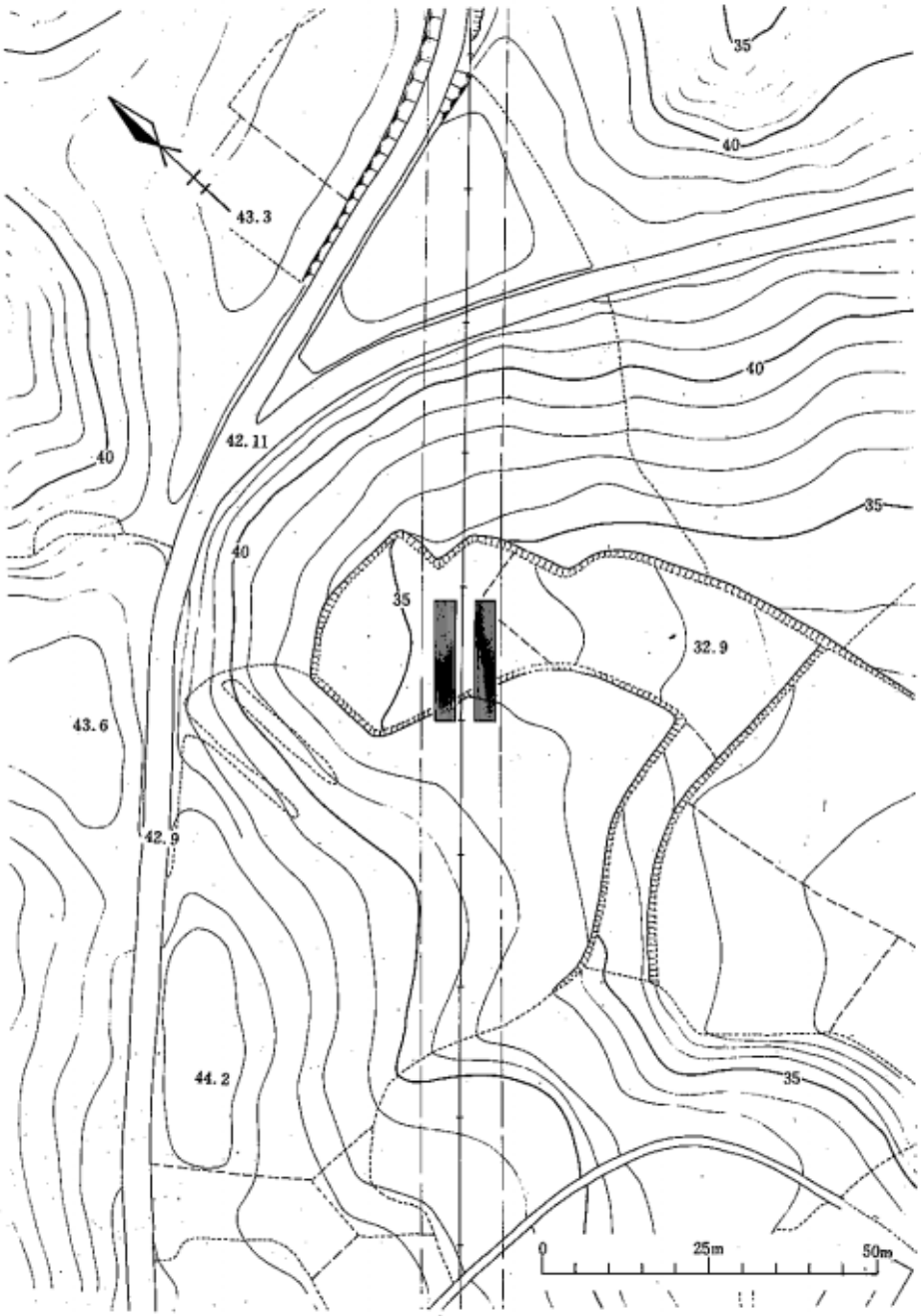
本遺跡は名取駅より南西へ約5kmの位置にある。名取市西部には蔵王連峰から東方にのびる標高20m前後の高館丘陵地帯がある。この丘陵から標高30～50mの小丘陵が枝状に分岐し、東側に突き出ている。箕輪丘陵、野田山丘陵、北台丘陵、愛島丘陵などがそれである。本遺跡は北台丘陵南斜面の、丘陵端から谷あいの斜面にかけて立地している。今回発掘調査した地域はこの丘陵の小さな谷あいの部分に位置し、西野田遺跡（本書所収）より南西に約0.5km離れたところにあたる。

2. 調査の経過と内容（第2図、第3図）

昭和48年の遺跡分布調査の際に発見された遺跡で、縄文施文土器片、石匙、フレーク、土師



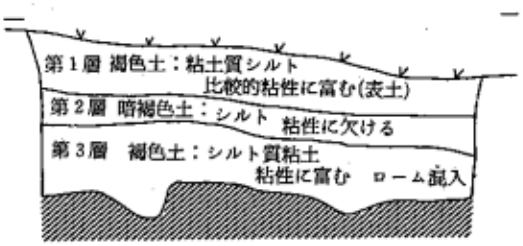
第1図 遺跡の位置と主要遺跡（岩沼5万）



第２図　地形図

器片などが散布していた。遺跡の一部が東北新幹線のトンネル出入口となるため、今回の発掘調査を実施することになった。路線敷となる谷あいの畑地に東西21×南北15mの調査区域を設定し、108m^{2}を発掘した。

基本的な層序は第1層表土、第2層暗褐色土層、第3層暗褐色土層、第4層ロー層（地山）である。層の堆積状況などから、二次堆積の可能性もある。



第３図 層位図（F － 2北壁）

遺物は第2層と第3層から縄文の施文された土器片が若干出土したのみである。遺構は検出されなかった。

3. まとめ

今回の発掘調査では縄文の施文された土器片が少数発見されたが、年代は縄文時代か弥生時代か判別できなかった。遺構は検出されなかった。しかし土器片が出土したことから路線敷外の丘陵上や、緩やかな斜面上にこれらに関連する遺構が存在する可能性が強い。

付記

発掘調査に協力いただいた方々は西野田遺跡の文末にまとめて記した。深く感謝したい。

(4) 西 野 田 遺 跡

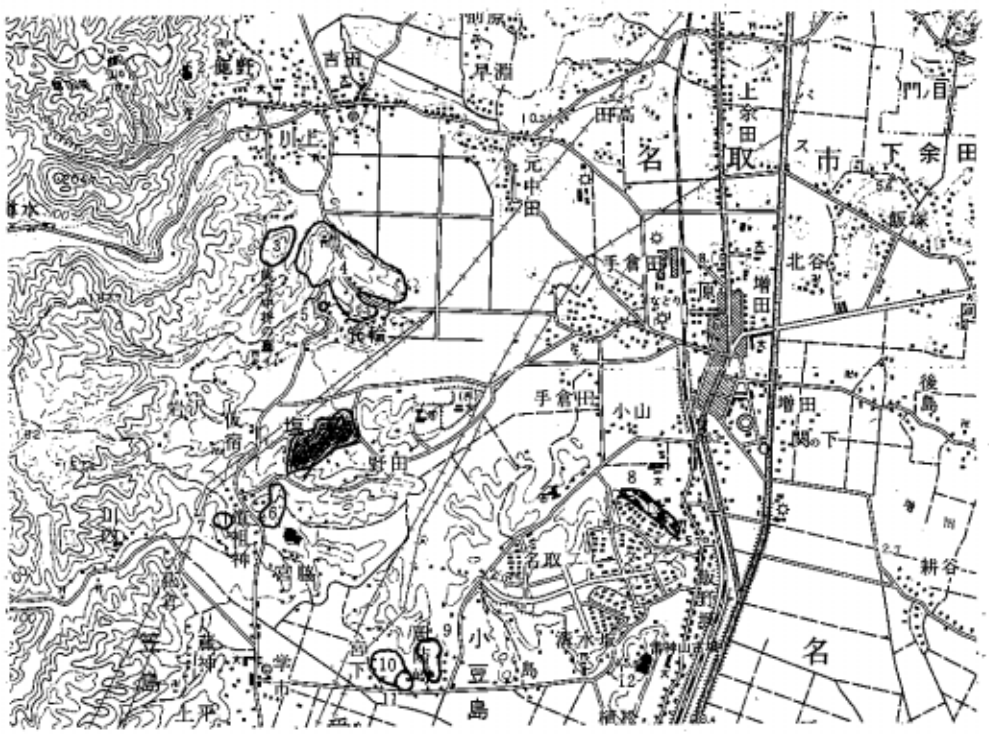
遺跡所在地：名取市愛島塩手字西野田
調 査 期 間：7 月 3 日～12 月 27 日
調 査 面 積：7,903m^2
発 掘 面 積：7,903m^2
遺 跡 記 号：ＢＴ

Ⅰ　遺跡の位置と環境

位置と地形：西野田遺跡は名取市愛島塩手字西野田・拾石中・拾石下に位置している。東北本線名取駅の西南西2.8㎞の地点である。

名取市の西方には遠く奥羽山脈に連なる標高200m前後の丘陵（高館山丘陵）が続いている。この丘陵は第三系中新統の火山岩類（高館安山岩）からなり、その東端には利府へ続く構造線が走っている。

高館山丘陵の東側には標高30～50mの箕輪･野田山・飯野坂・小豆島等の小丘陵群（愛島丘陵）が突き出している。これらの小丘陵は凝灰岩や砂岩からなる第三系鮮新統の竜ノ口層とそれを不整合におおう増田礫層を基盤として、その上に愛島火山灰層をのせている。中川氏等によればこの愛島丘陵は仙台の台の原段丘面、関東地方の下末吉面に対比されるという（中川他：1960）。愛島丘陵の前面には阿武隈川下流域に共通する有機質粘土層の発達した沖積層が



第１図　遺跡の位置（仙台・岩沼５万分の１地図）　※付周辺の主要遺跡

広がっており、その成因は河川の特性によるものと考えられている（安田：1973）。

西野田遺跡は野田山丘陵の西側に立地している。標高はもっとも高い部分で37.3mである。遺跡から周囲を見渡すと、北側に箕輪丘陵がある。野田山丘陵と箕輪丘陵の間には現在水田化されている沖積層が広がっている。遺跡の南側は、野田山丘陵から分岐した小丘陵と飯野坂丘陵が見渡せる。これらの小丘陵の間には幾本かの谷筋と狭小な沖積地があり、次第に幅を広げながら東側にのびている。

周辺の遺跡：西野田遺跡周辺の愛島丘陵群には遺跡が多い。縄文時代早期の遺跡として宇賀崎貝塚が小豆島丘陵の南端にある。この他、縄文時代の遺跡としては今熊野遺跡、金剛寺貝塚等が著名である。今熊野遺跡は縄文時代前期の集落跡であるばかりでなく、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺跡や遺物も発見されている（宮城県教育委員会：1973）。特に、方形周溝墓は古墳時代開始期の様相を考える上で極めて重要なものである。ほぼこの時期と思われる古墳として、宇賀崎1号墳や高館山古墳等が知られている。これらの古墳から雷神山古墳へ至る歴史的過程についてはまだ十分に明らかにされていない。

以上の他に、愛島丘陵とその周辺には原始・古代の遺跡が多く中世の館跡等も幾つか知られている。

Ⅱ　調査の方法と経過

西野田遺跡の調査の方法は、文化財保護課で他の遺跡に対して実施してきたものと基本的には同じである。しかし、遺跡の時期や特性に応じて部分的に異なる点もあるので、簡単にその概要を述べておきたい。

調査の方法

調査区の設定：遺跡の微地形に応じて、全体を西側台地･東側台地･北側低地･東側低地･堀と土塁（東側台地の北側裾部を中心としている）に大きく区分した。西側台地および北側低地は路線幅杭311^{K}740^{M}の北側（原点1Ａ）と南側（原点1Ｂ）を結ぶ線を基準とし、それに直交する線を設け3mグリットを組んだ。そして、原点1Ａを基準としてその北側を21区、南側を20区、東側をＤＴ区、西側をＥＡ区とし、それを延長してそれぞれグリッド名を付した。さらに、アルファベットによる区名の表記についてはＡ～Ｔを一つの大きな単位とし、その単位ごとに区別する方法をとった（ＤＡ～ＤＴ区、ＥＡ～ＥＴ区等）。

東側台地もほぼ同様である。路線幅杭311^{K}860^{M}の北側（原点2Ａ）と南側（原点2Ｂ）を結ぶ線を基準として3mグリッドを組み、原点2Ａの北側を21区、南側を20区、東側をＢＴ区、西側をＣＡ区とした。

東側低地も、路線幅杭311^{K}940^{M}の北側（原点3Ａ）と南側（原点3Ｂ）を結ぶ線を基準として3mグリッドを組み、原点3Ａの北側を16区、南側を15区、東側をＡＩ区、西側をＡＪ区とした。

東側台地の北裾をめぐる堀と土塁については3本のトレンチを設定し、東側から第1トレンチ、第2トレンチ、第3トレンチと呼ぶことにした。

発掘の方法：発掘の方法としては、5グリッドを単位としたトレンチを一列おきに設定し、遺跡における遺構の分布状況を検討した。その結果、台地上に関しては西側台地の東部と東側台地の北側斜面を除いてはほぼ全面を発掘することにした。

遺構の発掘に関しては次の点に留意した。第1点として遺構の検出される面を確認することである。これは遺構が構築された当時、どの部分から掘り込まれたかを検討するためのものであった。しかし、実際的には当時の地表面が浸蝕作用や後世の撹乱等のため失なわれていることが多く、遺構堀り込み面（旧地表面）と遺構確認面が一致したと言えるものはなかった。その中で、第3住居跡に関しては遺構確認面が表土下の黄褐色火山灰層でありながら、竪穴住居廃絶後の堆積土が竪穴の外にまで及んでいたことは興味深いものである。

第2点として、住居が廃絶された後、どのような過程を経ながら埋っていくのかを検討することである。そのために、あぜを十字に残し、四分法による発掘を実施した。層の形成過程と

遺物の関係を把握するために、層中に含まれる遺物と一時的安定面である層理面上にある遺物をできるだけ区別して取り上げるようにした。そのことによって、流入した遺物と人間の手によって直接廃棄された遺物を区別しようとしたが、十分徹底しない部分もあった。

なお、この時期も問題となるのは層位区分の方法である。今回は、まず層位が区分できる根拠をはっきりを示すために、土色・土性・混入物・間隙性・その他の性質について観察を行ない記録を作成した。土色については新版標準土色帖（小山・竹原：1967）を使用し、土性は国際土壌学会法による粒径区分を参照した。しかし土性に関してはサンプルを作成しておかなかったため、観察に幾分個人差が出てしまった。この点については今後解決していきたい。

認識された層は、共通する特徴によっていくつかの層群としてまとめ、層群相互の関係を検討することによって成因の理解に努めた。その成果に関しては、「住居（跡）の構造と廃絶後の状態」で述べてある。

第3点として、住居構築の手順と方法を検討することである。そのために住居跡の基本的次調査終了後、床面をさらに掘下り下げて掘り方の有無を調べた。

実測図の作成：発掘調査を実施した部分については、すべて$^{1}/_{20}$の平面図を作成し、レベルを記入した。また必要に応じて断面図も作成した。西側台地と東側台地の中央部は遣り方測量を実施したが、東側台地の北斜面と北側低地・東側低地は簡易遣り方測量を行なった。また、西側台地の東斜面の一部については平板測量を行ない等高線を書き入れた。東側台地の北裾をめぐる堀と土塁に関してはトレンチを入れる前に、東北地形社に依頼して再測量を行ない、$^{1}/_{500}$図を作成した。その成果はグリッド配図および遺構配図に盛り込んである。

調査の経過

発掘調査を開始したのは7月3日である。台地上は杉・雑木・竹が密生していたため、ブルドーザーを使用して抜根作業を行なった。抜根作業と併行して、グリッドの設定を行ない、7月1I日から西側台地東部地区の粗掘りを開始した。この地区からは煙道の発見を端緒として、平安時代と推定される第12住居跡が発見された。7月16日以降、粗掘りは西側台地北半部に及んだ。その結果、第2住居跡・第3住居跡・第4住居跡・第5住居跡・第6住居跡・第7住居跡・第8住居跡・第9住居跡・第10住居跡が次々と検出された。

7月25日以降は学生補助員の他に教職員の調査協力員と名取高校郷土クラブの生徒が加わり、精査を開始した。遺構の精査が進むにつれて、西野田遺跡が古墳時代と平安時代の集落跡であることが判明してきた。

第2住居跡・第3住居跡・第4住居跡・第5住居跡の精査がかなり進行し、実測図作成段階に近づいたため、7月31日から遣り方設定の準備に入った。写真撮影の終了を待って8月9日から第2住居跡・第3住居跡・第4住居跡の実測を開始した。

西側台地北半部の精査･実測と併行しながら、南半部の粗掘りを8月24日から行なった。この西側台地南半部からは古墳時代の住居跡は検出されなかったが､円形周溝2基と平安時代と推定される第13・第14住居跡が発見された。円形周溝は供献された状態を示す土器が見られなかったため正確な年代は推定できなかったが､第14住居跡によって第2円形周溝が切られていることから古代のものであることは誤りないと思われた。

調査地域の西側台地に関して調査も一段落ついたので10月20日現地説明会を開催した。その後、西側台地の調査は第14住居跡の最終的な検討の後、11月12日に終了した。

東側台地は雑木の撤去が遅れたため、その間に北側低地の調査を行なった。北側低地は最下層に弥生土器を僅かに含む層があり、その上から土壙や堀･溝が検出された。さらにその上には2～3度にわたって行なわれた積土層がみとめられた。北側低地の調査を終了したのは12月4日である。

東側台地の雑木を撤去し、グリット設定を行ない、粗掘りを開始したのは11月28日である。東側台地からは、第1住居跡と第11住居跡が発見された。東側台地の調査と併行して、東側低地と東側台地北裾をめぐる堀と土塁の調査を実施した。

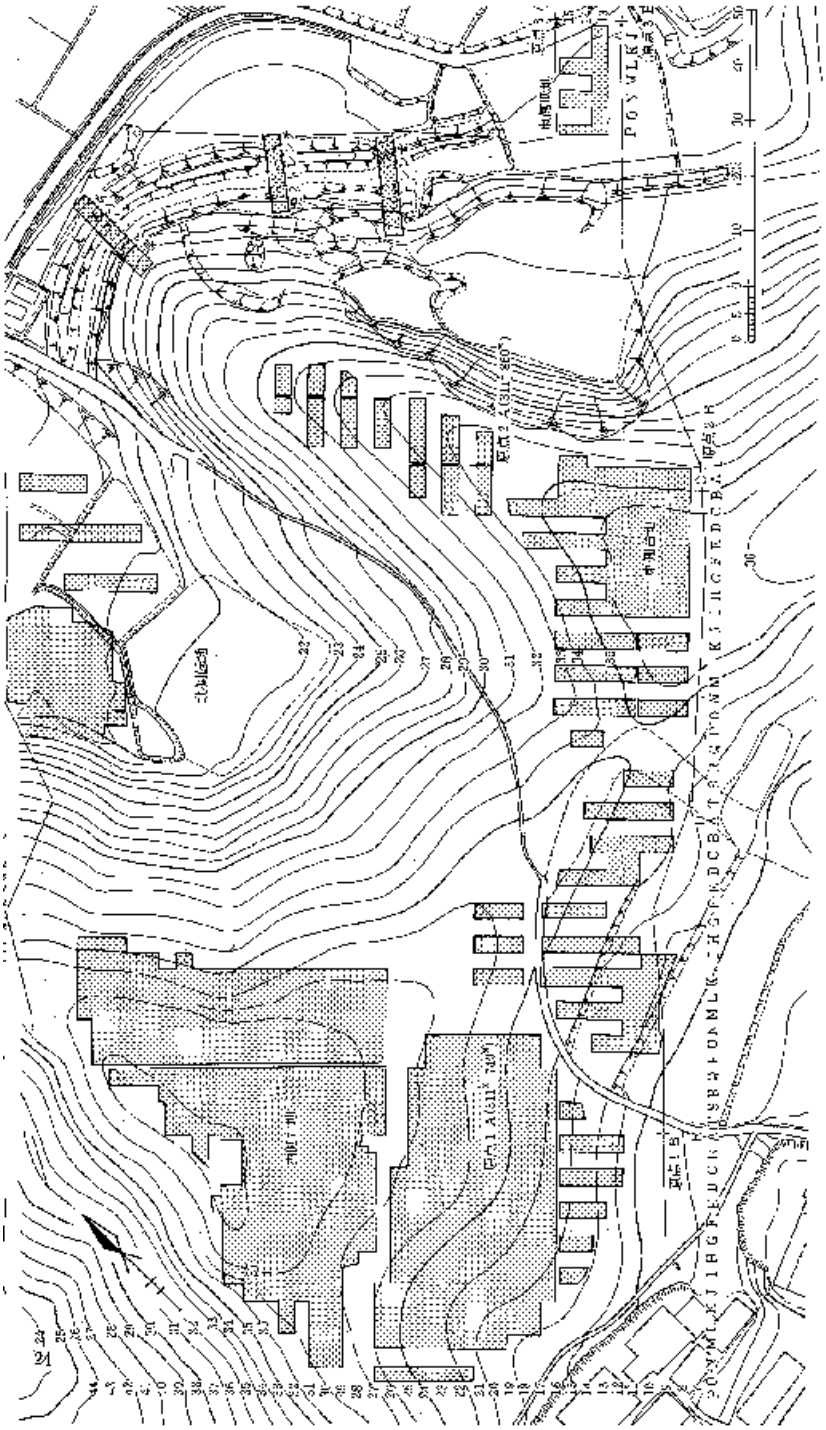
これらの調査は12月27日に終了したが、後片付け等が残ったため1月に残務整理を行なった。このように、今回の調査は半年におよぶものであったが、その間に7,903m^{2}を発掘し、14軒の居跡と2基の円形周溝を発見することができた。

報告に際して

調査資料の整理は、1月から開始した。今回は、事実報告と、その中から提起される問題を分けて記述することにした。また、遺構と遺物の関連を理解しやすくするために、遺構ごとに出土遺物をとりあげて説明し、最後にまとめるという形をとった。この中で、住居跡については第5住居跡が欠番となってしまったため、編集の都合上住居跡名を変更し、時代ごとにまとめることにした。第1～第11住居跡を古墳時代、第12～第14住居跡を平安時代のものとするように配慮した。従って、原図の遺構名と本書の遺構名では次のようなくいちがいがある。

(原図)	(報告書)	(原図)	(報告書)	(原図)	(報告書)
第15住居跡 →	第1住居跡	第7住居跡 →	第6住居跡	第14住居跡 →	第11住居跡
第1住居跡 →	第2住居跡	第8住居跡 →	第7住居跡	第6住居跡 →	第12住居跡
第2住居跡 →	第3住居跡	第9住居跡 →	第8住居跡	第11住居跡 →	第13住居跡
第3住居跡 →	第4住居跡	第10住居跡 →	第9住居跡	第13住居跡 →	第14住居跡
第4住居跡 →	第5住居跡	第12住居跡 →	第10住居跡		

なお、現地説明会資料の遺構名は原図によるものであったことを付記しておく。



第２図　西野田遺跡グリット配図

Ⅲ　発見された遺構と遺物

１．台地上の遺構と遺物

第1住居跡

（遺構の確認）東側台地の東縁辺は平担面からゆるやかに傾斜面へと移行する。その緩斜面上のＣＢ－11区周辺で黒褐色、ないしは暗褐色土の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の明褐色火山灰層である。

（重複・増改築）東西に走る幅30㎝（底面）の新しい溝によって、南側の一部が切られている。

（平面形・方向）北東および南東の一部が検出できなかったので正確な形は明らかでない。しかし、全体の$^{3}/_{5}$程確認されたので、それから推定すると南北に長軸をもつ長円形と考えられる。大きさは長軸3.4ｍ（推定）、短軸2.56ｍで、床面積は7.91ｍ^{2}（推定）である。

（堆積土）住居の東側は壁が検出できず、堆積土もほとんど残っていなかった。西側は後世の溝によって切られている部分もあったが、堆積土の保存は比較的よかった。この保存のよい部分では次のような層序が認められた。

第1層（黒褐色土層）：黒褐色の細砂質シルト層で炭化物と焼土を多く含む。分布は中央部に限られる。

第2層（褐色土層）：暗褐色シルト質粘土層で焼土や炭化物を含む。第1層同様中央部に限られるが、その分布は広い。

第3層（褐色土層）：褐色のシルト質粘土層で、焼土や炭化物を含む。壁沿に分布し、西側に厚く堆積している。

（床面）床面はやわらかく、たたきしめられたような痕跡は認められない。また、全体としては平担であるか、東側が幾分低い。床面から壁へはゆるやかな角度で立ちあがる。壁は保存のよい西側で20㎝程の高さで残っていたが、東側は3～5㎝程度である。床面で検出されたものは柱穴状のピット群と大形のP_1だけで、炉は発見されなかった。

なお、住居の掘り方については十分な検討を行なえなかったが明瞭なものは存在しなかった。

（柱穴）床面にはP_1を除き、合計21個のピットが検出された。これらのピット群は掘り方と柱痕を区別できるものがなかったので、いずれ一も柱穴とする決め手はない。

だが、これらのピットを位置的な関係から分類すると次のような規則性がうかがえる。壁に沿って長円形にならぶもの（P_5・P_6・P_{22}・P_7・P_8・P_{11}・P_{17}・P_{18}・P_{19}・P_{20a}・P_{20b}・P_{21}）。中央部にあるもの（P_2・P_3・P_4・P_{16}）中央東側から南壁に向って列状にならぶもの（P_9・P_{10}・P_{12}

P_{13}・P_{14}・P_{15})。これらの中で、壁に沿って長円形にならぶピットは決め手に欠けるものの、その配列の規則正しさから柱穴の可能性が強いと思われる。

（炉）検出されず。

（その他の施設）住居跡内の堆積土をとり除き、床面に達した所、北西寄りの部分にP_1が検出された。このP_1は大きさが90×60cmで、3段に掘りこまれている。中央部が最も深く、床面からの深さは45cmである。

ピット内に埋っている土を検討すると、全体的に地山の火山灰をフロック状に含んでいる。また、No.2層の上面で壺（第4図）が逆位の状態で検出された。このことから、P_1は人為的に埋められた（地山の火山灰をブロック状に含む）可能性がある。

（年代決定資料）遺構内の堆積土を発掘調査の段階で層ごとに識別することはかなり困難であった。そこで、遺物は一括して遺構内堆積土としてとりあげた。これらの遺物はいずれも細片である。また、床面につぶれた状態で発見された遺物もなく、遺構の年代を推定しうるような資料はこの中に含まれていなかった。

しかし、P_1から発見された壺は遺構の年代を考える上で極めて貴重な資料である。P_1が自然的に埋ったのではなく、人為的に埋められたとするのが正しいければ、この資料は住居跡が埋まる以前（第1～第3層堆積以前）のものと考えられるからである。

第１表　第１住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9
深さ(cm)	45	25	22	12	8	11	16	11	8
土　色	断面図あり	暗褐色	褐　色	暗褐色	褐　色	暗褐色	褐　色	暗褐色	暗褐色
		(10YR 3/3)	(10YR 4/6)	(10YR 3/4)	(10YR 4/4)	(10YR 3/4)	(10YR 4/6)	(10YR 3/3)	(10YR 3/4)
土　性		シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト

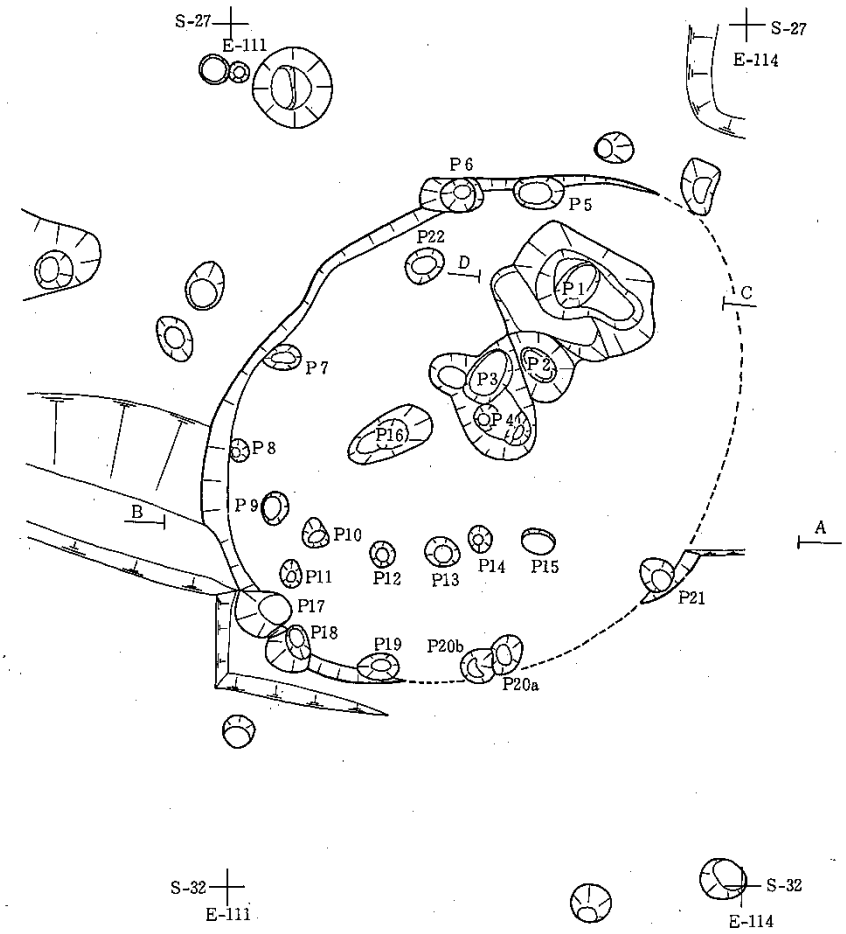
P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}
10	9	5	13	3	19	22	23	20	?
暗褐色	暗褐色	暗褐色	黒褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
(10YR 3/4)	(10YR 3/4)	(10YR 3/3)	(10YR 2/3)	(10YR 3/4)	(10YR 3/4)	(10YR 3/4)	(10YR 3/4)	(10YR 3/4)	(10YR 3/3)
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト

P_{20a}	P_{20b}	P_{21}	P_{22}
9	7	6	23
暗褐色	暗褐色	暗褐色	褐　色
(10YR 3/3)	(10YR 3/3)	(10YR 3/4)	(10YR 4/6)
シルト	シルト	シルト	シルト

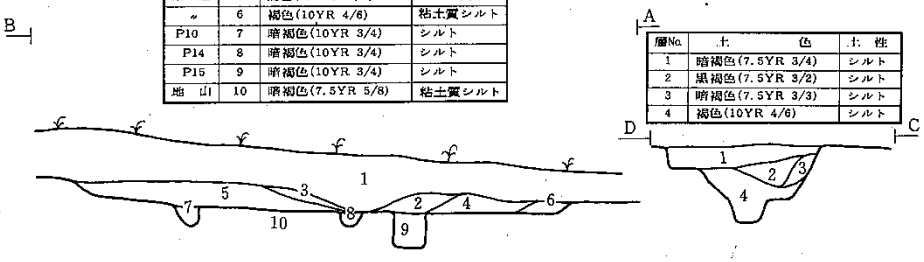
（遺物）

Ⅰ：弥生土器

弥生土器はいずれも細片である。器形の判明するものとして沈線によって変形工字文が描かれた鉢や口縁部が１点ある。この他器外面にＬＲ縄文や撚糸文が



層位	層No.	土色	土性
表土	1	略	略
第1層	2	黒褐色(10YR 2/3)	細砂質シルト
第2層	3	暗褐色(7.5YR 3/4)	シルト質砂
〃	4	暗褐色(10YR 3/4)	細砂質シルト
第3層	5	褐色(7.5YR 4/4)	シルト質粘土
〃	6	褐色(10YR 4/6)	粘土質シルト
P10	7	暗褐色(10YR 3/4)	シルト
P14	8	暗褐色(10YR 3/4)	シルト
P15	9	暗褐色(10YR 3/4)	シルト
地山	10	暗褐色(7.5YR 5/8)	粘土質シルト



層No.	土色	土性
1	暗褐色(7.5YR 3/4)	シルト
2	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト
3	暗褐色(7.5YR 3/3)	シルト
4	褐色(10YR 4/6)	シルト

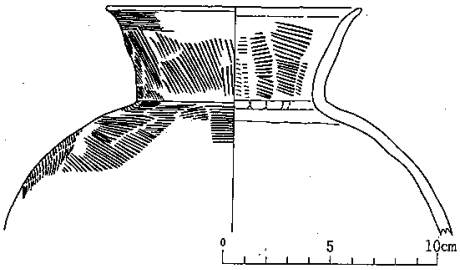
0　1　2 m

第3図　第1住居跡

施文された体部破片が数点が認められた。

Ⅱ：土師器

壺（第4図）：体部下半を欠失している。口縁部が外反しながらたちあがり、口縁端で軽く開き気味になる。肩から体部にかけて丸みのある曲線を描き、体部全体としては球形をなすと考えられる。



第４図　第１住居跡出土遺物

胎土は比較的大きい石英粒と若干の黒雲母を含む。

体部内面には幅10～15㎜の粘土帯による輪積痕がある。内面の調整として口縁部に横方向の刷毛目があるが、体部はよく観察できない。外面の調整として口縁部に縦方向の刷毛目、体部に横方向の刷毛目がある。体部の刷毛目は頚部付近で口縁部の刷毛目を消しているから、口縁部→体部の順に刷毛目調整が行なわれたことになる。なお、軽く開き気味の口縁端には刷毛目の後横ナデが行なわれている。

その他の土師器破片：器形の判明しない体部破片で器面の最終的な調整も不明瞭なものが数点認められる。

第2住居跡

（遺構の確認）西側台地中央から僅かに東寄りのＤＲ－28区周辺で、黒褐色土の落ちこみを発見した。遺構確認面は表土下の火山灰層である。

（重複・増改築）住居東壁の北側が、長方形をした後世の掘り込みによって切られている。

（平面形・方向）平面形は長方形を呈し、長軸は東西方向で、長さは4.2ｍである。短軸長は3.4ｍで、床面積は13.35m^2である。

（堆積土）住居内堆積土は基本的に3層にわけられる。

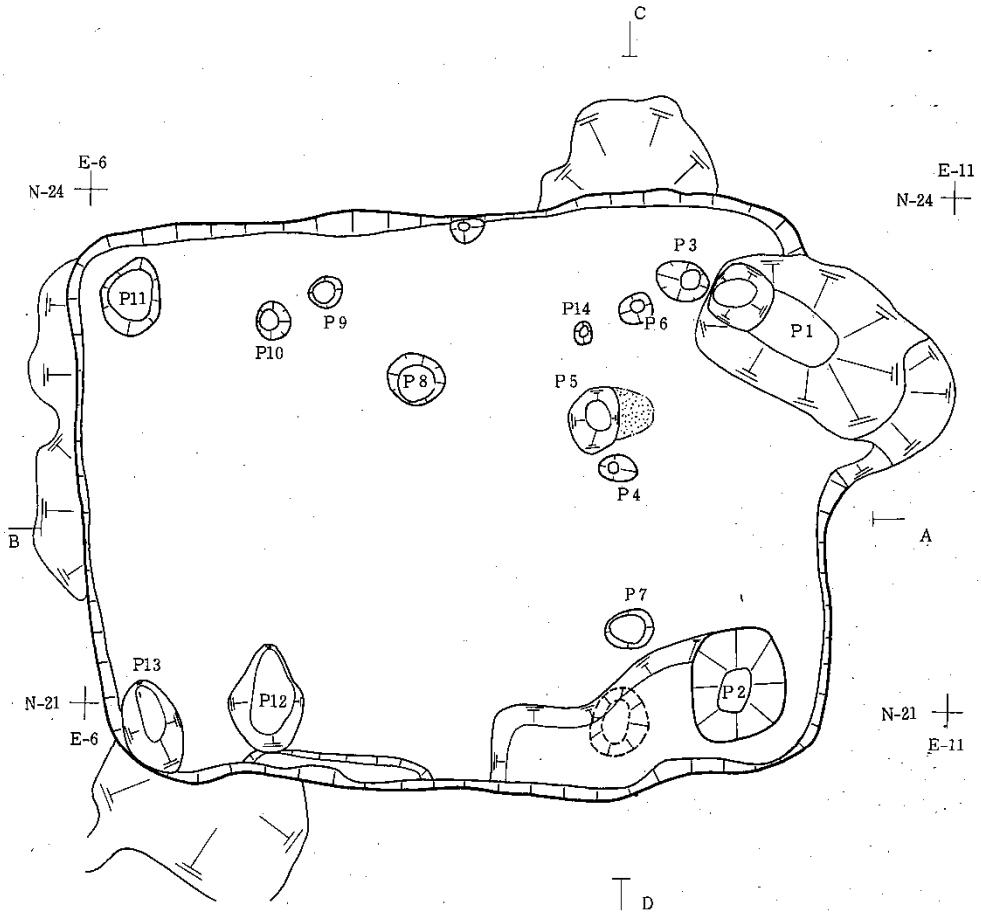
第1層（黒褐色土層）：黒褐色のシルト質粘土層で、焼土・木炭・火山灰が混入し、粘性がある。住居中央部にのみ分布する。

第2層（暗褐色土層）：混入物は多少異なるが、暗褐色の粘土質シルト層である。住居の中央部を除き、ほぼ全域に分布している。

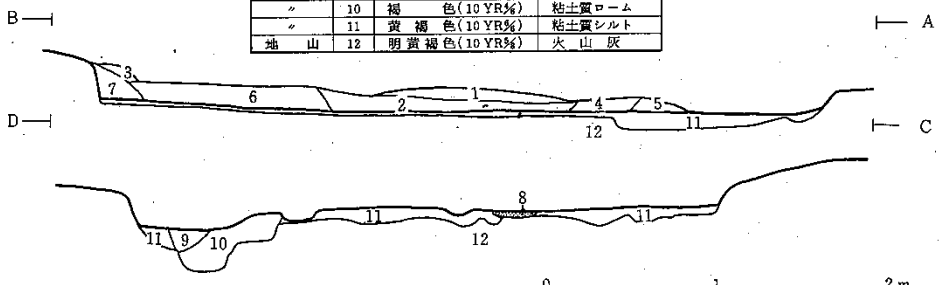
第3層（極暗褐色土層）：極暗褐色の粘土質シルト層で、壁沿に狭い分布を示す。

なお、第1層は最終的に堆積したと考えられる層であるが、第2・3層と土色の点等で著しく異なる。第3層住居廃絶後、もっとも初期的な堆積層である。

（床面）床面は多少の凹凸はあるが、平担で固くしまっている。床面から塾へは急角度でたちあがる。壁の高さはもっとも保存のよい西壁で14㎝あるが、平均すると8～10㎝である。壁沿



層　位	層No.	土　色	土　性
第 1 層	1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト質粘土
〃	2	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土
第 2 層	3	暗赤褐色(5 YR3/3)	シルト質粘土
〃	4	暗褐色(7.5YR3/4)	粘土質シルト
〃	5	褐色(7.5YR4/4)	粘土質シルト
〃	6	極暗赤褐色(5 YR2/3)	粘土質シルト
第 3 層	7	極暗褐色(7.5YR2/3)	粘土質シルト
炉	8	明赤褐色	粘土質シルト
掘り方埋土	9	黒褐色(10YR 3/2) シルトと褐色(10YR 4/6)火山灰の混合	
〃	10	褐色(10YR4/6)	粘土質ローム
〃	11	黄褐色(10YR5/6)	粘土質シルト
地　山	12	明黄褐色(10YR6/6)	火山灰



第５図　第２住居跡

の施設は検出されなかった。

床面の東側中央に焼けた部分があり炉と思われる。確認されたピットは合計14個である。

最後に床面を立ち割ったところ、黄褐色の粘土質シルト層が3～10cmあり、その下に地山の明黄褐色の火山灰層があらわれた。黄褐色粘土質シルト層は住居掘り方の埋土と考えられる。

（柱穴）　合計14個のピットの中で、P_1・P_5・P_{12}・P_{13}・は後世の作為によるものである。（住居廃絶後の掘り込みと木の根）。この他のピットでは、P_2を除くといずれも深さが10cm以下であり、柱痕と掘り方の区別のつくものがない。また、配列関係に規則性の認められるものもないことから、主柱穴とは考えられない。このため、第2住居跡については、主柱穴は不明である。

（炉）　床面が24×20cmの範囲で明赤褐色に焼けている。非常に固い。石組や掘り込み等はないが、床面自体が焼けていることから、炉と考えられる。

（貯蔵穴）　住居南東部に隅丸長方形をしたP_2がある。大きさは63×55cmで、床面からの深さが54cmである。遺物は出土していないが、位置･形態等他の住居跡に見られる貯蔵穴状ピットと一致する。

（その他の施設）　検出されなかった。

（年代決定資料）　遺物はあまり多くないが、第1～第3層から全体的に出土している。第3層からは小形甕（第6図2）、第2層から坏（第6図1）および甑（第6図4）、第1層から甑（第6図3）が発見された。しかし、床面および貯蔵穴状ピットからの遺物がないため、住居の年代を決定することが困難である。

第２表　第２住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}
深さ(cm)	139	55	5	6	15	6	5	10	2	7	8	12	23	5

（遺物）

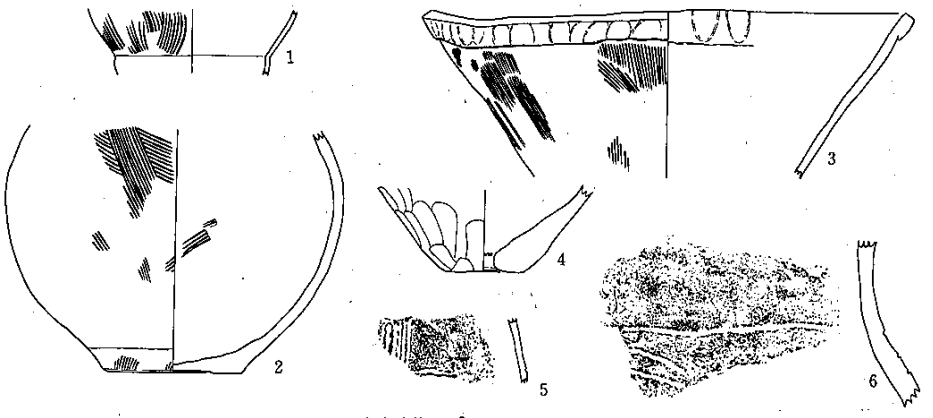
Ⅰ：弥生土器

第6図5：極めて幅の狭い平行施文具で2列の小波状文を横走させ、その間に縦の平行沈線を同一施文具によって数列施している。頚部破片と思われる。

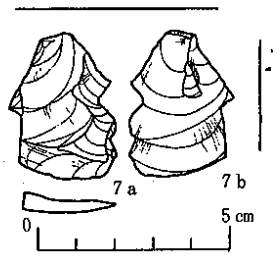
第6図6：壺の頚部から肩部にかけての破片。頚部下端に沈線を一条めぐらせ、その下に沈線による上向連弧文を施している。頚部は無文帯である。

Ⅱ：土師器

坏（第6図1）：体部に屈曲のある坏で、口縁および底部を欠失している。胎土は緻密である。体部上半外面には下から上へ縦方向の刷毛目調整が行なわれている。内面は横ナデされている。



第６図　第２住居跡出土遺物



小形甕（第6図2）：体部が球形の小形甕であるが口縁部を欠失している。胎土は幾分粗い。体部外面は剥落が著しいが、保存のよい部分では刷毛目が観察される。内面は刷毛目がヘラミガキによって消されている。

甑1（第6図3）：鉢形の甑であるが体部下半を欠失している。胎土は幾分粗い。口縁部は輪積み技法と同様な方法で複合口縁をつくり、指頭で調整している。体部外面は上から下へ縦方、向の刷毛目調整が行なわれている。内面は磨滅が著しいが、部分的にヘラミガキの痕跡が観察される。

甑2（第6図4）：甑1と同じ鉢形と思われる。体部上半を欠失している。胎土は幾分粗い。体部から底部にかけて肥厚し、底部中央に貫通孔がある。外面の上部には刷毛目の末端が観察される。底部付近はヘラケズリの後、ヘラミガキが行なわれている。内面はナデられている。

その他の土師器破片：この他破片であるが、高坏の脚部や甕等が出土している。それは下表にまとめてある。

第３表　第２住居跡出土土師器破片

層　位	器　形	部　位	内　面	外　面	備　考	数量(個体数)
第１層	甕	頚　部	？	？		１（１）
第２層	高　坏	脚　部	横の刷毛目	丁寧なミガキ	円錐台状の脚部	１（１）
	壺　？	頚　部	刷毛目	刷毛目		１（１）
	甕	口縁部	横の刷毛目	縦の刷毛目		１（１）
	甕	底　部	？	？		１（１）

Ⅲ：石器

剥片（第6図7）：打面に自然面を残す小形の縦長剥片である。a面に上方、右方より加撃方向を示す剥離痕がある。また、ｂ面主要剥離面にはバルバー・スカーがみられる。

第４表　第２住居跡出土石器計測表

図	名　称	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　材	完・不完	層　位
第６図７	剝　片	36.4	26.5	6.3	4.4	チャート	完	２層

第3住居跡

（遺構の確認）西側台地のほぼ中央部、ＤＴ－29区周辺で黒褐色土の落ち込みを発見した。遺構の確認面は表土下の火山灰層である。当初、方形をなすと考えられたが、プランの確認を行なった結果、円形に近いことが明らかになった。

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）平面形は歪んだ円形で、東側がわずかにふくらんでいる。長軸は北東－南西方向で、長さ3.8ｍである。短軸長は3.5ｍで、床面積は10.39m^2である。

（堆積土）住居内に堆積している層は基本的には3層に大別することができる。

第1層（黒褐色土層）：黒褐色ないしは極暗褐色の粘土質シルト層で住居中央部に分布する。

第2層（暗褐色土層）：色彩的に多少幅はあるが暗褐色の粘土質シルト層である。第1層の下にあって、分布も広く住居全域に及ぶ。

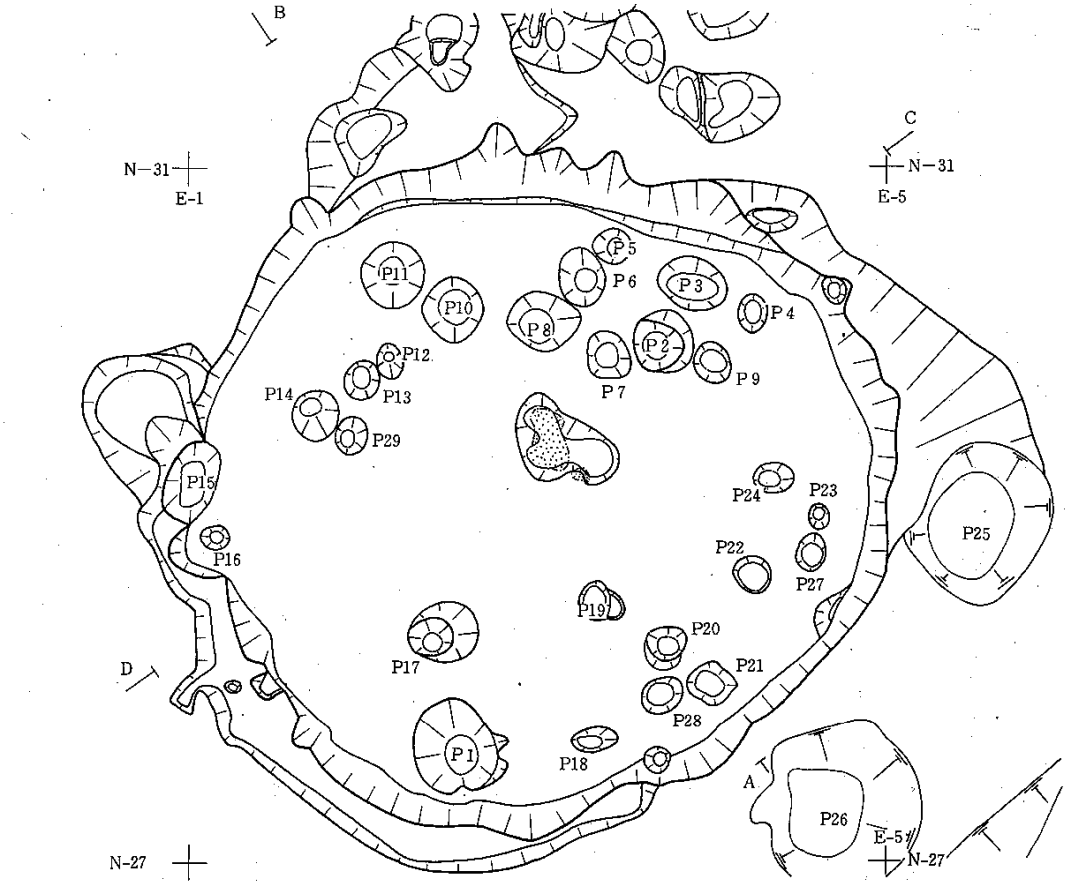
第3層（極暗縄色土層）：各部分によって細かな色彩的ちがいはあるが、第2層に比べ全体的に明度が低い粘土質シルト層である。第2層と床面の間に厚く堆積している。

（床面）床面は多少の凸凹はあるがほぼ水平で非常に固い。堆積土との間に肌わかれの現象が認められる。住居のほぼ中央部に炉がある。また住居南側には比較的大きいP_1があり、まとまった遺物を出土している。その他、合計28個のさまざまなピットがある。

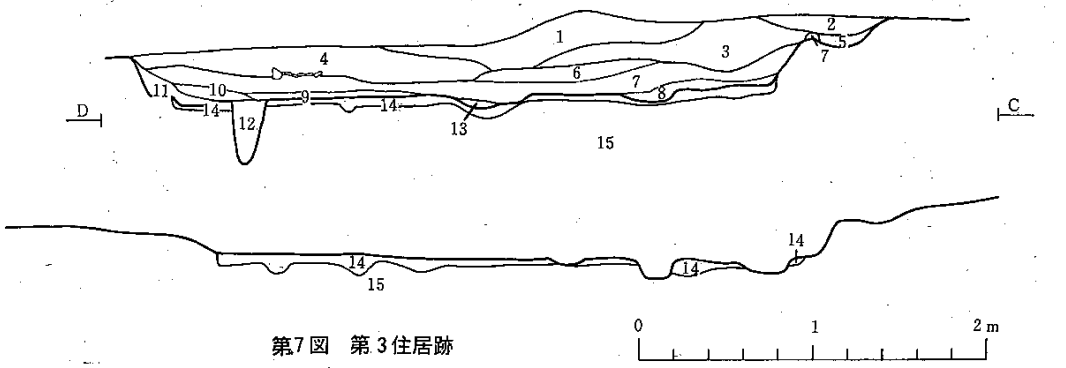
床面をはぐと明褐色の粘土質シルト層が5cm程度の厚さで認められ、その下に地山と思われる明黄褐色の火山灰層があらわれた。床面下の明褐色粘土質シルト層は住居掘り方の埋土と思われる。

（柱穴）住居とその周辺にあるピットは表に示したように合計29個ある。このうち、床面にあって住居に伴なうと考えられるのはP_{25}・P_{26}を除いた27個のピットである。また、P_3・P_4・P_8・P_9・P_{21}の中で、掘り方と柱痕を区別しえたのはP_2とP_{17}の2個だけである。

今、P_2とP_{17}を主体として柱穴の配列を考えるとP_{20}とP_{12}が多少歪んだ長方形をなす。他のピッ



層位	層No.	土色	土性	第3層	層No.	土色	土性
第1層	1	黒褐色（10YR 2/2）	粘土質シルト	〃	9	褐色（7.5YR4/3）	粘土質シルト
〃	2	極暗褐色（7.5YR2/3）	粘土質シルト	〃	10	暗褐色（7.5YR3/3）	粘土質シルト
第2層	3	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	〃	11	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト
〃	4	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	炉跡	12	黒褐色（ ? ）	シルト ?
〃	5	褐色（7.5YR6/4）	粘土質シルト	掘り方埋土	13	赤褐色（ ? ）	粘土質シルト
第3層	6	極暗褐色（7.5YR2/3）	粘土質シルト	掘り方埋土	14	暗褐色（7.5YR6/5）	粘土質シルト
〃	7	暗褐色（10YR3/3）	粘土質シルト	地山	15	明黄褐色（10YR6/6）	火山灰
〃	8	灰褐色（7.5YR4/2）	粘土質シルト				



第7図　第3住居跡

トは、その配列に規則性を見い出すのは困難である。従って、第3住居跡についてはP_2・P_{17}・P_{20}・P_{12}の組合せが柱穴としての可能性が最も高いことになる。だが、P_{10}・P_{12}については掘り方と柱痕が区別できていないから断定することはできない。

（炉）住居床面の中央北寄りの部分に焼土が85×77cmの広さで認められた。この焼土は床面自体が焼けたもので、非常に固い面をなしている。付近には木炭や灰はあまり認められなかった。

（貯蔵穴）住居床面に認められたピットの中でP_1は楕円形を示し、比較的大きい。床面は丸底状をなし、甕の大破片が出土している。このようにP_1は形状・遺物の出土状況等、他のピットとの間にちかいが認められる。

（年代決定資料）3層に大別された住居跡内堆積土において、最も遺物が集中して発見されたのは第3層上面である。土器として、高坏（第8図1）坏（第8図3）、甕（第8図5）等の他、壺の破片も発見されている。第2層から発見された遺物としては器台（第8図2）がある。

全体的には破片が多い。弥生土器や石器については、層位によるまとまりはあまり認められない。

以上の他にP_1から甕の大破片（第8図4）が発見されている。この甕が住居使用時のものなのか、それとも住居の廃絶後に廃棄されたものなのか明確ではない。しかし、第1～3層の遺物に比し、住居の年代を推定する上で最も有効な資料と考えられる。

第5表　第3住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2(掘り方)	P_2(柱痕)	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
深さ(cm)	16	52	52	5	2	30	8	8	4
土　色	?	暗褐色	黒褐色	?	?	暗褐色	?	?	?
土　性	シルト?	粘土質シルト	粘土質シルト	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?
備　考	貯蔵穴		焼土、木炭含む	凹み?	凹み				凹み?

P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}(掘り方)	P_{17}(柱痕)
5	7	13	38	40	35	7	23	46	46
?	?	?	黒褐色	黒褐色	?	?	黒褐色	暗褐色	黒褐色
シルト	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?	シルト?
凹み?			火山灰の混入	焼土、木炭含む			焼土、木炭含む		焼土、木炭含む

P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}	P_{24}	P_{25}	P_{26}	P_{27}
33	47	38	5	30	6	25	13	14	18
黒褐色	暗褐色	黒褐色	?	黒褐色	?	褐　色	?	?	暗褐色
シルト?	シルト?	シルト?	?	シルト?	?	シルト?	?	?	シルト?
焼土、木炭含む	木炭の混入	焼土、木炭混入	凹み?	焼土、木炭含む	凹み?	焼土、木炭含む	木の根?	木の根?	焼土、木炭混入

P28	P29
35	17
黒褐色	暗褐色
シルト？	シルト？
焼土、木炭混入	焼土、木炭混入

（遺物）

Ⅰ：弥生土器

第8図6・7：極めて幅の狭い（2～3㎜）平行沈線によって文様が描かれているもの。6には波状文や連弧文が、7には平行沈線間に山形文が施文されている。

第8図8・9：8は甕の口縁部破片で波状をなすと思われる。突起を中心に比較的太い4本の沈線によって連弧文が描かれ、その下にはＲＬの縄文が施文されている。

9は口唇を欠く口縁部破片である。3本の太い沈線が斜行している。

第8図10：壺の口縁部である。ＬＲ縄文を施文後、右斜下方から連続的に指頭で凹みをつけ、複合口縁状にしている。頚部は無文帯である。

第8図11：大形壺の肩部破片で、三重の綾絡文の下に斜行する撚糸文が施文されている。

Ⅱ：土師器

高坏（第8図1）：高坏の脚部。胎土に石英粒を含み、器面がザラザラしている。裾の広がる円錐台形を呈し、粘土帯（幅15～17㎜）の積みあげによって成形している。器面が剥落しているため調整技法は観察することができない。

器台（第8図2）：受部を欠損している。胎土に石英粒が認められる。脚部は短かい柱状の筒部と裾部からなる。筒部の貫通孔は下から上に向けてあけられている。裾部内面上半には刷毛目調整が認められる。

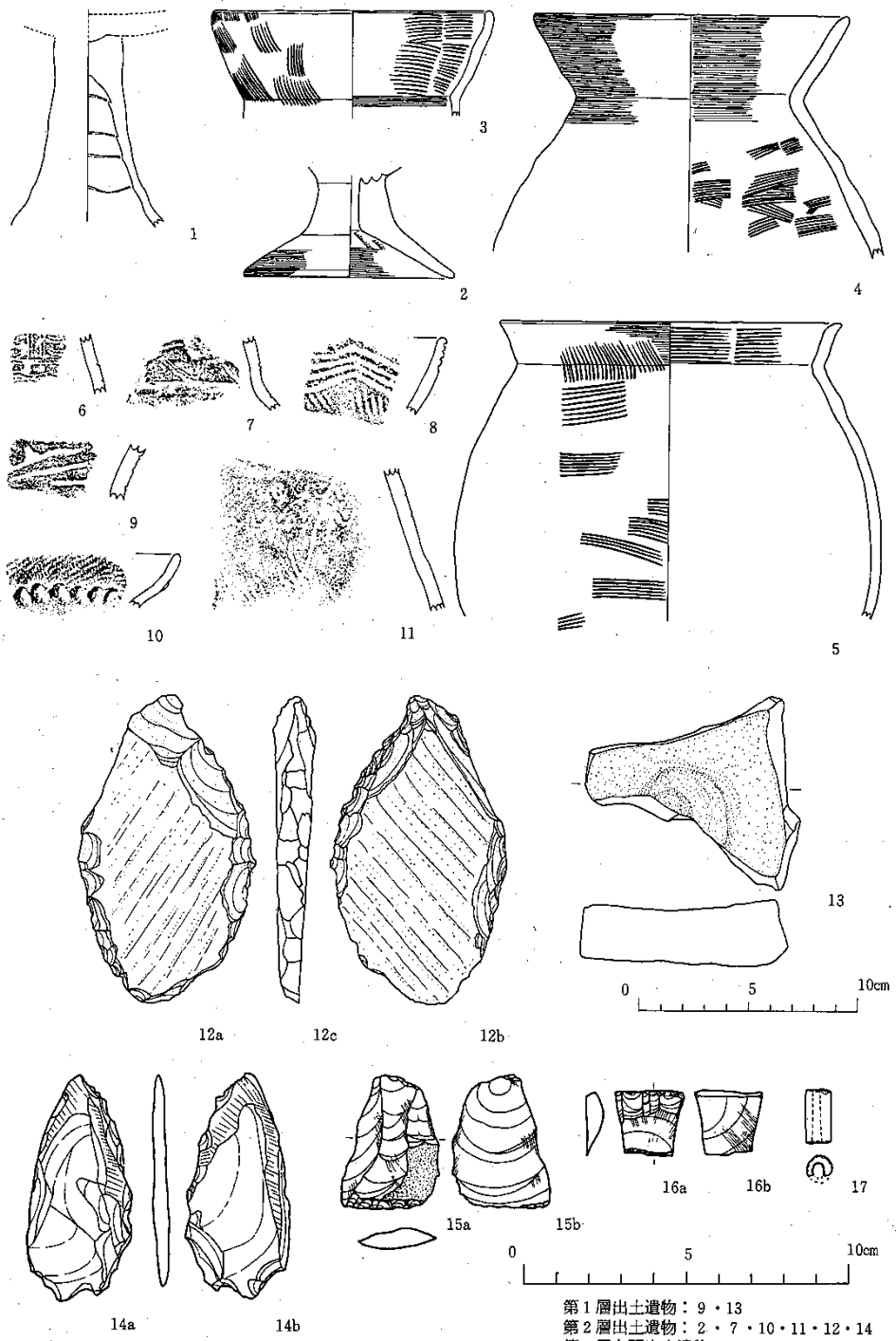
器外面は荒れているため、最終的な調整技法の観察は困難である。しかし、裾部外面の保存がよいところでは部分的に横ナデの痕跡が確認されるので、それが裾部全面におよんでいた可能性がある。

坏（第8図3）：口縁部が僅かに内反し、体部に屈曲が認められる坏であるが、底部を欠損している。胎土は緻密で色調も明るい。体部上半外面には下から上方に走る刷毛目が認められる。内面には横方向の刷毛目がある。この刷毛目は体部下半では横ナデによって消されている。

甕1（第8図5）：口縁部の外反する甕である。口縁端部は外側に開く。体部はなで肩で下半を欠失している。胎土は幾分粗く、暗褐色（5ＹＲ$^{6}/_{4}$）をしている。器外面には刷毛目が施こされている。この刷毛目は体部ではいずれも横方向であるが頚部のみ縦方向となっている。

口縁上半部には横ナデがある。器内面の刷毛目は口縁部で明瞭に観察される。その方向は横である。体部の刷毛目はナデによって消されている。

甕（第8図4）：口縁部の外反する甕である。口縁端部は丸みをもつ。体部はなで肩でその下半を欠失している。胎土は幾分粗く石英粒、細礫を含む。口縁部および頚部は器内外面とも横ナデによって調整されている。体部は内・外面とも軽いミガキが行なわれている。内面に



第1層出土遺物：9・13
第2層出土遺物：2・7・10・11・12・14
第3層上面出土遺物：1・3・5・17
第3層出土遺物：6・8・15・16
P1出土遺物：4

第8図　第3住居跡出土遺物

は刷毛目がミガキよって消されずに残っている部分もある。なお、この甕の体部上半には煤が付着していた。

その他の土師器破片：以上の他実測図作成が不可能な破片も多い。それは表にまとめてある。これらの中には細片であるため器形の判断が困難なものも多い。しかし、器形の判明するもので、第8図1～5に分類されないものとして、堆積土第2層出土の丹塗大型壺や堆積土第3層上面の複合口縁の壺等がある。

第6表　第3住居跡出土土師器破片

層位	器形	部位	内面	外面	備考	数量(個体数)
第1層	甕	頸部	?	ナデ	外面の刷毛目は頸部が縦、肩部は横	1 (1)
	〃	頸～肩部	横の刷毛目	刷毛目		1 (1)
	〃	頸部	横の刷毛目	縦の刷毛目		1 (1)
	〃	底部	?	?		2 (2)
第2層	高坏	脚部上端	?	?	円錐台状の脚部	1 (1)
	坏	口縁部	?	?	剝落著しい	1 (1)
	大型壺	頸～底部	ケズリ?→ミガキ	刷毛目→ミガキ	輪積み成形、粘土帯16～20mm	1 (1)
	甕	口縁部	刷毛目	刷毛目		1 (1)
	〃	〃	〃	刷毛目		1 (1)
	〃	〃	?	?	剝落著しい	1 (1)
	甕?	底部	?	刷毛目		1 (1)
第3層上面	壺	口縁～肩部	ミガキ?	縦の刷毛目		1 (1)
	〃	口縁～体部	?	?	複合口縁。口縁部幅広い。	1 (1)
	甕	頸部	ナデ?	刷毛目		9 (1)
	〃	口縁～体部	?	頸部は刷毛目	体部外面は刷毛目→ミガキ	11 (1)
	甕	口縁部	横の刷毛目	横のナデ	頸部外面は縦の刷毛目	1 (1)
	〃	〃	横の刷毛目	縦の刷毛目		1 (1)
	〃	口縁～体部	ミガキ?	ミガキ?		13 (?)
	甕	底部	?	?		3 (3)
	甕?	底部	ミガキ	刷毛目		1 (1)
Pit 1	壺	頸部	ミガキ	ミガキ		1 (1)
	甕	〃	?	ミガキ	剝落著しい	1 (1)
	〃	口縁～体部	ナデ	ナデ		15 (1)
Pit 3	壺	頸部～体部	?	?	剝落著しい	11 (1)

Ⅲ　石器

削器（第8図15・16）：15は小形の縦長剥片の末端に調整剥離を加え、直線状の刃部を作り出した削器である。a面右側面には刃潰しを意図したものか、細かな剥離痕がみられる。打面は平担打面である。16は両側辺が折れてしまってその形状が不明であるが、上部の一側辺にのみ抑圧剥離による調整痕が認められる。下部の細かな剥離痕は使用によるものか、新しい破損によるのか不明である。

粘板岩製磨製薄片（第8図14）：粘板岩の板状薄片を素材とし、その両面に粗雑な研磨を加えて尖頭器状に整形している石器である。用途は不明で、未製品の可能性もある。

大形打製石器（第8図12）：板状剥片を素材とした不定形の打製石器である。側縁は両面から、刃部はb面から調整剥離が行なわれている。

石皿（第8図13）：扁平な角礫の一面に中央に向って窪む磨面をもつ。石皿の小破片と思われる。

第7表　第3住居跡出土石器計測表

図	名　　称	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　材	完・不完	層　位
第8図12	大形打製石器	142.1	80.1	18.2	192.0	流紋岩	完	2層
第8図13	石皿	92.4	88.9	30.8		安山岩	不　完	1層
第8図14	粘板岩製磨製薄片	69.0	31.4	8.0	10.0	粘板岩	未　製	2層
第8図15	削器	40.2	30.5	4.8	6.7	頁　岩	完	3層
第8図16	削器？	20.4	19.7	4.7	2.3	頁　岩	未　製	3層

Ⅳ：その他の遺物

管玉（第8図17）：直径9.2㎜、長さ16.1㎜の緑灰色をした管玉で片面が欠損している。貫通している孔は片側が大きく3.3㎜、その反対側では少し小さく2.2㎜である。しかし、これは一方向からの穿孔か否か明らかでない。石材は碧玉である。

第4住居跡

（遺構の確認）西側台地は中央部から北側に向うに従ってしだいにすぼまっていく。第4住居跡が発見されたのは、台地がすぼまりはじめる部分のＤＳ－36区周辺である。表土排除後黄褐色の火山灰層に達した時、かなり大きい方形の黒褐色土の落ち込みを確認した。

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）平面形は四隅が多少丸みをもった正方形である。各辺はほぼ東西・南北万向に一致する。大きさは東西軸5m70㎝、南北5m50㎝で、床面積は32.75m^2である。

（堆積土）住居跡内の堆積土は各部分によって細かなちがいはあるが、基本的には次の3層に大別される。

第1層（黒褐色土層）：黒褐色の粘土質シルト層で、最上部に薄く堆積している。分布はせまく、住居のほぼ中央部に限られる。第2層以下に較べ幾分軟らかい。

第2層（暗褐色土層）：暗褐色をした粘土質シルト層で、第1層の下部に堆積している。住居の壁周辺を除き、広い分布を示し、中央部では直接床面に接している。

第3層（褐色土層）：褐色ないしは黄褐色の粘土質シルト層で、層位的には最下層となる。
住居中央部には見られず、分布は壁の周辺に限られる。住居廃絶後の最も初期的な堆積層と思われる。特に、南北断面のNo4・7・8層はにぶい黄褐色を呈し、壁に接していることから、壁剥落の影響のもとに堆積したものと推定される。

（床面）床面は全体的に平担な面をなしているが、部分的に凹凸がある。床面中央部には炉があり、南東部隅に貯蔵穴状ピットが認められる。床面全域には柱穴を含めたピット群がある。

床面から壁へはかなり急角度でたちあがる。南壁と東壁は20～30cm、西壁と北壁は4～10cmの高さで残っていたが、壁にともなう施設は検出されなかった。

床面をはぐと、5～10cmの厚さで明褐色の粘土質シルト層が認められた。粘性があり、木炭が混入している。その下に黄褐色の火山灰層（地山）があらわれた。床面下の粘土質シルト層は住居掘り方の埋土と考えられる。

（柱穴）住居床面において確認されたピットは合計30である。しかし、床面における観察ではどれが柱穴なのか判明しなかった。そこで、床面をはがしてみた所、P_2、P_{29}、P_{17}、P_{23}についてはひとまわり大きい輪郭が地山の面で確認された。この輪郭は掘り方で、床面から確認されたひとまわり小さいピットは、柱痕ではないかと思われる。

また、これら4つのピットを結んだ線は歪んではいるものの、方形に近い四角形を示し、住居の柱穴であったと推定される。

（炉）住居床面中央の僅か東寄りの部分に焼土がある。80×60cmの広さで床面が焼けており、特に著しい部分は深さ10cm位まで明赤褐色に変化し、固くなっている。また、この上には10cm程度の厚さで焼土や木炭の多量にまじった褐色粘土質シルト層がたまっていた。石等の特別な施設はないが、火が焚かれたものであり、炉の一種と考えられる。

（貯蔵穴）南東部隅にあるP_1は60×70cmの隅丸長方形で、他のピットとは大きさの点でちがいがある。深さも59cmと深い。ピットに入っている土は暗褐色の粘土質シルトで全体に焼土を含む。ピットの上部は特に焼土が多く、器台（第10図1･3）や甕（第10図4）、そして小形手捏ね土器（第10図6）等の遺物がまとまって発見された。

（年代決定資料）遺物がまとまって発見されたのはP_1の上部である。その他、床面から出土し

たものに器台（第10図2）と小形手捏ね土器（第10図5）がある。ピット以外の堆積土からも破片の出土は多い。しかし、その中で器形の判明する口縁部や底部片は第2層以下に限られる。

これらの資料の中で、住居の年代を考える上で最もまとまりのあるのは、床面とP_1出土のものである。P_1は住居廃絶以前に埋ったのか、それ以後なのか明確ではないが、住居の使用されていた年代からはなはだしくへだたるものではない。床面出土のものも居住最終のものか、住居廃絶後に廃棄されたものか明らかではないが、その点同様である。従ってP_1および床面出土土器は住居の年代を推定する上で、極めて有効と考えられる。

第8表　第4住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2(掘り方)	P_2（柱痕）	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8
深さ(cm)	59	66？	66	40	4	6	9	45	10
土色	暗褐色 (7.5YR 3/4)	黄褐色 (　？　)	褐色 (7.5YR 5/4)	褐色 (7.5YR 5/4)	暗褐色 (7.5YR 5/4)	褐色 (7.5YR 3/4)	褐色 (7.5YR 5/3)	褐色 (7.5YR 5/4)	褐色 (7.5YR 5/4)
土性	粘土質シルト	？	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト
備考	焼土含む		木炭混入	木炭混入	凹み	木炭混入			

P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}(掘り方)	P_{17}(柱痕)
5	24	1	17	16	17	8	4	41？	41
褐色 (7.5YR 5/4)	褐色 (7.5YR 5/6)	にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	暗褐色 (7.5YR 3/4)	褐色 (10YR 5/6)	褐色 (7.5YR 5/4)	褐色 (7.5YR 5/3)	？ (　？　)	にぶい黄褐色 (　？　)	暗褐色 (10YR 3/4)
粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	？	？	粘土質シルト
木炭混入		凹み	焼土・木炭混入				凹み		木炭混入

P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}(掘り方)	P_{23}(柱痕)	P_{24}	P_{25}	P_{26}
20	9	16	5	15	30？	30	13	20	9
暗褐色 (7.5YR 3/4)	暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	？ (　？　)	黒褐色 (10YR 2/3)	にぶい黄褐色 (　？　)	褐色 (7.5YR 5/4)	暗褐色 (10YR 3/3)	黒褐色 (10YR 2/2)	褐色 (7.5YR 5/4)
粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	？	粘土質シルト	？	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト
木炭混入	木炭混入		凹み			木炭混入	焼土・木炭混入	焼土・木炭混入	木炭混入

P_{27}	P_{28}	P_{29}(掘り方)	P_{29}（柱痕）	P_{30}
8	22	33？	33	22
褐色 (7.5YR 5/4)	暗褐色 (10YR 3/3)	褐色 (　？　)	褐色 (7.5YR 3/4)	黒褐色 (10YR 2/3)
粘土質シルト	粘土質シルト	？	粘土質シルト	？
木炭混入			木炭混入	

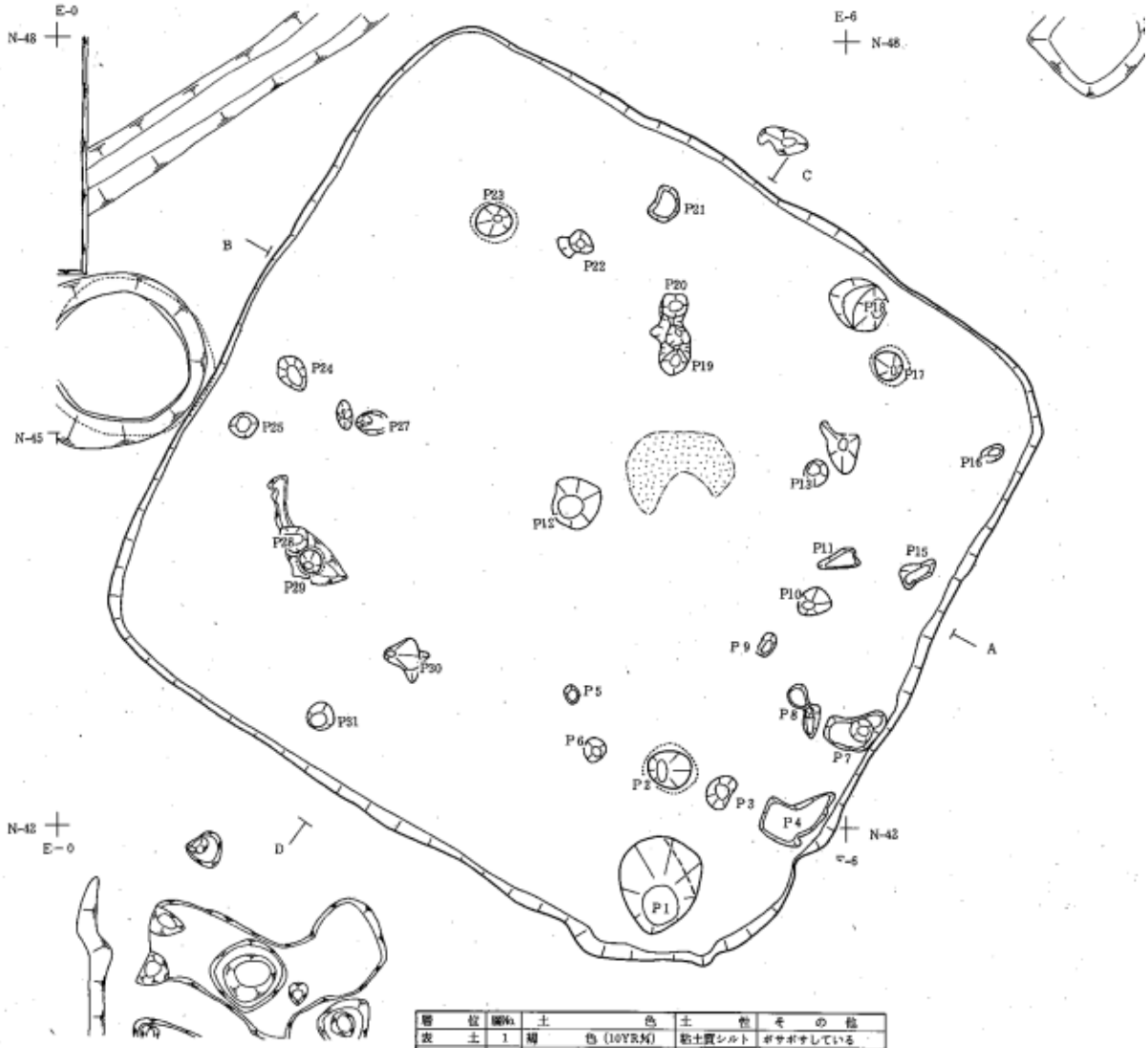
（遺物）

Ⅰ：縄文および弥生土器

縄文や沈線文の施文された土器細片が5点出土している。

Ⅱ：土師器

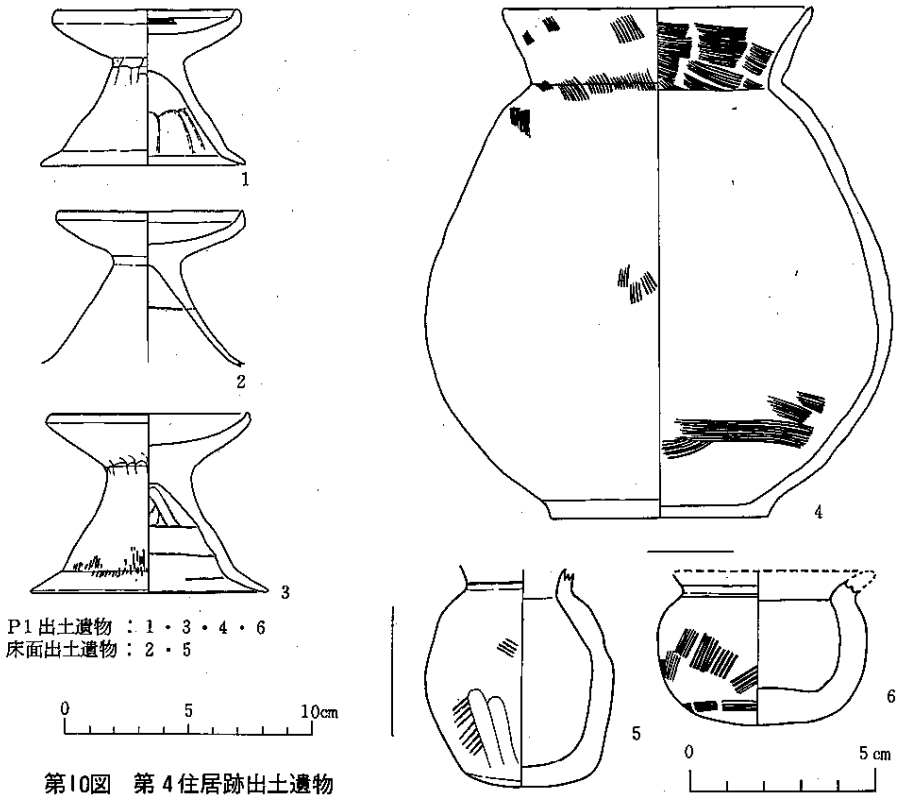
器台1（第10図1）：ほぼ完形。石英粒が



層位	層No.	土色	土性	その他
表土	1	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	ボサボサしている
第1層	2	黒褐色 (7.5YR3/2)	粘土質シルト	
第2層	3	極暗褐色 (7.5YR3/4)	粘土質シルト	
〃	4	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	
第1～3層	5	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	
〃	6	比較的黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト	
〃	7	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	
〃	8	暗褐色 (7.5YR3/4)	粘土質シルト	
〃	9	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	
炉跡	10	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	焼土・木炭多量に含む
炉跡	11	明赤褐色 (5YR5/6)	粘土質シルト？	固化している
掘り方埋土	12	明褐色 (7.5YR5/6)	粘土質シルト	
地山	13	黄褐色 (10YR5/6)	火山灰	

層位	層No.	土色	土性
第1層	1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト
第2層	2	極暗褐色 (7.5YR3/4)	粘土質シルト
第3層	3	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト
〃	4	比較的黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト
〃	5	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト
〃	6	比較的褐色 (7.5YR5/6)	粘土質シルト
〃	7	比較的黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト
〃	8	黄褐色 (10YR5/6)	粘土質シルト
Pit	9	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト
掘り方埋土	10	明褐色 (7.5YR5/6)	粘土質シルト
地山	11	黄褐色 (10YR5/6)	火山灰

第9図　第4住居跡



第10図　第4住居跡出土遺物

器面に観察されるが、胎土は緻密である。受け部は丸みのある皿状で、口縁部が垂直に立ちあがる。脚部はふくらみのある円錐台形で、裾がわずかに開き、軽い稜線を形成する。脚部内面は指で縦方向に調整されている。受部と脚部が接する部分の外面には、縦のヘラミガキが小さい単位で認められる。器面は全体的にあれていて調整技法を観察するのは難しい。器外面には部分的にヘラミガキの痕跡が見られる程度である。受部内面にはヘラミガキの他に横ナデが僅かに観察される。なお、この器台には受部と脚部との間に貫通孔がないのが特徴である。

器台2（第10図3）：ほぼ完形・胎土・器形の特徴は器台と同じである。器台1と異なる点は、脚部下半を輪積み技法によって成形していることと、器外面に縦の刷毛目が認められることである。

器台3（第10図2）：脚部下半を欠失している。基本的な器形は器台1・2と同じであるが、円錐形の脚部はふくらみをもたない。胎土は器台1・2に比べ僅かに荒い。成形技法は器台2と同様で、脚部下半に輪積み痕が認められる。調整としては受部内面にヘラミガキが僅かに残っている程度で、その他は剥落が激しく観察することが難しい。

甕（第10図4）：口縁部が僅かに外反する甕である。体部はなで肩で、最大径は体部中央よ

り僅か下にある。底部外面には軽い段がある。胎土は石英･長石粒を含むが全体的に細かい。成形は輪積みと思われるが、はっきり観察できなかった。器外面は剥落が著しく、頚部を中心とした縦方向の刷毛目が部分的に観察される程度である。器内面には、横方向の刷毛目がある。特に口縁部に明瞭な刷毛目が観察される。底部付近にも刷毛目はあるが、体部は横ナデされている。刷毛目が横ナデによって消された可能性もある。底部外面の調整ははっきりしない。

小形手捏ね土器1（第10図5）：器形は壺か甕かはっきりしない。口縁部を欠失している。器内面に輪積痕がある。底部はヘラケズリによって調整され、丸底風を呈する。体部は刷毛目とヘラミガキによって調整しているが、器面が荒れているため、部分的に観察されるにすぎない。

小形手捏ね土器2（第10図6）：体部が横に広い甕と思われるがはっきりしない。口縁部を欠失している。大きさの割には厚手である。丸底風で、器外面には刷毛目による調整がある。

その他の土師器破片：実測図は作成できないが、器形が判明するものは表にまとめた。器形としては、壺と甕が多い。壺には丹塗りのものもある。

第9表　第4住居跡出土土師器破片

層位	器形	部位	内面	外面	備考	数量(個体数)
第2層	器台?	脚裾部	ナデ	ミガキ		1（1）
	壺	頚部	ナデ?	刷毛目		1（1）
	甕	〃	?	?		1（1）
	〃	底部	ナデ	ナデ		1（1）
	〃	〃	?	?		1（1）
床面	壺	口縁～体部	ナデ	ミガキ		1（1）
	〃	頚～体部	〃	ミガキ→丹塗		1（1）
Pit 1	甕	口縁～底部	ケズリ→ナデ	口縁部はナデ	口縁部は刷毛目→ナデ。底部は凹底	（1）

第5住居跡

（遺構の確認）西側台地は北に向うにつれてせばまり、平担面はしだいに狭小となる。この狭小な平担面は東側にゆるやかに傾斜しながら急斜面へ続く。ＤＮ－39区周辺はその緩斜面上に位置するが、表土を掘り下げ明褐色火山灰層に達した所、方形をした黒褐色土の落ちこみを確認した。

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）この第5住居跡は正方形で、各辺は南北および東西方向にほぼ一致する。大きさは南北軸3m50㎝、東西軸3m45㎝で、床面積は11.90m^{2}ある。

（堆積土）細別された層はかなり複雑であるが、基本的には次の5の層に大別される。

第1層（黒色土層）：黒色のシルト質粘土層で住居の中央部にのみ分布する。

第2層（黒褐色土層）：黒褐色のシルト質粘土層で、第1層の周辺をとりかこむ形で住居の中央部に分布する。

第3層（暗褐色土層）：部分的に褐色やその他の場合もあるが、全体としては暗褐色のシルト質粘土層として包括される。最も厚い層で、分布も広く住居のほぼ全域に及んでいる。

第4層（褐色土層）：褐色のシルト質粘土層で、焼土や木炭の他に地山の火山灰を斑状に含む。住居中央部にはみられず、分布は壁沿いに限られる。

第5層（暗赤褐色土層）：焼土や木炭を多量に含む暗赤褐色のシルト質粘土層である。含まれる木炭は破片だけではなく、太い柱状のものも見られ、これが床面に横倒しの状態で数本検出された。また、この第5層は住居の床面にほぼ水平に堆積しているのが特徴である。

以上、5層に大別された層相互の関係を検討すると、第1～第4層までがさらに大きな1つのまとまりとして理解することができる。すなわち、住居が廃絶された後壁ぎわから順次埋っていき、最後に中央部の最上層が堆積したことを示している。その点自然の理にかなっていると言える。ところが第5層はさらにその下層にあって、床面の上に一定の厚さで水平に堆積しているから、第1～4層とは明確に区別して考えなければならない。さらに層中に、焼土や木炭、そして炭化材（?）等を含むことを考え併せれば、火災等によって屋根が焼け落ちたために形成されたのではないかと推定される。

（床面）床面は平担である。中央部周辺はパミスを多く含み、非常に固い面をなしている。この中央部から僅かに北東寄りの部分に炉がある。また東南部コーナーには、貯蔵穴状のピットがある。壁は床面から急角度で立ちあがる。各コーナー（北西部を除く）の上部が僅かに削平を受けているだけで保存は極めてよい。現存している壁の高さは、東壁で30㎝、西壁が38㎝、南壁45㎝、北壁40㎝である。壁に伴う施設は検出されなかった。

最後に床面を掘り下げると、暗褐色の粘土質シルト層が5～10㎝の厚さで認められ、その下に地山の明褐色火山灰層があらわれた。この暗褐色粘土質シルト層は、住居掘り方の埋土と考えられる。また前述した住居中央部のパミスを含んだ明褐色の固い面は、掘り方の埋土とは異なることから貼り床を意識したものと思われる。

（柱穴）住居跡の内部から発見されたピットは合計24個である。これらのピットを分類すると、木の根等のような住居廃絶後に成因をもつもの（P_6・P_{12}・P_{13}）、床面を剥いだ後に発見されたもの（P_2・P_3・P_8・P_9・P_{16}）、住居の廃絶後埋ったもの（P_4・P_5・P_6・P_7・P_{11}・P_{14}・P_{15}・

P_{17}・P_{18}・P_{19}・P_{21}・P_{22}・P_{23}・P_{27})、溝状のもの（P_{10}）、大形の貯蔵穴状のもの（P_1）となる。

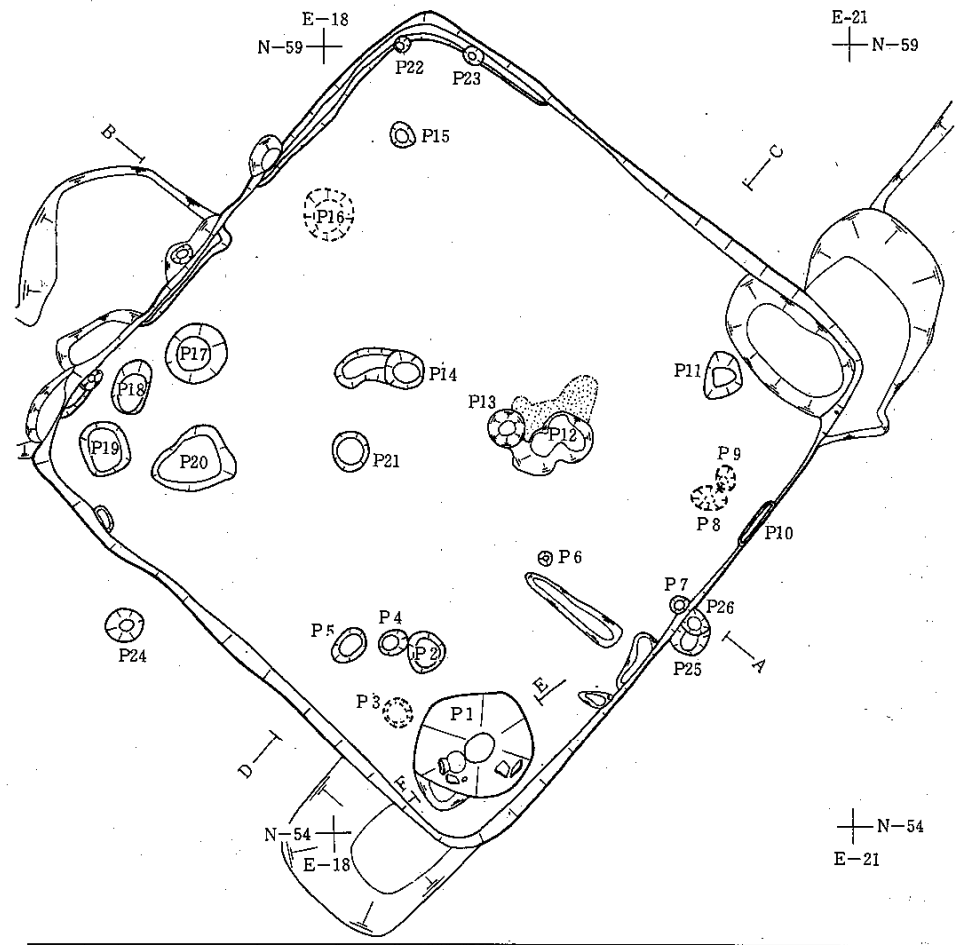
以上のピットの中で柱穴の可能性が考えられるのは、住居廃絶後埋ったものと、床面剥離後確認されたものに限られる。しかしこの両者についても、柱痕と掘り方を区別できたものがない。さらに、P_3・P_{19}・P_{15}・P_{11}、は配列に規則性が認められるが、P_3以外はいずれも深さが20cm未満であるなど、積極的に柱穴とすることができるものはない。

（炉）住居中央の東寄りの部分が50×25cmの範囲で赤褐色に焼けていた。その上面は非常に固い。これを立ち割ったところ、約6cmの深さまで赤褐色に変化していた。周囲に特別な施設はないが恒常的に火が焚かれたと推定され、炉と考えられる。なお、この炉跡は東側と南側がP_{12}とP_{13}によって破壊されている。

（貯蔵穴）東南部コーナーにあるP_1は深さ85cm、大きさ70×60cmの隅丸長方形をしたピットである。ピット内の層位は細別すると6層になるが、4層に大別することができる。つまり、第1層（暗赤褐色しルト質粘土層）、第2層（褐色シルト質粘土層）、第3層（暗褐色シルト質粘土層）、第4層（褐色シルト質粘土層）。これらの層の全体的柱特徴は次の3点に要約できる。第1点:いずれも水平に近い堆積状況を示しており、自然堆積とは考えにくい。第2点1ピットの上部に完形に近い土器（高坏・壺・器台）が一括して存在した。第3点:ピットの上部は焼土や木炭の混入が多いが下部に向うに従い少なくなる。

このピットがどの段階で埋ったかということは、遺構の性格を考える上で重要な意味をもつ。先に住居全体の堆積土を検討した段階で、第1～4層までは住居廃絶後の自然堆積層であり、第5層はその直前に火災等によって上部構造の焼け落ちたものではないかと推定された。すると、このP_1が住居廃絶後に埋ったものであれば、第5層がピット底部になければならないはずである。ところが、ピット底部には第5層が認められず、層位も自然堆積的でない。さらに、ピットの上部において完形に近い土器が一括して発見されたこと等を総合して考えると、P_1は火災にあう以前に埋められたものと理解することができる。その時期は不慮の火災であるか、住居廃絶に伴う意図的なものであるかによって異なる。前者の場合は、住居が構築された時から住居使用途上のある時期（火災にあう前）に求められる。後者の場合は、住居がある一定期間使用された後の住居廃絶時に求められる。

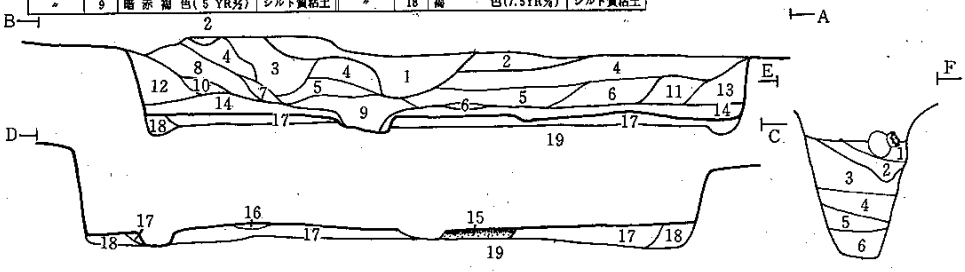
（年代決定資料）第5住居跡においてまとまった遺物が出土したのはP_1の上部と床面である。
床面から出土した大形壺（第12図3）と小形壺（第12図5）は第5層がその上に堆積しているので、P_1出土の高坏（第12図1）・器台（第12図2）・中形壺（第12図4）と同様に住居の年代を決める上で重要な資料である。この他、住居廃絶後の最も初期的な堆積土層である第4層から、台付甕の脚台（第12図6）と甑（第12図7）が出土している。



層位	層No	土色	土性
第1層	1	黒　色(10YR3/1)	シルト質粘土
第2層	2	黒褐　色(10YR3/2)	シルト質粘土
第3層	3	暗褐　色(7.5YR3/4)	シルト質粘土
〃	4	褐　色(7.5YR5/6)	シルト質粘土
〃	5	暗褐　色(7.5YR3/2)	シルト質粘土
〃	6	オリーブ褐色(2.5YR4/4)	砂質粘土
〃	7	暗褐　色(7.5YR3/4)	シルト質粘土
〃	8	褐　色(10YR5/4)	シルト質粘土
〃	9	暗赤褐　色(5YR3/3)	シルト質粘土

層位	層No	土色	土性
第4層	10	褐　色(7.5YR4/4)	シルト質粘土
〃	11	暗褐　色(7.5YR3/3)	シルト質粘土
〃	12	褐　色(7.5YR4/4)	シルト質粘土
〃	13	褐　色(7.5YR5/6)	シルト質粘土
第5層	14	暗赤褐　色(5YR3/3)	シルト質粘土
炉跡	15	赤褐　色(2.5YR4/6)	粘土質シルト
掘り方埋土	16	明褐　色(7.5YR5/6)	シルト質粘土
〃	17	暗褐　色(7.5YR3/4)	粘土質シルト
〃	18	褐　色(7.5YR4/4)	シルト質粘土

層位	層No	土色	土性
地山	19	明褐　色(7.5YR5/6)	粘土質シルト(及山(B))
第1層	1	暗赤褐　色(5YR3/3)	シルト質粘土
〃	2	暗赤褐　色(5YR3/3)	シルト質粘土
第2層	3	褐　色(7.5YR4/4)	シルト質粘土
〃	4	褐　色(10YR5/4)	シルト質粘土
第3層	5	暗褐　色(7.5YR3/4)	シルト質粘土
第4層	6	褐　色(7.5YR4/4)	シルト質粘土



第11図　第5住居跡

第10表　第5住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}
深さ（cm）	85	19	50	17	6	7	6	18	16	2	5	5	6	8

P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}	P_{24}	P_{25}	P_{26}	P_{27}
13	13	5	5	6	5	5	9	?	10	23	45	6

Ⅰ：弥生土器

第12図8：口縁がほぼ直立し、口縁内側に強い稜をもつ鉢である。口縁部外面には太い沈線が2条あり、体部外面には太い沈線と細い沈線が1条ずつ平行にめぐらされている。

第12図9：幅4mmの沈線がほぼ平行に走っている体部破片である。

第12図10：幅15～20mmの平行施文具によって平行沈線、波状文が描かれている体部破片である。

Ⅱ：土師器

高坏（第12図1）：胎土は石英、長石を若干含むが緻密である。坏部は内弯しながら大きく開く。脚部は柱状部と円錐台状の裾部からなる。成形については明らかでないが、坏部・柱状部・裾部を別々に作成し接合していると考えられる。内部の調整として、坏部はベラミガキが行なわれている。裾部には小さい単位の刷毛目調整が行なわれている。外面は剥落著しく観察が困難であるが、坏部に不定方向の刷毛目、脚部にヘラミガキの痕跡がある。

器台（第12図2）：受け部を欠く。胎土は石英、長石を若干含むが緻密である。

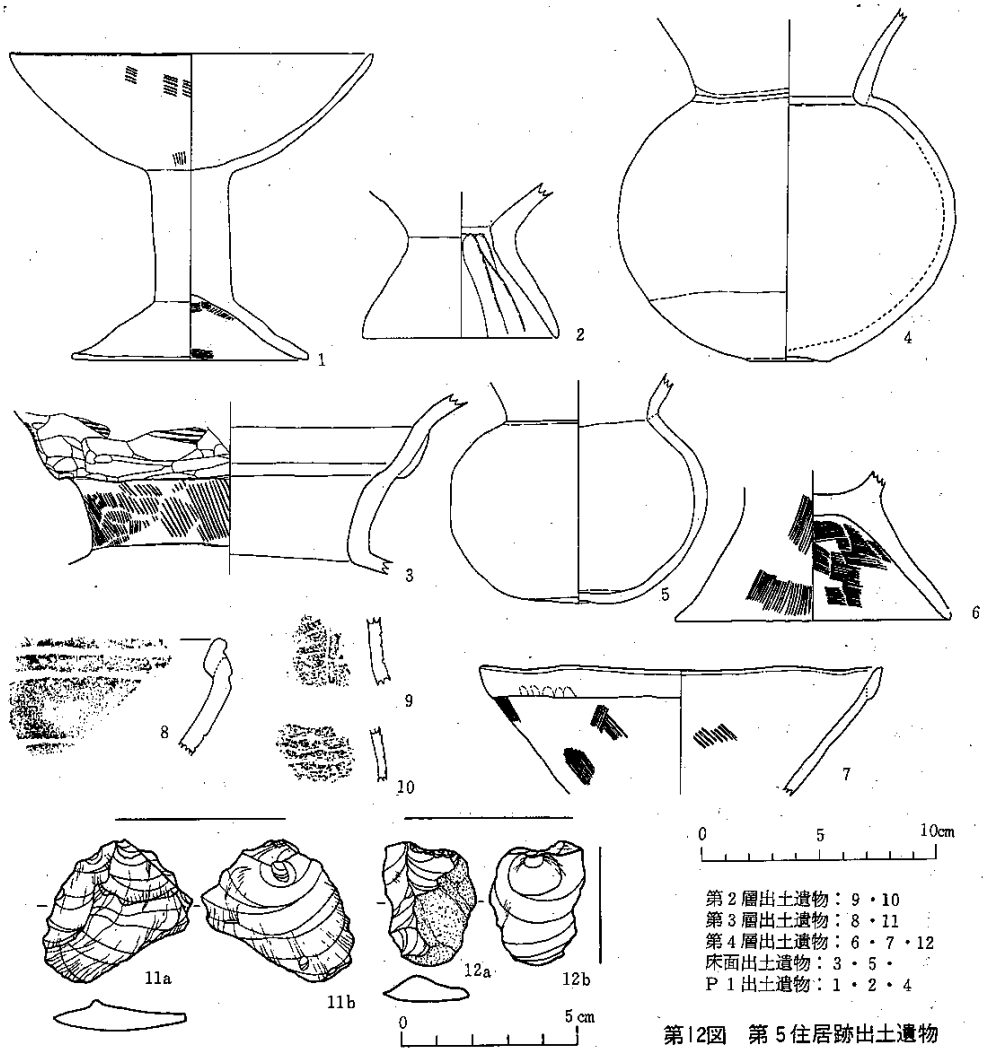
円錐形の脚部が上部で「く」の字状に外反し、受け部に至る。従って中央部が貫通孔となる。脚部内面は指で縦方向に調整されている。器外面の調整は磨滅が著しく不明である。

壺1（第12図3）：複合口縁で口縁部幅の広い壺である。体部を欠く。胎土は僅かに砂粒を含む。

頚部および口縁部は粘土帯の積みあげによって成形される。この段階で頚部は縦の刷毛目調整が行なわれる。その後、口縁部外面に粘土を貼りつけ、複合口縁状の段をつくる。調整として横の刷毛目が行なわれるが、さらにヘラミガキによってその刷毛目を消している。

内面も横の刷毛目調整の後ヘラミガキが行なわれている。なお、口縁部内面にも軽い段が形成されている。

壺2（第12図4・5）：口縁上半部を欠失している。体部がつぶれた球形をしており、最大径は体部中央にある。底部は丸底風であるが軽い凹みが認められる。これらの壺は壺1と大きさの点で異なる（小さい）。胎土は石英粒を含むが全体的に緻密である。器内外面の調整は剥落が著しくよくわからない。



第12図　第５住居跡出土遺物

台付甕（第12図6）：脚台の部分のみで他は欠失している。胎土は石英粒を含むが比較的緻密である。内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目調整知認められる。

甑（第12図7）：鉢形を示すが底部が欠損しているため底部孔の状態が明らかでない。胎土は長石･石英を含み、幾分粗い。

口縁部は複合口縁七あるが輪積技法によって成形された後、指頭でおさえて調整している。

体部は磨滅が著しいが内外面とも刷毛目が認められる。なお、この刷毛目は複合口縁をつくる前段階でなされたものである。

その他の土師器破片:以上の他に破片も多い。特記すべきものとしては、第3層の高坏脚部（輪積み成形による円錐台形の脚部）・第4層の煤が付着した甕（体部外面に刷毛目）等がある。

第11表　第５住居跡出土土師器破片

層位	器形	部位	内面	外面	備考	数量（個体数）
第2層	甕	底部	軽いミガキ	軽いミガキ		1 (1)
第3層	高坏	脚部	輪積み痕	縦のミガキ	円錐台状の脚部	1 (1)
第4層	中形壺	口縁～体部	?	頸部は縦の刷毛目	内外面とも剝落著しい	(2)
	〃	体部～底部	?	縦の刷毛目	底部は小さい	(1)
	壺?	口縁部	?	刷毛目→ミガキ		1 (1)
	甕	口縁～体部	?	?	細片、剝落著しい	101（1～2?）
	〃	口縁～底部	?	?	細片、剝落著しい	45 （1?）
	〃	〃	輪積痕	?	器形著しく歪み、剝落著しい	(1)
	〃	〃	?	体部に刷毛目	煤付着	(1)
	甕	頸部	?	横のナデ	肩部外面は縦の刷目	1 (1)
	〃	底部	軽いミガキ	?	凹底	1 (1)
	〃	底部	ナデ	?		2 (1)
	甑	口縁部	?	?	複合口縁、鉢形	1 (1)
第5層	壺	頸～肩部	?	?	剝落著しい	3 (1)
	甕	頸部	ミガキ	ミガキ		1 (1)
Pit1	甕	体～底部	?	刷毛目	剝落著しい	11 (1)
	高坏	坏部	?	?	段のない坏部	2 (2)

Ⅲ：石器

剥片（第12図11・12）：11は町角がかなり大きい剥片である。石材は質が粗悪で、石器の素材とするには不適当と思われる。おそらく粗い器面調整によって生じた剥片であろう。ａ面右肩部は折れている。

12はａ面に半分ほど自然面を残す剥片である。ｂ面にあるバルブは顕著である。打面は平担である。

第12表　第５住居跡出土石器計測表

図	名称	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石材	完・不完	層位
第12図11	剝片	43.1	34.5	7.9	10.3	安山岩	完	3層
第12図12	剝片	35.7	26.7	6.7	6.0	チャート	完	4層

第6住居跡

（遺構の確認）西側台地のほぼ中央部（第3住居跡の西側）、ＥＢ－29区周辺で黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構確認面は火山灰層である。

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）平面形は多少歪んではいるが、ほぼ楕円形である。長軸は西北－東南方向で、長さ2.00mである。短軸長は1.75mで、床面積は2.88m^2である。

（堆積土）遺構内の堆積土は基本的に4層に大別される。

第1層（暗褐色土層）：極暗褐色ないしは暗褐色のシルト質粘土層で、住居全域に分布する。この第1層は住居中央部で最も厚い堆積を示している。

第2層（黒褐色土層）：黒褐色のシルト質粘土層で、住居全域に厚く堆積している。第1層に較べ、土性は僅かに粗い。

第3層（暗褐色土層）：暗褐色のシルト質粘土層。壁沿いに狭小な分布を示す。

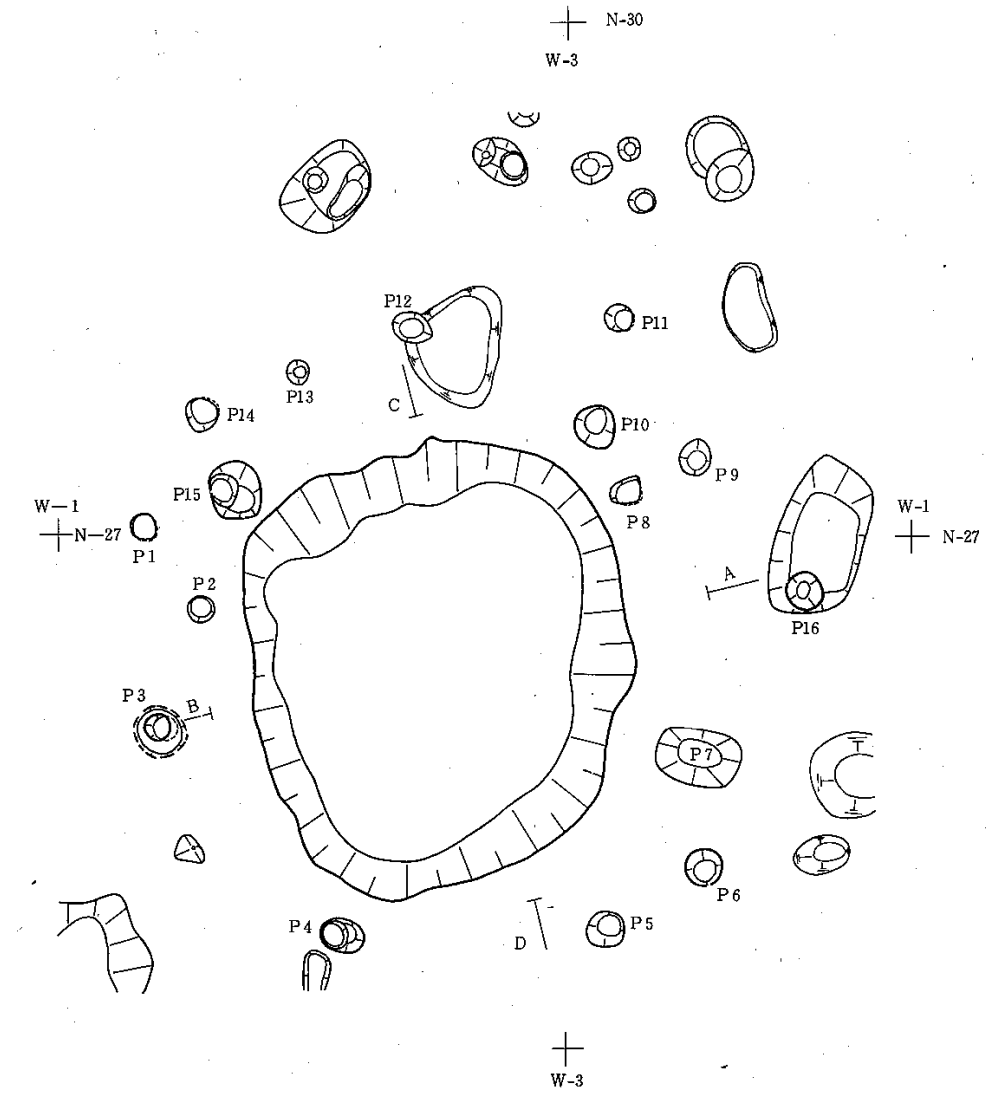
第4層傭褐色土層〕：暗褐色のシルト質粘土層で遺構底面に3～4cmの厚さで認められる。地山のブロックと若干の砂を含んでいることから、最も初期的な堆積物と推定される。

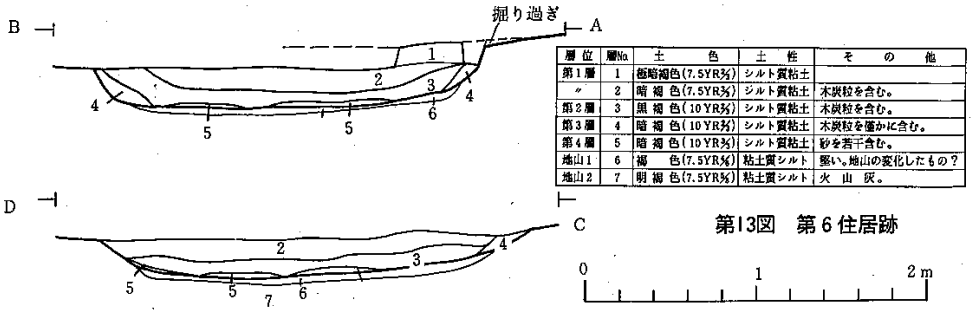
（遺構底面）遺構底面は固くしまっている。また、底面から塾への立ち上がりは非常にゆるやかで、全体として皿状を呈している。

遺構内には炉やその他の施設は一切検出されなかった。最後に床面を立ち割った所、その下に褐色粘土質シルト層・明褐色粘土質シルト層があらわれた。後者は地山の火山灰層であることが明瞭であった。さらに、前者との間に明瞭な層理面が発見されず、その変化が漸移的であることから、褐色粘土質シルト層は明褐色粘土質シルト層の変化したもの（地山）と推定された。従って、この第6住居跡（?）では掘り方は不明である。

（柱穴）遺構内には柱穴と思われるものは存在しなかった。しかし、その周囲を注意深く精査した結果P_1～P_{16}合計16個ピットを検出することができた。これら分ピットの中に入っていた土はいずれも暗褐色土で、遺構内の堆積土とよく似ていた。

P_1～P_{16}の中で掘り方と柱痕を識別することができたのはP_3のみである。この他に識別は明瞭ではなかったが、柱穴の可能性が強い（有段のピット）と考えられるのはP_4とP_{15}である。これらP_3・P_4・P_{15}は遺構の西側にあって二等辺三角形状の配置を示している。このP_3・P_4・P_{15}のピットを基礎として他のピットを検討するとP_{16}・P_6・P_{10}が東側の対称的な位置に認められる。さらに、これらはピット間の距離においても規則正しさ（P_4－P_6とP_{15}－P_{10}は2.20m、P_4－P_{15}とP_6－P_{10}は2.70m）が見られる。なお、これらのピットはP_{10}を除けばいずれも20cm以上で他のピットと較べると深い。以上の理由からP_3・P_4・P_{15}・P_{16}・P_6・P_{10}は柱穴の可能性が強い。





層位	層No.	土色	土性	その他
第1層	1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト質粘土	
〃	2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	木炭粒を含む。
第2層	3	黒褐色(10YR2/3)	シルト質粘土	木炭粒を含む。
第3層	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	木炭粒を僅かに含む。
第4層	5	暗褐色(10YR3/4)	シルト質粘土	砂を若干含む。
地山1	6	褐色(7.5YR4/4)	粘土質シルト	堅い。地山の変化したもの？
地山2	7	明褐色(7.5YR5/6)	粘土質シルト	火山灰。

第13図　第6住居跡

（炉およびその他の施設）検出されなかった。

（年代決定資料）遺物が集中して発見されたのは第1層（第14図1・2～5、7～11）である。第2層も多いが第1層と較べるとはるかに少ない。また、第3層からも出土しているが非常に僅かである。第4層からは1点も発見されなかった。

これらの遺物は遺構が廃絶された後に廃棄されたり流入したものと考えられる。また、第1層に遺物が集中することは第2層までの堆積作業が完了した後に廃棄された（もしくは流入した）遺物の多いことを示している。このため、遺構の構築および使用時の年代を直接推定しうるものはない。

しかし、これらの遺物によって埋っていく過程の年代を推定することができる。従って遺構の下限年代を理解することは可能である。

第13表　第６住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}
深さ(cm)	15	18	37	26	14	23	14	8	6	8	13	14	7	17	28	38

（遺物）

Ⅰ：弥生土器

第14図2：太いヘラガキによって沈線文が施文されている。体部の小破片で器形は不明である。

第14図3・4：極めて幅のせまい平行施文具によって山形文、平行沈線文が施文されている。体部小破片のため器形は不明である。

第14図5：甕の口縁部で、口縁に平行に3条の沈線を横走させ、口縁下端に1条の撚糸圧痕を施している。地文はＬＲの縄文である。

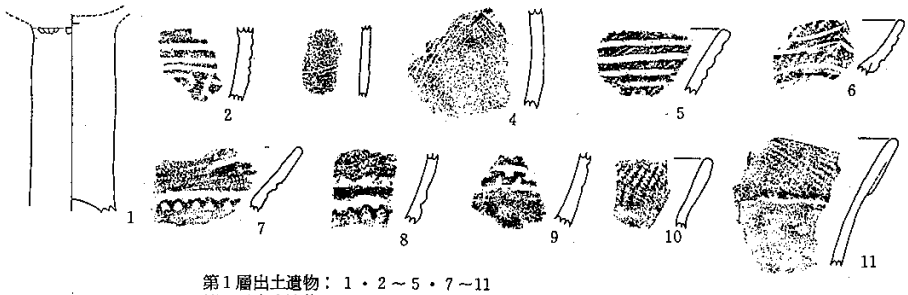
第14図6：波状をなす壺の複合口縁と思われる。地文としてＬＲを施文した後、突起を中心に2条の平行沈線による連弧文を描き、その間を磨消している。口縁下部には1条の沈線がある。

第14図7～9：口縁部破片で、いずれもその下端に交互刺突文がある。

第14図10・11：口縁部破片で縄文が施文されている。10は単純口縁であるが、11は複合口縁である。

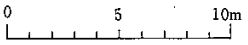
Ⅱ：土師器

高坏（第14図1）：脚柱状部。坏部および脚裾部は欠失している。胎土は石英、長石の細粒を含むが、比較的緻密である。器面の磨滅が著しく調整技法の観察は困難である。坏部と接合する部分に縦方向の小さい単位のヘラミガキが観察される程度である。



第1層出土遺物：1・2～5・7～11
第2層出土遺物：6

第14図　第6住居跡出土遺物



その他の土師器破片：この他、実測不可能なものは表にまとめたが、その中で器形が判明するものとして高坏（円錐台状脚部）甕等がある。これらはいずれも保存が悪く剥落が著しい。
この他体部破片はかなり多いが、いずれも細片である。

第14表　第6住居跡出土土師器破片

層位	器形	部位	内面	外面	備考	数量（個体数）
第1層	高坏	脚部上端	?	?	円錐台状の脚部上端	1 (1)
	壺 or 甕	底部	?	?		3 (1)
	甕	頸部	?	?		1 (1)
第2層	甕	頸部	?	?		1 (1)

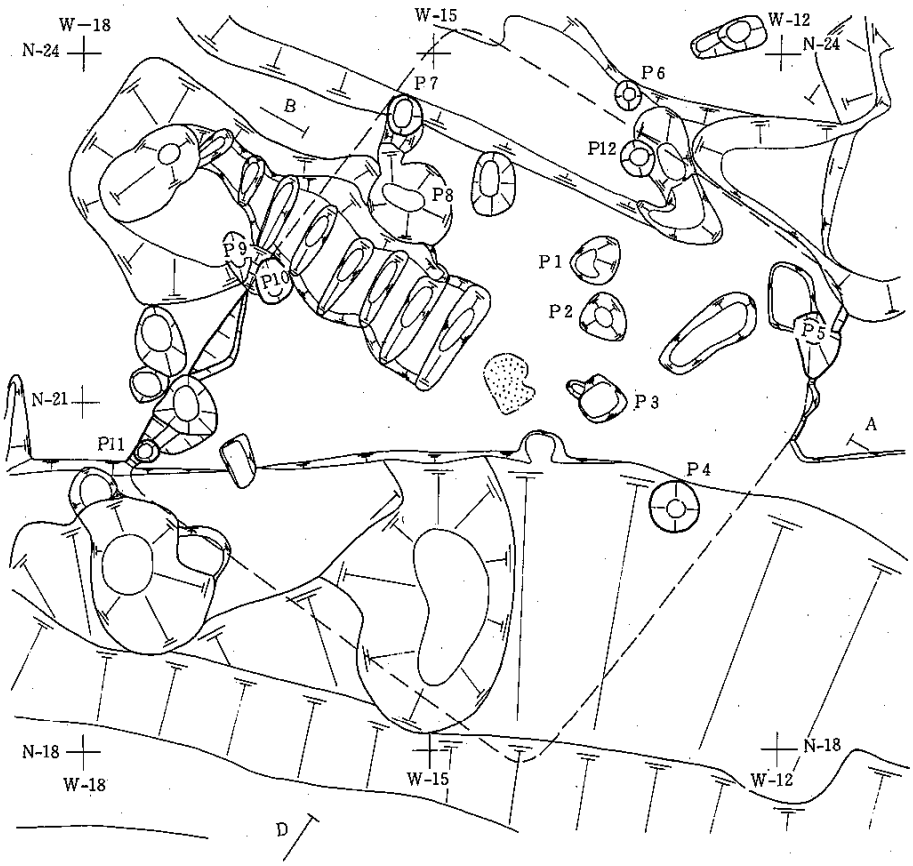
第7住居跡

（遺構の確認）西側台地の中央平担面から僅かに南寄りのＥＦ－28区周辺で、土師器片を含んだ暗褐色土の分布を確認した。遺構確認面は表土下の火山灰層であるが、この地区はブルドーザーの抜根作業によって表土の大半を削平済みであった。

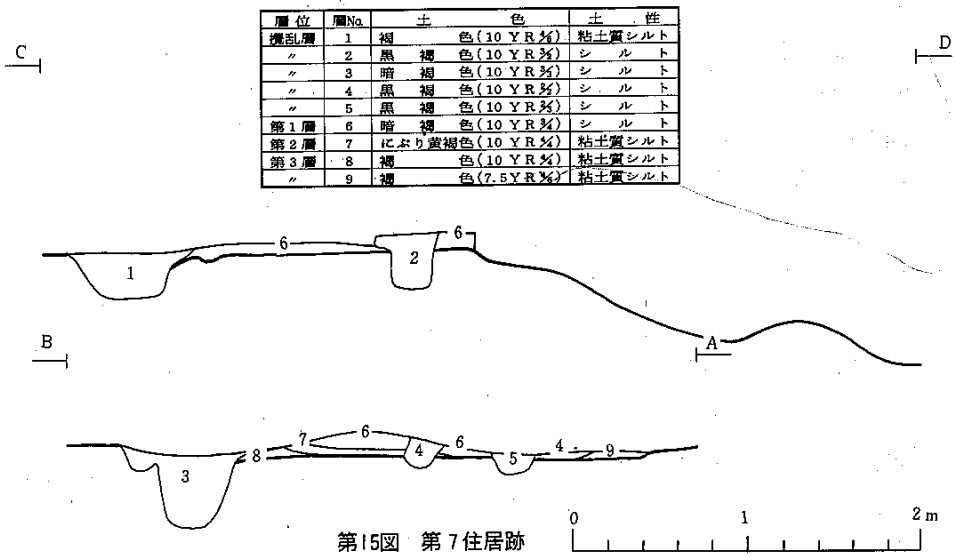
（重複・増改築）住居北側を第8住居跡から続く後世の溝によって切られ、さらに南側が大きな溝（ごく最近の）によって破壊されている。

（平面形・方向）住居の壁は一部を残してその大半が失なわれているので正確な形はわからない。残存している壁と柱穴状ピットの配列、住居内堆積土の分布等から推定すると正方形と考えられる。方向はほぼ南北で、大きさは3.45m×3.00m程度と推定される、その時の床面積は9.39m^2（推定）である。

（堆積土）あまりよく残っていないが、基本的には3層にわかれる。
第1層（暗褐色土層）：暗褐色のシルト層で僅かに焼土・木炭を含む。住居中央部に広い分布を示す。



層位	層No.	土色	土性
攪乱層	1	褐色(10YR⅗)	粘土質シルト
〃	2	黒褐色(10YR⅓)	シルト
〃	3	暗褐色(10YR⅓)	シルト
〃	4	黒褐色(10YR⅓)	シルト
〃	5	黒褐色(10YR⅓)	シルト
第1層	6	暗褐色(10YR⅓)	シルト
第2層	7	にぶい黄褐色(10YR⅘)	粘土質シルト
第3層	8	褐色(10YR⅘)	粘土質シルト
〃	9	褐色(7.5YR⅗)	粘土質シルト



第15図　第7住居跡

第2層（にぶい黄褐色土層）：にぶい黄褐色の粘土質シルト層で住居西側に広い分布を示す。

第3層（褐色土層）：褐色の粘土質シルト層で壁沿に狭小な分布を示す。

これらの層の中で、第2・3層は土色・土性等の点で共通性があるが、第1層との間には違が認められる。

（床面）床面は後世の溝によって切られ、さらにブルドーザーによる削平のため破壊が著しい。残っている部分について観察すると、平担ではあるが特にたたきしめられたような固い面をなしてはいない。中央部には炉がある。

最後に床面を剥がしてみたが明瞭な掘り方は検出されなかった。

（柱穴）ピットは合計12ある。この中でP_4・P_5・P_6・P_7・P_9・P_{10}・P_{11}・P_{12}以外は内部にボサボサした土が入っており木の根の可能性が強い。また、P_4～P_{12}の中で配列に規則性が認められるのはP_7・P_{10}・P_{11}・P_5・P_4・である。P_7とP_5、P_{10}・P_4は住居の東と西で対になっている。P_{11}に対応するものは東側にないが、対応地点が溝によって切られているため消滅したものと考えられる。

これらのピットは掘り方と柱痕を区別できなかったので柱穴と断定することはできない。しかし、以上述べたように東西に対をなして（3対）ならぶという配置の規則性を考えると、柱穴の可能性を認めないわけにはいかない。

（炉）床面中央部が20×30cmの広さで赤褐色に焼けて固くなっている。掘り込みや他の施設は認められず、床面自体の上で火が焚かれたものと思われる。

（その他の施設）検出されず。

（年代決定資料）床面から遺物は発見されなかった。遺物が多く発見されたのは第2層上面と第1層である。層相の観察と考え併せると第2層堆積終了後安定期を迎え、遺物が廃棄され、その後第1層が堆積したものと推定される。従って、これらの資料は住居の構築および使用の年代を正確に決めうるものではない。埋っていく過程の年代、すなわち、住居の下限年代を理解するにとどめねばならない。

第15表　第7住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6
深さ(cm)	6	17	20	33	22	7
土色	暗褐色 (10YR 3/3)	黒褐色 (10YR 3/2)	黒褐色 (10YR 3/2)	黒褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/4)
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	粘土質シルト
備考		後世のピット	後世のピット			

P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}
31	40	39	50	15	10
黒褐色 (10YR 3/2)	褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	黒褐色 (10YR 3/2)	黒褐色 (10YR 3/2)	暗褐色 (10YR 3/3)
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
	後世のピット				

（遺物）

縄文の施文された弥生土器もあるが、多くは土師器である。器形が判明するものでは刷毛目調整のある甕?が多い。これは層位による差がない。復元して実測図の作成できるものはない。
いずれも破片である。器形の判明するものは表にまとめてある。この他、体部破片はかなり多いがいずれも細片である。

第16表　第７住居跡出土土師器破片

層位	器形	部位	内面	外面	備考	数量（個体数）
第１層	甕	口縁部	?	?		1 (1)
	〃	口縁～体部	横の刷毛目	刷毛目→横ナデ		1 (1)
	〃	頸部	〃	横ナデ		1 (1)
第２層	甕	口縁部	横の刷毛目	刷毛目→横ナデ		1 (1)
	〃	〃	刷毛目	?		1 (1)
	〃	〃	ナデ	?		1 (1)
	〃	〃	横ナデ	横ナデ	頸部外面に刷毛目	1 (1)
	〃	底部	刷毛目とオサエ	縦の刷毛目	底面はナデ	1 (1)

第8住居跡

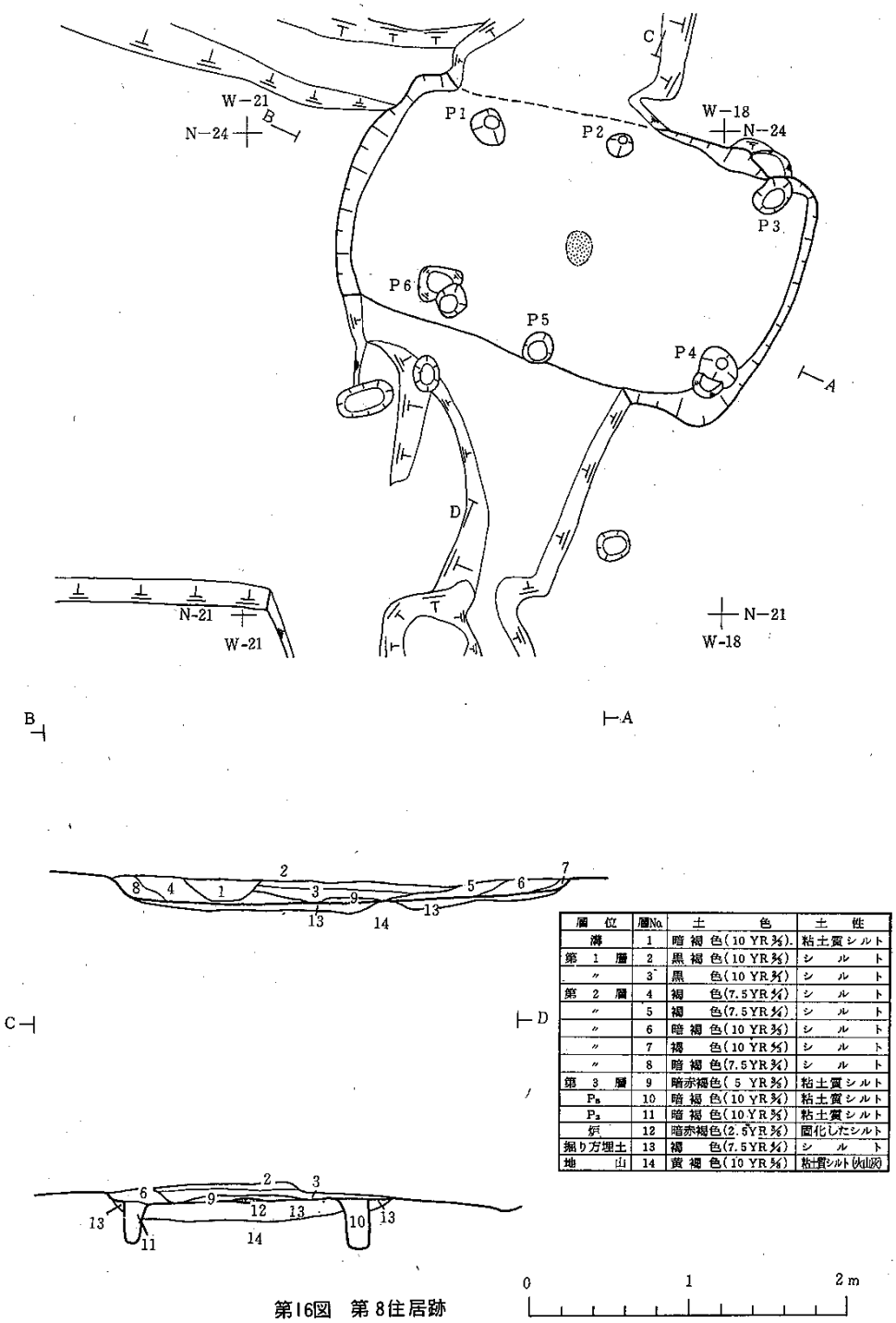
（遺構の確認）第7住居跡西側のＥＨ－28区に黒褐色土の落ち込みを確認した。確認面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（重複・増改築）南北と東西に直交して走る後世の溝によって切られている。

（平面形・方向）多少歪んだ隅丸長方形で、長軸は東西、短軸は南北方向にほぼ一致する。大きさは2.70×1.55mで底面積は4.30m^{2}である。

（堆積土）住居内の堆積土は基本的に次の3層に大別される。

第1層（黒褐色土層）：黒色ないしは黒褐色のシルト層で住居中央部に皿状の堆積を示す。
遺物の出土状況等からaとbに細分される。



層位	層No.	土色	土性
溝	1	暗褐色(10 YR 3/2).	粘土質シルト
第1層	2	黒褐色(10 YR 3/3)	シルト
〃	3	黒色(10 YR 3/1)	シルト
第2層	4	褐色(7.5 YR 4/4)	シルト
〃	5	褐色(7.5 YR 4/4)	シルト
〃	6	暗褐色(10 YR 3/3)	シルト
〃	7	褐色(10 YR 4/3)	シルト
〃	8	暗褐色(7.5 YR 3/4)	シルト
第3層	9	暗赤褐色(5 YR 3/3)	粘土質シルト
P_1	10	暗褐色(10 YR 3/4)	粘土質シルト
P_2	11	暗褐色(10 YR 3/3)	粘土質シルト
炉	12	暗赤褐色(2.5 YR 3/6)	固化したシルト
掘り方埋土	13	褐色(7.5 YR 4/4)	シルト
地山	14	黄褐色(10 YR 5/6)	粘土質シルト(火山灰)

第16図　第8住居跡

第2層（暗褐色土層）：褐色ないしは暗褐色をしたシルト層で、住居中央部を除き壁に近い部分に分布する。全体的に第1層より分布は広い。

第3層（暗赤褐色土層）：暗赤褐色の粘土質シルト層。焼土を多量に含んだ炉直上の堆積物である。

以上の層で、第３層は炉との関係が密接であり、純然たる住居廃絶後の堆積物とは見なしがたい。

（床面）床面は平担でしっかりしているが、あまり固くはない。中央部が焼けており炉と思われる。床面から塾への立ちあがりは極めてゆるやかである。北側と南側の壁は破壊がはげしく（後世の溝）、あまり残っていない。保存のよい東側と西側の壁は10cm位の高さで残っていた。壁沿の施設は柱穴状ピットを除いて、一切検出されなかった。

最後に床面を掘り下げると、褐色のシルト層が5～10cm続き、その下に地山の黄褐色火山灰層があらわれた。褐色シルト層には、地山のブロックが入りこんでいること等から、住居掘り方の埋土と考えられる。しかし、床面に特別な粘土を敷きつめたような形跡は認められない。

（柱穴）住居の壁に沿って合計6つのピットがならんでいる。内部の土は暗褐色ないしは黒褐色の粘土質シルトでしまりがある。掘り方と柱痕の区別はできなかったが、ほぼ対称的に南北に3対ならんでいる。このように規則正しい配列状況は柱穴の可能性が強いことを示している。

（炉）住居中央部の床面が17×20cmの範囲で、楕円形に焼けている。暗赤褐色を呈し、非常に固い。この部分を立ち割ると、周辺および下部に向うに従い影響が弱まっていく（色彩と固化）ことが観察された。

（その他の施設）検出されなかった。

（年代決定資料）遺物が多く発見されたのは、第1b層の上面と第2層の上面である。その他は少ない。床面には遺物は認められなかった。

従って、住居の構築および使用時の年代を決定できる資料はない。これらの資料によって推定できる年代は住居が埋っていく過程のものであるから、住居の使用された時期という点ではその下限を理解するにとどめなければならない。

第17表　第８住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6
深さ（cm）	33	25	12	16	33	30
土色	暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	黒褐色 (10YR 3/2)	黒褐色 (10YR 3/2)	暗褐色 (10YR 3/4)	暗褐色 (10YR 3/4)
土性	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト

（遺物）いずれも土師器で、弥生土器は含まれていない。実測図を作成できるものはないが、器形として、高坏・器台・甕等がある。器形の判明するものは、表としてまとめた。

第18表　第８住居跡出土土師器破片

層位	器形	部位	内面	外面	備考	数量（個体数）
第１層	高坏	坏部	?	?	外面に有段	1 (1)
	〃	坏部	?		〃	1 (1)
	〃	脚部	?	?	中実の柱状脚部	1 (1)
	〃	〃	?	?	円錐台状の脚部	1 (1)
	器台	〃	刷毛目	ミガキ		1 (1)
	甕	口縁～頸部	ナデ or ミガキ	ナデ	頸部外面に刷毛目	1 (1)
	〃	頸部	?	刷毛目?		1 (1)
	〃	口縁部	ナデ	刷毛目		1 (1)
	〃	口縁～頸部	刷毛目	ナデ	頸部外面に刷毛目	1 (1)
	〃	口縁部	?	?		1 (1)
	〃	〃	ナデ	ナデ		1 (1)
	〃	底部	?	?		1 (1)
第2層 上面	甕	口縁部	ナデ	ナデ		2 (2?)
	〃	〃	?	?		2 (2?)
	〃	〃	刷毛目	ナデ	頸部外面に刷毛目	1 (1)
第２層	〃	頸部	ナデ	〃		1 (1)

第9住居跡

（遺構の確認）西側台地は南側に向うに従ってしだいにせばまり、調査区の南端では狭小な平担面となる。第9住居跡はＥＮ－29区周辺のゆるやかな斜面上で確認された。

遺構確認面は表土下の火山灰層であるが、荒掘りの段階で住居内の堆積土をほとんど掘りあげてしまった。

（重複・増改築）南北に走る後世の溝によって中央部が切られている。

（平面形・方向）北側の壁はほとんど残っていない。保存がよいのは東西に残したあぜの部分だけで、南側の壁も荒掘りによる削り過ぎが目立つ。比較的保存のよい壁と床面の接する部分から推定すると、一辺約3mの正方形をなすと考えられる。方向は北東－南西を示す。

（堆積土）全体的な観察はできなかったが、あぜに残された断面から考えると、2層に大別さ

れるようである。

第1層（暗褐色土層）：暗褐色のシルト質粘土層で木炭、焼土を含む。壁付近を除き住居のほぼ全域に分布すると考えられる。

第2層（褐色土層）：褐色のシルト質粘土層である。焼土や木炭を僅かに含む他、暗褐色シルト質粘土の混入が多い。分布は壁付近に限られる。

（床面）床面はほとんど失われている。あぜの下に残っていた部分は固い平担な面を形成していた。2ケ所程焼けた部分がある。この他、性格は明らかでないが多数のピットがあった。

なお、住居の掘り方と床面のちがいは検出することができなかった。

（柱穴）ピットは合計20個検出されたが、掘り方と柱痕を区別できるようなものはない。また、配列関係を検討してみたがその中に規則性を発見できず、柱穴に関しては明らかにすることができなかった。

（炉）焼土面が住居中央部と僅かに東寄りの部分に2ケ所発見された。両方とも楕円形で、ピットによって切られている。大きさは第1焼土面が45×36cm、第2焼土面が30×22cmである。

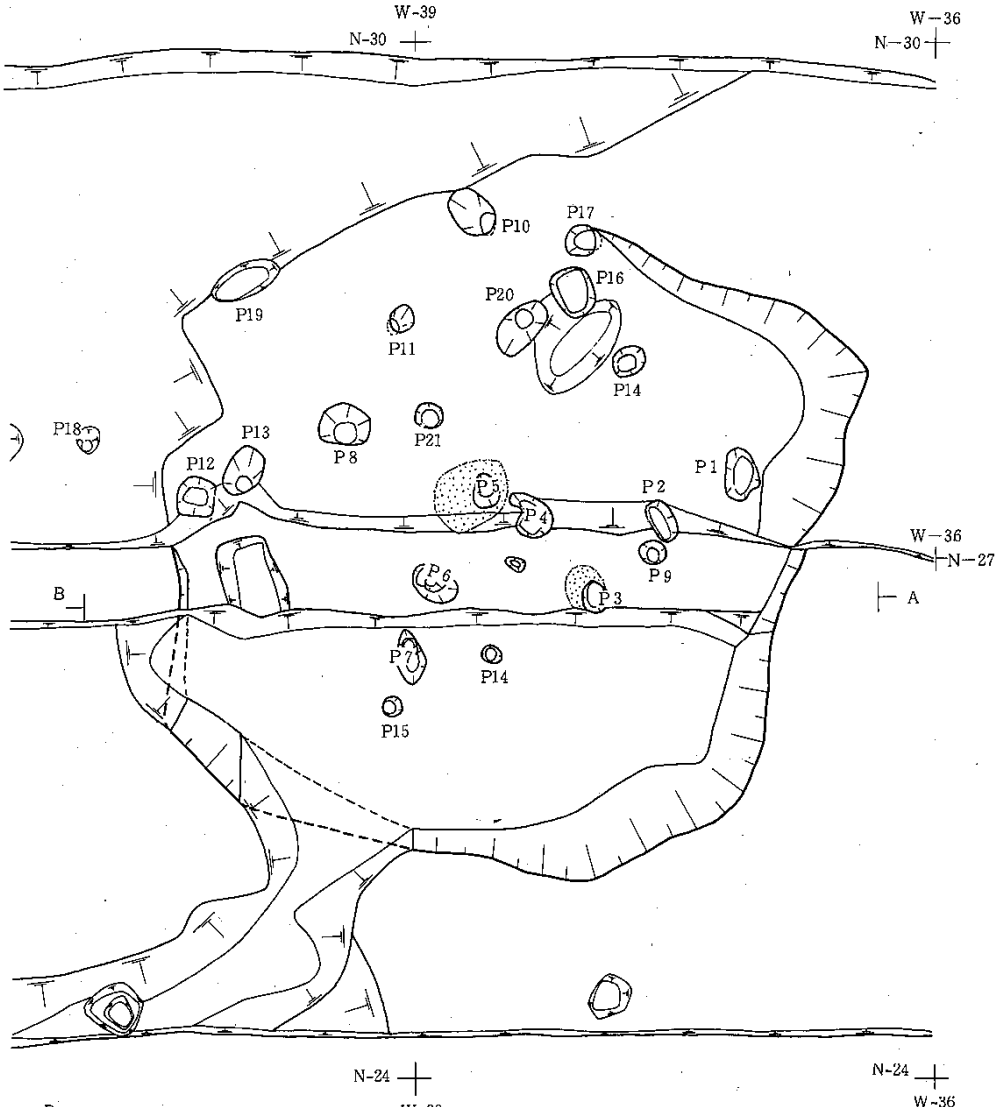
（その他の施設）検出されなかった。

（年代決定資料）発見された遺物は非常に少ない。いずれも小さい破片が多い。すべて第1層の遺物であり、遺構の年代を決める上で適当な資料はない。住居廃絶後の堆積土層の遺物によって下限の年代を推定するに留めねばならない。

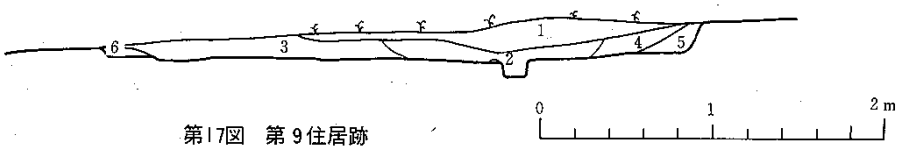
第19表　第9住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9
深さ（cm）	20	36	9	17	17	42	45	40	7
土　色	暗褐色 (7.5YR3/3)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (7.5YR3/3)	暗褐色 (10YR3/3)	暗赤褐色 (5YR3/3)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗赤褐色 (5YR3/6)
土　性	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土

P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}
46	25	19	17	40	25	58	43	28	12	30
暗赤褐色 (5YR3/6)	暗褐色 (7.5YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	暗褐色 (10YR3/4)	
シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	



層　位	層No.	土　　色	土　　性	そ　の　他
表　土	1	略		
第１層	2	暗褐色（10YR3/3）	シルト質粘土	焼土・木炭を含む
〃	3	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト質粘土	焼土・木炭を含む
〃	4	暗褐色（10Y R3/4）	シルト質粘土	焼土・木炭を含む
第２層	5	褐　色（7.5YR3/4）	シルト質粘土	No.４層を混合
〃	6	褐　色（7.5YR3/4）	シルド質粘土	No.４層を混合



第17図　第９住居跡

（遺物）

Ⅰ：弥生土器

縄文および撚糸文の施文された土器片が数点出土している。細片のため器形等は不明である。

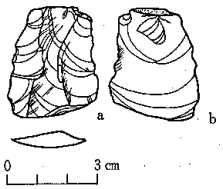
Ⅱ：土師器

土師器と思われるものは1点だけである。小形壺の口縁部と考えられるが、内外面にヘラミガキがある。

Ⅲ：石器

剥片（第18図）：自然面を有する平坦な打面が認められ、末端は蝶番剥離となっている。ａ面にほぼ上方からの剥離痕がある。

ｂ面にはバルバー・スカーがみとめられる。



第18図　第９住居跡第２層出土遺物

第20表　第９住居跡出土石器計測表

図	名　称	長さ（mm）	幅　（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石　材	完・不完	層　位
第18図	剥　片	35.1	29.8	7.4	6.9	チャート	完	2　層

第10住居跡

（遺構の確認）西側台地の北西部、ＤＳ－35区周辺で表土をはぎとり地山の火山灰層に達したところP_1を発見した。このP_1は貯蔵穴状をなすことから、住居跡の存在が予想されたので周囲を精査した。その結果、僅かに残存していた壁を検出することができた。

（重複、増改築）認められない。

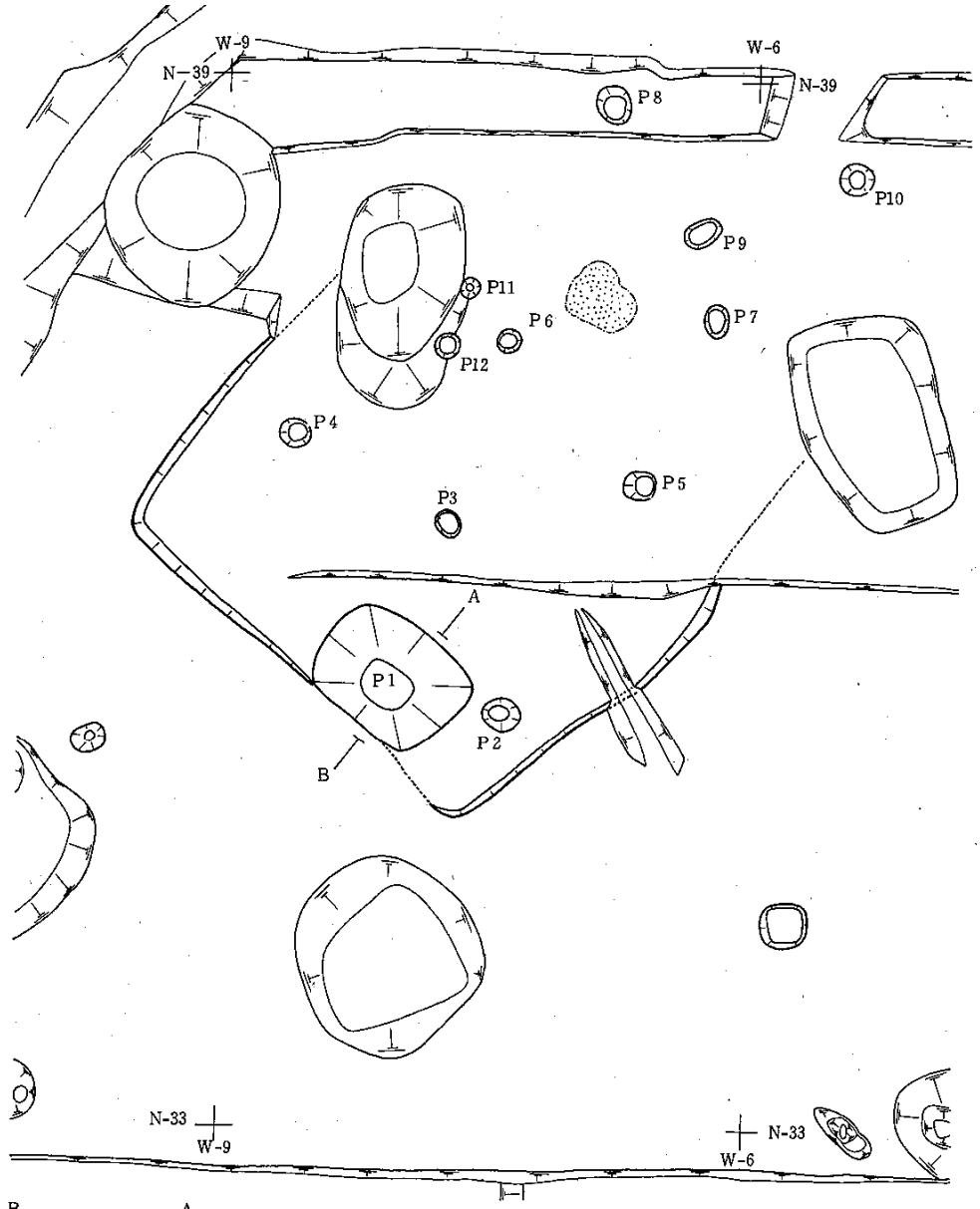
（平面形、方向）住居北側の削平が著しく壁を検出することができなかったため、正確な平面形はわからない。残存していた南側の壁と焼土の配置等から推定すると、南北に長軸をもつ長方形ではないかと思われるが確証はない。大きさは東西が2.85m、残っている部分で南北が1.3～1.9mである。

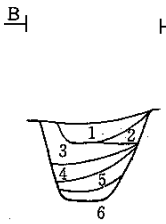
（堆積土）住居南側の床面直上に、暗褐色土に明褐色火山灰が斑状に混入した層が薄く認めら.れた。この他、住居内堆積土は残っていなかった。

（床面）堆積土の残っていた住居南側に確認された。平担な面をなしているが貼り床があったかどうかわからない。住居の南東隅には長方形のピットがあり、北側には焼土が認められた。

この他ピットが合計12個検出された。

（柱穴）検出された12個のピットには掘り方と柱痕が区別できたものがない。P_2とP_6は深さも20cm以上であるが、その他はいずれも浅い。また配列関係に規則性をみいだすことができず、柱穴とは考えられない。





層　位	層No.	土　　色	土　　質
第1層	1	暗赤褐色（5 YR3/3）	シルト質粘土
〃	2	黒 褐 色（7.5YR3/2）	粘土質シルト
第2層	3	暗 褐 色（7.5YR3/3）	シルト質粘土
〃	4	極暗褐色（7.5YR2/3）	粘土質シルト
第3層	5	暗赤褐色（5 YR3/2）	粘土質シルト
〃	6	褐　　色（7.5YR4/4）	粘土質シルト
地　山	7	明 褐 色（7.5YR5/6）	粘土質シルト

第19図　第10住居跡

0　1　2 m

（炉）住居北側に40×40cmの範囲で斑状の焼土が確認された。床面が焼けたものと判断することは困難である。しかし、住居廃絶後の堆積物とも考えられないことから、焼けた面が草木の根等によって部分的に撹乱を受けたものかもしれない。

（貯蔵穴）P_1は床面からの深さ50cm、大きさ85×65cmの隅丸長方形をしたピットである。
ピット内の層位は大別すると3層となる。第1層（暗赤褐色シルト質粘土層）、第2層（暗褐色シルト質粘土層）、第3層（褐色粘土質シルト層）。これらの層を観察すると、埋まり方は自然堆積的ではない。なお、ピットの上部（第1・2層）からは小形手捏土器（第20図3・4）や高坏（第20図1・2）、甕の破片等がまとまって出土した。

（その他の施設）検出されず。

（年代決定資料）P_1上部層から発見された小形手捏土器や高坏、甕等が住居の年代を推定する上で重要である。

第21表　第10住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}
深さ（cm）	50	22	10	5	10	20	12	12	5	16	6	7

（遺物）

Ⅰ：土師器

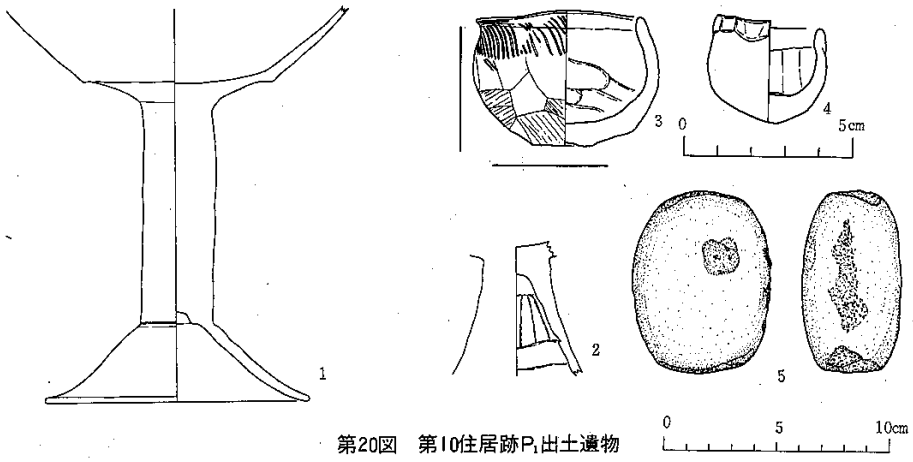
高坏1（第20図1）：胎土は石英、長石を含み比較的緻密である。坏部外面には段がある。脚部は中実の柱状部と円錐形の裾部からなる。柱状部下端には凹みが認められる。成形、調整技法の観察は困難であるが、坏部は体部と底部、脚部は柱状部と裾部を別々に作成し接合さているものと推定される。調整としてヘラミガキがなされているようであるが、明瞭ではない。

高坏2（第20図2）：高坏の円錐形をした脚部であるが裾部を欠く。胎土は石英粒を含み比較的緻密である。上半部を指で縦方向に調整した後、下半部を輪積み技法で成形している。内外面の最終的な調整は剥落が著しいため不明である。

小形手捏土器1（第20図3）：体径に比し器高の低い甕形をしている。口縁部が僅かに外反する。胎土は石英粒が全面に観察され幾分粗い。成形技法は不明であるが体部外面はヘラケズリされている。頚部から体部にかけて刷毛目調整が行なわれている。内面は指でオサエながら器面をととのえている。

小形手捏土器2（第20図4）：丸底で複合口縁の土器である。胎土は石英粒を含むが比較的緻密である。成形は不明である。口縁部は指頭によるオサエ、体部外面はケズリもしくはナデによって調整されている。

その他の土師器破片：P_1第2層から甕の体～底部破片が1個体分出土している。器外面は刷



第20図　第10住居跡P_1出土遺物

毛目調整が行なわれているが、部分的にミガキによって消されている。内面はナデが観察される。

Ⅱ：石器

敲石（第20図5）：円礫の上下両端に敲打によってできた面がある。両側面にも敲打痕が認められる。

第22表　第10住居跡出土石器計測表

図	名　称	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石　材	完・不完	層　位
第20図5	敲　石	81.1	61.0	43.6	307	安　山　岩	完	Pit 1－1層

第11住居跡

（遺構の確認）東側台地の中央部から幾分東寄りのＣＤ－8区周辺で方形をした黒褐色土の落ちこみを検出し、第11住居跡とした。遺構確認面は表上下の明褐色火山灰層である。

（重複・増改築）認められない。

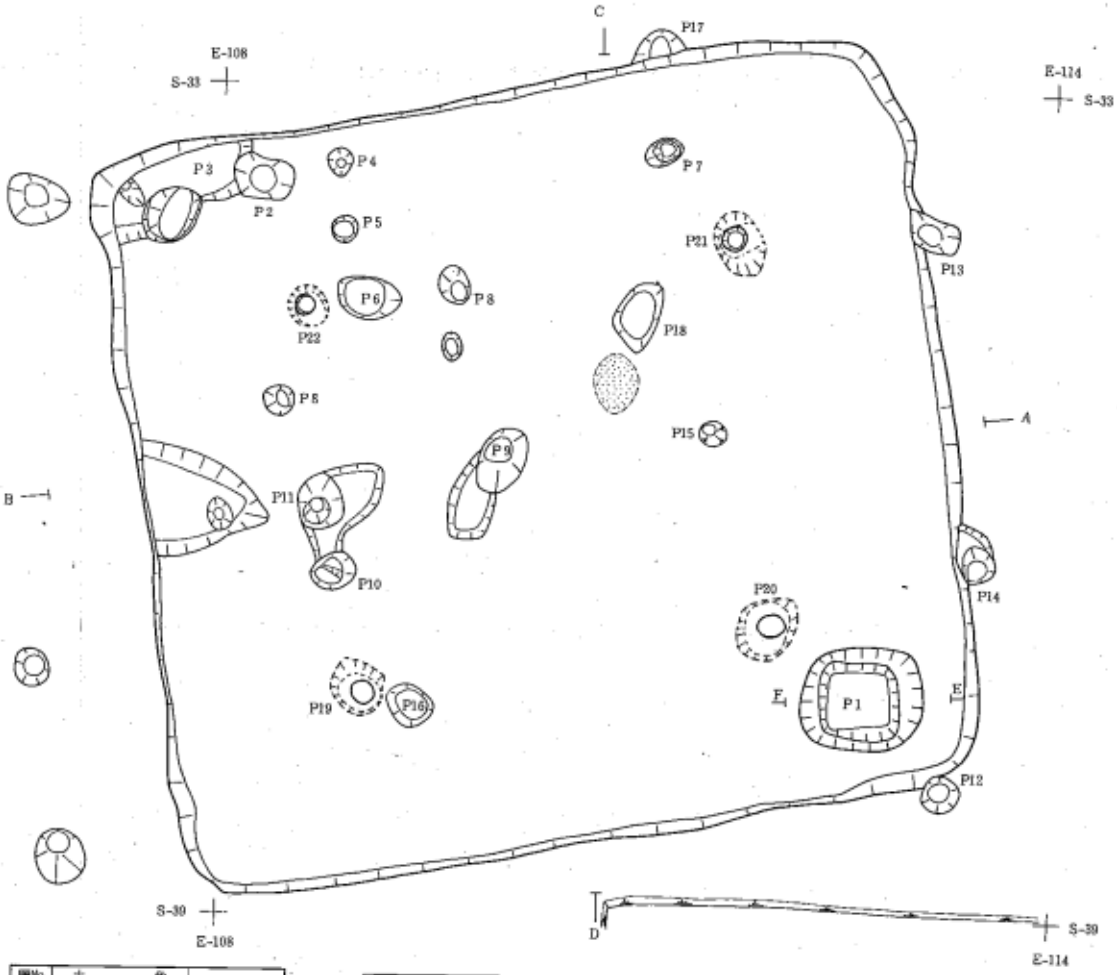
（平面形・方向）長軸5.75m・短軸5・30mで多少歪んではいるが、ほぼ正方形に近い。床面積は33.60m^2である。長軸は北東から南西方向。

（堆積土）住居円の堆積土は次の3層に大別される。

第1層（黒褐色土層）：黒褐色のシルト質粘土層で、住居の中央部に皿状に分布する。

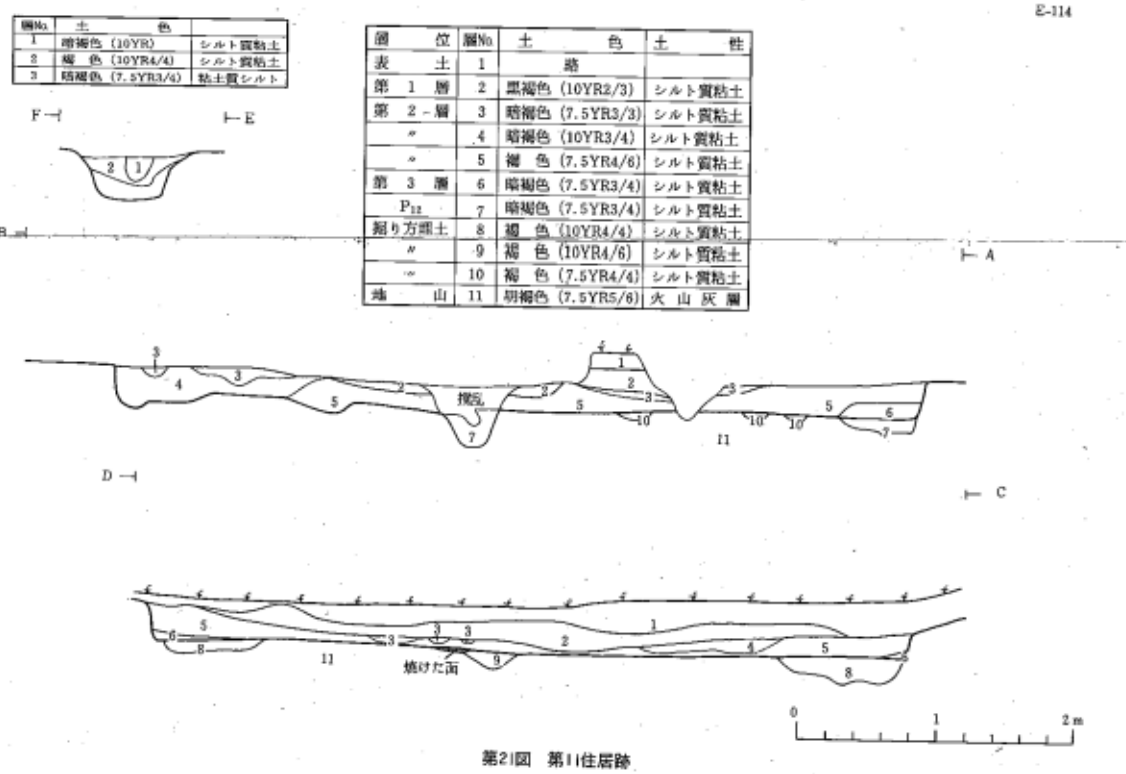
第2層（褐色土層）：褐色のシルト質粘土層。僅かに粘性があり、焼土を含む。住居のほぼ全域に厚く堆積している。なお、この第2層は住居の西側と最上部において多少の汚れが認められ、暗褐色になっている部分がある。

第3層（暗褐色土層）：暗褐色をしたシルト質粘土層で、焼土や木炭を含んでいる。分布はせまく壁沿に限られる。層も薄い。



層No.	土色	
1	暗褐色 (10YR)	シルト質粘土
2	褐 色 (10YR4/4)	シルト質粘土
3	暗褐色 (7.5YR3/4)	粘土質シルト

層位	層No	土色	土性
表土	1	路	
第1層	2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト質粘土
第2-層	3	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト質粘土
〃	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト質粘土
〃	5	褐 色 (7.5YR4/6)	シルト質粘土
第3層	6	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト質粘土
P_{12}	7	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト質粘土
掘り方埋土	8	褐 色 (10YR4/4)	シルト質粘土
〃	9	褐 色 (10YR4/6)	シルト質粘土
〃	10	褐 色 (7.5YR4/4)	シルト質粘土
地山	11	明褐色 (7.5YR5/6)	火山灰層



第21図 第11住居跡

（床面）床面は平担であるが、あまり固い面をなしていない。壁に近い部分ではそれが顕著で非常にやわらかい。壁は床面がまっすぐ立ちあがる。住居中央の東寄りには炉がある。その他、貯蔵穴状ピットや柱穴と考えられるピットが検出された。

最後に床面を掘り下げたが壁に近い部分を除いて、明確な掘り方は検出されなかった。

（柱穴）床面で確認できたものが18個、竪穴の壁に接して外側にあるものが4個、合計するとピットの数は22個となる。この中で、柱痕と掘り方が識別できたのはP_{19}・P_{20}・P_{21}・P_{22}である。この4つのピットは配置も規則的（竪穴の各辺に平行な方形である）で、基本的な柱穴と考えられる。なお、柱痕のピットは直径15～19cm、ほぼ垂直である。柱の太さもこの程度のものであったと推定される。

（炉）床面が楕円形に焼けている。大きさは43×32cmで、赤褐色の固い面をなしている。灰や木炭はほとんどみられない。この焼けた部分を立ちわると、小規模な掘り方が検出された。しかし、この掘り方は焼土面の南側に広がっているため、炉を意識した掘り方なのか、それとも住居全体に通ずるものなのか明らかでない。

（貯蔵穴）住居の東南隅に隅丸長方形のP_1が検出された。大きさは86×74cm、深さは約30cmである。内部には褐色ないしは暗褐色の土が入っていた。下部（No.3層）は木炭が多く、壺の口縁部（第22図3）や甕の体部が発見された。なお、このP_1が人為的に埋められたのか、自然に埋まったのか、はっきりしない。

（年代決定資料）全体的に遺物の出土は多くない。その中で、遺物が比較的多かったのは、第2層で、坏（第22図1）や壺（第22図2）等が発見された。第3層の遺物は少ないが、小形甕（第22図2）が出土している。これらの資料は住居廃絶後の年代を推定する上で重要である。

以上の他に、P_1から壺（第22図3）と外面に刷毛目のある甕が出土している。このP_1は人為的に埋められたのか、自然堆積によって埋ったのかはっきりしないが、どちらにしても住居構築～住居廃絶直後の時間的幅の中で埋ったものと推定される。従って、住居の使用された年代を考える上で撮も有効な資料ということができる。

なお、発掘の段階ではNo.2層を第1層、No.3層を第2層、No.4層を第2b層、No.5層を第3層、No.6層を第4層として遺物をとりあげた。

第23表　第11住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9
深さ（cm）	30	21	22	23	13	15	24	29	24
土色	暗褐色（10YR 3/3）	暗褐色（10YR 3/4）	暗褐色（10YR 3/4）	暗褐色（10YR 3/3）	暗褐色（7.5YR 3/4）	暗褐色（10YR 3/4）	暗褐色（10YR 3/4）	黒褐色（10YR 2/3）	暗褐色（10YR 3/4）
土性	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土
備考	貯蔵穴							木の根？	

P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}
32	42	31	35	56	27	16	9	8
暗褐色 (10YR 3/4)	黒褐色 (10YR 3/3)	褐色 (7.5YR 5/4)	褐色 (7.5YR 5/4)	暗褐色 (10YR 3/4)	黒褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/4)	褐色 (7.5YR 5/4)	暗褐色 (10YR 3/4)
シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土

P_{18} (掘り方)	P_{19} (柱痕)	P_{20} (掘り方)	P_{20} (柱痕)	P_{21} (掘り方)	P_{21} (柱痕)	P_{22} (掘り方)	P_{22} (柱痕)
60	60	56	56	56	56	64	64
褐色 (10YR 5/6)	褐色 (7.5YR 5/4)	褐色 (10YR 5/6)	暗褐色 (10YR 3/4)	褐色 (10YR 5/6)	暗褐色 (10YR 3/4)	褐色 (10YR 5/6)	暗褐色 (10YR 3/4)
シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土

（遺物）

Ⅰ：弥生土器

第22図5：太いヘラ描き沈線文がある。

第22図6・7：細い沈線によって平行沈線文や同心円文が描かれている。

第22図8・9：幅の狭い（2～3㎜）平行施文具によって横走する沈線文や、波状文を描いている。

第22図10：壺の口縁部である。ＬＲの縄文を施文した後、2条のヘラ描沈線文と交互刺突文を施している。交互刺突文の下は無文帯で、1条の沈線によって頚部と区画されている。

第22図11・12・13：いずれも、口縁部破片で、撚糸文が施文されている。12・13は成形段階の輪積み痕が観察される。

Ⅱ：土師器

坏（第22図1）：口縁部が僅かに内反し、体部に屈曲の認められる丸底風の坏である。胎土は緻密であるが石英粒を含む。

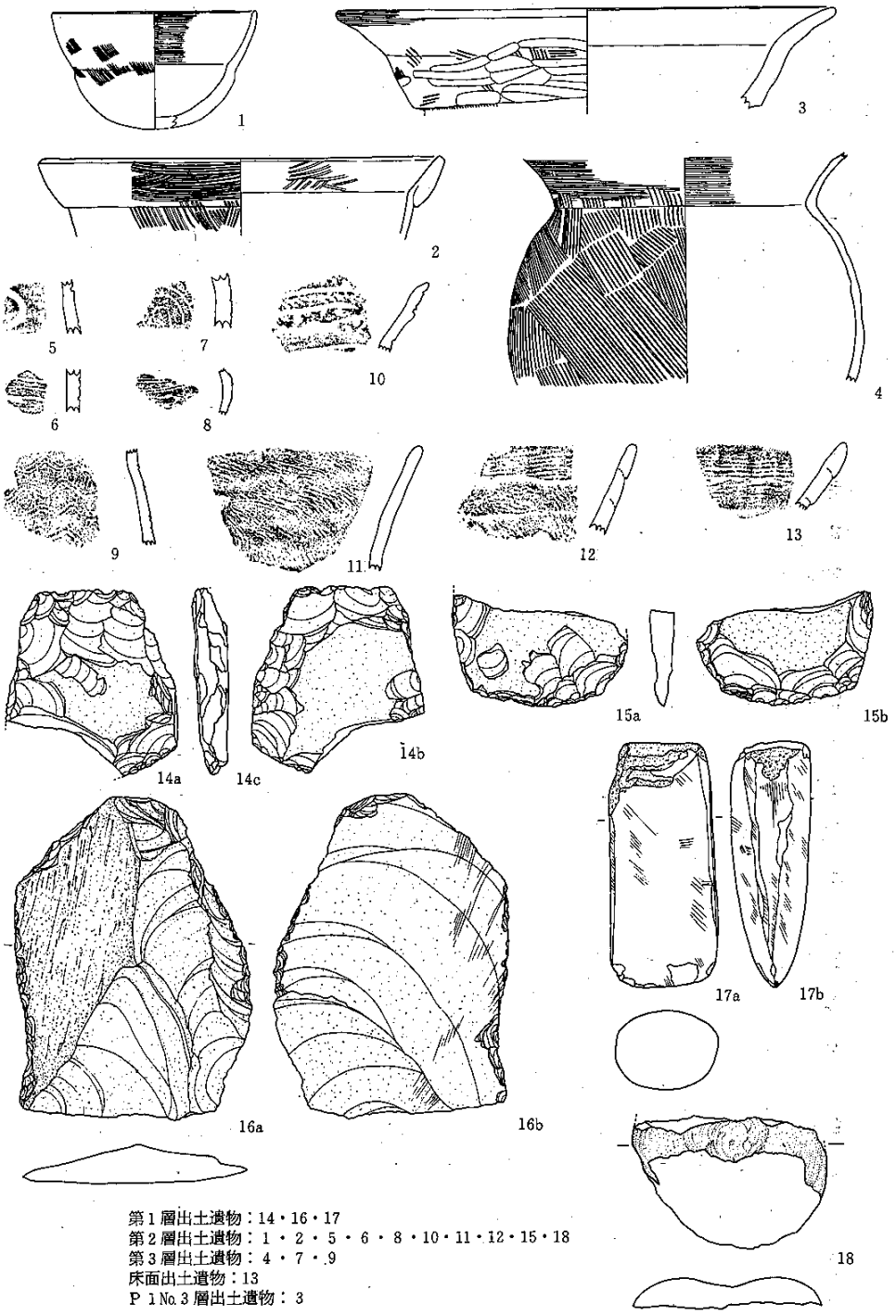
調整として体部外面に縦方向の刷毛目がある。内面には体部上半に明瞭な横ナデ・下半に不明瞭なナデが観察される。

壺1（第22図2）：頚部下半と体部を欠く。胎土には石英粒を含む。

口縁部が軽く開き、内面において頚部との境に稜線を形成している。また、口縁部は複合口縁で、頚部の刷毛目調整の後、粘土帯を継ぎたして（輪積み技法と同じ方法）成形している。

その後再び刷毛目調整が行なわれている。内面の調整は不明瞭であるが、口縁部には刷毛目が観察される。

壺2（第22図3）：複合口縁の壺で、頚部以下を欠損している。口縁部上半は開き気味となり、内面に軽い稜線を形成する。胎土は石英粒を混入するが、比較的緻密である。



第1層出土遺物：14・16・17
第2層出土遺物：1・2・5・6・8・10・11・12・15・18
第3層出土遺物：4・7・9
床面出土遺物：13
P 1 No.3 層出土遺物：3

第22図　第11住居跡出土遺物I

0　5　10cm

僅かに残された頚部上端には縦方向の刷毛目が観察される。そして、この刷毛目調整後に、口縁部外面に段をもつような複合口縁が、粘土の貼りつけによってつくられている。

口縁部外面の調整としてヘラミガキが行なわれているが、徹底せずその下に刷毛目の観察される部分がある。

小形甕（第22図4）：口縁部が軽く外反し、体部中央に最大径をもつ。輪積成形と考えられるが、成形痕は不明瞭である。器外面は刷毛目調整が行なわれているが、内面は調整痕が不明瞭で観察できない。

その他の土師器破片：口縁部破片として、輪積み技法による複合口縁の壺（あるいは甑）が、第3層と床面から各1点出土している。両者とも外面に刷毛目がある。また、この他壺（あるいは甕）の底部が1点、第3層から出土した。

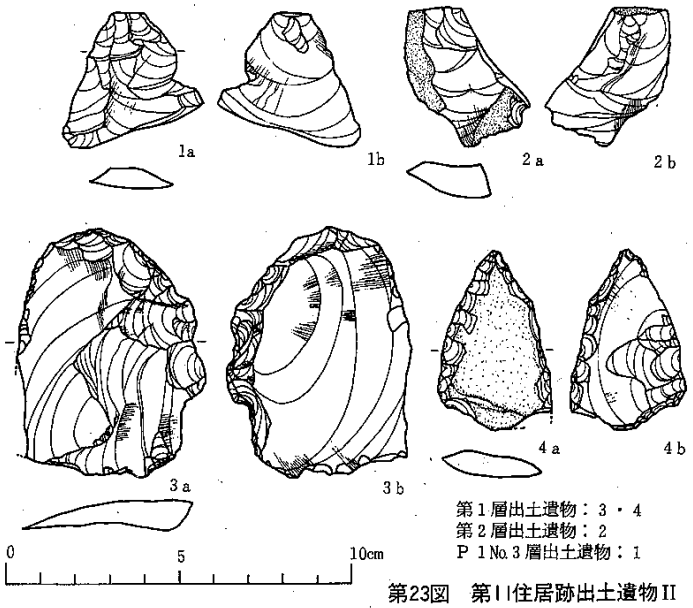
Ⅲ：石器

剥片（第23図1・2）：1は三角形を呈する剥片で、末端には蝶番剥離がみられる。ａ面には上方の同一方向から幾枚も剥取した剥離がみられる。ｂ面にはバルバー・スカーがある。

石英自体縁辺に部分的な欠損がみられる。2は斜長であるが、ａ面の右側辺が折れてしまっているため、その形状が不明な剥片である。打面およびａ面には自然面が残っているので、角礫から剥離された初期的な剥片かもしれない。

削器（第23図4）：横長の剥片を素材とし、二縁辺を調整剥離することによって、尖頭状に作り出している。基部もこまかく調整剥離されているが、一部破損しているため、その形状は不明である。ｂ面中央部に大きなバルバー・スカーがみられる。なお、ｂ面の調整はａ面調整後に行われている。

不定形石器（第23図3）：横長の剥片を素材とし、ａ面側から急角度に剥離を行ない、ｂ面の加撃点を剥取した石器である。その形状はナイフ形石器の一般的にみられる背部のブランティングの技術を類似する。ａ面左側縁



第23図　第Ⅱ住居跡出土遺物Ⅱ

には使用痕と思われる剥離がみられる。一部は折れている。

磨製石斧（第22図17）：蛤状の刃部をもつ棒状の磨製石斧で断面が楕円形をしている。頭部近くに敲打調整痕を残すほかは、全体がよく研磨されており、稜線は刃部付近に見られるだけである。頭部は平担で、研磨等の整形は行なわれていない。

刃部には小剥離が見られる。刃先が潰れ、周辺が磨耗している。頭部縁辺も磨耗が著しい。これらは使用痕と考えられる。

石鏃（第22図14・15）：扁平な板状礫の縁辺に、両面から調整剥離を加えて形を整えている。14は刃部の$^{2}/_{3}$を欠いているが、ほぼ完形である。右側面には自然面を残している。両側面に擦痕と磨滅痕がある他、刃部・基部・b面にも、若干磨耗がある。15は刃部の小破片である。縁辺の磨耗は特に左側面に著しい。

大形剥片（第22図16）：安山岩の大きな剥片で、粗大な器面調整剥離が行なわれているが、a面には自然面を残している。主要剥離面はb面である。石鏃などの大形打製石器の素材になる剥片と思われる。

凹石（第22図18）：円礫の小破片に凹みが観察されるもので、この凹みが敲打によるものか、回転によるものか不明である。

第24表　第11住居跡出土石器計測表

図	名　称	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	石　材	完・不完	層　位
第23図1	剝　片	39.2	40.0	6.6	7.4	頁　岩	不　完	P_1 No.3層
第23図2	剝　片	39.2	39.1	15.0	10.0	チャート	不　完	3　層
第23図4	削　器	51.5	32.4	10.6	11.0	頁　岩	不　完	1　層
第23図3	不定形石器	71.5	54.0	7.0	32.8	頁　岩	完	1　層
第22図17	磨製石斧	111.0	49.0	36.7	33.0	安山岩	不　完	1　層
第22図14	石　鏃	84.9	78.7	14.6	11.5	安山岩	一部破損	1　層
第22図15	石　鏃	51.7	80.3	11.0	5.1	安山岩	不　完	3　層
第22図16	大形剝片	148.0	100.8	17.8	30.8	安山岩	完	1　層
第22図18	凹　石	73.6	76.2	31.6	9.8	砂　岩	破　片	2　層

第12住居跡

（遺構の確認）西側台地の南東斜面、ＤＯ－9区に位置している。この第12住居跡はP_5の発見が端緒であった。P_5は形状からカマドの煙出しではないかと考えられたので、その南側を拡張し住居跡の検出につとめた。その結果、住居跡と思われる暗褐色土の落ちこみを確認した。遺構確認面は表土下の火山灰層である。

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）住居跡の南側は撹乱が著しい。このため、全体の形は明確でないが、残存している部分から推定すると隅丸方形と考えられる。方向（カマドの方向を基準）は北北西－南南東で、大きさは2.85×3.00mである。床面積は5.88m^{2}と推定される。

（堆積土）堆積土は撹乱を受けている部分が多く、各々の層についてその関係を明確に把握することは困難であった。そのため、堆積土の遺物は一括してとりあげた。

なお、最終的には次のような層位を確認することができた。

第1層（黒褐色土層）：黒褐色の粘土質シルト層で、住居中央部東側に狭い分布を示す（Ａ－ＢのNo.1層）。

第2層（暗褐色土層）：部分的に細かなちがいはあるが暗褐色の粘土質シルト層で、東壁および北壁の一部を除き広い分布を示す（Ａ－BのNo.2・3層、Ｅ－ＦのNo.1・2層）。

第3層（黒褐色土層）：黒褐色の粘土質シルト層で、住居中央部床面から東壁にかけて分布している（Ａ－ＢのNo.4～6層、Ｅ－ＦのNo.3層）。

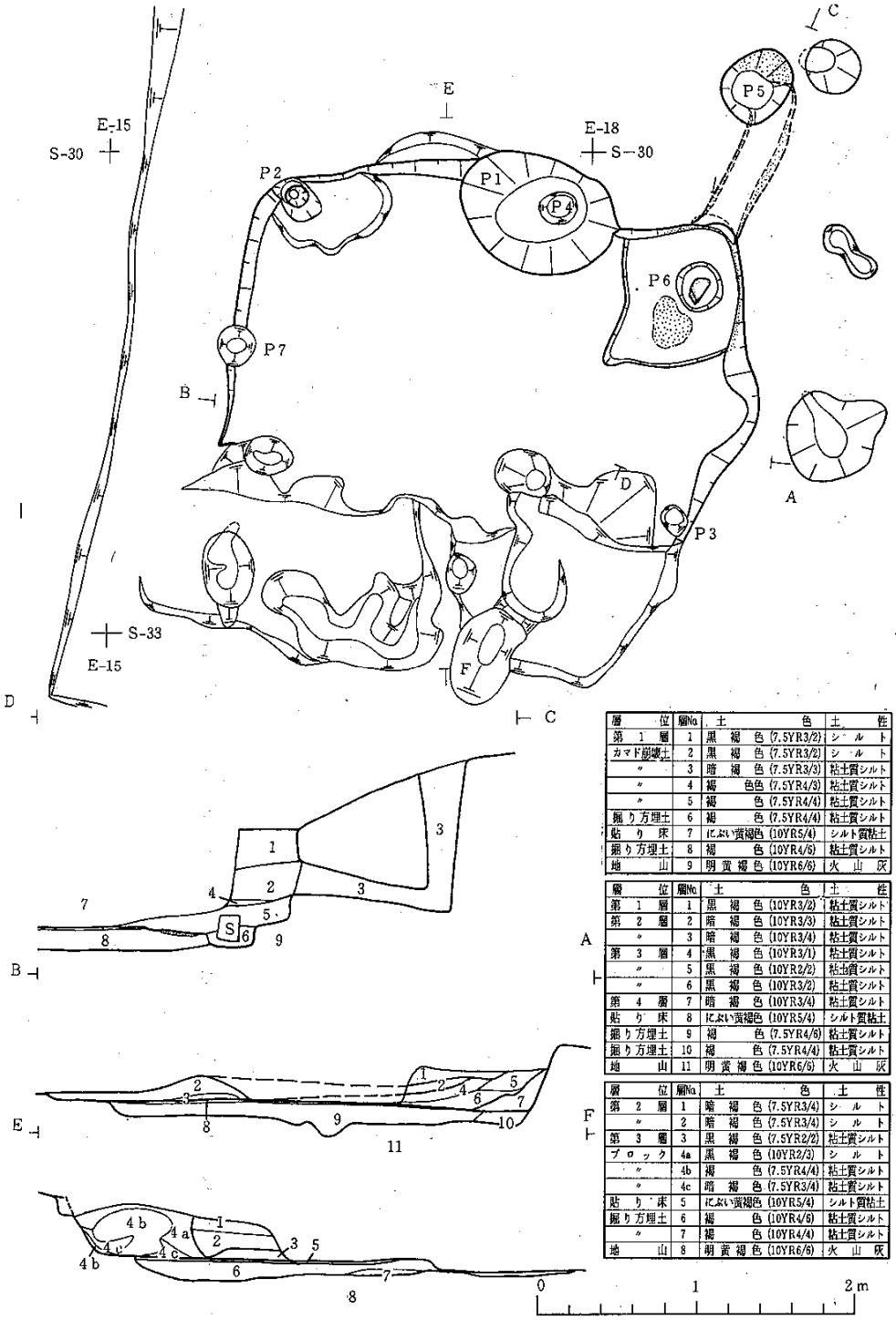
第4層（暗褐色土層）：暗褐色の粘土質シルト層で、東側壁付近にのみ分布する初期的な堆積層である（Ａ－ＢのNo.7層）

この他、北壁付近に褐色をした粘土質シルトの大きなブロックがあった。このブロックは部分的に黒褐色ないしは暗褐色のシルトを含んでいる。その性格は明らかでない（Ｅ－ＦのNo.4a～4c層）。

（床面）床面の南側半分はほとんど残っていなかった。保存のよい北側は、多少の凸凹はあるが平担で固い。堆積土との間に肌わかれの現象が認められる。壁は床面から急角度でたちあがる。保存のよい北壁では20～50cmの高さで残っている。北側の隅にカマドが、その西側に貯蔵穴状ピットが検出された。最後に床面を立ち割ったところ、にぶい黄褐色のシルト質粘土層が約4cmの厚さで住居掘り方埋土（褐色の粘土質シルト）上に貼られていた。

（柱穴）住居跡とその周辺のピットは合計7個ある。このうち、P_5・P_6はカマドに付属するものであり、P_1は貯蔵穴状ピットである。P_3・P_4・P_7は堆積土上から確認されたもので、住居廃絶後のピットと考えられる。P_2は掘り方と柱痕が区別できたので、柱穴と考えられる。しかし、配置の上でP_2と組み合うピットがないので柱穴に関しては不明な点が多い。

（カマド）カマドは壁を掘りこんでつくられている。燃焼部は85×72cmの範囲で浅い落ちこみになっている。燃焼部中央の煙道寄りの部分に支脚と思われる石（露出部の高さ13cm）が立っており、その下には大きさ27×29cm深さ12cmのP_6がある。このP_6は支脚を安定させるための掘り方と考えられる。焚口と支脚の間はよく焼けている。燃焼部の上部は崩落しているためわからないが、側壁はよく焼けている。



層位	層No.	土色	土性
第1層	1	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト
カマド崩壊土	2	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト
〃	3	暗褐色 (7.5YR3/3)	粘土質シルト
〃	4	褐色色 (7.5YR4/3)	粘土質シルト
〃	5	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト
掘り方埋土	6	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト
貼り床	7	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト質粘土
掘り方埋土	8	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
地山	9	明黄褐色 (10YR6/6)	火山灰

層位	層No.	土色	土性
第1層	1	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト
第2層	2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト
〃	3	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト
第3層	4	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト
〃	5	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト
〃	6	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト
第4層	7	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト
貼り床	8	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト質粘土
掘り方埋土	9	褐色 (7.5YR4/6)	粘土質シルト
掘り方埋土	10	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト
地山	11	明黄褐色 (10YR6/6)	火山灰

層位	層No.	土色	土性
第2層	1	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
〃	2	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト
第3層	3	黒褐色 (7.5YR2/2)	粘土質シルト
ブロック	4a	黒褐色 (10YR2/3)	シルト
〃	4b	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト
〃	4c	暗褐色 (7.5YR3/4)	粘土質シルト
貼り床	5	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト質粘土
掘り方埋土	6	褐色 (10YR4/6)	粘土質シルト
〃	7	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト
地山	8	明黄褐色 (10YR6/6)	火山灰

第24図　第12住居跡

煙道は燃焼部底面から12cm程上の奥壁をくりぬき、僅かに傾斜しながら煙出しへ接続する。接続する部分では両者の間に位置的なズレが認められる。煙道および煙出しは全体的に火熱を受けた痕跡が観察される。

（貯蔵穴）カマドの西側に楕円形をしたＰ$_1$がある。大きさは100×70cmである。内部には焼土･木炭･火山灰を含んだ褐色土が詰まっていた。

（年代決定資料）遺物がまとまって発見されたカマドの燃焼部（第25図5）、煙道部（第25図3・4）、煙出し部（第25図8）である。土師器の坏や須恵器の甕はカマドにありながら再酸化を受けていない（特に内面黒色の坏はそのままである。）

（遺物）

第25表　第12住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2（掘り方）	P_2（柱痕）	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7
深さ（cm）	20	25	30	15	25	85	12	33

Ⅰ：弥生土器

ＬＲ縄文の施文された弥生土器体部片が1点（床面直上）出土している。

Ⅱ：土師器

坏（第25図1～3）：ロクロ調整の行なわれている坏である。ロクロから切り離された後、手持ちのヘラミガキによって再調整されている。1は体部下端がヘラケズリされているが底部を欠失している。2は体部下端と底部全面がヘラケズリされている。3は底部全面だけヘラケズリされている。

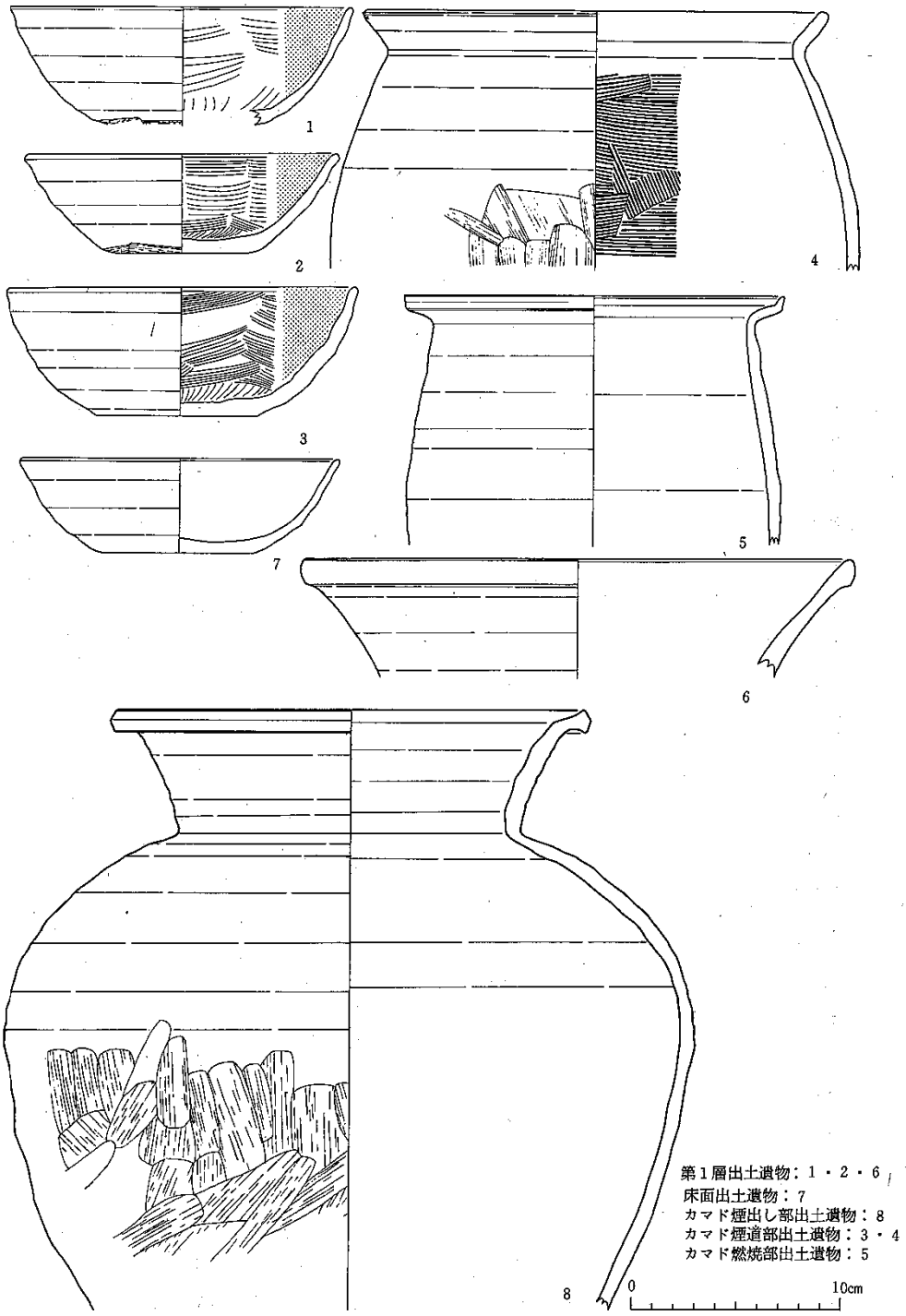
内面は再調整として、いずれもヘラミガキと黒色処理が行なわれている。ヘラミガキは底部付近が放射状で体部が横方向である。

甕1（第25図4）：口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端で丸味をもつ甕である。外面の体部中央はヘラケズリ、体部上半はロクロ調整痕が観察される。体部内面は刷毛目調整が行なわれている。

甕2（第25図5）：口縁部が急角度で外反し、口縁端が立ちあがる甕である。内外面ともロクロ調整が行なわれている。

甕3（第25図6）：口縁部が大きく外反し、その口縁端が肥厚する大形の甕である。内外面はロクロ調整が行なわれている。

土師器破片：坏は口縁部が4点、底部が4点発見されている。いずれも内面はヘラミガキと黒色処理が行なわれている。これらの中に、体部下端と底部が手持ちのヘラケズリによって再調整されているものが1点（第1層）、回転糸切りによってロクロから切り離された後再調整さ



第25図　第12住居跡出土遺物

れていないものが2点（第1層およびカマド崩壊土から各1点）ある。残り1点（床面）の底部片はこの点不明である。

この他、高台付坏の高台と思われるものが1点（P_1）あるが、内外面の調整は不明である。

Ⅲ：須恵器

坏（第27図7）：ロクロ調整後の切り離しは回転糸切りで、再調整は行なわれていない。

甕（第27図8）：口縁および頸部が僅かに外反し、口縁端の肥厚する甕である。体部上半と口縁部はロクロ調整が行なわれている。体部下半外面にはタタキ目とその後に行なわれたヘラケズリが観察される。

須恵器破片：坏の口縁部が1点（第1層）出土している。

第13住居跡

（遺構の確認）西側台地南緩斜面の西側、ＥＪ・Ｋ－18区に暗褐色土の落ち込みを発見した。
遺構確認面は表土下の火山灰層である。

（重複・増改築）住居跡の南側は耕作によって削られている。また、住居中央部は南北に走る溝によって切られている。
住居の増改築についてはよくわからない。

（平面形・方向）住居の南側が削平されているため、正確な平面形はわからない。しかし、残っている壁と柱穴状ピットの配列から推定すると、南北に長軸をもつ長方形ではないかと考えられる。大きさは長軸6.3m（推定）、短軸4.4mで、床面積は26.00m_2（推定）である。

（堆積土）住居内に堆積している層は基本的には3層に大別される。

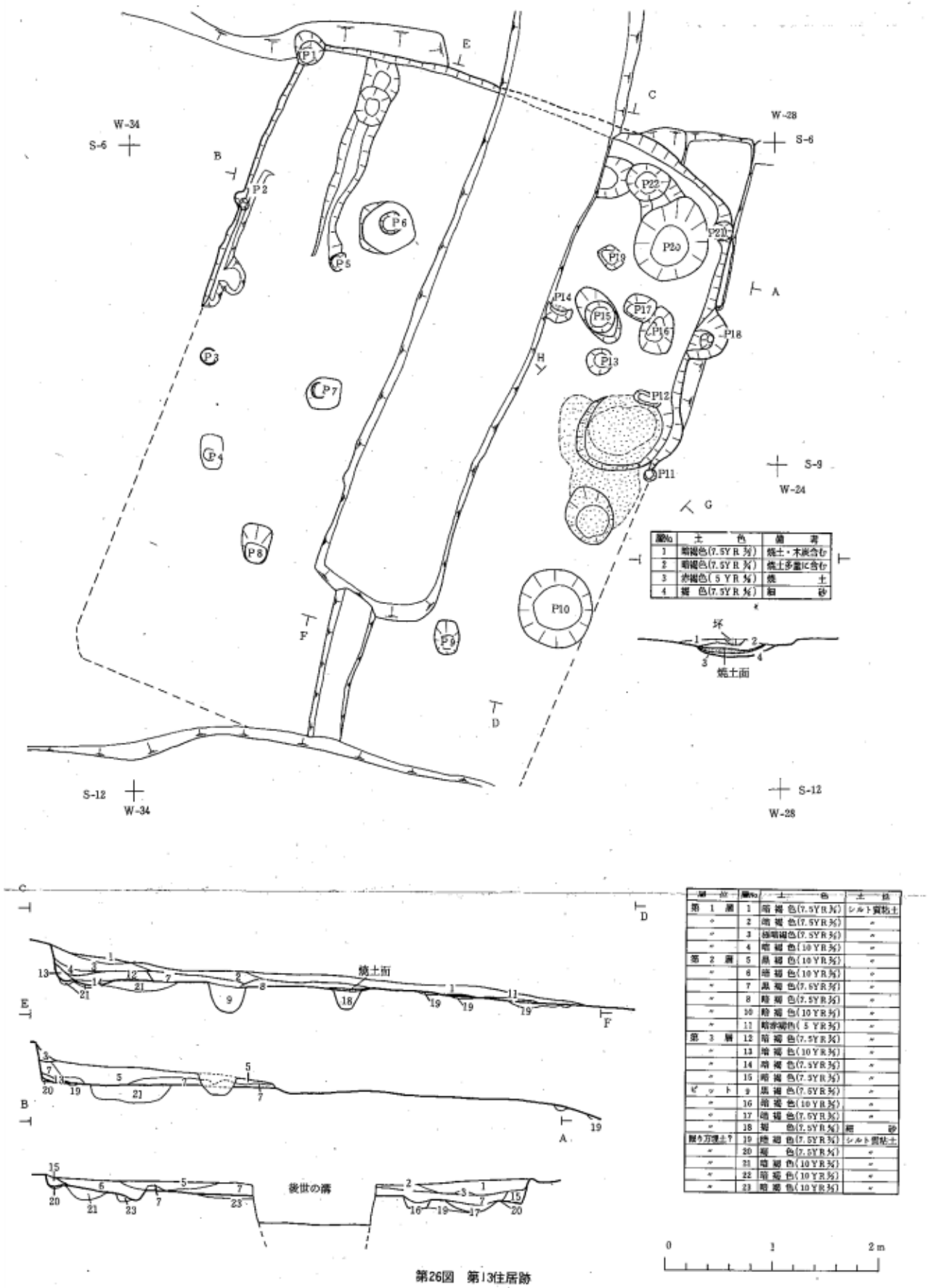
第1層（暗褐色土層）：暗褐色のシルト質粘土層で固くしまっている。住居東側に広く分布している。

第2層（黒褐色土層）：色彩的に部分的なちがいはあるが、黒褐色のシルト質粘土層である。固くしまっている。住居西側に厚く堆積していて、東側になると薄くなる。

第3層（暗褐色土層）：暗褐色のシルト質粘土層でやや固い。壁ぞいに分布する。住居が埋まりはじめた時のもっとも初期的な堆積層と考えられる。

（床面）床面が残っていたのは北側であるが、この部分もあまり保存はよくない。特に西側は木の根による撹乱などがあり凸凹している。南側はかなり削られてしまって（耕作による）、傾斜している。床面から壁へは急角度で立ちあがり、保存のよい北壁では30～40㎝の高さで残っている。

東側壁に接する床面に焼土のかたまりと焼土面がある。また、床面では柱穴状のピットをはじめ合計18個のピットが検出された。



層No	土色	備考
1	暗褐色(7.5YR 3/2)	焼土・木炭含む
2	暗褐色(7.5YR 3/4)	焼土多量に含む
3	赤褐色(5YR 4/6)	焼土
4	褐色(7.5YR 4/6)	細砂

層位	層No	土色	土性
第1層	1	暗褐色(7.5YR 3/2)	シルト質粘土
〃	2	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃
〃	3	極暗褐色(7.5YR 2/3)	〃
〃	4	暗褐色(10YR 3/3)	〃
第2層	5	黒褐色(10YR 3/2)	〃
〃	6	暗褐色(10YR 3/3)	〃
〃	7	黒褐色(7.5YR 3/2)	〃
〃	8	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃
〃	10	暗褐色(10YR 3/3)	〃
〃	11	暗赤褐色(5YR 3/3)	〃
第3層	12	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃
〃	13	暗褐色(10YR 3/3)	〃
〃	14	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃
〃	15	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃
ピット	9	黒褐色(7.5YR 3/2)	〃
〃	16	暗褐色(10YR 3/3)	〃
〃	17	暗褐色(7.5YR 3/3)	〃
〃	18	褐色(7.5YR 4/6)	細砂
掘り方埋土?	19	暗褐色(7.5YR 3/3)	シルト質粘土
〃	20	褐色(7.5YR 4/6)	〃
〃	21	暗褐色(10YR 3/3)	〃
〃	22	暗褐色(10YR 3/3)	〃
〃	23	暗褐色(10YR 3/3)	〃

第26図　第13住居跡

最後に床面を立ち割ったところ、部分的に暗褐色をした層があった。しかしこの層が住居掘り方の埋土なのか、地山の火山灰層が他からの影響によって変化したものなのか明らかでない。

（柱穴）合計18個のピットの中で柱痕と掘り方が識別できたのはP_{15}・P_6・P_7である。この他P_8とP_9は柱痕と掘り方を識別できなかったがP_6・P_{15}と対になり規則正しい配置関係を示している。このことから、P_{15}・P_6・P_7・P_8・P_9は第13住居跡の主柱穴であったと推定される。

なお、P_{15}とP_6は柱痕の周囲に地山と同じ火山灰が貼られていたため、床面をはがしてから掘り方が検出された。

（カマド?）東側の壁に接する床面に広い焼土の分布（95×150cm）が認められる。焼土の上面に土師器の甕が3個体分、焼土の中に完形の坏が1点あった。焼土をとりのぞくと焼けた面があらわれた。北側にある皿状になった部分の底面が特に固くなっている。焼けた面をとり除くとその下に更に落ちこみが検出された。この落ちこみは焼土面より古いものと考えられる。これらカマドか否かは確証に欠ける。

（その他の施設）住居西側の床面に幅20～30cm、深さ約10cmの溝がある。長さは約2mあるが性格は不明である。この他、P1とP2は他のピットと大きさの点で違いが認められるがその性格を明らかにすることができなかった。

（年代決定資料）床面や住居内堆積土からはまとまった遺物は発見されていないが、カマド?から3個体分の土師器甕（第27図2～4）と坏（第27図1）が出土している。この4個体の土師器は住居の年代を推定する上で重要な資料である。

第26表　第13住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7
深さ（cm）	41	8	14	6	15	63	60
土色	黒褐色 (10YR 3/3)	黒褐色 (7.5YR 3/4)	?	?	?	暗褐色 (7.5YR 3/4)	褐色 (7.5YR 4/4)
土性	シルト質粘土	シルト質粘土	?	?	?	シルト質粘土	シルト質粘土
備考	壁からの深さ	木の根？				柱痕	柱痕

P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}
37	29	16	5	8	20	25	39
?	暗褐色 (7.5YR 3/3)	暗褐色 (7.5YR 3/4)	?	?	暗褐色 (7.5YR 3/3)	?	暗褐色 (7.5YR 3/4)
?	?	シルト質粘土	?	?	シルト質粘土	?	シルト質粘土
柱穴(掘り方)	柱穴(掘り方)						柱痕

P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}
11	5	27	12	33	22	10	14
暗　褐　色 (10Y R ⅗)	?	?	?	暗　褐　色 (7.5Y R ⅗)	?	?	?
シルト質粘土	?	?	?	シルト質粘土	?	?	?
		壁からの深さ			壁からの深さ		

（遺物）

Ⅰ：土師器

坏（第27図1）：ロクロ調整の行なわれている坏である。ロクロからの切離しは回転糸切りで、その後外面の再調整は行なわれていない。内面は再調整としてヘラミガキと黒色処理が行なわれているが明瞭でない。

甕1（第27図4）：口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端が丸味をもつ。内外面ともロクロ調整が行なわれている。

甕2（第27図2～3）：口縁部が急角度で外反し、口縁端が軽く立ちあがる。内外面ともロクロ調整が行なわれている。

土師器破片：坏は口縁部が10点、底部が3点出土している。いずれも内面はヘラミガキと黒色処理が行なわれている。これらの中に、体部下端と底部が手持ちのヘラケズリによって再調整されているものが1点（カマド?2層）、回転糸切りによってロクロから切離された後再調整されていないものが1点（第1層）ある。残り1点の底部はこの点不明である。

この他、高台付坏と思われるものが4点（第1層および第2層から各2点）出土している。
この中に回転糸切りによってロクロから切離され、内面がヘラミガキと黒色処理されている体部下端の破片が１点（第２層）あるが、不明なものが多い。

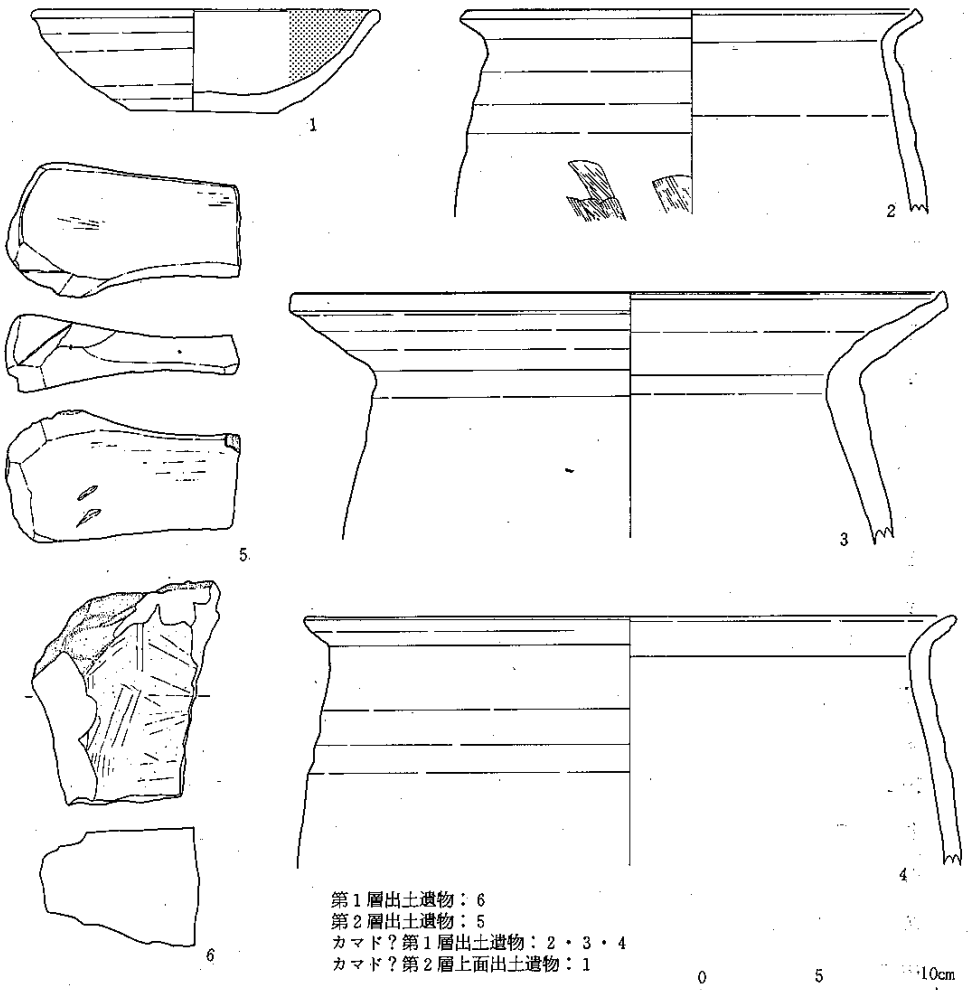
甕は口縁部が10点、底部が5点ある。

Ⅱ：須恵器片：坏の口縁部が2点（第1層および第2層から各1点）出土している。

Ⅲ：その他の土器破片：褐色をした内外面ともロクロ調整の坏が口縁部2点（第1層および第2層から各1点）、底部1点（第1層）出土している。ロクロからの切離しは回転糸切りと思われるが保存が悪くよく観察できない。

Ⅳ：砥石

2点出土している。第27図5は泥岩製で片側の一部を欠いている。上面・下面および両側面が磨面となっている。上面と下面は滑らかな面をなしているが、中央部（破損部に近い）が特に凹んでいる。これは、砥石を使用するときに中央部に加わる力が強かったこと、磨研の回数



第27図　第13住居跡出土遺物

が両端の部分よりも多かったことを示している。なお、磨面以外の部分に鋭い擦痕や条痕が認められる。第27図5は安山岩製であるが、破損の状況から大形のものと推定される。上面が磨面となっているが、第27図6程滑らかでない。この磨面には不定方向の擦痕や条痕が認められる。

第27表　第13住居跡出土砥石計測表

図	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	石　材	完・不完	層　位
第27図５	98.0	57.7	33.8	泥　岩	不　完	第２層
第27図６	94.2	79.0	55.8	安山岩	不　完	第１層

第14住居跡

（遺構の確認）西側台地の南緩斜面、ＥＨ－18区周辺の表土をはぎとり、地山の火山灰層に達したところ黒褐色土の落ちこみを確認した。

（重複・増改築）第2円形周溝の堆積土を切って、住居を構築している。増改築は判明しない。

（平面形・方向）南側が削平されているため、正確な平面形はわからない。しかし、北側の壁と柱穴状ピットの配列から推定すると長方形ではないかと考えられる。長軸の方向は南北で現存長1.80m（推定7.70m）、短軸長5.40mである。現存する床面積は6.24m^2（推定38.00m^2）である。

（堆積土）住居跡の南側は削平されているため、堆積土は北側に残っているだけである。残存部分の層位は次の通りである。

第1層（黒褐色土層）：黒褐色のシルト層で、粘性は少ないが固くしまっている。住居中央部に分布していたと思われ、壁付近には見られない。

第2層（明るい暗褐色土層）：明るい暗褐色のシルト層で、粘りがある。住居中央部から壁付近まで分布する。なお、第2層は中央部では非常に薄く、分布しない部分もある。

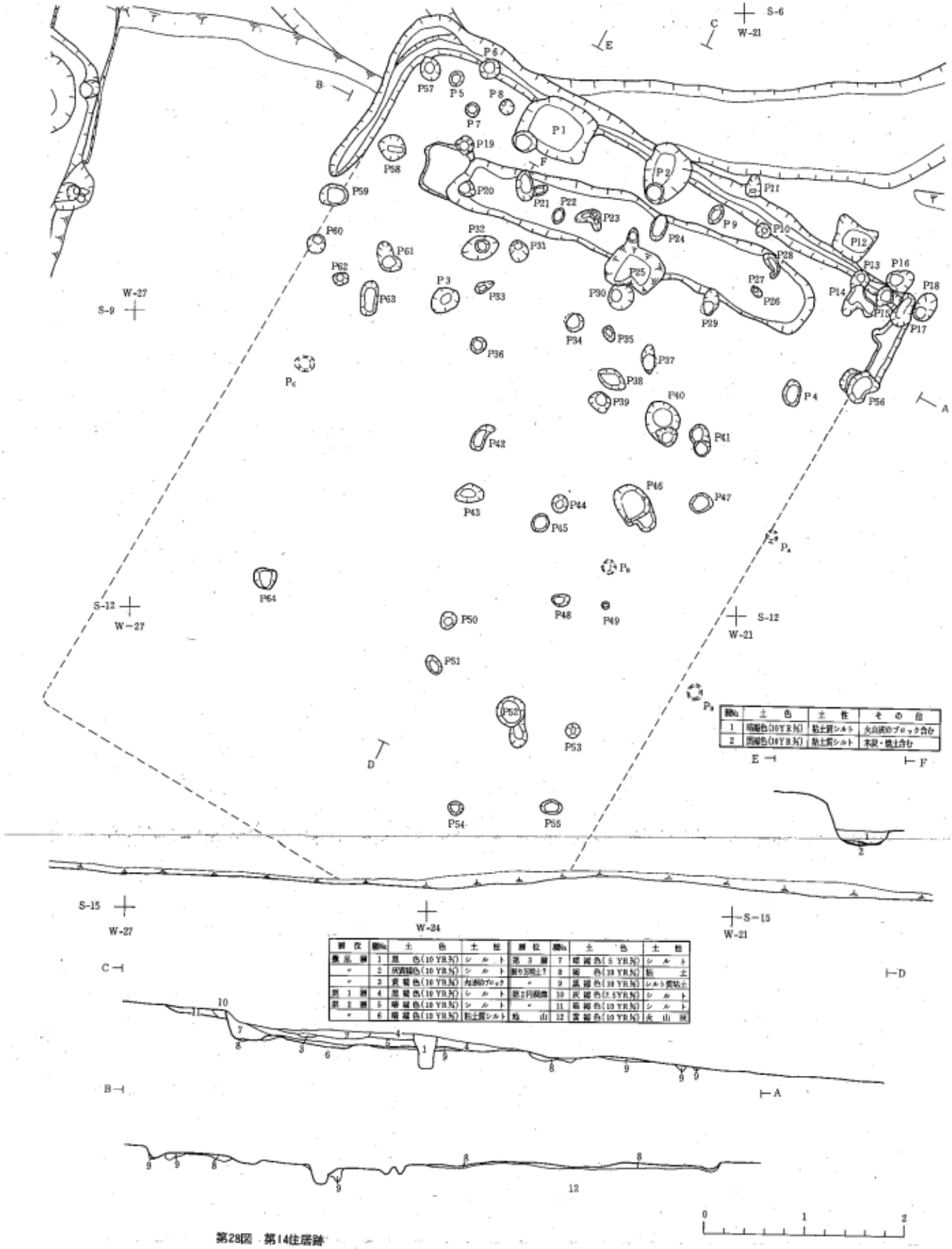
第3層（暗褐色土層）：暗褐色の粘土質シルト層で焼土・木炭の細粒を含む。分布は住居の壁沿いに限られる。

（床面）残存している住居北側の床面はほぼ平担であるが、特にたたきしめられたような痕跡はない。

カマドは確認されなかった。住居南側が削られていることから、破壊されてしまった可能性もある。床面の北壁に近い部分に幅50～60㎝、長さ約4mの溝が東西に走っている。底はなだらかで浅く、深さも5㎝程度である。堆積土から判断すると住居にともなうものと考えられるが、それがどのような役割を果すものかは判明しなかった。床面および壁に沿った部分で合計64個のピットが発見された。

最後に床面を剥がしたが明瞭な貼り床は確認されなかった。掘り方と床面もかなり接近している。なお、この段階でP_A～P_Dの合計4個のピットが検出された。

（柱穴）床面上で確認されたピットは合計64ある。このうち、P_5・P_{18}・P_{22}・P_{25}は木の根と考えられるので柱穴の範囲から除外される。P_2・P_3・P_4・P_7・P_8・P_{19}・P_{20}・P_{21}・P_{23}・P_{24}・P_{30}・P_{37}・P_{38}・P_{40}・P_{57}は内部の土に焼土や木炭が含まれることから住居と何らかの関係があったものと考えられるが、その他のピットについては判定が困難である　（竹の根の可能性があるため）　。合計15のピットの中で柱痕と掘り方を区別できたものはないが、P_3・P_{30}・P_{40}はいずれも50㎝以上の深さをもち、他のピットとは大きなちがいが認められる。また、P_3とP_{40}は住居北壁に平行な状態でならんでいること、さらにこの2つのピットと対になって規則的な配列を示



層No.	土色	土性	その他
1	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	火山灰のブロック含む
2	黒褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	木炭・焼土含む

層位	層No.	土色	土性	層位	層No.	土色	土性
撹乱	1	黒色(10YR3/1)	シルト	第3層	7	暗褐色(5YR3/4)	シルト
〃	2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	掘り方埋土?	8	褐色(10YR5/6)	粘土
〃	3	黄褐色(10YR5/6)	白粉のブロック	〃	9	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土
第1層	4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	第2円筒層	10	灰褐色(7.5YR5/3)	シルト
第2層	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	〃	11	暗褐色(10YR3/3)	シルト
〃	6	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山	12	黒褐色(10YR3/1)	火山灰

すものとしてP_{52}とP_{64}があることから柱穴ではないかと推定される。

（その他の施設）壁にそって幅20cm深さ5cm程の周溝がめぐっている。ただ、この周溝は北西部隅において壁から約10cm離れて存在する。

西壁西側には比較的大きいP_1・P_2がある。P_1からは内黒土師器坏の破片が出土しただけであるが、P2の底面から完形の坏（第29図1）が1点発見された。両者の性格は明らかでない。

（年代決定資料）床面からまとまった遺物の出土はないが、P_2の底面から完形の坏（第29図1）が出土している。P_2の性格が明らかでないので、この坏が住居使用時のものか住居廃絶後に廃棄されたものか簡単に断定できない。ただ、P_2が壁沿いにあることから、たとえ廃棄されたものであっても住居廃絶の時点からさしてへだたるものとは考えられない。

第28表　第14住居跡ピット一覧

Pit No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9
深さ (cm)	15	10	61	14	14	11	9	11	20
土色		黒褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/4)	暗褐色 (10YR 3/4)	黒褐色 (7.5YR 3/2)	?	暗オリーブ褐色 (2.5YR 3/3)	黒褐色 (10YR 3/2)	?
土性		シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	シルト	?	粘土質シルト	シルト	?
備考		焼土・木炭含む	焼土・木炭含む	焼土・木炭含む			焼土・木炭含む	焼土・木炭含む	

P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}
10	10	10	26	10	7	15	8	15	22
?	黒褐色 (10YR 3/2)	?	?	?	?	?	?	?	黒褐色 (7.5YR 3/3)
?	?	?	?	?	?	?	?	?	粘土質シルト

P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}	P_{24}	P_{25}	P_{26}	P_{27}	P_{28}	P_{29}
16	19	5	17	20	?	2	3	6	9
暗褐色 (10YR 3/3)	黒褐色 (10YR 3/2)	黒褐色 (10YR 3/2)	暗褐色 (10YR 3/4)	暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	?	?	?	?
粘土質シルト	シルト	シルト	シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	?	?	?	?
		木の根	木炭含む	木炭含む					

P_{30}	P_{31}	P_{32}	P_{33}	P_{34}	P_{35}	P_{36}	P_{37}	P_{38}	P_{39}
55	13	13	7	20	5	3	20	11	9
暗褐色 (10YR 3/3)	黒褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	?	黒褐色 (7.5YR 3/2)	?	?	黒褐色 (10YR 3/2)	暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)
シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	?	シルト	?	?	シルト	シルト	シルト
焼土含む							焼土含む	木炭含む	

P_{40}	P_{41}	P_{42}	P_{43}	P_{44}	P_{45}	P_{46}	P_{47}	P_{48}	P_{49}
56	11	5	11	3	7	19	12	7	3
暗褐色 (7.5YR 3/4)	?	?	?	?	?	?	?	?	?
シルト?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
焼土・木炭含む									

P_{50}	P_{51}	P_{52}	P_{53}	P_{54}	P_{55}	P_{56}	P_{57}	P_{58}	P_{59}
10	5	27	20	14	7	14	?	?	?
?	?	?	?	?	?	?	暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/4)
?	?	?	?	?	?	?	粘土質シルト	シルト	粘土質シルト
							焼土・木炭含む		

P_{60}	P_{61}	P_{62}	P_{63}	P_{64}	P_A	P_B	P_C	P_D
?	?	?	?	11	5	7	13	21
暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	暗褐色 (10YR 3/3)	?	?	黒褐色 (7.5YR 3/2)	褐色 (7.5YR 3/4)	暗褐色 (7.5YR 3/3)	暗褐色 (7.5YR 3/3)
シルト	シルト	シルト	?	シルト	シルト質粘土	粘土質シルト	シルト質粘土	シルト質粘土
			?					

（遺物）

Ⅰ：弥生土器破片

ＬＲ縄文とＲＬ縄文の施文された体部破片が第1層と第3層から1点ずつ出土している。

Ⅱ：土師器破片

坏は口縁部が8点、底部が7点出土している。いずれも、ロクロから切離した後内面をヘラミガキと黒色処理している。これらの中には、底部全面をヘラケズリ（手持ち）しているもの1点（第1層）・底部の一部だけヘラケズリ（手持ち）して回転糸切り痕を残すもの1点（第2層）、回転糸切り後再調整を加えないもの4点（第1層1点、第2層2点、第3層上面1点）がある。この他、高台付坏と思われるものが2点ある。底部（第1層）と高台（第3層）の破片である。底部内面はヘラミガキと黒色処理が行なわれている。

甕は口縁部破片が2点、底部破片が3点ある。この中で口縁部破片（第3層上面）は内外面ともロクロ調整され、外反した口縁部の端が立ちあがる特徴をもっている。

Ⅲ：須恵器

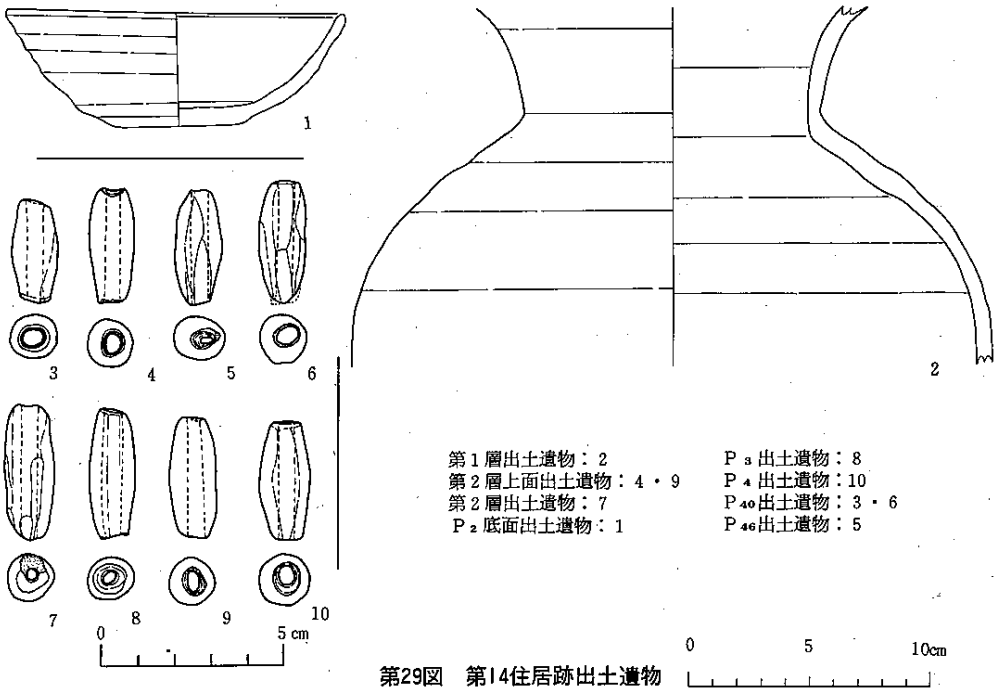
甕（第29図2）：口縁および頚部が僅かに外反する甕で、内外面ともロクロ調整が行なわれ

ている。

須恵器破片・坏の口縁部が1点（第2層上面）と甕の体部破片が1個体分（第2層上面）出土している。甕は体部外面に平行の叩き目、内面に青海波文赫観察される。

Ⅳ．その他の土器

坏（第29図1）：明黄褐色をした内外面ロクロ調整の行なわれている坏である。ロクロからの切離しは回転糸切りで再調整は内外面ともまったく行なわれていない。



第29図　第14住居跡出土遺物

Ⅴ：土錘（第29図3～10）

土錘は8点出土している。紡錘形をした管状の土錘で長さは27.9～37.2㎜、太さ（最大径）は12.6～14.1㎜である。貫通孔は断面楕円形のものが多く、孔の最大径4.5～5.1㎜で、重さは3.8～5.8gのものまである。重さに関しては欠損や磨滅しているものが多いことから、計測値より僅かに大きくなるものと思われる。

次に、欠損状況を観察すると片側の先端が欠けているものが5点、両先端が欠けているものが1点ある。この他、残る2点は欠損は著しくないが両先端が磨滅している。先端が欠けたり磨滅しているのは網に固定した際の力の入り方（使用状況）を反映している可能性がある。特に、片側先端が欠損しているものが多いことは興味深い。

第29表　第14住居跡出土土錘計測表

計測値／図	長さ（mm）	最大径（mm）	孔の大きさ（mm）	重さ（g）	欠損状態	層位
第29図 3	27.9	12.6	4.7	3.8	欠損は著しくないが両端は磨滅している	P_{40}
第29図 4	30.8	12.6	4.5	4.4	片側の先端部が½程欠けている	2層上面
第29図 5	31.6	13.1	4.5	4.9	片側の先端部が一部欠けている	P_{46}
第29図 6	32.7	12.9	4.1	4.8	片側の先端部が⅔程欠けている	P_{40}
第29図 7	37.2	13.9	5.1	5.8	両先端部の同一面が½程欠けている	2層
第29図 8	36.4	13.2	4.7	5.4	片側の先端が一部欠けている	P_3
第29図 9	32.6	13.2	4.5	5.0	片側の先端が½程欠けている	2層上面
第29図10	32.7	14.1	4.6	5.5	欠損は著しくないが両端は磨滅している	P_4

円形周溝

西側台地は中央部から南側へゆるやかに傾斜している。この緩斜面の表土をはぎとると、畑を区画した溝をともなう段が所々に認められる。溝や段によって区画された内部にはうね状の浅い溝が幾筋も走っている。これらは地山の火山灰層をかなり削っているようである。

第1円形周溝が発見されたのは緩斜面の幾分東寄りの部分である。その12m西側で第2円形周溝が発見された。両者とも遺構確認面は表土下の黄褐色火山灰層であるが，周溝の上部は上述のように畑の区画によってかなり削りとられている可能性が強い。

第1円形周溝

第1円形周溝は幅40～100cm（溝底）の溝が円形にめぐっているものである。南西側の一部が途切れている。これが溝の掘られた段階のものなのか明らかでない。大きさは南北軸14m50cm東西軸15m50cmで、幾分東西に長い（軸長は溝底の中心から測定）

溝は底面から壁にゆるやかに立ちあがる。内部の堆積土は場所によって多少異なるが2～3層にわかれ、全体として粘りがある。土色は暗褐色をしたものが多い。層の堆積は将棋倒し状で、砂層等は含まない。溝底のレベルを検討すると、北西部と南東部では約1mの差が認められる。

円形の台状部は北西から南東にゆるやかに傾斜する。台状部上に積土は確認できなかったが、中央部から僅かに北西寄りの部分に長円形の土壙があった。この土壙は北北東～南南西に長軸をもち、底面の大きさが1m70cm×40cm、現存の深さ7cmであった。土壙内の層位は4層に細分されるが、人為的に埋められたのか自然堆積なのか確証にかける。

土壙および周溝から発見された遺物はいずれも弥生土器と土師器（塩釜式）の細片で、供献された状態を示すものはみられなかった。

この他、この第1円形周溝は南東部において円形の小竪穴と重なりあっている。この円形小竪穴は2m70㎝×2m50㎝の大きさで、底面が凸凹している。堆積土は暗褐色系のシルト質粘土で焼土や木炭の他に黄褐色火山灰（地山）のブロックを多量に含んでいる。層の堆積状況について検討したが、十分明らかにすることができなかった。円形周溝との関係も不明な点が多い。それでも、円形小竪穴は第1円形周溝の堆積土を切っている様子が見られないことから、第1円形周溝に伴なうものか、それとも僅かに古く逆上るものである可能性が強い。

第2円形周溝

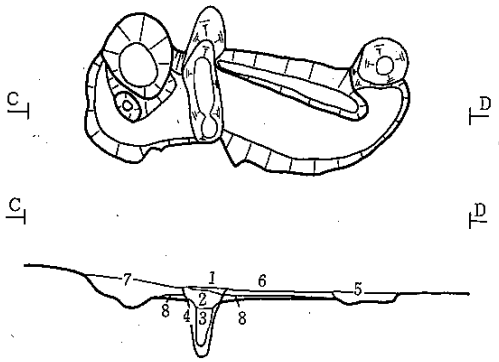
第2円形周溝は幅1m前後（溝底）の溝が途切れなく円形にめぐっているものである。大きさは南北軸11m50㎝、東西軸12m（軸長は溝底の中心から測定）である。

溝は底面から壁にゆるやかに立ちあがる。周溝はその上部がかなり削られているため、壁の高さが5～10㎝程度残っているに過ぎない。その中に僅かに残っている堆積土は第1円形周溝と同様で、暗褐色系の粘土質シルトである。層の堆積も将棋倒し状である。溝底のレベルを検討すると北西部が南東部よりも高く、その比高は約80㎝ある。

周溝によって区画された円形の台状部は北西から南東にゆるやかに傾斜している。台状部における積土および土壙は検出されなかった。

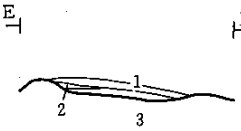
周溝の堆積土から発見された遺物はいずれも弥生土器と土師器（塩釜式）の細片で、供献された状態で出土したものはない。この点、第1円形周溝と共通する。

なお、この第2円形周溝は南側が第14住居跡によって切られている。このため、第2円形周溝の堆積土が第14住居跡の壁となっている部分がある。このことから、時期的に第14住居跡よりは確実に古いものと考えることができる。



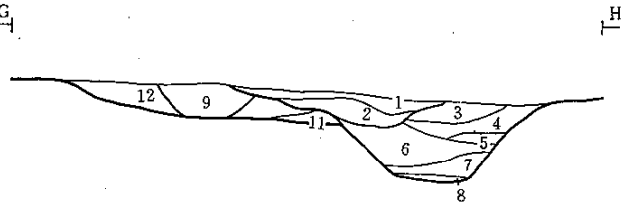
第Ｉ円形周溝台状部の土坑

層位	層No.	土色	土性	その他
溝堆積土	1	黒褐色(5YR3/2)	シルト	
溝堆積土	2	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	
溝堆積土	3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	
溝堆積土	4	にぶい黄褐色(10YR5/3)		
第1a層	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	火山灰。
第1b層	6	黒褐色(5YR3/2)	シルト	焼土・火山灰の細粒を含む。
第2a層	7	灰褐色(7.5YR)	粘土質シルト	ねばりあり。
第2b層	8	褐色(7.5YR4/4)	粘土質シルト	ねばりあり。
地山	9	明褐色(7.5YR5/6)	ローム	地山。



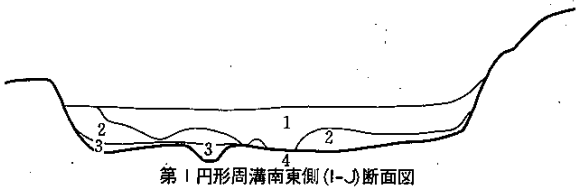
第Ｉ円形周溝北側(E-F)断面図

層No.	土色	土性	その他
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト質粘土	焼土、木炭、火山灰(微粒状)混入。
2	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	焼土、木炭(微粒状)、火山灰(粒状)混入。
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土質シルト	焼土、木炭(粒状)、火山灰(ブロック状)、パミス混入。
4	褐色(7.5YR4/6)	粘土質シルト	地山。



第Ｉ円形周溝西側(G-H)断面図

層位	層No.	土色	土性	その他
	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	後世の溝堆積土。
	2	極暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	後世の溝堆積土。
	3	褐色(7.5YR4/3)	シルト質粘土	後世の溝堆積土。
	4	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト質粘土	後世の溝堆積土。
	5	暗赤褐色(5YR3/4)	シルト質粘土	後世の溝堆積土。
	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	後世の溝堆積土。
	7	赤褐色(5YR4/6)	シルト質粘土	後世の溝堆積土。
	8	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト質粘土	後世の溝堆積土。
第1層	9	極暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	焼土、木炭(粒状)混入、火山灰(ブロック状)混入。
第2層	10	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	木炭(粒状)混入、火山灰の混入。
〃	11	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	炭化物、火山灰少量混入。
第3層	12	暗赤褐色(5YR3/3)	粘土質シルト	木炭(粒状)混入。火山灰混入。
地山	13	褐色(7.5YR4/6)	粘土質シルト	火山灰。

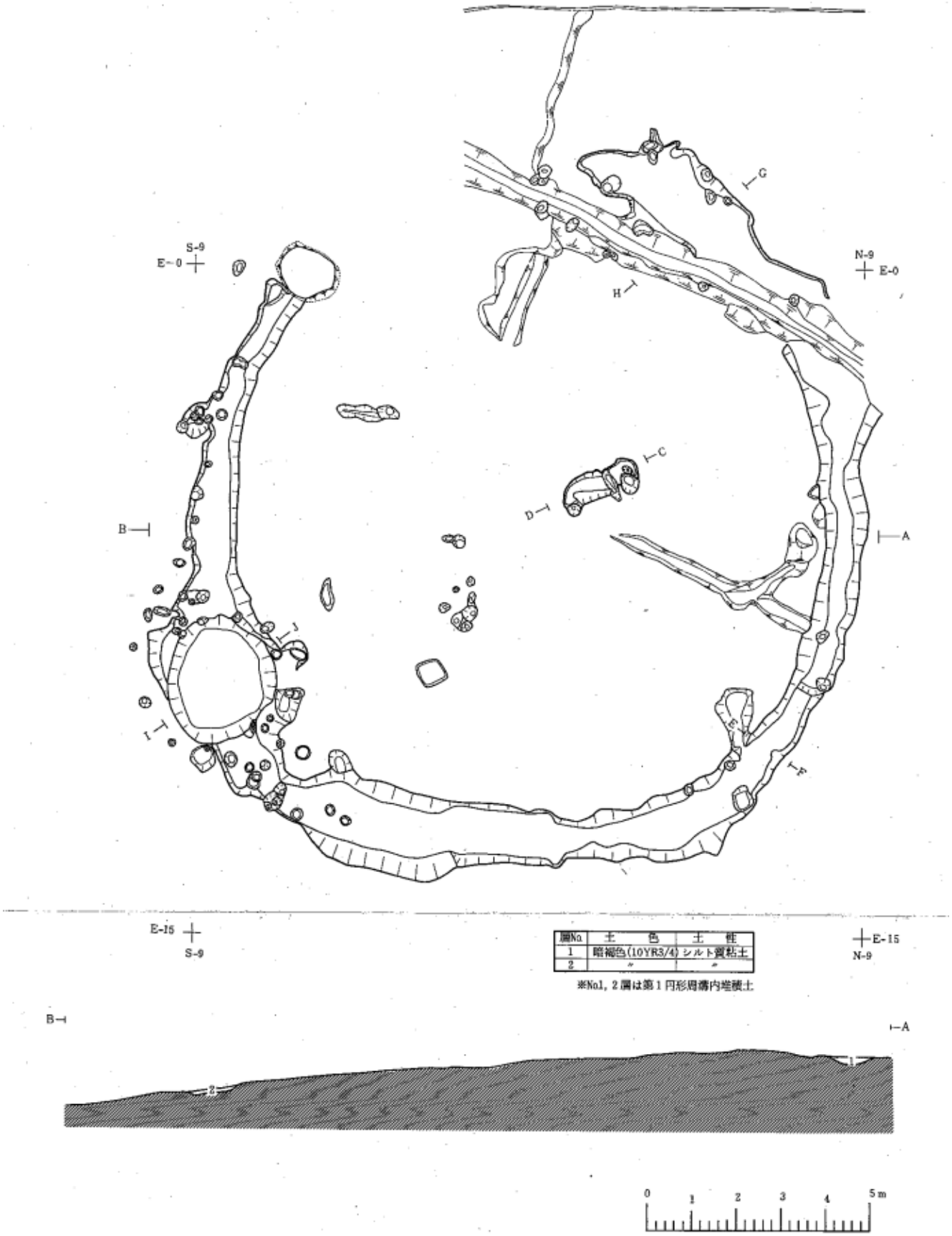


第Ｉ円形周溝南東側(I-J)断面図

層位	層No.	土色	土性	その他
第3層	1	極暗赤褐色(5YR3/3)と暗褐色(7.5YR3/3)との混合	シルト質粘土	焼土、木炭を僅かに含む。
第4層	2	極暗赤褐色(5YR3/3)	シルト質粘土	焼土、木炭を含む。
第4層	3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト質粘土	焼土、木炭を含む。
地山	4	褐色(7.5YR4/6)	粘土質シルト	火山灰。

第30図　第Ｉ円形周溝細部断面図

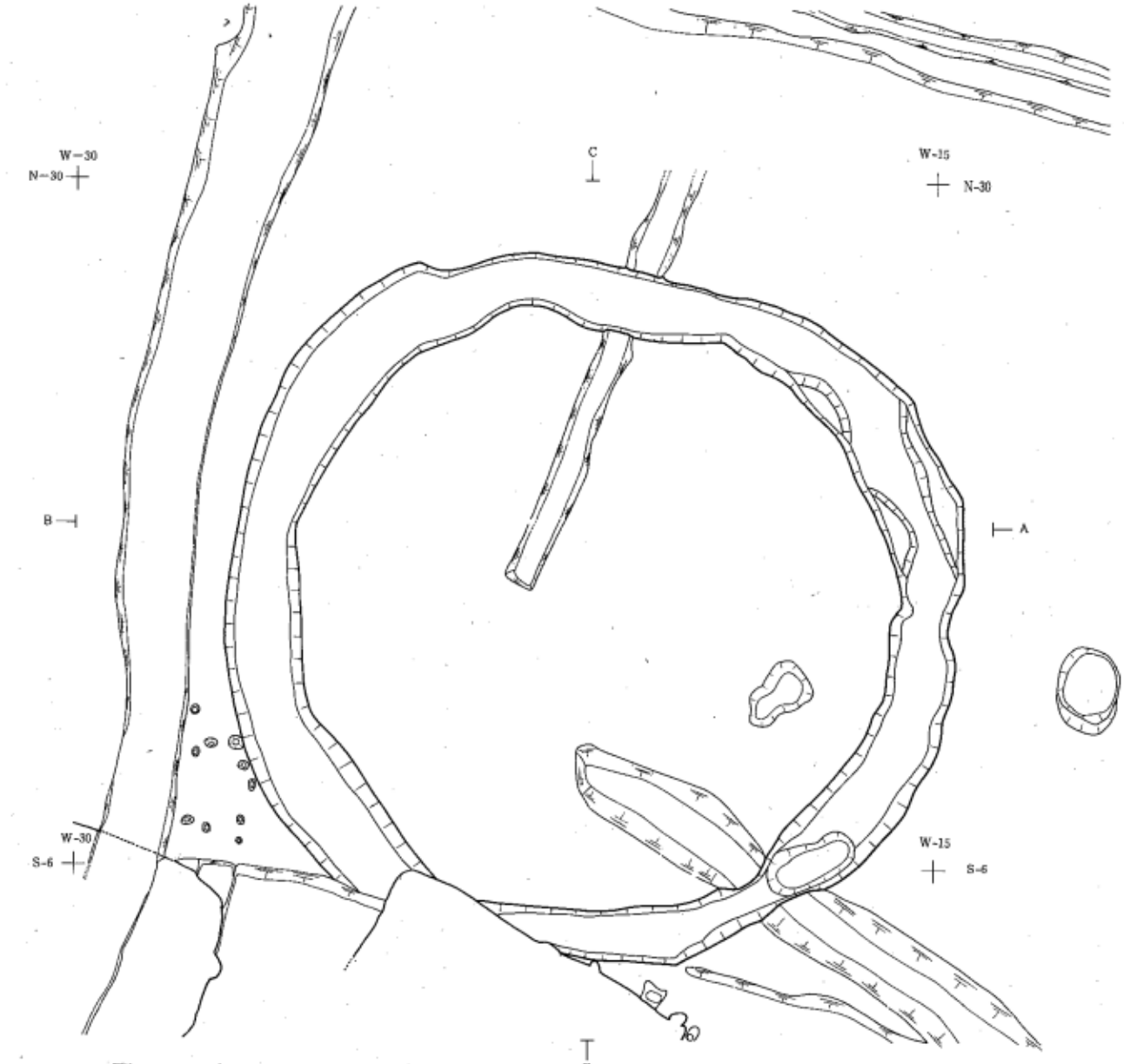
0　1　2m



層No.	土色	土性
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト質粘土
2	〃	〃

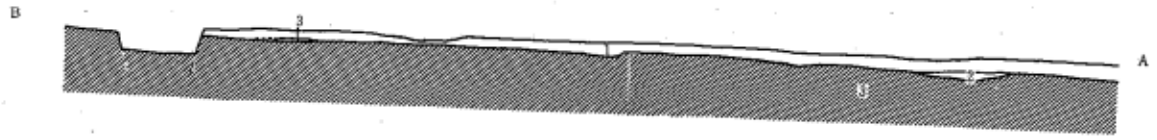
※No1, 2層は第1円形周溝内埋積土

第31図　第1円形周溝



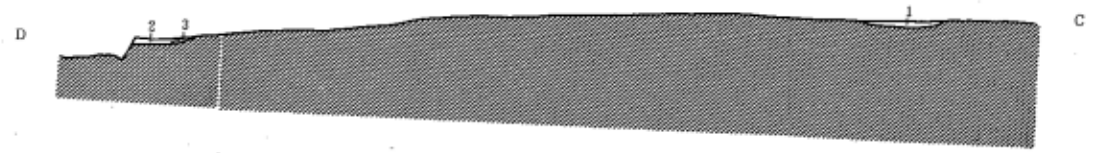
層No.	土色	土性	その他
1	褐色(7.5YR 4/4)	シルト質粘土	
2	極暗褐色(7.5YR 8/3)	シルト質粘土	粘性弱く固い
3	黒色(7.5YR 8/0)のシルト質粘土に褐色(7.5YR 4/4)のシルト質粘土混入		

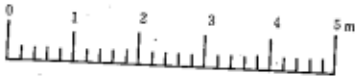
※No.1層は撹乱層、No.2・3層は円形周溝内堆積土



層No.	土色	土性	その他
1	暗褐色(?)	粘土質シルト	黄褐色の灰山灰をブロック状に含む
2	灰褐色(7.5YR 4/2)	シルト	細かな火山灰ブロックを斑状に含む
3	暗褐色(10YR 3/4)	シルト	

※No.1－3円形周溝内堆積土





第32図　第2円形周溝

2. 低地の遺構と遺物

北側低地

（概要）北側低地からは弥生時代の堆積層、時期不明の土壙、近世と思われる堀、溝、積土層等が発見された。これらを発掘の結果に従ってその年代的序列を検討すると次のようになる。

第Ⅰ期面:地山。この上に弥生土器の破片を少量含む第4、5層が堆積している。

第Ⅱ期面:弥生土器を含む第4、5層堆積終了後の安定した面（第4層上面）。第1土壙・東西に走る幅の広い堀・直角にまがる幅の狭い溝等が、この4層上面から掘り込まれている。

堀と溝の堆積層は場所によってもちがいはあるが、黒褐色の粘土層によって主体が占められる。水分の含有量が多く、部分的に砂を含むことから、水成の堆積物と考えられる。従ってこの堀と溝にはゆるやかな水の流れがあったと推定される。この堀と溝について切り合い関係を確認するために平面と断面を観察したがわからなかった。

第Ⅲ期面:第1土壙・堀・溝が埋った後の面。柱穴群が確認される。これらの柱穴の中には柱根が腐らずに残っていたものもある。しかし、その配列に規則性を見いだすことができなかった。

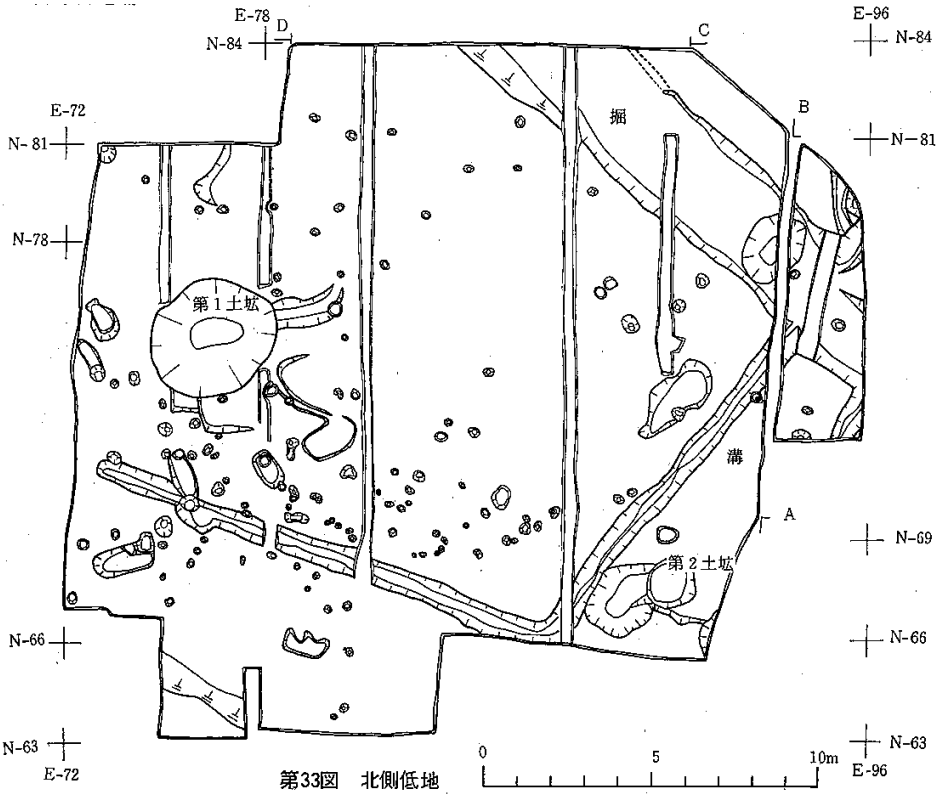
第Ⅳ期面:第Ⅲ期面の上に大規模な積土が見られる。この上面を第Ⅳ期面とする。この積土によって平坦な面が作られている。積土層は南側は薄いが北側に行くに従い厚くなり、1～1.5m程となる。層の積み方を観察すると2～3回にわたって行なわれたと推定される。

（第1土**壙**）第1土壙は第4層上面において確認された楕円形の掘り込みである。大きさは4m×3m40cmで長軸方向は北東－南西である。底面も1m60cm×90cmの楕円形である。

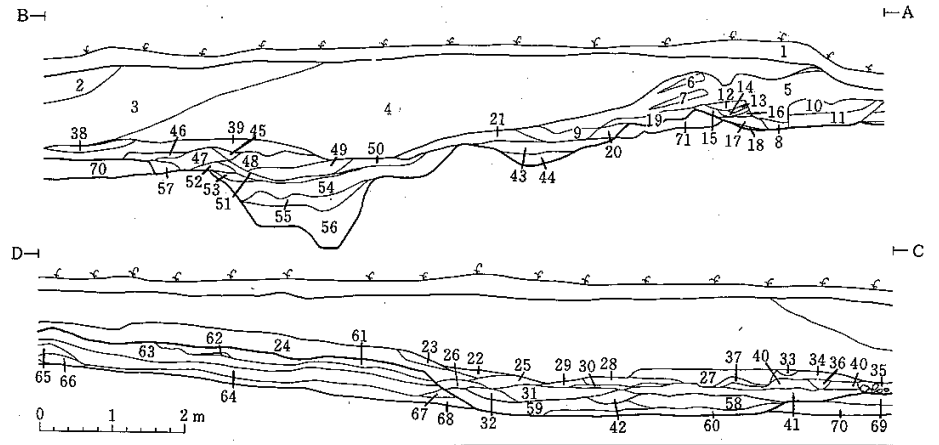
丸底状の底面から壁へはかなり急角度でたちあがる。その後、掘り込みの中位の部分で広がり気味となり、そのまま第4層上面に至る。深さは2mある。掘り込まれている地山の層は粗砂および細砂層で水分を多量に含んでいる。

遺構内には水分含有量の多いシルト質粘土層群が堆積している。下位の層には細砂や中砂の混入が多い。これは壁が崩れたための混入物と考えられる。中位の層には草木の腐ったものが幾重にも見られる。上位の層には酸化して赤色になった草の茎や根が縦に無数に入っている。遺構が埋まりきった段階で茎の長い草が群生したものと思われる。その後、この上は（概要）で述べた積土におおわれる。

なお、この第1土**壙**からは遺物が出土していないので正確な年代はわからない。しかし、同じ第4層上面から掘り込まれている堀や溝から近世と思われる遺物（木製の椀等）が出土しているので、第1土**壙**もそれに近い年代のものと推定される。

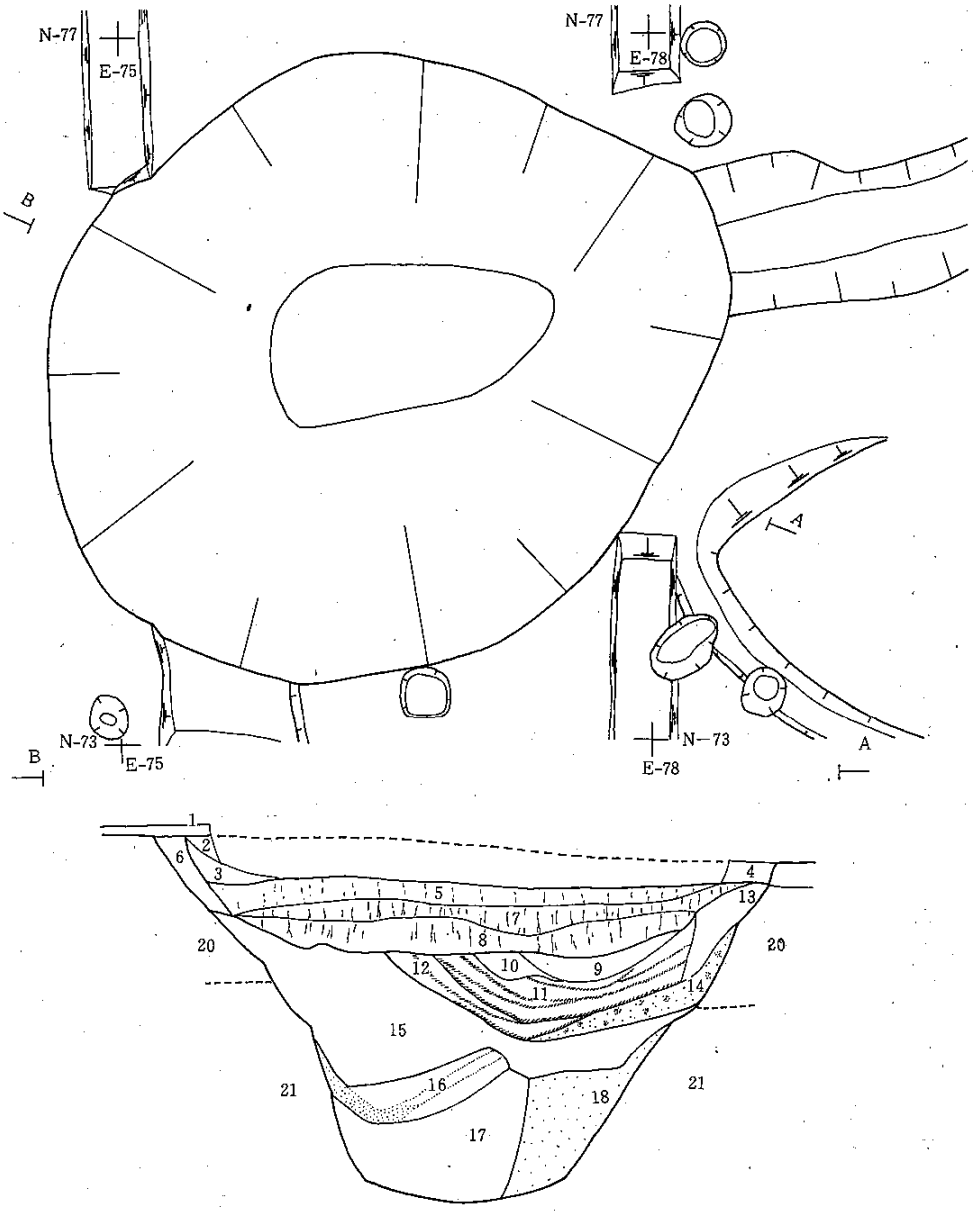


第33図　北側低地



層No.	土色	土性	層No.	土色	土性	層No.	土色	土性	層No.	土色	土性	層No.	土色	土性
1	褐色 (2.5YR 5/4)	シルト	17	黄灰色 (2.5YR 5/1)	シルト	33	にぶい黄色 (10YR 5/4)	細砂	49	灰色 (5Y 5/1)	粘土	65	黒褐色 (7.5YR 3/2)	粘土質シルト
2	黄色 (2.5Y 5/4)	細砂	18	黄灰色 (7.5YR 5/1)	粘土	34	にぶい黄色 (10YR 5/4)	細砂	50	オリーブ黒色 (5Y 3/2)	粘土質シルト	66	黒色 (10YR 5/2)	粘土質シルト
3	黒褐色 (10YR 3/2) 明黄褐色 (10YR5/6)	シルト 細砂 } 互層	19	暗灰黄色 (2.5Y 5/2)	細砂	35	灰黄褐色 (10YR 5/2)	細砂	51	黒褐色 (7.5YR 3/2)	中砂	67	黒色 (10YR 2/2)	粘土
4	黒色 (7.5YR 2/1) 褐色 (10YR 5/3)	細砂 } 互層	20	にぶい黄色 (2.5Y 5/3)	細砂	36	黄橙色 (10YR 5/8)	細砂	52	黒褐色 (7.5YR 3/2)	シルト	68	黒褐色 (10YR3/2)	砂質粘土
5	褐色 (10YR 5/4)	細砂	21	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	37	褐色 (7.5YR 5/3)	細砂	53	黒褐色 (2.5YR 3/2)	砂質粘土	69	黒色 (10YR 3/2)	シルト質粘土
6	浅黄色 (2.5Y 7/3)	細砂のブロック	22	暗褐色 (10YR 3/4)	細砂	38	黒褐色 (7.5YR 3/2)	粘土質シルト	54	黒色 (2.5Y 3/2)	粘土	70	黒色 (10YR 2/2)	粘土
7	浅黄色 (2.5Y 7/3)	細砂のブロック	23	褐色 (10YR 5/4)	細砂	39	灰黄褐色 (10YR 5/2)	細砂	55	オリーブ灰色 (5GY5/1)	細砂	71	黒色 (10YR 2/2)	粘土質シルト
8	にぶい黄色 (2.5Y 5/3)	細砂質粘土	24	灰褐色 (7.5YR 5/2)	シルト	40	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	56	黒色 (10YR 2/2)	粘土			
9	にぶい黄色 (10YR5/3)	砂質粘土	25	にぶい黄色 (10YR 5/3)	細砂	41	黒色 (10YR 2/2)	細砂	57	褐色 (7.5YR 5/3)	シルト			
10	オリーブ黒色 (5Y 3/2)	粘土質シルト	26	暗灰色 (10YR5/2)	細砂	42	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	58	黒褐色 (7.5YR 3/2)	粘土			
11	灰黄褐色 (10YR 5/2)	細砂	27	にぶい黄色 (10YR 5/3)	細砂	43	黒色 (10YR 2/2)	シルト質粘土	59	黒褐色 (2.5Y 3/2)	粘土			
12	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	細砂	28	黒褐色 (10YR 3/2)	細砂	44	黒色 (10YR 2/2)	粘土	60	黄灰色 (2.5Y 5/1)	粘土			
13	灰白色 (10YR 8/2)	細砂	29	オリーブ黒色 (5Y 3/2)	粘土質シルト	45	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	61	黒褐色 (10YR3/2)	シルト			
14	浅黄橙色 (10YR 8/3)	中砂	30	オリーブ黒色 (5Y 3/2)	粘土質シルト	46	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	細砂	62	明黄褐色 (10YR 7/6)	細砂			
15	浅黄色 (2.5Y 8/3)	細砂	31	灰黄褐色 (10YR 5/2)	細砂	47	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	63	黒褐色 (5YR 3/2)	シルト			
16	灰黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	32	黒褐色 (10YR 3/2)	細砂質シルト	48	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	細砂	64	黒色 (5YR 2/2)	粘土質シルト			

第34図　北側低地断面図



層No.	土　　色	土　性	11	黒褐色(10 Y R 3/2)	砂質粘土
1	灰黄褐色(10 Y R 3/2)	シルト	12	紫黒色(5 R P 3/1)	砂質粘土
2	暗赤褐色(5 Y R 3/2)	シルト	13	紫黒色(5 R P 1.7/1)	砂質粘土
3	にぶい黄橙色(10 Y R 3/4)	細　砂	14	紫黒色(5 R P 2/1)	砂質粘土
4	灰褐色(7.5 Y R 5/1)	シルト	15	紫黒色(5 R R 1.7/1)	砂質粘土
5	灰褐色(5 Y R 5/2)	砂質粘土	16	青黒色(5 B 3/1)	粘　土
6	赤黒色(5 R 3/1)	粘　土	17	黒色(N1.5/0)	粘　土
7	灰色(5 Y 5/1)	砂質粘土	18	青灰色(10 B G 5/1)	細　砂
8	灰色(5 Y 5/1)	砂質粘土	19	灰黄褐色(10 Y R 5/2)	細　砂
9	暗赤灰色(2.5 Y R 3/1)	シルト質粘土	20	明黄色(2.5 Y R 7/6)	粗　砂
10	黒褐色(7.5 Y R 3/1)	粘　土	21	黄橙色(7.5 Y R 7/6)	細　砂

第35図　北側低地第Ⅰ土坑

堀と土塁

（概要）　東側台地の裾部を堀と土塁がめぐっている。この堀は台地側縁を削って一方の壁とし、その反対側に土塁を築くことによってもう一方の壁を形づくっている。堀の幅は底の部分で2～3m、肩の部分で7～8mである。堀にともなう土塁は高さが約1mで、幅は肩の部分が2～3m、裾の部分が6～7mである。

この土塁は二ヶ所で途ぎれている。この途ぎれ部は肩の部分で2m、底の部分で1mの幅となっている。また、この途ぎれ部について底面のレベルを検討すると他の場所に較べて幾分低い。つまり、堀の底は土塁の途ぎれ部に近づくに従って次第に低くなっている。

土塁の築成方法を検討するためにトレンチを入れて3ケ所を立ち割った。そのトレンチを東側から第1、第2、第3トレンチとした。第1トレンチと第3トレンチの断面は第36図に示した通りである。

土塁の断面を観察すると次のような共通点を確認することができる。細別された層は複雑であるが、それを大別すると表土層→積土層→旧表土層→土塁築成以前の堆積層となる。そして、この中で積土層を検討すると、その土が旧表土と地山および土塁築成以前の堆積層が入り混ったものであることが判明した。また、旧表土層上面の傾斜が台地側縁の斜面とひと続きになることも明らかとなった。従って、この土塁は堀を掘った時の土を積みあげることによって築成されたものと考えられる。また、土塁の途ぎれ部は、堀から他の所へ水を流すための水門ではないかと推定される。しかし、堀の断面を見た限り、その底面に水成の堆積物や砂層は認められなかった。このことから、実際に水が流されたか否か明らかでない。調査の結果としては否定的である。

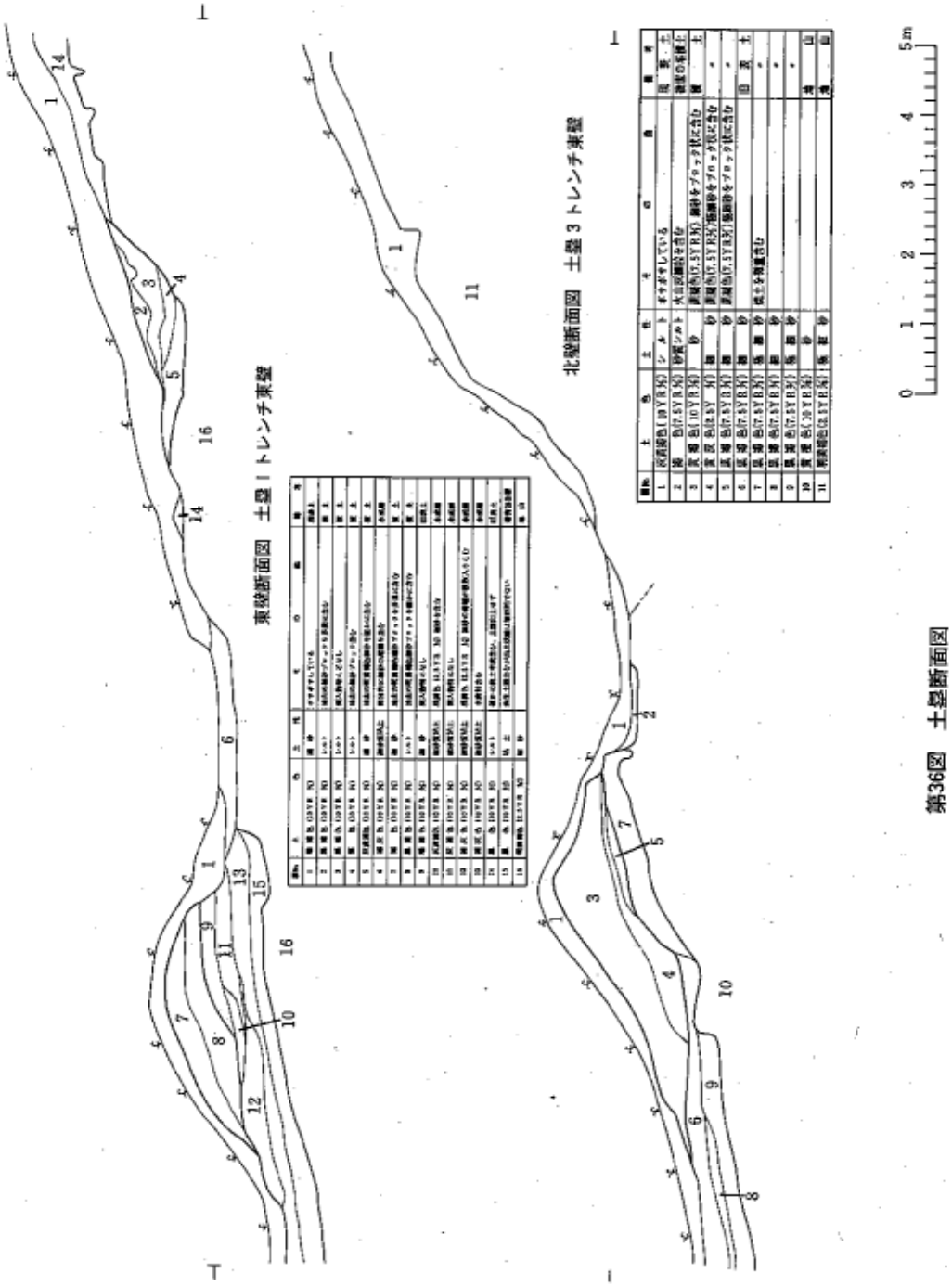
この土塁をともなう堀は北側低地の堀（低面のレベルは異なる）へ続くことから、近世のものと考えられる。

尚、土塁第1トレンチの下部には、水分の含有量が多い黒色の粘土層があった。この黒色粘土層は土塁築成以前のもので、層中に弥生土器（第37図1～6）を含んでいる。また土塁の積土からは皿状の土器（第37図7）が1点出土した。

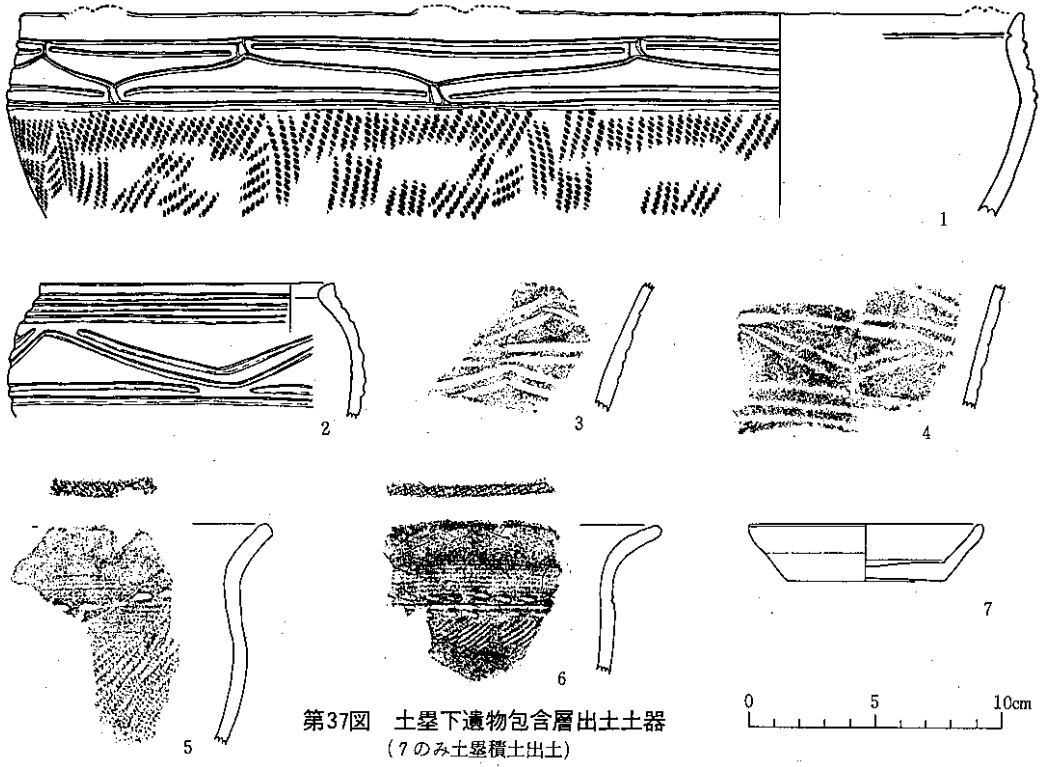
（遺物）

第37図1：口縁部が内彎する大形の浅鉢で、体下半部を欠いている。口縁部文様帯には太い沈線による変形工字文が描かれている。口縁部内面にも1条の沈線が走っている。なお、器外面には炭化物が付着していた。

第37図2～4：2は口縁部が強く内彎し、その上端が若干立ちあがる深鉢であるが、体部下半を欠いている。太いヘラ描きの沈線を口縁部に3条、体部中央に2条めぐらして、その間を並行する2条の沈線によって、山形文を描いている。3と4は1と同様な文様構成をもつ体部



第36図　土壁断面図



第37図　土墨下遺物包含層出土土器
（7のみ土墨積土出土）

破片である。

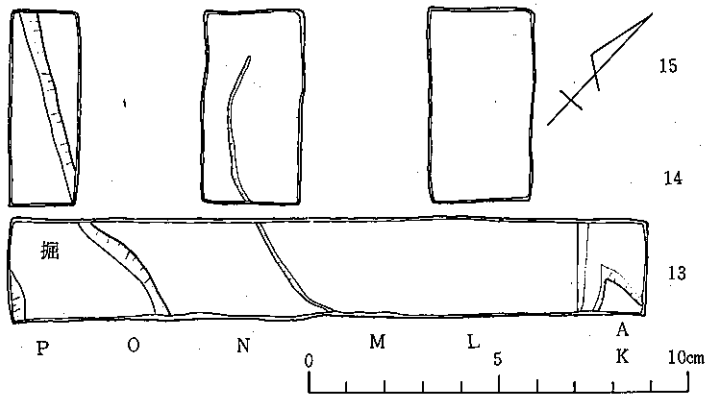
第37図5･6：口縁部の外反する甕の破片である。5は頚部に一列の列点文がある。6は頚部に1条の沈線があり、その上下に列点文が施文されている。両者とも頚部には横ナデが観察される。

第37図7：明黄褐色をした浅皿状の土器である。製作にロクロを使用している。ロクロからの切離しは回転糸切りで、その後の再調整は内外面とも行なわれていない。大きさの割に器肉が厚い。

東側低地

（概要）東側低地は南から北側にゆるやかに傾斜している。この東側低地においても北側低地と同様積土層がある。しかし、北側低地程大規模ではなく、厚さが50cm程度にすぎない。積土層の下には黒褐色の粘土質シルト層が20～30cmの厚さで認められ、弥生土器（第39図1～5）が出土した。弥生土器は量も少なく、その大半は細片である。

この弥生時代の堆積層を切る形で南側に堀が検出された。この堀は底の幅が約4mで、屈曲しながら土墨を伴なう堀の方向へと続いている。しかし、堀底面のレベルは土墨を伴なう堀よりかなり低い。この他遺構は検出されなかった。



第38図　東側低地

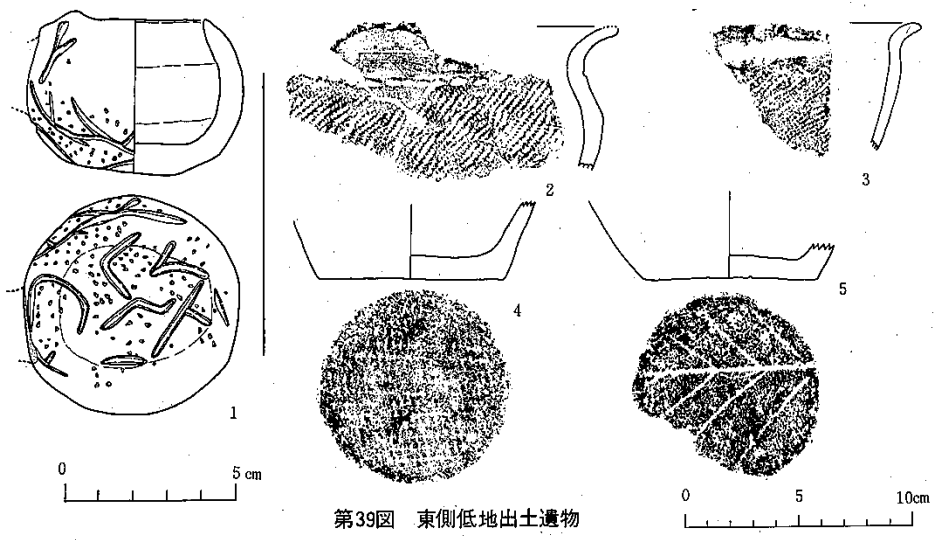
（遺　物）

第39図1：口縁部が内彎し、体部が球形をなす小形の土器である。底部は丸底である。器外面の全体にわたって、小さい円形の刺突が加えられ、太い沈線が不定形に描かれている。体部中央に直径2.5cmの剥落痕が認められ、この部分に柄がつき、杓子形の土器であった可能性がある。

第39図2：口縁部が強く外反する甕の破片で、口唇部を欠いている。頚部には横ナデが観察され、その下端に一列の列点文がめぐっている。体部にはＬＲ縄文が施文されている。

第39図3：頚部がくびれた甕の破片である。頚部は無文で、体部との境に綾絡文が1条めぐっている。体部にはＬＲ縄文が施文されている。

第39図4・5：土器の底部である。4には網代の、5には木の葉の圧痕がある。



第39図　東側低地出土遺物

3. 表土から発見された遺物

土　器

縄文土器（第40図5～6）

第40図5：胎土に微量の繊維を含む土器片である。組紐を回転した文様をもつ。

第40図6：注口土器の体部破片である。体部中央に隆帯がめぐり、下半部には磨消し縄文が観察される。

弥生土器（第40図1～2・7～38、第41図1～29）

第40図7～12：太いヘラ描き沈線によって文様が描かれているものを一括する。7は脚部、8・9・10は鉢の破片であるが、いずれもていねいなヘラミガキの後、変形工字文に類似した文様が施文されている。なお、9と10は同一個体である。11は鉢の破片であるが地文のＬＲ縄文を沈線間に残している。12は鉢の口縁で沈線が3本口縁に平行して横走しており、口唇部裏面にも1条の沈線がめぐっている。

第40図13～17：すべて同一個体の破片で、台付鉢の脚台である。2本単位の沈線が数列めぐり、その間にＬＲの細かな縄文が残っている。

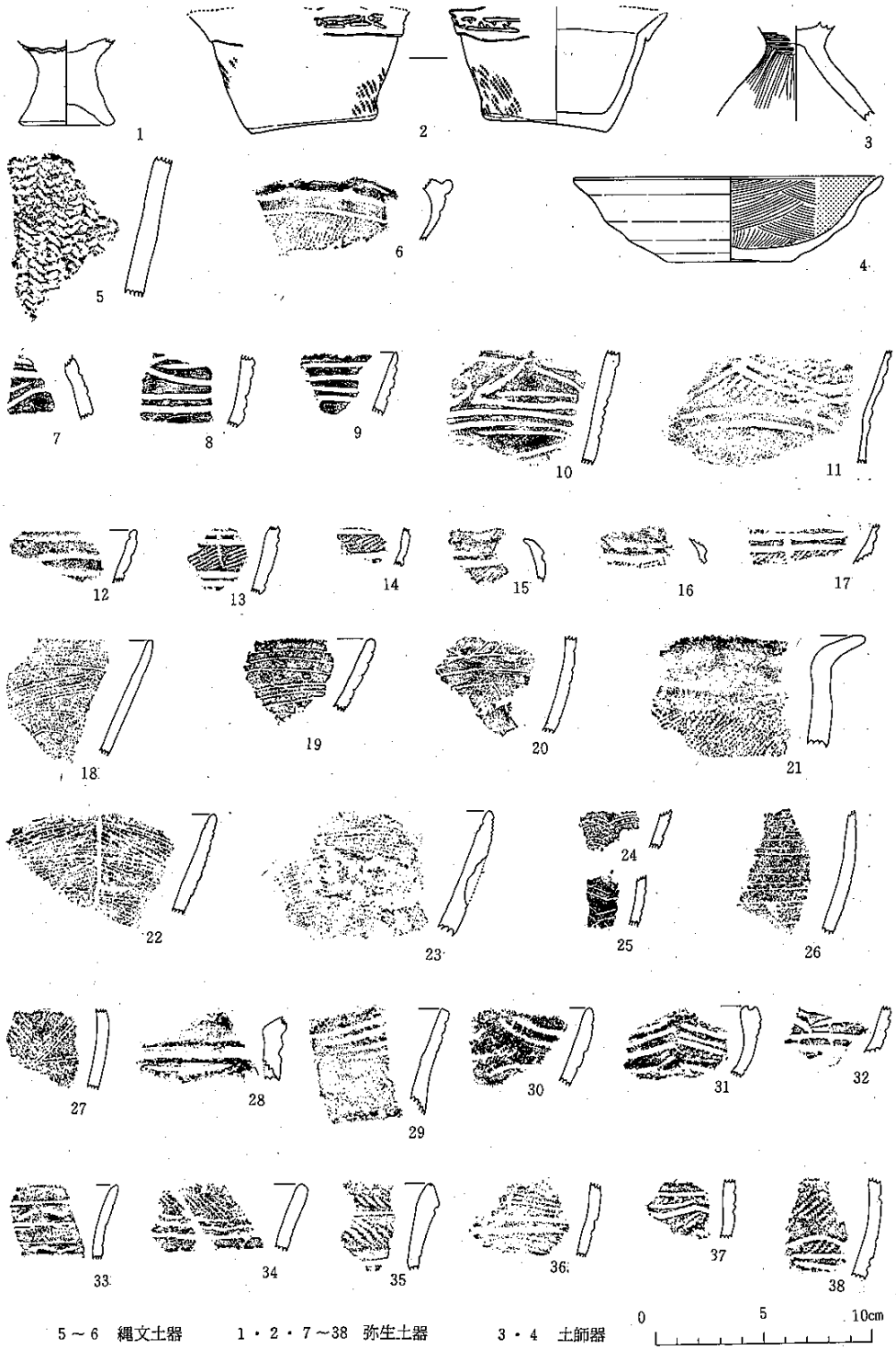
第40図18・19：両者とも鉢の口縁部で、細いヘラ描き沈線によって文様を施している。18は3本の沈線を口縁に平行させてめぐらせ、その下に3本の平行沈線で連続山形文を$^{1}/_{2}$単位ずらして施している。19も同様な文様と思われる。沈線間はよく研磨されている。

第40図20：壺の体部破片である。3条の細いヘラ描き沈線が平行に横走し、これをはさんで数本の平行沈線による三角文（と思われる）が施されている。器面はよく研磨されている。

第40図21：頚部が強く屈曲して外反する甕で、口縁から頚部には横ナデが観察される。体部にはＬＲ縄文が施文され、体部上端には縄文原体を回転した際の末端変化がみられる。

第40図1・22～28：幅の狭い（2～4㎜）平行施文具によって三角文・連弧文・山形文・平行沈線文などが描かれているものを一括する。1は高坏?の台部で、坏部下端が若干残っており、小波状文が描かれている。22と23は同じ個体（鉢の口縁部）で、口縁上端に1列の平行沈線があり、その下に平行沈線による三角文を交互に3段めぐらせている。24・25は鉢の体部破片、26・27は壺の体部破片である。28は壺の頚部で、太い沈線を数条めぐらせているため、沈線間は凸帯となっている。その下には平行沈線文がみられる。

第40図29～33：ヘラ描きの沈線によって連弧文や「ハ」字文が施されているものを一括する。いずれも甕の口縁部破片である。29～31は突起の部分で、頂部を中心にして口縁に平行な沈線を2～4本描いている。29は地文にＲＬ縄文がみられる。31は頂部を凹ませている。32・33は平行



5～6　縄文土器　　1・2・7～38　弥生土器　　3・4　土師器

第40図　表土発見の土器Ⅰ

沈線文を併用している。33は平行線間に「ハ」字文を施している。なお、32は口唇部を欠いている

第40図34～38：縄文施文後（36のみ撚糸文）に横および弧状の沈線を数本単純にめぐらしているものを一括する。34・35・37・38は甕の口縁部で、36は体部破片である。35は口唇部に連続刺突がある。37は沈線間に刺突がある。

第40図1・第41図1～7：口縁部文様帯に交互刺突文を持つものを一括する。第40図1は小形の鉢で、口唇部を僅かに欠くが完形に近い。口縁部は複合口縁で若干外反する。口縁部文様帯の中央にはくずれた交互刺突文がめぐっているが、施文が途切れている所がある。この途切れた部分は外反が強く、片口状になっていた可能性がある。体部にはＲＬの斜行縄文が施文されている。第41図1～7は甕の口縁部で、口縁部文様帯の下端に交互刺突文がある。1・2は凸帯に交互刺突を加えているが粗雑である。1は弧線文と沈線文の間に右斜め方向からの竹管による刺突がある。3と4は同一個体の破片でＬＲ縄文を地文として連弧文が描かれている。
5は横位の撚糸文を地文として平行沈線文が描かれている。6は斜行縄文が施文されている。
7は無文である。

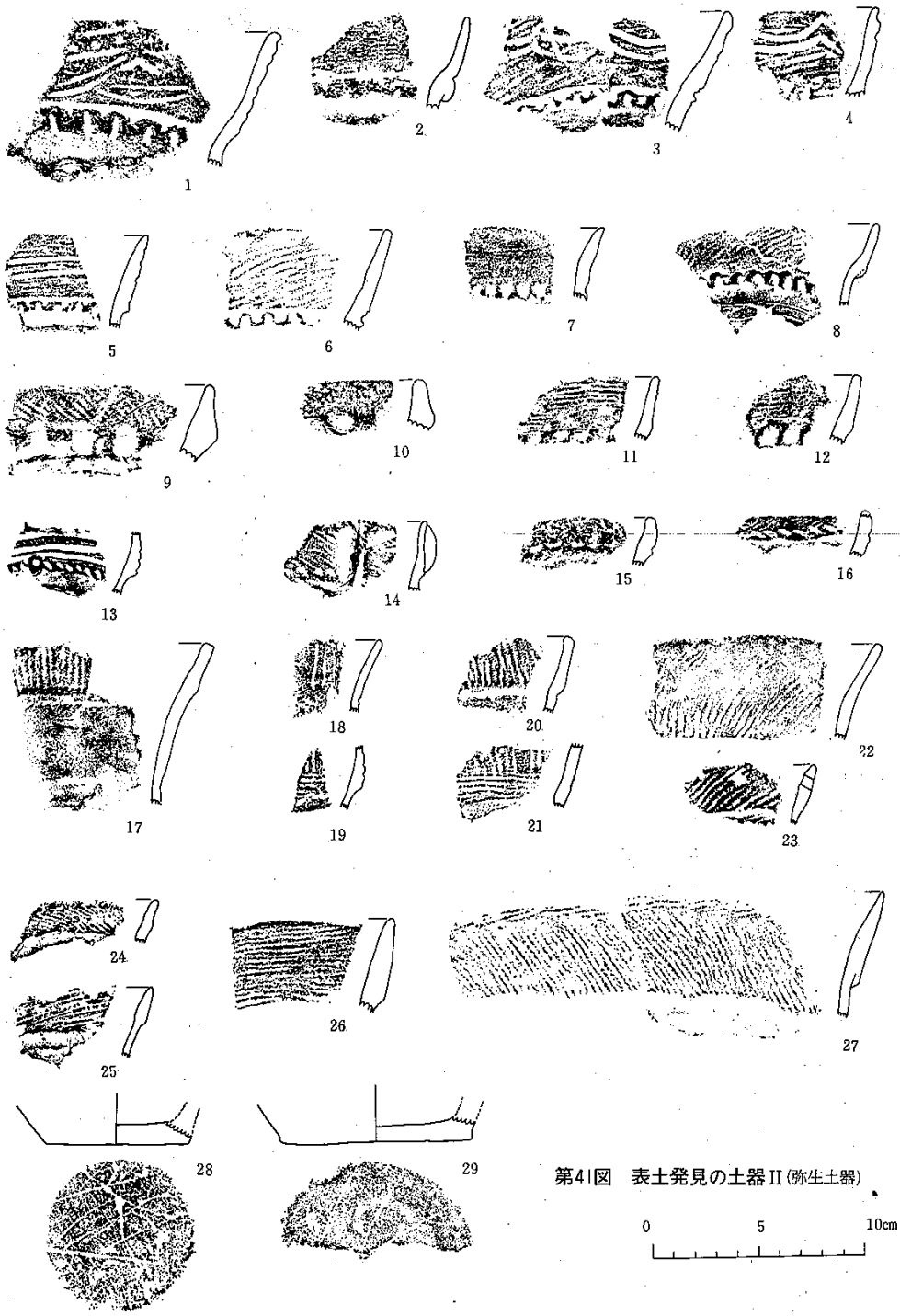
第41図8～12：口縁部下端に指頭状工具の圧痕によって、複合口縁状をなすものを一括する。8～10は壺、11・12は甕の口縁部と思われる。口縁部文様帯には縄文が施文されているもの（8・9）、無文のもの（10）、撚糸文が施文されているもの（11・12）がある。

第41図13～16：口縁部文様帯の下端に刺突利点文のあるものを一括する。いずれも複合口縁ある。13は口唇部を欠くが、口縁部下端に幅の狭い凸帯がめぐっていて、その上から刺突が加えられている。また、この凸帯の上には円形をした粘土の貼付（円形刺突が加えられている）がみられる。14は口縁部文様帯に「Ｄ」字状の突起を縦に貼りつけ、突起の中央に沈線を入れている。刺突利点文は口縁下部だけではなく突起の両側にもある。15・16は口縁部の幅が狭く、壺の口縁部と思われる。15の口縁部文様帯は無文であるが、16はＬＲ縄文が口縁部と頚部に施文されている。

第41図17～21：口縁部文様帯に縦位の縄文が施文され、その下端に横位の縄文や抑圧縄文のあるものを一括する。いずれも甕の口縁部で、17は頚部無文帯がよく観察できる。20は口唇部にもＬＲ縄文が施文されている。

第41図22～27：口縁部文様帯に縄文や撚糸文が施文されているだけのものを一括する。22は単純口縁であるが、その他は複合口縁になっている。22は鉢の口縁部で、無節の縄文が施文され焼成前の穿孔がある。23は甕の口縁部でＬＲ縄文が施文されている。24は壺の口縁部で、ＬＲ縄文が施文されている。25も壺の口縁部で撚糸文が施文されている。26・27は甕の口縁部で撚糸文が施文されている。

第41図28・29：底部破片で、木葉文のみられるものである。この他に無文と網代痕のものが



第41図　表土発見の土器Ⅱ(弥生土器)

あるが、布痕のものは発見されなかった。

土師器（第40図3・4）

第40図3：高坏の脚部で、外面が縦方向にヘラミガキされている。内面にはナデがあるがよく観察できない。坏部および脚部外面には丹が塗られている。

第40図4：製作にロクロの使用されている坏である。ロクロからの切り離しは回転糸切りで、切り離し後の再調整は加えられていない。内面はヘラミガキと黒色処理が行なわれている。

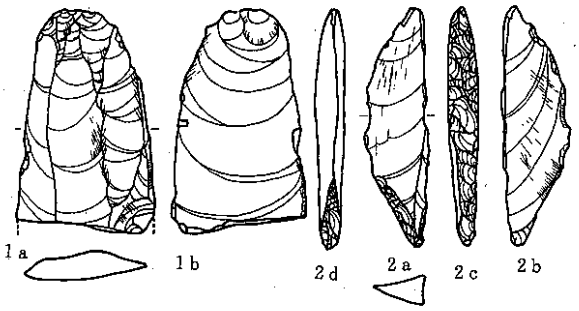
石　器

旧石器（第42図）

石刃（第42図1）：未端が折れているため長さは不明であるがいわゆる石刃技法によって剥取された石刃である。風化のため剥離面の稜線は磨滅している。

また、縁辺には新しい小さな破損がみられる。打面は小さいが、除去されてはいない。

この剥片はb面にバルブが2ケ所ある双錐体剥片である。



第42図　表土発見の石器Ⅰ　0　5cm

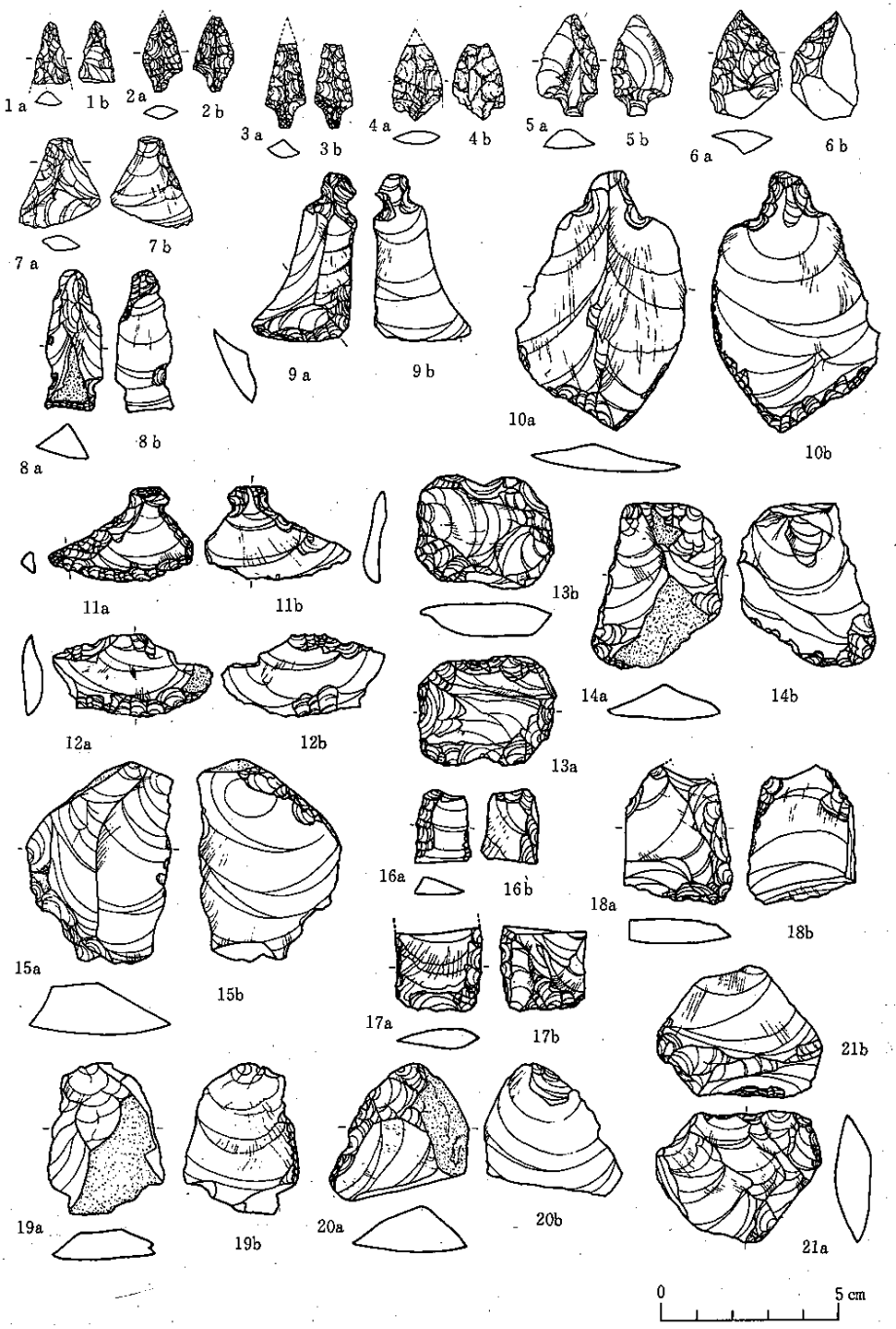
ナイフ形石器（第42図2）：縦長の剥片を素材とし、切断手法による斜め成形を行ない形状をつくり出している。2Cにみられる刃潰し加工はa・b両面から行なわれている。風化がすすみ、剥離面の稜は磨滅している。

第30表　石刃計測表、ナイフ形石器

図	名　称	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	石　材	完、不完	出土地点
第42図－1	石　刃	58.9	36.2	7.8	頁　岩	不　完	ED－32区1層
第42図－2	ナイフ形石器	62.8	13.0	7.6	頁　岩	完　形	CA・B－10区1層

縄文時代以降の石器（第43図・第44図・第45図・第46図）

石鏃（第43図1～6）：いずれも破損品である。4は風化のため磨滅が著しい。5は一縁辺と基部のつけねに調整剥離がみとめられるが、基部は途中から破損しているため全体の形状は不明である。他の縁辺に調整剥離が施されていないのは第1次剥離によって形成された縁辺をそのまま機能させたものと観察される。6はb面が大幅に欠損しているため全体の形状は不明である。しかし残存部の形状、大きさ、器面調整の観察から石鏃と推定した。2・3・4は有茎の石鏃あり、5も残存部の形状から推定して有茎の石鏃となる可能性が大きい。なお、図示



第43図　表土発見の石器 II（石鏃・石匕・削器）

されてはいないが、石鏃の尖端部の破片が1点出土している。

第31表　石鏃計測表

図	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　材	完、不完	出土地点
第43図－1	18.5	11.2	3.3	0.7	黒耀石	不　完	CE－10区1層
第43図－2	22.5	12.5	5.0	1.0	黒耀石	不　完	EN－22区1層
第43図－3	25.9	11.4	5.0	1.0	黒耀石	不　完	EN－22区1層
第43図－4	23.0	15.4	3.8	1.3	安山岩	不　完	DI－18区1層
第43図－5	30.7	17.9	5.4	2.3	頁　岩	不　完	DO－42区1層
第43図－6	32.1	21.0	13.0	3.7	頁　岩	不　完	CK－13区1層

石匕（第43図7～11）：つまみ状の突起を一端につけた石匕は3点ある。また、その未製品と推定されるものは2点ある。9･10は縦形の石匕で、いずれも打面を残し、その周縁につまみを両面から作り出している。9は剥片の末端に掻器のような部厚い刃部を有している。10はb面にみられるように左側辺から末端にかけて、薄身の刃部をもつ。11は左側辺を錐状に整形した横形の石匕である。表面がかなりひどく磨滅している。7は三角形を呈したb面の肩部にこまかな調整剥離を施したものである。削器とも考えられるが、剥片の形状から石匕を製作する途上のものと推定した。8は剥片の末端部付近の両側辺に、ノッチ状に調整を施している。
つまみ状の加工がやや不明確であり、加工途上の未成品かもしれない。

第32表　石匕計測表

図	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　材	完、不完	出土地点
第43図－7	21.2	29.1	5.0	2.0	黒耀石	完形(未成品?)	DO－42区1層
第43図－8	43.6	17.0	8.6	10.6	頁　岩	不完(未成品?)	DS－30区1層
第43図－9	51.9	28.6	8.2	7.5	頁　岩	完　形	表　採
第43図－10	77.0	49.6	9.3	28.5	流紋岩	完　形	DR－36区1層
第43図－11	22.8	42.9	4.5	5.0	頁　岩	完　形	CB－15区1層

削器（第43図12～21）：剥片の縁辺を調整剥離し、刃部を作り出したものである。12は横長の剥片の末端に調整剥離した外彎刃の削器である。石器自体磨滅し、ひどく破損している。打面は調整剥離によって除去されている。13はほぼ全周が調整され、形状は不整形な四辺形を呈す。この石器も磨滅し、ひどく縁辺が破損している。14･15は剥片の側辺及び下辺部を調整剥離し、刃部を作り出した石器である。14はかなり磨滅したせいか、縁辺に新しい剥離がみうけられる。15は末端が折れてしまっているが、a面の側辺に鋸歯状を呈する刃部をもっている。

16・17・18は折れてしまって、その形状は推定できないが、いずれも一側辺にこまかな調整剥離がおこなわれている。19・20はいずれも下部が破損している。19は破損がひどく、ｂ面の左側辺にみられる調整も、破損によるものかもしれない。20は打面が僅かに残り、ｂ面にはバルバー・スカーがみとめられる。ａ面の左側辺が刃部である。21はａ面上部に直線刃を有する石器である。またｂ面の上部の打面は除去されている。削器類は他に数点出土しているが、破損がひどく形状が不明なものが多い。

第33表　削器計測表

図	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	石材	完・不完	地区
第43図－12	29.3	49.2	5.0	チャート	不完	ＣＨ－10・11区１層
第43図－13	39.3	33.4	11.0	石英	完形	ＤＯ－42区１層
第43図－14	50.0	38.6	10.5	頁岩	完形	ＣＯ－８区１層
第43図－15	60.5	42.5	14.8	頁岩	不完	ＤＯ－43区１層
第43図－16	22.0	16.4	6.0	チャート	不完	ＤＯ－41区１層
第43図－17	25.3	25.6	5.9	頁岩	不完	第１円形周溝３層
第43図－18	43.6	32.5	9.0	頁岩	不完	ＣＦ－10区１層
第43図－19	47.0	45.0	9.0	頁岩	不完	ＣＤ－11区１層
第43図－20	36.8	44.6	14.0	チャート	不完	ＣＡ・Ｂ－16区１層
第43図－21	39.6	49.5	10.0	チャート	不完	ＣＧ－９区１層

剥片（第44図1～14）：縦長の剥片、横長の剥片と形状は様々であるが、図示したものはほぼ完形に近いものである。2は縁辺の破損が著しく、a面の剥離面の稜は磨滅している。3は安山岩製のため、風化して灰色を呈している。6はａ・ｂ両面にいずれもポジティブ・バルブを有しているが、前後関係を示す加撃点はいずれも破損していて、いずれが最終剥離面かは不明である。剥片を石核として、さらに剥片を剥取した時に生じた剥片であろう。30はａ面に様々な方向から剥片を剥取した剥離痕がみられ、その面は凹・凸が著しい。この種の剥片は石核の打面を再生する時に生じた剥片である。

第34表　剥片計測表

図	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	打角	打面調整	石材	完・不完	地区
第44図－１	38.0	37.5	8.7	8.0	95°	平坦	チャート	完形	ＤＯ－42区１層
第44図－２	52.5	31.2	13.8	5.0	108°	平坦	流紋岩	完形	ＥＦ－32区１層
第44図－３	64.3	38.3	11.8	38.2	101°	平坦	安山岩	不完	ＣＣ－８区１層

第44図－4	66.2	49.0	13.8	36.6	113°	平　坦	流紋岩	完　形	ＥＡ－32区１層
第44図－5	36.2	24.3	7.7	6.2		平　坦	流紋岩	不　完	ＤＲ－27区１層
第44図－6	37.5	23.4	3.1	3.0			頁　岩	不　完	ＤＮ－41区１層
第44図－7	34.0	51.2	12.0	16.6	102°	平　坦	流紋岩	完　形	ＤＯ－42区１層
第44図－8	46.0	46.7	13.9	22.8	106°	平　坦	流紋岩	完　形	ＣＧ－13区１層
第44図－9	48.0	55.4	13.5	25.5	75°	調　整	頁　岩	不　完	ＤＯ－42区１層
第44図－10	57.0	41.7	18.0	28.0	114°	調　整	頁　岩	完　形	ＣＧ－13区１層
第44図－11	92.8	59.8	18.5	103.0	100°	自　然	安山岩	完　形	ＣＦ－11区１層

石核（第44図11～14）：11はかなり風化がすすみ安山岩特有の灰色を示す。形態がチョッピング・トウールのような石器にみえるが、ａ・ｂ両面を交互に打面として剥片を剥取した石核である。剥離面の縁辺は階段状剥離が密集している。12は石材が瑪瑙である。ｂ面に傾斜した打面を設け、ａ面から小形の剥片を得ている。14は11同様に両面から交互に剥片を剥取している。

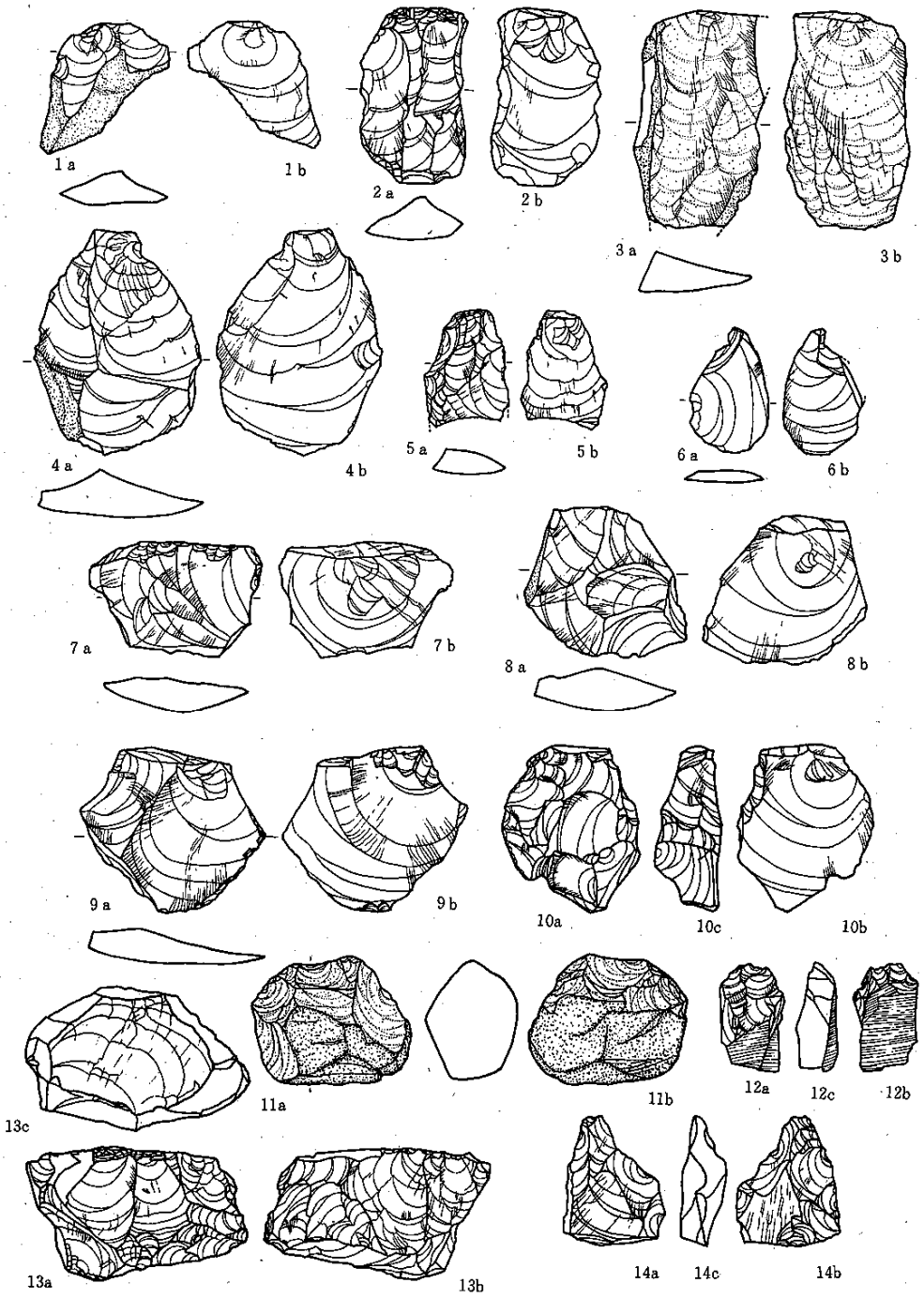
第35表　石核計測表

図	長さ(ｍｍ)	幅（ｍｍ）	厚さ(ｍｍ)	石　材	完・不完	地　区
第35図－11	42.8	46.0	29.1	安山岩	完　形	ＣＦ－11区１層
第35図－12	30.5	19.3	12.3	メノウ	完　形	ＣＤ－11区１層
第35図－13	39.5	66.2	47.0	チャート	完　形	ＥＤ・Ｅ－28区１層
第35図－14	38.7	30.5	12.4	流紋岩	完　形	ＣＥ－10区１層

磨製石斧（第44図1～3）：太型蛤刃石斧が2点、扁平片刃石斧と思われるものが1点出土した。1は刃部の一部が剥落しているが、ほぼ完形である。全体を敲打によって成形し、刃部だけを両面から研磨している。刃先付近には使用痕と思われる縦方向の粗い擦痕が観察される。
2は蛤刃石斧の刃部の破片である。3も刃部の小破片と思われる。刃部を片刃に研磨している板状の石斧のようであり、扁平片刃石斧の可能性が強い。その他に形状不明の石斧の破片が1点みとめられる。

第36表　磨製石斧計測表

図	長さ(ｍｍ)	幅（ｍｍ）	厚さ(ｍｍ)	重さ（ｇ）	石　材	完・不完	地　区
第44図－1	151.6	61.7	41.7	643.0	砂　岩	不　完	ＥＭ－22区１層
第44図－2	27.8	41.0	5.4	10.0	安山岩	不　完	ＣＣ－32区１層
第44図－3	36.0	46.7	11.4	25.0	砂　岩	不　完	ＤＴ－32区１層



第44図　表土発見の石器Ⅲ(剝片・石核)

茎（なかご）庖丁（第36図4･5）：4は半月形を呈し、背部は直線的であり、外彎状の刃部をもつ。刃部は両刃である。孔は両面から穿孔されている。器面は平で整形時の斜めの擦痕が残るが、刃部では使用による磨耗のためか擦痕は観察できない。また孔の外周縁にも僅かな磨滅がみられる。5は右穿孔部より右半分と左端部を欠く破損品であるが、その復元長は4よりも小さくなるようである。刃部は外彎を呈し、両刃をもつ。背部も僅かに外彎する。4に比して扁平で、穿孔位置は背部より離れ中央寄りになっている。その間隔も少し狭い。背部に打撃による剥離がみられるが、右半分の欠落はこの打撃によるものかもしれない。左端部の欠損後も使用されたらしく、剥落した刃部に磨滅がみとめられる。刃先にも磨耗がみとめられる。

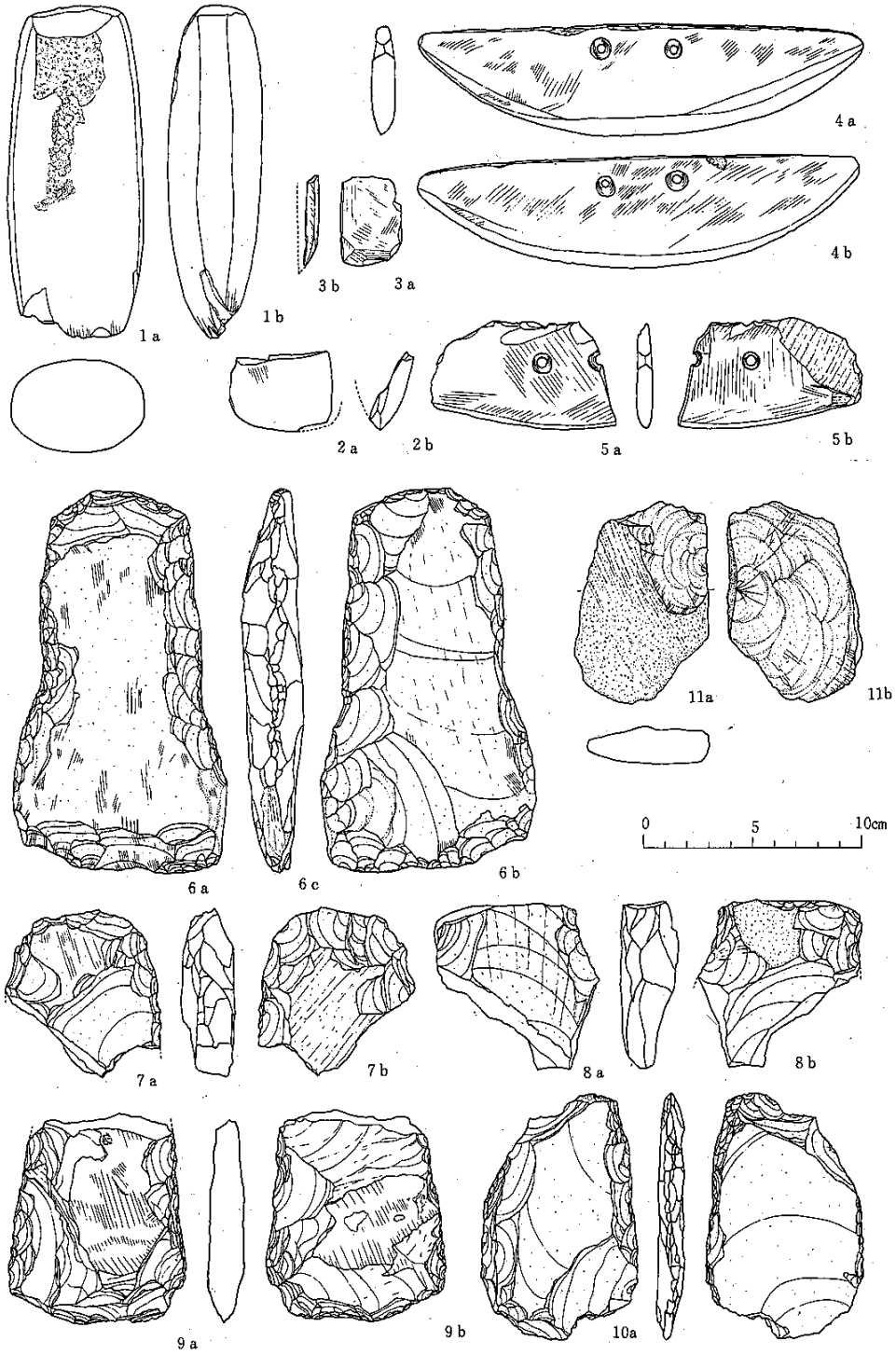
第37表　石庖丁計測表

図	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	石　材	完・不完	地　区
第36図－4	221.0	52.0	10.5	スレート	完　形	CH－12区1層
第36図－5	82.8	49.0	6.4	スレート	不　完	DO－41区1層

石鏃（第446～10）：安山岩、粘板岩の扁平な原石の縁辺に粗雑な調整剥離を加えて、短冊形に成形した打製石器である。刃部は基部よりも幅広くなっている。両面もしくは片面に自然面が残ることが多い。6は完形品で中央部より刃部にかけて僅かに開き、撥形に近い形状を示す。両面からの調整剥離が縁辺を全周するが、左側縁下端にはa面からの剥離しかおこなわれず自然面が残る。両側縁･基部の刃部はいずれも潰れて磨耗している。特に両側縁下部、b面下部で著しい。刃部は比較的鋭利である。7は基部から$^{1}/_{3}$程度、8は上下両端を欠く破片である。いずれも両側縁･刃部に磨滅がみられる。9は粘板岩の板状岩製で基部を欠いている。側縁刃部の磨耗は著しい。a・b両面に自然面が残り、使用痕によると思われる磨滅と長軸に対して斜行する擦痕が観察される。10も粘板岩製で、基部を僅かに欠くが、ほぼ完形である。他の石鏃に比して小形で身が薄くなっている。縁辺の調整剥離は両面から施されているが、刃部はb面からの剥離で片刃に作り出されて鋭い。基部、側縁の刃部は潰れて磨滅が著しい、11は安山岩の大形剥片で、石鏃などの大形打製石器製作の初期の器面調整剥片と推定される。

第38表　石鏃計測表

図	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ (g)	石　材	完・不完	地　区
第44図－6	156.5	97.8	26.0	513.0	粘板岩	?	CT－12区1層
第44図－7	74.0	71.4	25.0	137.6	安山岩	不　完	CF－8区1層
第44図－8	74.5	74.3	26.0	156.0	安山岩	不　完	DO－42区1層
第44図－9	94.7	81.7	16.8	168.0	粘板岩	不　完	表　採
第44図－10	112.1	72.0	11.2	122.0	粘板岩	不　完	CG－9区1層



第45図　表土発見の石器Ⅳ（太型蛤刃石斧・石包丁・石鏃・大型剥片）

凹石（第45図1）：安山岩の円礫の表・裏に各々二個の凹を有し、その周辺には敲打による僅かな窪みがみとめられる。縁辺には敲打によってできた面が一周している。

敲石（第45図2・3）：円礫の器面、縁辺に敲打痕を有するもので、2は表面及び側面に、3は表裏両面及び縁辺に敲打疲がみられる。2は表面が、3では縁辺が特に著しい。

磨石（第45図4・5）15は$^{1}/_{3}$ほど欠損しているが、扁平な円礫の側面に磨面を中心に敲打による剥製がみられる。

石皿（第45図5）：板状を呈し、一面がよく研磨されていて、著しく磨滅している。磨面は中心に向かって僅かに窪んでいる。

第39表　凹石・敲石・磨石・石皿計測表

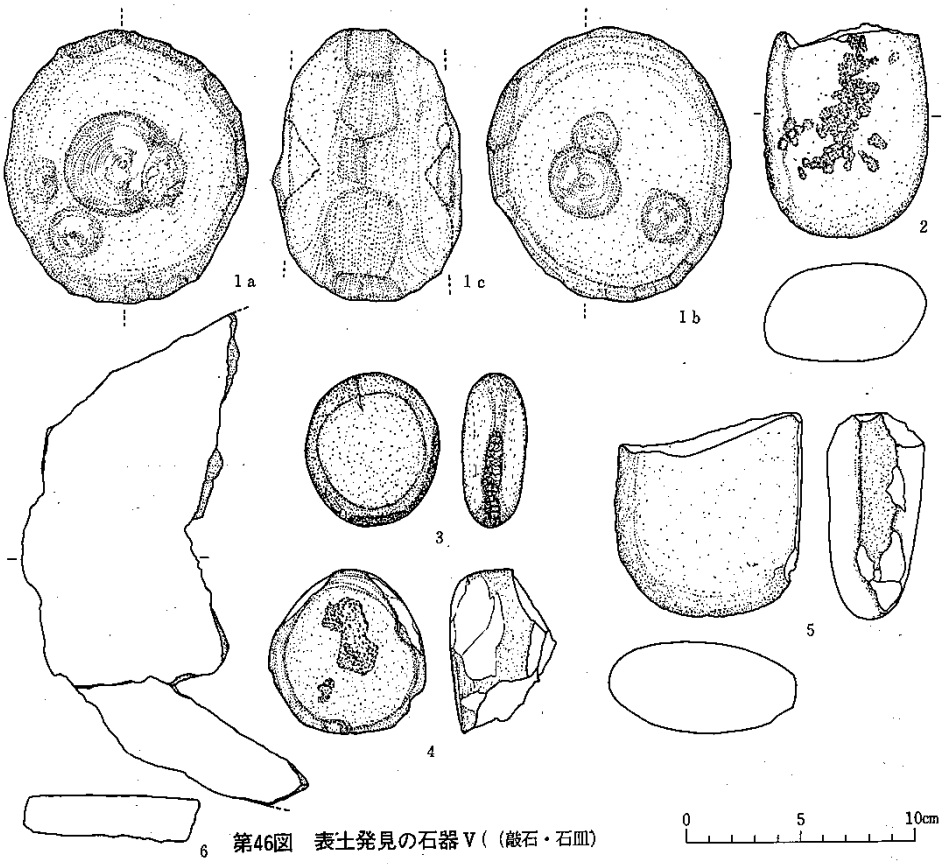
図	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）		石　材	完・不完	地　区
第45図－1	119.2	105.7	82.5		安山岩	完　形	DO－41区1層
第45図－2	93.5	71.5	43.0		花崗斑岩	不　完	CG－9区1層
第45図－3	66.5	58.5	27.5		砂　岩	完　形	EJ－20区1層
第45図－4	71.8	68.2	45.0		砂　岩	不　完	DL－10区2層
第45図－5	89.1	81.6	42.0		安山岩	不　完	CF－11区1層
第45図－6	208.5	78.0	29.8		安山岩	不　完	DS－31区1層

その他の遺物（第47図・第48図）

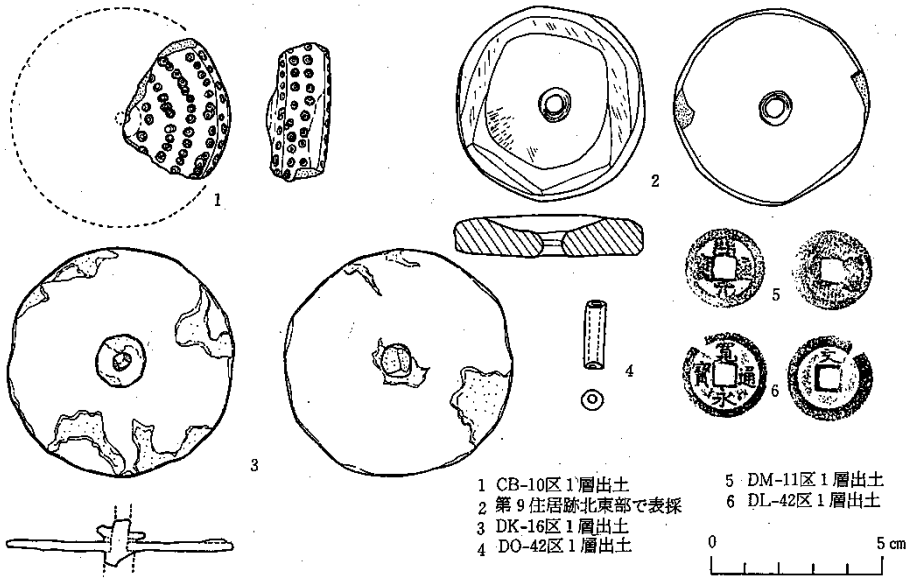
土製紡錘車（第47図1・2）：円盤状をした土製紡錘車である。1は全面に小さい円形刺突が加えられている。全体の$^{1}/_{4}$破片であるが、直径54mm程の大きさであったと推定される。厚さは中心部で16.3mm、周縁部で11.4mmである。貫通孔の大きさは明確でない。2は中央部が凹んでいるものである。凹んでいる部分のヘラ状の工具を押し付けて成形したままであるが、その他はヘラケズリかヘラミガキされている。直径は56.4×55.2mmで、厚さは10.4～11.0mmである。貫通孔の周辺は凹んでいるため、厚さは7.2mm程度である。貫通孔はもっとも径がせばまる部分で6.9×6.7mmである。

鉄紡錘車（第47図3）：薄い円盤に心棒をさしこみ、その反対側を小さい円形の留め金具で固定しているものである。円盤の大きさは65.5×65.3mmで、厚さは2.6mmである。心棒は断面円形で直径が8.6mmであるが、留め金具によって固定されている側は幾分細く直径が5.4×5.5mmである。留め金具は直径14.5×14.8mm、厚さ1.2mmの小さい円盤である。

管玉（第47図4）：長さ19.1mm、直径5.9mmの緑灰色をした管玉である。貫通孔は両端ともほぼ等しく、直径が2.4mm程である。この貫通孔は内部が僅かにせばまっているようであるがよく観察できない。石材は碧玉である。

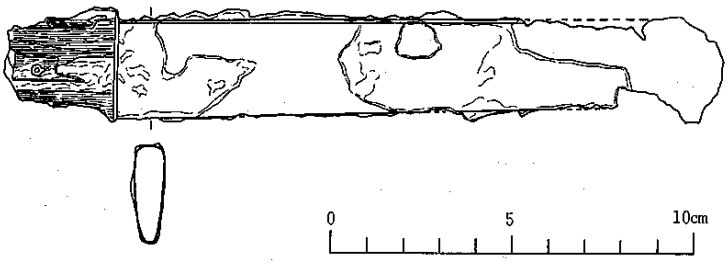


第46図　表土発見の石器Ⅴ（（敲石・石皿）



第47図　表土発見のその他の遺物Ⅰ（鈎錘車・管玉・古銭）

古銭（第47図5・6）:5は唐銭で「開元通宝」である。
6は「寛永通宝」である。



第48図　表土発見のその他の遺物Ⅱ(直刀)

直刀（第48図）身の部分に鎬（しのぎ）が観察されないことから平造（ひらづくり）の直刀であると思われる。棟の厚さは7.2㎜程であるが、刃部は錆のためよくわからない。茎には木質部が残っており、目釘孔も観察できる。関（まち）は刃部に段のある刃関（はまち）である。

Ⅳ　遺構とその出土遺物に関する問題点

1. 古墳時代の住居跡とその出土遺物

第1～11住居跡から出土した土師器は、いずれも成形や調整の段階でロクロが使用されておらず、黒色処理も行なわれていない。東北地方にあってこのような非ロクロ調整・非黒色処理の土師器が一般的に生産され、かつ消費されたのは従来の知見（氏家：1957，工藤・桑原：1972）によれば、古墳時代に限られる。したがって、第1～11住居跡もおおまかではあるが、古墳時代のものとすることができる。これらの住居跡群について、形態的特徴・廃絶後の状態・出土土器等を検討してみたい。

住居（跡）の構造と廃絶後の状態

（平面形）各々の住居跡について、その平面形を検討すると次の3種に分類することができる。円形を基調とするもの：楕円または円形に近いものである。この中には長円形のもの（第1住居跡）、歪んだ楕円形のもの（第6住居跡）、歪んだ円形のもの（第3住居跡）等がある。

隅丸長方形のもの：長円形と長方形の中間的な形態を示すものである（第8住居跡）

方形を基調とするもの：この中には方形を基調としながら一辺が他の辺よりも長く長方形を呈するもの（第2住居跡・第11住居跡?）と、各辺の長さがほぼ等しく、正方形を呈するもの（第4住居跡・第5住居跡・第7住居跡・第9住居跡・第11住居跡）とがある。

なお、以上の中で円形・正方形・長方形等の用語は幾何学的に厳密なものではなく、相対的にそれに近い形を示すものという意味で使用した。

（主柱穴とその配置）住居跡の床面にはかなり多くのピットが存在する。これら多数のピット群の中から、住居の上部構造を支えていた柱の穴を摘出することは、住居の構造を考える上で極めて大事なことと思われる。

ピット群の中から柱穴を摘出するためには、まず住居廃絶後のピットを取り除かねばならない。一般に住居廃絶後のピットは、発掘が床面に達する前に堆積土排除の段階で、その存在を確認できることが多い。しかし、調査技術の不備や注意不足等のため、精査が床面に達した段階になって気付く場合もある。この場合は床面直上の堆積土や、他のピットの土と土色・土性・間隙性等のちがいを検討して区別することになる。この時、土にしまりがあるか、それともボサボサしているか等、間隙性のちがいを特に重視することになる。

このようにして、住居廃絶後のものではないと判断されたピットは、住居に伴なうもの（住居構築～使用時のもの）と考えられる。これらのピットの中で柱穴として積極的に承認できる

ものは、柱痕と掘り方が識別できたものである。第3住居跡や第11住居跡の柱穴はその代表的なものといえる。また、両者の識別ができないものでも、大きさや深さで共通し、配列に規則性のみとめられるものがある。時として、柱痕と掘り方の識別できるものと組み合うことによって配列に規則正しさを示す場合もある。これは柱の太さと掘り方の大きさが接近していたためではないがと考えられるので、決め手には欠けるが柱穴の可能性の高いものといえる。

以上のような方法によって摘出された柱穴について、その配置のあり方を検討すると次のようなものが存在する。A:竪穴内に正方形に四個配されるもの。住居平面形が正方形の場合は、その対角線上にのることが多い。B:竪穴内の壁に沿って配されるもの。この場合、向いあった側に対になる柱穴がある。C:竪穴の外に壁に沿って配されるもの。B同様向い合った側に対になる柱穴がある。D:不明のもの。これらに該当するものをあげると、A:第3住居跡?第4住居跡・第11住居跡、B:第1住居跡・第7住居跡・第8住居跡、C:第6住居跡、D:第2住居跡・第5住居跡・第9住居跡・第10住居跡となる。

（炉）第1～11居跡において石組等の施設をもった炉は、1例も発見されていない。いずれも住居中央部床面が焼けて固くなっているだけである。また、その上に焼土等が残っていたのは、第4庄居跡の1例のみにすぎない。このような簡略な炉は関東地方の五領式期の住居跡に一般的で、台付甕の存在と関連づけられている（玉口:1972）。西野田遺跡では、台付甕と考えられるものは脚台の部分が1点出土しているだけなので、両者の関係を積極的に主張することはできない。

次に炉が検出されなかったものとして、第1住居跡と第6住居跡がある。第1住居跡は東側に後世の撹乱によって削りとられている部分があるので、その時失なわれてしまった可能性もある。第6住居跡は撹乱を受けた形跡がないことから、住居構築当初において設置されなかったものと考えられる。

（その他の施設）炉や柱穴以外で住居に伴なう施設としては、貯蔵穴状のピットをあげることができる。この貯蔵穴状のピットは、大きさ・深さの点で他のピット群と異なり、遺物がまとまって出土する場合が多い。これをその形態的特徴によって楕円形のもの、隅丸長方形のもの不整形のものに分類することができる、また、これらの長軸と深さを検討するとその比が1:0.3前後（1:0.29～0.35）で比較的浅いものと、1:0.5以上（1:0.5～1.21）で比較的深いものにわかれる。前者をa、後者をbとして再分類すると、楕円形a（第3住居跡）・隅丸長方形ａ（第11住居跡）・隅丸長方形b（第2住居跡・第4住居跡・第5住居跡・第10住居跡）不整形b（第1住居跡）となる。以上の他に、貯蔵穴状ピットの設置されていないものとして、第6住居跡・第8住居跡、不明なものとして第7住居跡・第9住居跡がある。

次に、遺物の出土状況について観察すると平面形にかかわらず、長軸:深さ＝1：0.3前後

の。aタイプのものは、ピット下部から土器の大破片が、長軸:長さ=1:0.5以上のbタイプのものは、ピット上部から完形に近い土器が数個体まとまって出土している。この中で例外は遺物の発見されなかった第2住居跡のみである。深くて遺物の多いbタイプの貯蔵穴状ピットはその埋り方が自然堆積的でなく、人為的に埋められた可能性が強い。つまり、層全体が近似し、細分が困難であり、細分されても将棋倒し状というよりは、水平に近い層位をなしているのである。aタイプの貯蔵穴状ピットについては浅いため、自然堆積か人為的なものか、判然としない。

第40表　古墳時代の住居跡一覧表

住居跡名	位置	遺構確認面	平面形	大きさ(床面積)	方向	床面構築	主柱穴の配置	炉	貯蔵穴状ピット(大きさ・深さ)
第1住居跡	CB－11区	表土下火山灰層	長円形(推定)	3.4×2.56m(7.91㎡)	南－北	床面下の掘り方不明	壁穴内の壁沿に規則正しく配置(12個検出)	不明	不整形(90×60×45cm)
第2住居跡	DR－28区	表土下火山灰層	長方形	4.2×3.4m(13.35㎡)	東西	床面下に掘り方有。	不明	床面が焼けている。(24×20cm)	隅丸長方形(63×55×54cm)
第3住居跡	DT－29区	表土下火山灰層,堆積土は竪穴の外に及ぶ	歪んだ円形	3.8×3.5m(10.39㎡)	北東－南西	床面下に掘り方有。	竪穴内に方形に4個配置	床面が焼けている。(85×77cm)	楕円形(55×46×16cm)
第4住居跡	DS－36区	表土下火山灰層	正方形	5.7×5.5m(32.75㎡)	東－西南－北	床面下に掘り方有。	竪穴内に方形に4個配置	床面が焼けている。(80×60cm)	隅丸長方形(70×60×59cm)
第5住居跡	DN－39区	表土下火山灰層	正方形	3.50×3.45m(11.90㎡)	東－西南－北	床面中央部は貼床状,床面下に掘り方有。	不明	床面が焼けている。(50×25cm)	隅丸長方形(70×60×85cm)
第6住居跡	EB－29区	表土下火山灰層	歪んだ楕円形	2.00×1.75m(2.88㎡)	西北－東南	床面下に掘り方はない。	竪穴外の壁沿に規則正しく配置	無し	無し
第7住居跡	EF－28区	表土下火山灰層	正方形(推定)	3.45×3.00m(9.39㎡)(推定)	南－北	床面下の掘り方不明(破壊著しい)	竪穴内の壁沿に3対の配置	床面が焼けている。(20×30cm)	不明
第8住居跡	EH－28区	表土下火山灰層	隅丸長方形	2.70×1.55m(4.30㎡)	東－西南－北	床面下に掘り方有。	竪穴内の壁沿に規則正しく配置	床面が焼けている。(17×20cm)	無し
第9住居跡	EN－29区	表土下火山灰層	正方形(推定)	3.0m(10.74㎡)(推定)	北東－南西	床面下の掘り方不明。	不明	床面が焼けている部分が2ケ所ある。(45×36cm)(30×22cm)	不明
第10住居跡	DS－35区	表土下火山灰層	長方形(?)	2.85×?m(4.39㎡)(残存部)	南－北	床面下の掘り方不明。	不明	焼け土があるが、炉か否か不明。(40×40cm)	隅丸長方形(85×65×50cm)
第11住居跡	CD－8区	表土下火山灰層	正方形	5.75×5.30m(33.60㎡)	北東－南西	床面下の掘り方は不明瞭。	竪穴内に方形に4個配置	床面が焼けている。(43×32cm)	隅丸長方形(86×74×30cm)

今回の調査において、これら貯蔵穴状ピットの機能を積極的に主張できるような成果をあげることはできなかった。しかし、bタイプのピットについては、ピットを埋めた後その上に高坏・器台・壺・小形手裡捏ね土器等を一括して廃棄もしくは置くという行動のパターンが存在した可能性を指摘できると思う。

（住居跡の分類） 古墳時代の遺物を出土した第1～11住居跡について平面形・柱穴の配置・炉・貯蔵穴状ピット等の特徴をそれぞれ検討した。次に、これら相互の関係を考慮しながら住居（跡）の分類を行ないたいと思う。そのための基本的な指標として、1：住居の平面形と2：貯蔵穴状ピットの有無と形態を重視することにしたい。その理由は、この両者が炉の有無や柱穴の配置と密接な関係が認められると同時に、その住居跡の特徴をよく反映していると考えられるからである。

第1類：円形の平面形を基調とするものである。これらは、貯蔵穴状ピットの特徴によって、第1ａ類（楕円形でａタイプのもの）・第1b類（不整形でbタイプのもの）・第1ｃ類（設置されないもの）に細分される。第1a類は炉があり、主柱穴は方形状に4個配置されている。第1b類は炉が不明であるが、壁に沿って柱穴がならんでいる。第1ｃ類は貯蔵穴状ピットだけでなく、炉も設置されていない。また、柱穴も住居内には無く、竪穴の外に壁に沿ってならんでいる。
この点特異なものといえる。

第2類：平面形が隅丸長方形で、長円形と長方形の中間的な形態のものである。炉はあるが貯蔵穴状ピットは無い。柱穴は壁に沿ってならんでいる。

第3類：方形の平面形を基調とするものである。貯蔵穴状ピットの特徴によって、第3a類（隅丸長方形でaタイプのもの）・第3b類（隅丸長方形でbタイプのもの）・第3c類（不明もしくは設置されないもの）に細分される。これらにはいずれも炉がある。柱穴配置は判明するものと不明のものとがあるが、第3c類の第7住居跡だけが壁に沿ってならんでいるだけで、他は方形に4個配置されている。

以上の中で、第1類と第2類に分類された住居跡（平面形が円およびそれに近いもの）について、主柱穴の配置関係を検討すると第3住居跡を除き壁沿にならぶという共通性を見いだすことができる。また、第3類として分類された住居跡（平面形が方形）で、柱穴が判明したものについても、第7住居跡を除き方形に4個配されているという共通性を示している。このように、住居の平面形と主柱穴の配置には密接な関係があることがうかがえる。

次に貯蔵穴状ピットと主柱穴配置－住居平面形の関係について検討してみたい。貯蔵穴状ピットの存在しない住居跡は壁沿に柱穴が配置され、平面形も円形がそれに近い。貯蔵穴状ピットbタイプの住居跡は、第1住居跡を除き、いずれも主柱穴が方形に4個配置され（主柱穴の判明しているもの）、平面形も方形を基本としている。貯蔵穴状ピットaタイプの住居跡は主

柱穴が方形に4個配置されているが、平面形は歪んだ円形と正方形の両者がある。

このように貯蔵穴状ピットについても主柱穴配置や住居の平面形と密接な関係があることを理解できる。

第41表　古墳時代の住居跡の分類表

分類＼項目	平面形	炉	貯蔵穴状ピット	主柱穴配置	住居跡
第1類 a	楕円or円形	有	楕円形a	方形に4個配置	(第3住居跡)
第1類 b	楕円or円形	不明	不整形b	竪穴内の壁沿に配置	(第1住居跡)
第1類 c	楕円or円形	無	無	竪穴外の壁沿に配置	(第6住居跡)
第2類(c)	隅丸長方形	有	無	竪穴内の壁沿に配置	(第8住居跡)
第3類 a	方形	有	隅丸長方形a	方形に4個配置	(第11住居跡)
第3類 b	方形	有	隅丸長方形b	方形に4個配置	(第4・5・10住居跡)
第3類 c	方形	有	隅丸長方形b	不明	(第2住居跡)
	方形	有	不明	竪穴内の壁沿に配置	(第7住居跡)
	方形	有	不明	不明	(第9住居跡)

（住居廃絶後の状況－その1）第1～11住居跡の発掘調査において確認された層は、第42表の通りである。変成層とは他からの影響によってある層の一部が変化したものである。したがって、そのようにして認識された層は明確な層理面を形成せず、極めて漸移的な変化を示すことになる。これは、第6住居跡の床面を立ち割った時に確認された（第6住居跡の項を参照）が、床面上の有機物質が地山の火山灰層に浸透したための変化と考えられる。同様な状況は第11住居跡の第2層上部で確認された。このような変成層は、住居の構築や廃絶後のあり方と面接関連するものではない。

堆積層の中で、自然堆積層としたものは全ての住居跡においてみとめられ、住居廃絶後の状況を知る上で最も貴重なものである。竪穴の壁に近い部分から埋りはじめ、しだいに中央部に至るのが一般的である。その形態は将棋倒し状となる。

事故的堆積層としたものは、第5住居跡にみられるように、火事等によると推定されたものである（第5住居跡の項参照）。第5住居跡の第5層は床面上に厚く堆積しており、その中に多量の焼土や木炭を含んでいる。層の形態も将棋倒し状ではなく、水平層である。この第5層よりも上位の層は将棋倒し状で、自然堆積層と考えられる。

人為的堆積層とは、その形成に人間の行為が関係しているものである。これらは住居掘り方の埋土層・柱穴掘り方の埋土層・貼り床層・生活層・その他の人為的堆積層に細分される。住居の掘り方埋土層は、第5住居跡で特徴的に認められ、第2住居跡・第3住居跡・第4住居跡・第8住居跡・第11住居跡で確認された。柱穴掘り方の埋土層は柱痕と掘り方の間に認められる

もので、第3住居跡・第4住居跡・第6住居跡の一部・第11住居跡において確認された。貼り床層は住居の掘り方埋土層の上部に他から特別な粘土等を運んできて貼り床をつくっているものである。第5住居跡の中央部に非常に固い面をなすパミスを含んだ層が認められた。

以上、住居掘り方の埋土層・柱穴掘り方の埋土層・貼り床層はいずれも住居の構築に関するもので、その時の構築状況に規制されると考えられる。

生活層とは、生活を営んでいる間に有機物質等がたまって形成される層であるが、明瞭なものは確認できなかった。

その他の人為的堆積層とは、貯蔵穴状ピットの堆積層である。特に、bタイプの貯蔵穴状ピットは既に述べたように、層の細分が困難であったり、水平層である等人為的に埋められた可能性が強い。

第42表　西野田遺跡における遺構に関する層の分類――住居跡内堆積層を中心として、

（層の分類）				（層の特徴）
観察される層（攪乱層は除く）	変成層（他からの影響を受けて変化を起した層）			漸移的変化
	堆積層	自然堆積層（水・風等の自然的営力によるもの）		将棋倒し状
		事故的堆積層（火事などによるもの）		水平層
		人為的堆積層	堀り方埋土層	住居全域におよぶ堀り方埋土層	住居構築状態に規制される。
				柱穴の堀り方埋土層	柱穴形態に規制される。
			貼り床層（他から特別な粘土等を運び貼り床を形成するもの）	水平層
			生活層（生活を営なんでいる間に形成される層）	水平層
			その他の人為的堆積層（ピット等を人為的に埋めているもの）	層の細分が困難で細分された場合は、ブロック状もしくは水平層となる。

（住居廃絶後の状況－その2） 住居跡に直接または間接に関連する層とその特徴について（住居廃絶後の状況－その1）で、簡単に説明した。次に、このような層に対する認識を前提として、第1～11住居跡の廃絶後の状況を整理すると、第43表のようになる。もちろん、第5住居跡の貯蔵穴状ピットのように、住居使用途上において埋められたのか、住居廃絶直前に埋められたのか、はっきりしないものもある。しかし、ここではとりあえず、住居が廃絶され埋まりはじめる以前の段階で埋められたものと理解しておきたい。この意味で、bタイプの貯蔵穴状ピットは一連のものと考えることができる。

ところで、このようにして住居跡が埋っていく過程を整理し、さらに、その過程における遺物廃棄のあり方を検討すると次の3つのタイプがあることがわかる。

第43表　古墳時代の住居跡―その廃絶後の状況

項目／住居跡名	住居廃絶後の状況	堆積層の特徴	遺物の出土状況	タイプ
第1住居跡	P_1 が埋まる→壁沿に第3層(褐色土層)→中央部に第2層(暗褐色土層)→中央上部に第1層(黒褐色土層)	第3層→第1層は将棋倒し状の堆積。	P_1 上部に壺A。	III
第2住居跡	壁沿に第3層（極暗褐色土層）→第2層（暗褐色土層）→中央部に（黒褐色土層）	第3層→第1層は将棋倒し状の堆積。	第1～3層から遺物出土。床面にはない。	II
第3住居跡	壁沿と床面上に第3層（極暗褐色土層）→全域に第2層（暗褐色土層）→中央部に第1層（黒褐色土層）	第3層→第1層は将棋倒し状の堆積。第3層上面は一時的安定面。	P_1 下部に甕A，大破片。第1～第3層から遺物出土。	II
第4住居跡	P_1 が埋まる→壁沿に第3層（褐色土層）→全域に第2層（暗褐色土層）→中央部に第1層（黒褐色土層）	第3層→第1層は将棋倒し状の堆積。	P_1 上部・床面に遺物集中。第1～3層からも少量出土	III
第5住居跡	P_1 が埋まる→床面上に厚く第5層（暗赤褐色土層）→壁沿に第4層（褐色土層）→全域に第3層（暗褐色土層）→中央部に第2層（黒褐色土層）→中央上部に第1層(黒色土層)	第5層は水平堆積。第4層→第1層は将棋倒し状の堆積。	P_1 上部・床面に遺物集中。第2～4層からも少量出土。	III
第6住居跡	床面に第4層（暗褐色土層）→壁沿に第3層（暗褐色土層）→全域に第2層（黒褐色土層）→中央部に第1層（暗褐色土層）	第4層→第1層は将棋倒し状の堆積。第3層上面は一時的安定面。	第1・2層に遺物集中。第3層に土器細片が僅かに含まれる。床面・第4層にはない。	I
第7住居跡	壁沿に第3層（褐色土層）→西側に第2層（にぶい黄褐色土層）→中央部に第1層（暗褐色土層）	第3層→第1層は、将棋倒し状の堆積。第2層上面は一時的安定面。	第1層・第2層上面に遺物集中。床面にはない。	I
第8住居跡	炉直上周辺に第3層（暗赤褐色土層）→壁沿を中心に第2層（暗褐色土層）→中央部に第1a・b層（黒褐色土層）	第2層→第1層は将棋倒し状の堆積。第2層上面は、一時的安定面。	第1b層上面・第2層上面に遺物集中。床面にはない。	I
第9住居跡	壁付近に第2層（褐色土層）→全域に第1層（暗褐色土層）あぜの断面観察による。		第1層に僅少の土器細片。	II？
第10住居跡	P_1 が埋まる→削平のため不明		P_1 上部に遺物集中。	III
第11住居跡	壁沿に第3層（暗褐色土層）→全域に第2層（褐色土層）→中央部に第1層（黒褐色土層）	第3層→第1層は将棋倒し状の堆積。	P_1 下部に壺C口縁部・甕A_1？体部大破片。第2～3層から遺物出土。	II

第Ⅰタイプ：床面および住居内堆積土最下層には遺物がなく、ある程度埋った後の一時的安定面に集中している。その他の層にも遺物は含まれるが僅少で細片である。第6住居跡・第7住居跡・第8住居跡。

第Ⅱタイプ：床面には完形に近い土器はない。いずれも破片である。貯蔵穴状ピットaタイプの下部から比較的大きな土師器破片が出土する場合もある。堆積土全体から遺物が出土し、特に集中するような一時的安定面は原則としてない（第3住居跡のみ第3層上面に比較的集中）。
第2住居跡・第3住居跡・第9住居跡?・第11住居跡。

第Ⅲタイプ：床面や貯蔵穴状ピットの上部から完形の土師器（一部欠損しているものも含む）が数個体まとまって出土する。住居跡の堆積土からも遺物は出土するが、特に集中する一時的安定面はない。第1住居跡・第4住居跡・第5住居跡・第10住居跡。

以上、3つのタイプに分類された中で、第Ⅰタイプは遺物が集中して廃棄された時には、廃絶された住居跡がかなり埋ってしまっていたと考えられる。第Ⅲタイプは住居が廃絶され埋まりはじめる以前の段階で完形土器が廃棄されるか、置かれるかしたものと考えられる。第Ⅱタイプは両者の中間的なものと言える。この3つのタイプの存在は使用されていた住居が廃絶された後、しだいに埋っていく過程がすべて同じではなかったことを示している。

（住居の構造と廃絶後の状況）今まで、住居跡とその堆積土を検討することによって、住居の構造的な特徴と、廃絶後の状況にいくつかのタイプが存在することを指摘した。そして、構造的な特徴として7類に、廃絶後の状況（埋まり方）として3つのタイプに分類した。この両者における分類は直接相互に関連するものと考えるわけにはいかない。住居の構造と廃絶後の埋まり方は、別の次元の問題だからである。

ところが、第1～11住居跡の構造的な特徴と廃絶後の状況を検討すると、第Ⅲタイプの埋まり方を示しているのは、第1b類と第3h類のみであることに気がつく。さらに、第Ⅰタイプの埋まり方を示す住居跡は第1c類・第2（c）類・3c類なのである。つまり、第Ⅲタイプの埋まり方を示しているのは、bタイプの貯蔵穴状ピットが設置されているものに限られ、第Ⅰタイプの埋まり方をしているのは、貯蔵穴状ピットの設置されないもの（不明のものも含まれる）に限られているのである。また、第Ⅱタイプの埋まり方をしている住居跡の場合は貯蔵穴状ピットのbタイプ（第3b類）、aタイプのもの（第1a類・第3a類）、さらには不明なもの（第3c類?）等が含まれている。

これは、極めて興味深い現象であるが、その理由について今は立ち入らないことにして、その事実だけ確認しておきたい。

土師器の分類と住居跡の年代

（土師器の分類） 第1～11住居跡から出土した土師器は基本的な器形として、高坏・器台・坏・壺・甕・甑の6種に分類される。これらは、各器種ごとの細かな器形上の相違や成形・調整技法の違いによってさらに細分される。

高坏：高坏は胸部の形態によって3種に細分される。脚部が中実の柱状部と円錐台状の裾部からなるものを高坏Ａとし、さらに柱状部の下端に凹みのあるものを高坏Ｂとする。高坏Ａ・高坏Ｂについては成形方法をはっきり観察することはできないが、坏部・脚柱状部・脚裾部を別々に作成して接合しているものと考えられる。

脚部全体が円錐台状のものを高坏Ｃとする。高坏Ｃは脚上半部の内面を指で縦方向に調整し、その後下半部を粘土帯の積み上げによってつくりあげている。

高坏の中で坏部と脚部の関係が判明するものは2個体ある。高坏Ａの坏部は外面に段がないが、高坏Ｂの坏部には外面に段がある。しかし、これが坏部と脚部の関係としては一般的なものかどうかは資料が少ないため明らかにすることができない。高坏Ｃについては不明である。

器台：器台は器形の上で3種に細分される。受け部と脚部が上・下に開くものを器台Ａとし、受け部と脚部の間に短い柱状部をもつものを器台Ｂとする。両者とも中心部に貫通孔がある。器台Ａの脚部内面は指で縦方向に調整されているが、器台Ｂの脚部内面は横方向の刷毛目調整が行なわれている。

皿状の受け部と幾分膨らみ気味の円錐台状をした脚部からなるものを器台Ｃとする。器台Ｃは中心部に貫通孔がなく、この点器台Ａ・Ｂと異る。器台Ｃは脚部の成形および調整技法のちがいによって、さらに次の2種に細分される。脚部内面のほとんどを指で縦方向に調整した後、幅のせまい粘土帯を一段継ぎたして裾部を成形するもの。脚上半部の内面を指で縦方向に調整した後、下半部に粘土帯を数段継ぎたして裾部を成形するもの。前者を器台C_1後者を器台C_2とする。

これらの器台は器面の剥落が著しく、最終的な調整の観察が困難であった。1点だけ脚部外面に刷毛目調整の認められる器台C_2があったが、他のものについては不明である。

坏：坏はいずれも体部に屈曲があり、底部が丸底状をしている。最終的な調整の仕方のちがいによって次の2種に細分される。器内外面ともに刷毛目調整が行なわれているものを坏A_1とする。刷毛目による調整は器外面だけで、内面が横ナデされているものを坏A_2とする。

壺：壺は口縁部および体部の特徴によって次の5種に細分される。

単純口縁のものを壺Ａとする。球形の体部を持ち、口縁部は軽く外反する。頚部および口縁部の内外面と体部外面に刷毛目調整が行なわれているのが特徴である。

複合口縁であるが口縁部幅のせまいものを壺Ｂとする。複合口縁を粘土帯の積み上げによっ

てつくっているのが特徴である。口縁部内外面と嶺部外面は刷毛目調整が行なわれている。体部の状態は明らかでない。

複合口縁で口縁部幅の広いものを壺Ｃとする。壺Ｃの特徴は幅の広い口縁部下端に粘土帯を貼りつけることなよって複合口縁をつくっていることである。器面調整としての刷毛目が明瞭に観察されるのは頚部の外面だけであるが、ヘラミがキされた口縁部内外面にも部分的ながら刷毛目痕が残されている。体部は口縁部や頚部との関係が直接判明する資料がないため明確にできないが、球形をなすと考えられる。

口縁部は不明であるが体部がつぶれた球形をなす中形のものを壺Ｄ、小形のものを壺Ｅとする。壺ＤとＥは器形の上で大差はない。底部は丸底風の平底で浅い凹みをもつのが特徴である。器外面はいずれも剥落が著しく、最終的な調整技法については不明である。

甕：甕は器形の上甕Ａ、甕Ｂ、甕Ｃに分類される。

甕Ａは口縁部が軽く外反し、最大径が体部中央の僅か下にある。この甕Ａは器面調整のちがいによって次の2種に細分される。内面･外面の両方に刷毛目調整の認められるもの（甕A_1）と内面にのみ刷毛目調整の痕跡を残し外面は横ナデかヘラミガキされているもの（甕A_2）である。

甕Ｂは口縁部が軽く外反し、体部が球形をした小形の甕である。頚部および体部外面は刷毛目調整が行なわれている。

甕Ｃは台付甕であるが脚台の部分が1点発見されているだけなので、全体的な特徴は明らかでない。発見された脚台は外面に縦方向の刷毛目、内面に横方向の刷毛目が観察される。

甑:同一個体で口縁～底部まで存在するものはないが、破片資料を総合すると単孔の鉢形のものと考えられる。口縁部は輪積み技法と同様な方法で複合口縁がつくられ、それを指頭でオサエて調整している。体部外面には縦方向の刷毛目調整が認められるが、内面は器面が荒れているため観察が困難である（1点だけ内面に部分的ながら刷毛目の痕跡を残すものがあった）。

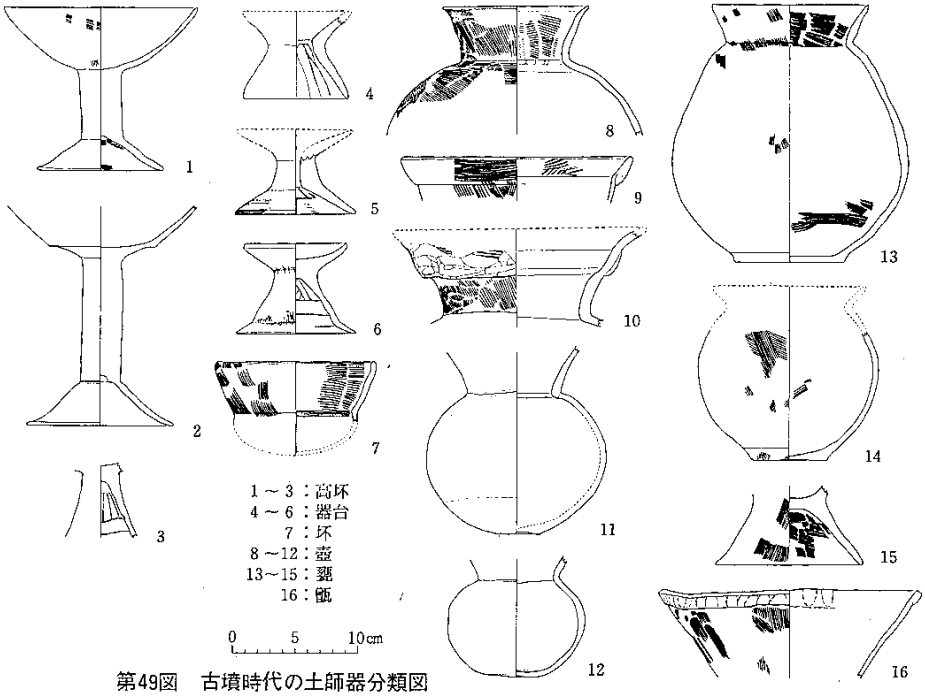
以上によって、西野田遺跡第1～11住居跡出土の土師器は基本的な器形として6種類、細分された器形として16種類、さらにその中での成形、調整技法のちがいによって19種類に分類されたことになる。この19種類の中で器面観察が困難であった高坏･器台の大部分と壺Ｄ･壺Ｅを除くといずれも刷毛目調整が行なわれているという共通点を見い出すことができる。

（住居跡における土師器の出土状態）19種類に細分された土師器の各住居跡における出土状態をまとめると第45表･第46表のようになる。尚、この表では体部のみの破片は一切省いてある。また、個体数は口縁部および底部によって算出したものであるが、両者が同一個体の場合も考えられるので、量的な問題は一つの傾向として理解するに留めたい。

次に分類された各々の土師器がどのような関係にあるか検討してみたい。まず、第5住居

第44表　古墳時代の土師器分類表（第Ⅰ～Ⅱ住居跡出土土師器）

高坏	高坏A	（脚部＝中実の柱状部＋裾部。）	〔第49図１〕
	高坏B	（脚部＝中実の柱状部＋裾部。柱状部下端に凹みがある。）	〔第49図２〕
	高坏C	（裾の広がる円錐台状の脚部。）	〔第49図３〕
器台	器台A	（貫通孔がある。柱状部のないもの。）	〔第49図４〕
	器台B	（貫通孔がある。柱状部があるもの。）	〔第49図５〕
	器台C	（貫通孔がない。皿状の受け部と円錐台状の脚部からなる。）	〔第49図６〕
	器台C_1	（脚裾部を粘土帯の継ぎたしによって成形。）	
	器台C_2	（脚部下半を粘土帯の継ぎたしによって成形。）	
坏	坏A_1	（体部に屈曲があり丸底状。内・外面に刷毛目調整。）	〔第49図７〕
	坏A_2	（体部に屈曲があり丸底状。内面に横ナデ、外面に刷毛目調整。）	
甕	壺A	（単純口縁。体部球形の大形壺。）	〔第49図８〕
	壺B	（複合口縁。口縁部幅のせまい大形壺。体部不明であるが球形と推定される。）	〔第49図９〕
	壺C	（複合口縁。口縁部幅の広い大形壺。体部不明であるが球形と推定される。）	〔第49図10〕
	壺D	（口縁部不明。体部がつぶれた球形の中形壺。）	〔第49図11〕
	壺E	（口縁部不明。体部がつぶれた球形の小形壺。）	〔第49図12〕
壺	甕A	（最大径が体部中央より僅か下にある。）	〔第49図13〕
		甕A_1（内・外面に刷毛目調整。）	
		甕A_2（内面に刷毛目調整。）	
	甕B	（最大径が体部中央にある小形甕。）	〔第49図14〕
	甕C	（台付甕。）	〔第49図15〕
甑	甑A	（複合口縁の鉢形甑。）	〔第49図16〕



第49図　古墳時代の土師器分類図

跡の堆積土第5層・床面・貯蔵穴状ピットから出土した土師器は極めて限定された年代幅のものと考えられた（第5住居跡および住居廃絶後の状況その1、その2参照）。したがって、ある限られた年代幅における土師器の組合せとして理解することができる。このような観点で、同様に評価できるものとして第4住居跡の床面と貯蔵穴状ピットの土師器、第10住居跡の貯蔵穴状ピットの土師器がある。これらの土師器は器種の組み合せという点ではそれぞれ相違を示すが、その中にお互に共通するものを含んでいる。これらを共通する器種によってまとめながら総合すると次のような組合せとなる。高坏A・高坏B・高坏C・器台A・器台C_1・器台C_2・壺C・壺D・壺E・甕A_1・甕A_{20}これは一時期の土師器の組合せとしては最も安定したものと言える。

しかし、ここで共伴関係が判明したものは坏や甑等の器種を欠いている。そこで、同一層位面および同一層位から発見された土師器について検討を加えたい。これらは床面や貯蔵穴状ピット出土の土師器程ではないが、限定された年代幅の遺物として重要な存在と考えられる。第3住居跡の第2層と第3層上面から高坏C・器台B・坏A_1・壺C・甕A_1・甕A_2が出土している。これらの土師器は第3層堆積後から第1層堆積以前のものとして一括される。第2住居跡の第2層からは高坏C・坏A_2・甕A、甑A・第5住居跡の第4層からは壺D・甕A_1?・甕C・甑A、第11住居跡第2層からは坏A_2・壺B等が出土している。これらを相互に共通する遺物をなかだちとしてまとめると高坏C・器台B・坏A_1・坏A_2・壺B・壺C・壺D・甕A_1・甕A_2・甕B・甕C・甑Aとなる。

床面および貯蔵穴状ピット出土土師器と層位面・層位中出土土師器を比較すると高坏C・壺C・壺D・甕A_1・甕A_2が相互に共通する。このことから、多少の誤差は含まれるかも知れないが、同一年代幅の中で理解することができるものとして高坏A・高坏B・高坏C・器台A・器台B・器台C_1・器台C_2・坏A_1・坏A_2・壺B・壺C・壺D・壺E・甕A_1、甕A_2・甕B・甕C・甑Aを指摘することができる。これらは壺Aを除いたすべての器種である。したがって、器種の欠損という現象は年代幅に関する誤差の範囲を多少大きくとることによってほぼ解消されたことになる。

（土師器の年代的位置）第1～11住居跡出土土師器は器形・成形技法・調整技法の観察と、出土状況の検討によって限られた年代的幅のものと判断された。もちろん、その証明において個体数があまり多くないということや誤差の範囲について問題を残してはいる。それは壺Aが他の壺および器種との共伴関係を指摘できなかったことに特徴的である。だが、壺Aは体部が球形をなすという点、調整に刷毛目を多用しているという点において他の壺や器種と共通点を見いだすことができる。従って、僅かの誤差を除けば他の年代的に大きく異なるものとは考

第45表　住居跡出土土師器一覧Ⅰ（第1～11住居跡）

住居跡・層位	器形	図	個体数
(第1住居跡)			
Pit 1	壺 A	第 4 図	1
(第2住居跡)			
第1層	甕 A	頸部片	1
	甑 A	第 6 図 3	1
第2層	高坏C	脚部片	1
	坏 A_2	第 6 図 1	1
	壺 ?	頸部	1
	甕 A_1	口縁部	1
	甕 A ?	底部	1
	甑 A	第 6 図 4	1
第3層	甕 B	第 6 図 2	1
(第3住居跡)			
第1層	甕 A_1	頸部	2
	甕 A_2	頸部	1
	甕 A ?	底部	2
第2層	高坏C	脚上部	1
	器台B	第 8 図 2	1
	坏 A	口縁部	1
	壺 C ?	頸～底部	1
	甕 A_1	口縁部	2
	甕 A	口縁部	1
	甕 ?	底部	1
第3層上面	高坏C	第 8 図 1	1
	坏 A_1	第 8 図 3	1
	壺 C	口縁～体部	1
	壺 ?	口縁～肩部	1
	甕 A_1	第 8 図 5	1
	甕 A_1	口縁部	4
	甕 A_2	口縁部	1
第3層上面	甕 ?	底部	4
Pit 1	壺 C ?	頸部	1
	甕 A_2	第 8 図 4	1
	甕 A_2	口縁～体部	2
Pit 3	壺 C ?	頸～体部	1
(第4住居跡)			
第2層	器台?	脚裾部	1
	壺 ?	頸部	1
	甕 A	頸部	2
	甕 A	底部	2
床面	器 C_2	第10図 2	1
	壺 C ?	口縁～体部	2
	小形手捏ね土器	第10図 5	1
Pit 1	器台C_1	第10図 1	1
	器台C_2	第10図 3	1
	甕 A_1	第10図 4	1
	甕 A_1	口縁～底部	1
	小形手捏ね土器	第10図 6	1
(第5住居跡)			
第2層	甕 A ?	底部	1
第3層	高坏C	脚部	1
第4層	壺 ?	口縁部	1
	壺 D	口縁～底部	2
	甕 A_1 ?	口縁～底部	2
	甕 A	口縁～体部	1
	甕 A ?	口縁～底部	2
	甕 A ?	底部	2
	甕 C	第12図 6	1
	甑 A	第12図 7	1
	甑 A	口縁部	1

第46表　住居跡・出土土師器一覧Ⅱ（第1～11住居跡）

住居跡・層位	器　形	図	個体数
第5層	壺　C？	頸～肩部	1
	甕　A_2	頸　部	1
床　面	壺　C	第12図3	1
	壺　E	第12図5	1
Pit　1	高坏A	第12図1	1
	高坏	坏　部	2
	器台A	第12図2	1
	壺　D	第12図4	1
	甕　A_1	体～底部	1
(第6住居跡)			
第1層	高坏A	第14図1	1
	高坏C	脚部上端	1
	壺or甕	底　部	1
	甕　A	頸　部	1
第2層	甕　A	頸　部	1
(第7住居跡)			
第1層	甕　A_1	口縁～体部	1
	甕　A_2	頸　部	1
	甕　A	口縁部	1
第2層	甕　A_1	口縁部	1
	甕　A_1	底　部	1
	甕　A	口縁部	3
(第8住居路)			
第1層	高坏	坏　部	2
	高坏B	脚　部	1

住居跡・層位	器　形	図	個体数
第1層	高坏C	脚　部	1
	器台	脚　部	1
	甕　A_1	口縁～頸部	1
	甕　A_1？	口縁・頸部	3
	甕　A	口縁～頸部	2
	甕　A？	底　部	1
第2層上面	甕　A_1	口縁部	1
	甕　A_2	口縁部	1
	甕　A？	口縁部	1
第2層	甕　A	頸　部	1
(第9住居跡)			
堆積上	壺　E？	口縁部	1
(第10住居跡)			
Pit　1第1層	小形手捏ね土器	第20図3・4	2
Pit　1第2層	高坏B	第20図1	1
	高坏C	第20図2	1
	甕　A_1	体～底部	1
(第11住居跡)			
第2層	坏　A_2	第22図1	1
	壺　B	第22図2	1
第3層	壺or甕	底　部	1
	壺or甑	複合口縁	1
	甕　B	第22図4	1
床　面	壺or甑	複合口縁	1
Pit　1	壺　C	第22図3	1

えられない。

次にこれらの土師器が他の遺跡でどのようなあり方を示しているか検討してみたい。

宮城県下において西野田遺跡第1～11住居跡出土土師器に類似するものとして大橋遺跡（藤沼邦彦:1971）の資料をあげることができる。両者に共通するもとのして、壺・坏・甕等がある。大橋遺跡の壺は複合口縁で外面に段がある。また、刷毛目調整後ヘラミガキによって刷毛目を消している等、壺Cと器形・成形および調整技法において共通点を見い出すことができる。しかし、大橋遺跡の壺には頚部つけ根に刻目のある隆帯がめぐっているが、壺Cにはそれがない点異なる。大橋遺跡の坏には器形および調整技法の点で坏A_2と等しいものがある。坏A_1も基本的にはその中に含めて理解される。甕も器形および調整技法において共通する点が多い。大橋遺跡の資料と大きく異なるものとして、高坏・器台がある。高坏Cおよび器台C_1・C_2の脚部は円錐台状を示す点大橋遺跡と類似するが、輪積痕の観察される点で顕著なちがいが認められる。また、大橋遺跡の器台には受け部から脚部に通じる貫通孔があるが、器台C_1・C_2にはそれが認められない。

この他、西野田遺跡に存在するもので、大橋遺跡と比較することができないもの（未報告のもの）として、高坏A・高坏B・器台A・器台B・壺A・壺B・壺D・壷E・甕B?・甕C・甑Aがある。これらについては大橋遺跡調査資料の整理終了後、新たに検討を行なう必要がある。

以上、西野田遺跡第1～11住居跡と大橋遺跡出土土師器について現段階での検討を行なった。その結果、各々の器形と成形・調整技法そして器形の組合わせについて共通する点が多いことを確認した。もちろん、おたがいに細かな器形上の特徴や成形・調整技法の差、器形の欠損現象はある。しかし、それは古墳時代の土師器の中で南小泉式以前のものという点で一致すると見てよい。すなわち、塩釜式（氏家:1957）の範囲に包括することによって先に述べた共伴関係における誤差も解消されると思われる。そして、西野田遺跡の高坏や器台に円窓がないこと、壺Cの頚部に刻み目のある隆帯がめぐっていない点等は塩釜式内部の新しい要素として理解しておきたい。

なお、西野田遺跡に存在するもので、大橋遺跡調査資料と比較することができなかったものについて類例を指摘しておきたい。

高坏A・高坏Bに類似するものは福島県江添十九壇古墳群の第1号墳出土遺物に認められる。さらに、第1号墳および第3号墳からは壺D・Eに類似する壺が出土しており、器面に刷目調整が行なわれている（中川・中村・大川原・穴沢・小滝:1973）。

器台Bに類似するものは埼玉県五領遺跡第13号住居跡（杉原荘介:1972）や諏訪山遺跡第40号住居跡（増田逸郎:1971）から出土している。器台Aと同一と考えられるものは明確でないが、近似したものは各地に多い。

器台Cは受け部と脚部の間に貫通孔がない。貫通孔のあるものは大橋遺跡をはじめとして南小泉式および和泉式以前の遺跡にかなり普遍的である。しかし、貫通孔がないものになると類例は少なくなる。脚部に円窓のないものとなるとさらに少ない。現在、石田川遺跡第1種土器の器台（尾崎・今井・松島：1968）が西野田遺跡の器台C_1および器台C_2に最も近いものと考えられる。

壺Aは、他の器種との共伴関係をとらえることができなかったが、類似したものとして埼玉県入山遺跡（増田逸郎：1969）の方形周溝墓発見の壺形土器をあげることができる。

甕Cは西野田遺跡において1点確認された（脚台の部分）だけであるが、類例は多い。南小泉遺跡（氏家：1957）をはじめとし、岩切鴻ノ巣遺跡（本書収録）、福島県中島遺跡（福島県：1964）等で出土している。これらは埼玉県五領遺跡（台地研究会：1971、杉原荘介：1972）でも特徴的な存在である。

甑A類に類似したものは南小泉遺跡?（氏家：1957）、福島県中島遺跡（氏家：1957、福島県：1964）、千葉県中里遺跡（下津谷：1972）に認められる。いづれも複合口縁の鉢形で、南小泉例を除いて刷毛目調整が明瞭に行なわれている。

以上、大橋遺跡調査資料の中に確認できなかったものについて類例を指摘した。これらは、いづれも南小泉式や和泉式以前のものと共通する。西野田遺跡第1～11住居跡出土土師器は先にも述べたように塩釜式の範ちゅうに含めて理解するのが妥当と思われる。そして、住居跡での出土状況による器種の組合せにまつわる誤差は塩釜式の内部におけるちがいとして理解されるべきものと考えられる。

（住居跡の年代）西野田遺跡第1～11住居跡出土土師器は塩釜式として理解された。それでは、これらの住居跡はすべて塩釜式期のものなのであろうか。この点について検討してみたい。

先に、住居跡堆積土の分類と遺物の出土状況について検討し、住居廃絶後の状況として3つのタイプが存在することを指摘した。3つのタイプのうち第Ⅲタイプとして分類された第4住居跡や第5住居跡では床面や貯蔵穴状ピット上部から完形に近い土師器がまとまって発見されている。これらの土師器は住居が廃絶され埋まりはじめる以前の段階に残されたものであるから住居使用最終時の年代を示すことになる。従って、第Ⅲタイプの埋まり方をしている住居跡はその年代的位置を塩釜式期に求めることができる。

ところが、第Ⅰタイプおよび第Ⅱタイプの埋まり方をしている住居跡の場合このようにはいかない。第Ⅰタイプや第Ⅱタイプの住居跡の床面には埋まりはじめる前に残されたものと思われる完形土器はない。いずれも埋まりはじめてから廃棄されたり流れ込んだりしたものが多い。
従って、出土土器の示す年代は住居が廃絶されてから埋まりきるまでのものと考えられる。特に第Ⅰタイプの住居跡の場合、塩釜式土師器が集中して廃棄された時には既に住居跡はかなり

埋まってしまっていたと考えなければならない。第Ⅱタイプの住居跡の場合は床面に完形土器こそないが初期的な堆積層から大きな破片が出土していることから、住居廃絶後にこれらの土師器が廃棄されたり流入したと考えられる。

以上のように、住居跡から発見された土師器が塩釜式期のものであっても、住居そのものの営なまれた時期については同一視することができない。この中で時期を明確に指摘できたのは第Ⅲタイプの住居跡のみである。そして、第Ⅱタイプの住居跡は塩釜式期に埋まりはじめ、第Ⅰタイプの住居跡は塩釜式期にはかなり埋まってしまっていると考えられるのである。すると、第Ⅰタイプや第Ⅱタイプの埋まり方を示している住居跡が営まれていた時期は第Ⅲタイプの埋まり方を示している住居跡よりも古いことになる。第Ⅰタイプと第Ⅱタイプの住居跡では第Ⅰタイプの住居跡の方が古いと言える。このことが正しいとすれば、西野田遺跡の第1～11住居跡は第1タイプの住居跡→第Ⅱタイプの住居跡→第Ⅲタイプの住居跡と時間的に移行した可能性があることになる。

しかし、このような推論には問題となる点がある。第1に土師器の編年において塩釜式の土師器が製作されて使用された時期がどの程度の年代幅をもつかということである。西野田遺跡において最も安定した共伴関係を指摘できるものに高坏A・高坏B・高坏C・器台A・器台C_1・器台C_2・壺C・壺D・壺E・甕A_1・甕A_2がある。これらは大橋遺跡出土資料と同様に南小泉式土器以前のもの（塩釜式の土師器）と理解されながら、その中で幾つかの相違する特徴を併せもっていたのである。これを塩釜式の土師器の細分された姿であると早急に結論ずけることには未だ無理がある。この中には既に述べたように坏や甑等の器種が欠損しているからである（甑については大橋遺跡でも不明）。そこで、器種の欠損現象を補なうために住居廃絶後の堆積層において共伴関係を示す資料を援用するという作業を行なった。この援用は器種の欠損を補なうという積極的な面を持ちながら、他方で住居跡が埋まる過程で流れ込んだ幾分古い時期の土師器（当時の地表面に散乱していたと思われるもの）も含ませてしまう可能性を内包していた。

このような方法によって把握された器種の組合せは床面や貯蔵穴状ピット出土土師器によるものよりも年代的幅を大きくとらねばならなくなるのである。したがって、塩釜式として一括されたものを前提として住居廃絶後の埋まり方の相違によって新旧関係を求める方法は未だ検討の余地を残している。ただ現実的には、一時期における安定した器種の組合せと理解されたのは器形・成形技法の点で他のものより新しい要素をもつものである。

第2に第Ⅲタイプとした第1住居跡については、P_1の上部から発見された壺Aが他の器種との共伴関係をまったくとらえられなかったことから他の第Ⅲタイプの住居跡と同一に扱うことができるのかという問題である。これは第1の問題に通ずる他に、住居跡の平面形が長円形で

ある等、住居の構造という面でも検討の余地を残している。

以上のような状況を考えると、第1～11住居跡の年代に関して結論的には次のように言いうるに過ぎない。

1.　住居跡の時期を塩釜式期として明確に指摘できるのは第Ⅲタイプの埋まり方をしているのである。その中で、第1住居跡については他の住居跡に較べ若干の時間的幅を考慮する必要がある。

2.　第Ⅰ・第Ⅱタイプの埋まり方をしている住居跡については確証に欠けるが、第Ⅲタイプの埋まり方をしている住居跡よりも逆上る可能性がある。第Ⅰタイプと第Ⅱタイプの埋まり方をしている住居跡については前者方が逆上る可能性がある。

3. 第Ⅰ～Ⅲタイプの埋まり方を示す11軒の住居跡はいずれも南小泉式期以前において埋まり切ったものと推定される。

2. 円形周溝

（形態的特徴）今回発見された2基の円形周溝は、上部がかなり削られていたため、その性格を十分に検討することができなかった。しかし幅40～100㎝の溝（底面の幅）が直径10mを越す大きさで、円形にめぐっていたことは興味深い事実である。溝底のレベルを計測した所、高い部分と低い部分では第1円形周溝で100㎝、第2円形周溝で80㎝の差があった。このことから、円形の周溝は水をたたえるには適さず、他の空間から区画するという役割を果す程度のものであったと思われる。溝内の堆積土を検討しても水がたまっていた痕跡はなかった。溝が掘られた時の土が封土として円形台状部に盛られたか、否かについては削られてしまっているので不明であった。

第1円形周溝の台状部には土**壙**があるが極めて浅い。掘られた当初、どの程度の深さであったか不明であるが、かなり削られて痕跡的に残っていたものと思われる。

（円形周溝の年代）次に、この円形周溝の時期を検討してみたい。しかし、残念なことに周溝や土**壙**の中から供献された状態を示す土器は1点も検出されていない。発見された土器は溝が埋まる段階で流入したと考えられる弥生土器と土師器（塩釜式）にすぎない。そのため、正確な時期決定を行なうことは困難である。ただ、周溝内から発見されている、もっとも新しい土器が塩釜式の土師器であることから、塩釜式期には、まだ周溝が埋まり切っていなかったっことがわかる。さらに、第2円形周溝は平安時代の第14住居跡に切られているから、平安時代以前のものと考えて誤りはない。また、西野田遺跡からは、南小泉式から国分寺下層式の土師器は現在発見されていない。

以上のような理由から、2基の円形周溝は塩釜式期か、それ以前と考えるのが妥当でないか

と思われる。そして、例え弥生時代まで逆のばったとしても、塩釜式期には未だ周溝は埋り切っていなかったという事実から察して、塩釜式期とさして時間的にへだたるものではないであろう。

（円形周溝の性格）ところで、このような円形周溝は、東北地方では最初の発見である。現在、全国的にみても類例はあまり多くなさそうである。埼玉県西台遺跡（塩野：1969）の円形周溝は直径12mで、溝内および構外から鬼高Ⅱ期の土師器が出土しているというが、実測図が不明のため西野田遺跡のものと比較することができない。西野田遺跡の円形周溝と近似するものとしては、静岡県神崎遺跡の例（静岡県教委：1972）がある。直径10.5mの正円に近いもので、幅1m内外の溝には途切れがない。時期は土師器の古い段階のものと考えられているが、その性格は十分明らかでない。墓としての評価が与えられているものに兵庫県川島遺跡（櫃本他：1971）の円形周溝墓がある。溝にかこまれた部分は南北6.8m・東西6.1mでその中央部に長方形の土坑があり主体部と考えられている。周溝の底から第Ⅳ様式の壺形土器が発見されていることから、弥生時代中期後葉に位置づけられるている。

西野田遺跡の場合、第1円形周溝から長円形の土坑が発見されている。この土坑を川島遺跡例と同様に周溝墓の主体部と理解すべきかどうか早急に明言することはできない。東北地方における類例の蓄積を待って、慎重な検討を加えたいと思う。もちろん、それは周溝墓としての可能性を否定するものではない。

3．平安時代の住居跡とその出土遺物

平安時代と推定される住居跡は第12～13住居跡である。これらの住居跡についてその形態的特徴、出土遺物等について総括的な検討を加えてみたい。

住居（跡）の構造と廃絶後の状態

（平面形）いずれも住居跡全体が残っていたわけでないので、平面形については残存部分から推定する他はない。第12住居跡は残存している壁と住居の掘り方の範囲から多少歪んではいるが隅丸方形をなすものと考えられる。第13・14住居跡は北側に残っていた壁と主柱穴配置から長方形をなすものと考えられる。このように、第12～14住居跡は平面形として隅丸方形のものと長方形のものにわけられる。この平面形によるちがいは大きさにおいても認められる。すなわち、隅丸方形の第12住居跡は各辺の長さが3m前後と推定されるが、長方形の第13・14住居跡は長軸が6 m以上（長軸は推定された長さ）で短軸も4m以上と考えられるのである。

（主柱穴とその配置）主柱穴の配置関係が判明したのは第13・14住居跡である。両者とも、長方形に4～5個の柱穴が配置されている。第13居跡は長方形に5個のピットがならび、その

うち3つのピットにおいて柱痕と掘り方を識別することができた。第14住居跡の場合掘り方と柱痕の識別はできなかったが、ピットの深さや配列の規則正しさ（長方形をなす）から柱穴と推定された。

このように、平面形が長方形で規模の大きい第13・14住居跡では主柱穴の配置関係が判明したが、隅丸方形で規模の小さい第12住居跡ではこの点不明である。第12住居跡では柱痕と掘り方を識別できたピットが1個あるが、組合うものがない。

（炉またはカマドについて）第12～18住居跡はいずれも南斜面につくられている。したがって、壁は北側が高い。第12住居跡は、この高い部分の壁を掘り抜いてカマドを構築している。
このカマドは燃焼部の他に煙道と煙り出し部を備えたもので、燃焼部中央には石を立てて支脚としている。

この点、第13・14住居跡は不明なことが多い。第13住居跡の場合、東壁に接する床面が皿状に凹んでいて固く焼けている。その上に焼土が厚く堆積していたが、カマドの構築されていた痕跡（上部構造につらなる袖状の部分）を確認することはできなかった。

（その他の施設）第12住居跡は住居の掘り方が明瞭に観察され、貼り床も認められる。ところが第13・14住居跡は貼り床が認められず、住居の掘り方も明瞭でない。このように両者には住居の構築に関しても異なる点がある。

（住居跡の2つの形態）以上のように平安時代と考えられる住居跡は3軒発見されただけであるが、形態的に2つの種類のあることが判明した。

第1類：平面形が隅丸方形で主柱穴配意が不明もの。北壁に掘り抜き式のカマドがあり床面は明瞭な貼り床である。第12住居跡。

第2類：平面形が長方形で規模も大きく、主柱穴は長方形に配置されている。明確なカマドはなく、住居の掘り方も不明瞭である。第13住居跡・第14住居跡。

第47　平安時代の住居跡一覧表

項目／住居跡名	位置	遺構確認面	平面形	大きさ（床面積）	方向	床面構築	主柱穴の配置	カマドおよびその他の施設
第12住居跡	ＤＯ－９区	表土下火山灰層	隅丸方形（推定）	2.85×3.00m（5.88㎡）（推定）	北北西－南南東	床面にはにぶい黄褐色・シルト質粘土の貼床あり	不明	掘抜き式のカマド。燃焼部・煙道部・煙出し部にわかれる。燃焼部床面には石の支脚がある。
第13住居跡	ＥＪ・Ｋ－18区	表土下火山灰層	長方形（推定）	6.3(推定)×4.4m（26.00㎡）（推定）	南－北	床面下の掘り方不明	長方形に５個配置	東壁に接する床面に、皿状に凹んだ焼土面がある。この他、床面の残っていた部分には壁沿に周溝があった。
第14住居跡	ＥＨ－18区	表土下火山灰層	長方形（推定）	7.70(推定)×5.40m（38.00㎡）（推定）	南－北	床面下の掘り方不明瞭	長方形に４個配置	不明。

（住居廃絶後の状況）第12～14住居跡は後世の撹乱や削平を受けているため、住居廃絶後の全

体的な様相を的確に把握することはできなかった。しかし、住居跡の北側$^1/_2$～$^1/_3$については堆積土が残っており、住居廃絶後の埋り方に関してある程度知ることができた。いずれも、基本的には将棋倒し状の堆積が認められ、自然の営力によって埋ったものと思われる。第12住居跡における褐色粘土質シルトのブロックもその中で理解されるものと考えられる。

住居跡の年代を考える時、第12住居跡のカマドおよび床面出土の土器や第13住居跡のカマド?からまとまって発見された土器は重要な資料となる。現在の段階で、これらの土器が住居使用時のものが遺棄されたのか、住居廃絶に伴ない廃棄されたのか、また住居廃絶後に廃棄されたのか、明言することはできない。しかし、出土状態から推定すると（住居廃絶後の自然堆積層の下位にある）、これらの土器が住居内に残されたのは住居廃絶時とはなはだしく隔だたるものとは考えられない。

同様に、第14住居跡P_2出土土器も住居の壁に沿ったピットの床面から発見されていることから住居廃絶の時点に近いものと考えられる。

第48表　平安時代の住居跡――その廃絶後の状況

項目／住居跡名	住居廃絶後の状況	堆積層の特徴	遺物の出土状況
第12住居跡	東壁に第４層(暗褐色土層)――→中央部床面から東壁近辺に第３層(黒褐色土層)――→東壁および北壁の一部を除き第２層(暗褐色土層)――→中央部に第１層(黒褐色土層)	第４層――→第１層は原則的に将棋倒し状の堆積。	カマドの燃焼部・煙道部・煙出し部から土師器坏・甕・須恵器等まとまって出土
第13住居跡	住居南側半分は削られてしまっている。壁沿に第３層（暗褐色土層）――→西側に厚く第２層（黒褐色土層）――→東側に厚く第１層（暗褐色土層）	第３層――→第１層は将棋倒し状の堆積。	遺物がまとまって出土したのはカマド？の崩壊土層からである。
第14住居跡	住居南側弱は削られてしまっている。壁沿に第３層（暗褐色土層）――→壁付近から中央部付近に第２層（明るい暗褐色土層）――→中央部に第１層（黒褐色土層）	第３層――→第１層は将棋倒し状の堆積。	特に遺物の集中する部分はない。P_2底面から完形の坏出土。

出土土器の分類と住居跡の年代

（土器の分類） 第12～14住居跡出土土器は数点の弥生土器細片を除き、すべて製作の段階でロクロが使用されている。

土師器

坏:坏はいずれも器高が口縁部径の$^1/_2$以下である。口縁部は僅かに内彎気味であるが、口縁端の外反するものもある。ロクロから切離された後、すべて器内面がヘラミガキと黒色処理されている。これらは切離し後、底部周辺に再調整が行なわれるもの（第1類）とそのままのもの（第2類）に分類される。

第1類は手持ちのヘラケズリによって再調整されているものであるが、それが体部下端と底部全面におよぶもの（第1ａ類）、底部全面のもの（第1b類）、底部周縁だけのもの（第1c類）に細

分される。第1ａ類および第1b類はロクロからの切離しが不明であるが、第1ｃ類は回転糸切りである。

第2類はヘラケズリ等の再調整は行なわれていない。ロクロからの切離しは回転糸切りである。

高台付坏:高台付坏は破片のみで全体的な形はわからない。底部破片の中には回転糸切りによってロクロから切離され、内面がヘラミガキと黒色処理されているものがある。高台は付け高台である。

甕:甕は口縁部が外反し、器高がいずれも口縁部より大きい。口縁形態によって次の3類に分類される。口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端が丸味をもつものを第1類とする。第1類は内面が刷毛目調整され外面がロクロ調整されているもの（第1ａ類）、内外面ともロクロ調整されているもの（第1b類）に細分される。

口縁部が大きく外反し、口縁端が立ちあがるものを第2類とする。第2類は内外面ともロクロ調整されている。

口縁部が鉢状に外反し、口縁端が肥厚するものを第3類とする。口縁部破片が1点あるのみなので全体的な器形はわからない。口縁部から判断すると第1・2類に比べ厚手で大形の甕と思われる。

須恵器

坏:坏は破片が多く、全体の形態が判明するものは少ない。器形の判明するものは器高が口縁部径の$^{1}/_{2}$以下で、体部は内彎気味である。口縁端は僅かに外反気味になる。ロクロからの切離しは回転糸切りで、その後の再調整は行なわれていない。

甕:甕は実測図を作成できたものが2点のみである。両者とも口縁および頚部が僅かに外反する大形の甕で、口縁端の肥厚するものがある。体部上半はいずれもロクロ調整が行なわれているが、体部下半はタタキ目やヘラケズリが観察される。

その他の土器

実測図を作成できたものは1点のみであるが、破片資料においても次のような共通した特徴をもつ。明黄褐色をした坏で、ロクロから切離した後、内面および外面が再調整されていない。ロクロからの切離しは回転糸切りである。

（出土土器と住居跡の年代的位置）

以上の土器の中で、土師器は製作の段階でロクロが使用されるという特徴を持っている。このような土師器は東北地方における土師器の編年において、表杉ノ入貝塚出土資料（加藤:1954）を標式として設定された表杉ノ入式－第七型式（氏家:1957）として理解される。すなわち、平安時代のものと考えられる。第12住居跡のカマド（煙道部）や床面から出土している須

第49表　平安時代の土器分類表（第12～14住居跡出土土器）

- 土師器
  - 坏
    - 第1類（ロクロからの切離し後、外面が再調整されるもの）
      - 第1a類（体部下端・底部全面に手持ちのヘラケズリがある。）
      - 第1b類（底部全面に手持ちのヘラケズリがある。）
      - 第1c類（底部周縁に手持ちのヘラケズリがある。）
    - 第2類（ロクロからの切離し後、外面が再調整されない。切離しは回転糸切り。）
    - ※坏の内面は再調整としてヘラミガキと黒色処理が行なわれている。
  - 高台付坏
  - 甕
    - 第1類（口縁部が「く」の字状に外反するもの。）
      - 第1a類（外面ロクロ調整。内面刷目調整。）
      - 第1b類（内・外面ロクロ調整。）
    - 第2類（口縁部が大きく外反し、口縁端が立ちあがるもの。内・外面ロクロ調整。）
    - 第3類（口縁端部が肥厚する大形甕。内・外面ロクロ調整。）
- 須恵器
  - 坏（ロクロからの切離し後、外面が再調整されない。切離しは回転糸切り。）
  - 甕（口縁端部が肥厚する大形甕。内・外面ロクロ調整。）

その他の土器　坏（内・外面ロクロ調整。ロクロからの切離し後、まったく再調整されない。切離しは回転糸切。）

恵器の甕も坏も、これらに伴うものと考えられる。

この中で、その他の土器として分類した坏は、回転糸切りによってロクロから切離しされた後、一切再調整が行なわれていない。色は明黄褐色をしている。この種の土器はかって、広い意味での土師器と考えられていた（氏家:1957、桑原:1969）。その後、多賀城跡調査の成果を中心として、内面がヘラミガキされていないこと等から須恵器の系譜を引くものとする見解（多賀城跡調査研究所:1970、工藤、桑原:1972）があらわれた。さらに、多賀城跡第15次調査（多賀城調査研究所:1972）では、第6層（11世紀初頭と推定される灰釉の長頸瓶を出土）とその上位の層において認められ、その下層からは出土していないという。

この種の土器が広い意味での土師器の中に含まれるのか、それとも須恵系の土器として理解されるべきものか、西野田遺跡の資料では明確にすることはできない。それでも、この種の土器が第12住居跡から発見されておらず、第13・14住居跡においてみられるということは、多賀城跡第15次調査の成果と考えあわせる時、興味深いものがある。多賀城等のような官衛跡と一般の集落跡を同列に扱うことはできないにしても、表杉ノ入式の土師器において、この種の土器を共伴するものと共伴しないものとでは、時期的な差が存在する可能性がある。しかし、それは土師器の坏および甕の両者において、第12住居跡と第13・14住居跡のものでは大きな違い

は認められないことから、表杉ノ入式の土師器が消費された時期の中での出来事と思われる。

このような問題を考慮しながら、第12～14住居跡の年代について考えてみると、表杉ノ入式期もの（平安時代）と一括されながらも、第13･14住居跡は第12住居跡よりも新しい可能性がある。

住居跡の年代に関して、現在のところ、これ以上細分することはできない。それでも、第13・14住居跡が同時存在か否かまったく不明である。この点に関しては、各々の住居跡の説明や住居廃絶後の部分で、どの土器が住居使用時にもっとも近い関係にあるかを示しておいたので、今後の土器研究の進行とともに再検討されるべきものと思われる。

Ⅴ　表土および低地から発見された遺物に関する問題点

遺構とそれに直接関連する遺物（特に遺構の年代決定）については「Ⅳ、遺構とその出土遺物に関する問題点」で既に述べてある。その中で、弥生土器や時期を明確にすることができなかった石器については触れなかった。この他に、西野田遺跡では表土・低地・土塁下遺物包含層から各時期にわたる遺物が少量ではあるが出土している。これらの遺物は出土状態が良好でないため共伴関係を十分に指摘しうるものではない。しかし、遺跡の歴史的な過程を考える上でそれなりの意義を持つものである。したがって、ここではこのような遺物を一括して検討し、その中に含まれる問題点について考えてみたい。

1．土器

（縄文土器）

縄文土器は文様の判明するものが2点だけ出土している。第40図5のように胎土に多量の繊維を含み組紐が回転施文されている土器は平田原貝塚（宮城県塩釜女子高等学校社会部：1969）や今熊の遺跡（宮城県教育委員会：1973）から出土しており、大木1式土器の範ちゅうの中で理解されている。

第40図6は宮城県内での良好な報告例には欠けるが、注口土器の体部下半に平行線による磨消縄文がある等岩手県雨滝遺跡（芹沢：1960）における大洞C_2式期の土器と共通する特徴をもっている。

（弥生土器）

弥生土器は台地上の表土を中心として、低地や土塁下の遺物包含層から出土している。この他、住居跡等からも出土しているが、いずれも住居廃絶後に流れ込んだものである。そのため、住居跡内堆積土の中で層位的に分類することによって相互の年代的関係を指摘することができない。さらに、小破片が多いことから器形と文様の関係についても十分明らかにすることができなかった。このような事情から主として文様の特徴によって分類したい。その後、分類されたおのおののものについて、現在までの弥生土器研究成果と比較し検討を加えることにする。

今回、発見された弥生土器は次の16類に分類される。

第1類：太い沈線によって文様が描かれるもの。文様として変形工字文・弧線文・平行沈線文等がある。

第2類：平行沈線間に縄文の認められるもの。

第3類：ヘラ描きの沈線で幾可学的な文様を描いているもの。文様として、平行沈線文・連続山形文等がある。

第4類:口縁部が強く屈曲し、頚部に横走する列点文のあるもの。

第5類:細いヘラ描きの沈線で、平行沈線文、三角文、同心円文を描いているもの。

第6類:口縁部が強く屈曲し、頚部に稜絡文、、縄文の末端変化等が認められるもの。

第7類:幅のせまい（2～3㎜）平行施文具によって文様を描いているもの。文様として、三角文・連弧文・波状文等がある。

第8類:口縁部文様帯下端に撚糸圧痕の認められるも.の。

第9類:肩部に幾段かの綾絡文が施文されているもの。

第10類:口縁部にヘラ描きの単沈線によって連弧文や八字文を描いているもの。

第11類:縄文施文後に横および弧状の沈線文を描いているもの。

第12類:口縁部文様帯として、文互刺突による波状浮線文をもつもの。

第13類:口縁部下端に指頭状の圧痕が加えられ、複合口縁化されているもの。これは複合口縁に外面的な形態としては近いが、成形という点では十分明らかでない。

第14類:口縁部に横位の刺突列点文が認められるもの。

第15類:口縁部に縦位の縄文を施文し、その下に横位縄文・撚糸圧痕を施文しているもの。

第16類:口縁部文様帯に縄文や撚糸文を施文しているだけのもの。複合口縁をなすものが多い。

次に以上の土器群を現在までに公表されている資料と比較し、編年的に位置づけてみたい。

第1類のような変形工字文がさらにくずれた文様は角田市鱸沼遺跡出土土器（志間：1972）に見いだすことができる。このような文様をもつ土器は大泉式土器（伊東：1960）として理解されている。第2類としたものは脚部破片であるが、これも大泉式土器の範ちゅうに含まれるものと思われる。

第3類とした沈線による連続山形文は桝形式（伊東:1650）よくみられる文様であることから、桝形式として位置ずけられる。

第4類の甕は頚部に列点文をもつことから桝形式（伊東:1950）に相当するものと思われるが、鱸沼遺跡（志間:1971）では大泉式にも伴っている。

第5類の細いヘラ描き沈線による幾可学的文様は柴田郡村田町円田出土の長頚壺を標式とする円旧式（伊東:1960）の文様と共通する。第6類の甕は柴田郡蔵王町大橋遺跡（藤沼:1971）や福島県郡山市福楽沢遺跡で第5類とした円田式土器に伴って出土している。

第7類とした幅の狭い平行施文具によって文様が描かれているもの、第8類とした頚部に撚糸圧痕の認められるものは、塩釜市崎山囲洞窟（伊東・伊藤1962）・山形県七浦遺跡出土のものと類似しており、福島県原町市桜井遺跡出土土器を標式として設定された桜井氏（伊東・1955）に比定される。なお、この型式の土器は十三塚式（伊東:1960）とも言われている。

第50表　弥生土器の分類とその出土地点

分　類	出　土　地　点　（図）	土器型式
第１類	第５住居跡（第12図８）、第６住居跡（14図２）、第11住居跡（第22図５）、土墓下遺物包含層（第40図1･2･4）、ＤＴ－31区（第40図11）、ＣＭ－11区（第40図12）地区不明（第40図７～10）	大泉式
第２類	地区不明（第40図13～17）	
第３類	ＤＯ－42区（第40図18・19）	桝形式
第４類	土墓下遺物包含層（第37図5.6）東側低地（第39図２）	
第５類	第５住居跡（第12図９）、第11住居跡（第22図６・７）、ＦＯ－21区（第40図20）	円田式
第６類	東側低地（第39図３）、ＥＥ－35区（第40図21）	
第７類	第２住居跡（第６図５）、第３住居跡（第８図６・７）、第５住居跡（第12図10）、第６住居跡（第14図3･4）、第11住居跡（第22図8･9）、ＣＣ－10区（第40図25）、ＣＥ－10区（第40図24）、ＣＫ－8区（第40図22～23）、ＤＯ－42区（第40図27）、ＤＳ－38区（第40図26）、地区不明（第40図28）	桜井式
第８類	第６居跡（第14図５）	
第９類	第３住居跡（第８図11）	天王山式
第10類	第３住居跡（第８図8･9）、第６住居跡（第14図6）、ＣＦ・Ｇ－８区（第40図31）ＣＫ－12区（第40図32）、ＣＫ－47区（第40図33）、ＤＲ－28区（第40図29）、ＥＡ－30区（第40図30）	
第11類	第２住居跡（第6図6）、ＣＡ・Ｂ－10区（第40図36）、ＣＣ－20区（第40図35）、ＣＧ－９区（第40図37）、ＣＩ－15区（第40図38）、ＤＱ－34区（第40図34）	
第12類	第６住居跡（第14図7～9）、第11住居跡（第22図10）、ＢＴ－14・15区（第41図1）、ＣＦ－10区（第41図７）、ＣＥ－８区（第41図５）、ＤＴ－30（第41図６）、ＥＡ－30区（第41図３・４）、地点不明（第41図２）	
第13類	第３住居跡（８図10）、ＣＧ－８区（第41図11）、ＣＨ－10区（第41図12）ＣＫ－12区（第41図10）、ＣＫ－13区（第41図９）、ＥＡ－30区（第41図８）	
第14類	ＣＣ－８区（第41図15）ＣＩ－５区（第41図14）、ＤＫ－32区（第41図13）ＤＰ－22区（第41図16）	
第15類	ＢＴ－14･15区（第41図19）、ＣＡ・Ｂ－16区（第41図20）、ＣＣ－14区（第41図17）ＣＥ－10区（第41図－18）、ＣＧ－12区（第41図21）	
第16類	第６住居跡（第14図10・11）、第11住居跡（第22図11･12･13）、ＣＡ・Ｂ－10区（第41図26）、ＣＨ－10区（第41図22）、ＤＡ－11区（第41図25）、ＥＡ－30区（第41図23）地区不明（第41図24）	

第9～16類①口縁部文様帯にヘラ描き沈線による連弧文や平行沈線がある、②交互刺突文もつ、③複合口縁状に口縁部を肥厚させたり、複合口縁となるものが多い等、天王山式土器に併行するものとして一括される。しかし、これらの中には福島県天王山遺跡出土資料（坪井:1953）に認められないものも含まれている。県内では天王山式土器に併行するものとして、大橋遺跡（藤沼:1971）や岩出山町内の遺跡群から出土した資料（興野:1970）等が報告されている。これらの資料は量的にも少なく、そのほとんどが破片であるため、器形と文様の関係や器形の組合せ等、その内容が十分把握されているとは言い難い。したがって、西野田遺跡におけるこのような資料が（天王山遺跡出土資料に認められないもの）地域的なちがいによるものか、時期的なちがいによるものか、現段階でははっきり述べることができない。

以上のように、西野田遺跡出土の弥生土器は量的に少ないけれども、大泉式から天王山式まで弥生時代全般にわたっていることが判明した。それを各類ごとに出土地点を示したのが第50表である。この表を見てもわかるように、第1類とした大泉式土器は土塁下の遺物包含層に多く、第9～16類とした天王山式土器は東側台地の東部を中心として分布している。また、台地上には各時期にわたるものが僅かずつ認められる。

この他に杓子形の土製品が東側低地から出土している。これは器形が特殊であり、文様も他の弥生土器の中に共通するものを見い出すことができないためどの時期に属するのかわからない。ただ、同じ層から桝形式（第4類）や円田式（第6類）が出土しているので弥生時代のものと考えることに誤りはないであろう。

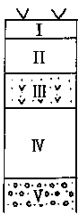
（土師器）

土師器で実測図を作成できたものは第40図3に示した高坏の脚部と第39図4に示した内面黒色の坏である。前者は脚部の形態から塩釜式（氏家:1957）のものと考えられる。後者は製作にロクロを使用していることから表杉ノ入式（加藤:1954・氏家:1957）の土師器と思われる。

2. 石器

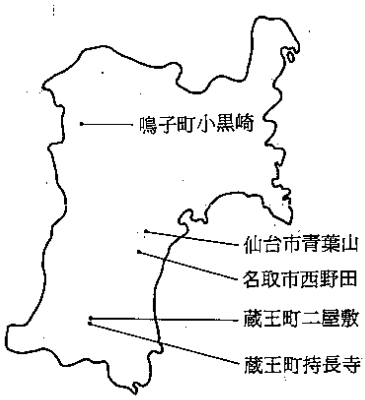
（旧石器）

第42図に示した資料はいづれも表土層から出土した石器であり、その層位的な出土位置については言及し、編年的な問題まで述べるには困難である。通常、石刃やナイフ形石器は後期石器時代に位置づけられているものであり（芹沢：1969）、関東地方で立川ローム層上の上部にみとめられる石器である。本遺跡の台地も、第50図の柱状図に示したように火山灰が堆積している。1層は表土及び弥生時代以降の包含層。Ⅱ層は明褐色の火山灰層。Ⅲ層は黄色の浮石層。Ⅳ層はにぶい褐色の火山灰層。Ⅴ層は安山岩、砂岩などを含む礫層である。



第50図

名取市付近の地形・地質は、すでに中川氏等によって研究されているが、それによると、本遺跡の火山灰層は名取市愛島十三塚付近（本遺跡より東南1.5km距離）を標準地とする愛島火山灰に対比されるものと推定される（中川・小川・鈴木:1960）。しかしながら、この愛島火山灰におおおれている愛島段丘は、それによると関東地方の下末吉段丘に対比されていて、今回出土した石器の年代と火山灰層の対比が、この点くい違いを生じてくる。この相違については、出土した石器も確実に火山灰層内からのものと言えないので、その火山灰層の年代と石器との関係は言及することができない。



第51図　県内出土ナイフ形石器の分布

今後、考古学、地質学的な報告からこの付近の火山灰層の細分・対比を検討すべきであろう。

なお、県内で報告されているナイフ形石器は蔵王町二屋敷跡・同持長地遺跡（宮城県教育委員会:1971）、仙台市青葉山遺跡（宮城県教育委員会:1970）、鳴子町小黒崎遺跡（興野:1959）、の各遺跡1例であり、本遺跡を含めて5例となった。しかしながら本遺跡のように、明確に切り出し状に整形されている例は報告された資料に限れば県内では初めてである。

（縄文時代以降の石器）

石器群の特徴について

縄文時代以降と思われる石器に関して、その形態的特徴・製作技術、使用および破損の状態石材についてまとめると次のようになる。

石鏃:7点出土した。石材は黒燿石・頁岩・チャート・安山岩と様々なものが使用されている。いづれも破損しているが、その形状が判断できるものは有茎石鏃である。

石匕:縦形2点、横形1点石材は頁岩・流紋岩である。いづれも平坦な打面を頭部に残し、その付近につまみを作り出している。ｂ面の主要剥離面には、つまみ以外にほとんど調整剥離をしていない。

削器：10点出土した。石材はチャート・頁岩・石英が用いられているが、安山岩・流紋岩は使用されていない。形態的には定形的なものほなく、剥片の一縁をこまかな調整剥離した程度の削器が多い。刃部の形状は直線刃・外彎刃が大部分で、一部に第43図15のように鋸歯状を呈するものや、第43図13のような全周縁に刃部をもつものもある。石器自体いたみがひどく、刃部が調整によるか、破損によるかは不明な例もある。

剥片類:（大きさ）長さは打面の両端をむすぶ線分におろした垂線に、剥片の上下両端を投射してえられたもの。幅は剥片の左右両側でもっとも飛び出した部分に打面からおろした垂線のあいだの距離によって得られたもの（林:1970）。それによると長さは3～7cm大で、3～

5cm大のものが多い。幅は2～6cm大で、2～5cm大のものが多い。ただし第45図11のように安山岩製の大形の剥片もある。長さと幅の比は2:1を越えるものは1点のみで、逆に1:2を越えるものはない。したがって、本遺跡出土の剥片の大きさは2～7cm程度で、特に形状が縦長・横長剥片というものはあまりみとめられない。厚さについては0.6～1.5cm程度が通常の大きさである。

（打面と打角）打面はそこに数枚の剥離面を残す調整打面、平坦な一枚の剥離面しか残さない平坦打面、自然面を残す自然面打面との三種類に分けてみた。そのうち平坦打面が$^{2}/_{3}$をしめ、残りを調整・自然面がほぼ同数をしめる。打角は加撃点から剥片の末端におろした直線と、打面の前後端をむすんだ直線との角度によっている（林:1970）。また打面が有っても、小さくて測定不能なものもあった。打角は90～130度にまたがり、100～120度台に集中する。

（剥片の使用痕）剥片の縁辺に小さな傷、あるいは細かな剥離痕が観察される例がみられる。これらは石器自体が風化した色調と同色をしめしており、あきらかに新しい破損とは区別できる。当時の事故による破損でない限り、これらは使用によって生じた刃潰れと推定できる。剥片は二次的に加工されてのみ用いられるのではなく、むしろ第一次剥離によって生じた鋭利な縁辺をそのまま刃部として使用された場合も多かったであろう。

石核:量的には少なく、7点が出土した。第44図14の石核は剥片が石核から剥離される過程を知るうえで興味ある資料である。上部に平坦な打面を設け、そこから順次に表裏から剥片を剥取している。またそれ以前にも下端を打面として剥片を剥取しており、打面を下端から上端に転位したものであろう。

磨製石斧:大型蛤刃石斧が3点、扁平片刃石斧が1点出土した。その他に形状の不明な石斧の破片が1点ある。大型蛤刃石斧2点は破損はしているものの、形状や刃部状態はその特徴がよくでている。扁平片刃石斧は破片であるが、刃部や側辺にみられる稜から、それと推定した。

石庖丁:3点出土した。いづれも外彎半月形態で、刃部は両刃である。石材はスレートが用いられている。1点は完形品であるが、その大きさは長さが22cmと長大である。他の一点は途中で折れてしまってその形状は不明。その他破片が1点ある。

石鏃:扁平な原石を素材とし、縁辺に粗い剥離を施した大形の打製石器を形状から石鏃として扱った。大部分破損し形状の不明なものが多いが、第45図6は完形品でその形態がうかがえる。撥形を呈し、刃部が部厚く、重量感がある。石材は安山岩・粘板岩が用いられている。石器自体風化がすすみ、色調は灰黄色を呈す。ほとんどめ刃部は、使用による潰れ、磨滅が著しい。また石器の両面の中央部に擦疲が走っている例もある。

敲石:4点出土した。円礫の一面に敲打によると推定される凹凸がある石で、その機能については不明なものである。

磨石:3点出土した。円礫の一面に扁平なすり面をもつ石器で、いづれも破損している。

凹石:2点出土した。円礫の両面に凹面をもつ石器が1点、完形のままで発見された。凹は回転運動によって生じたものと推定されるが、なにぶん風化が著しいので断定できない。

石皿：2点出土した。破損品であるが、その形状や磨面から石皿として使用したものと考えられる。

砥石:2点出土した。いづれも第13住居跡から出土した。平安時代の住居跡である。

石器群の時期と特性について

以上で述べた石器について所属時期、その特性等を検討してみたい。これらの石器は表土層から発見されたものが多いため、時期を決定することが困難な資料と言える。また、古墳時代の住居跡（第1～11住居跡）から出土した石器についても堆積土中に弥生土器の混入が著しいためその所属時期を明確にすることができない。その中で、第13住居跡から出土した2点の砥石だけは平安時代以外の遺物が混入していないことから、住居跡とほど同時期のものと考えて差しつかえないと思われる。

このように、出土状態によって時期を限定できるものは砥石だけである。この他の石器については縄文時代から平安時代までの時間的幅で考えなければならない。そこで、次に形態的特徴を検討し他の遺跡の資料と比較する方法をとりたい。形態的に時代を限定できる石器として、石庖丁・大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧等がある。

これらは弥生時代に特有な石器である。これらに共伴するすると考えられる石器としては、石鏃・石匕・石鍬があげられよう。特に石鍬は南小泉遺跡出土の例と類似している（伊東1950・伊藤:1967）。石鏃は東北地方で弥生時代に伴うと考えられているアメリカ式石鏃は本遺跡においては発見されず、むしろ凸基有茎式石鏃であった。

また、石ヒ・削器・剥片・石核・敲石・磨石・凹石・石皿などについては、出土した縄文土器が前期大木1式1点、晩期大洞C_1式1点の計2点だけであり、これらに伴ったものとすることは困難と思われる。この点、弥生土器の出土が比較的豊富であることを考えると、これらの石器類についても断言はできないが弥生時代の石器組成の一部である可能性が強い。

弥生時代の土器は一様に大泉式～天王山式と中期～後期にわたって発見されているが、これらの石器等がさらに細分化され、どの時期に限定されるかについては不明な点が多い。

Ⅵ　遺跡の構成

今回の調査によって西野田遺跡から旧石器時代～平安時代の遺物が出土した。この中で、住居跡等の遺構が発見されたのは古墳時代と平安時代のものに限られる。それ以前のものは遺物は発見されているが明確な遺構をともなっていない。

旧石器時代・縄文時代

旧石器と推定されるものは2点確認されている。縄文土器は大木1式と大洞C_2式土器片が各々1点ずつ発見されている。これらの遺物は量的にも極めて少なく、表土から出土したものであるため遺跡との関係を十分明らかにすることができなかった。

弥生時代

弥生土器の発見はそれ以前のものと較べると比較的多い。大半は台地上の表土から発見されたものであるが、その他古墳時代の住居跡、低地の遺物包含層等からも出土している。弥生土器に伴なうと考えられる石器も多く、石庖丁、大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石鏃等が出土している。このような遺物の豊富さは、住居跡の発見こそないものの、当時の人々が西野田遺跡において生活を営んでいた可能性を指摘するのに十分である。具体的な居住の場が今回の調査範囲外の部分にあったのか、それとも古墳時代や平安時代の段階で破壊されてしまったのか、明らかでない。しかし、古墳時代の住居跡や円形周溝の中に弥生時代の土器や石器が顕著に混入していることから見ると、この段階では未だ地表面にかなり弥生時代の遺物が散乱していたのではないかと考えられる。この点、平安時代に属する住居跡では弥生時代の遺物の混入はほとんどみとめられない。

古墳時代

（住居群と円形周溝）古墳時代前期のものと考えられる住居跡が11軒、円形周溝が2基発見されている。これらは塩釜式期の終末までに埋まりきってしまったと考えられるが、すべて同時存在と見るわけにはいかない。それでも、遺跡における住居の占める場というものにかなり共通した特徴が認められる。すなわち、西側台地では台地中央部とその北側に9軒の住居跡（第2～10住居跡）が発見されたが、南側斜面では1軒も検出されていないのである。塩釜式期の住居跡が検出されなかった南側斜面には円形周溝が2基ならんでいる。東側台地においてもこの時期の住居跡が検出されたのは台地中央部から東端の部分にかけてである。

このように西野田遺跡では住居群の営まれた「場」と円形周溝の構築された「場」に顕著な相違を見せており、それが重なるということはない。円形周溝が墓であるか否か明確ではないが、住居群より僅かに離れた低い部分に構築されされているということは様々な問題を提起することになろう。その中にはこの円形周溝が西野田遺跡の住居群と直接関連をもったものなのか、それとも他の集落と関連を示すものなのかという問題も含んでいる。

（西野田遺跡と古墳時代開始期の様相）仙台平野において古墳が築造されはじめる前後の政治的･経済的状況は十分明らかではない。今熊野遺跡の発掘調査、宇賀崎1号墳の発掘調査、高館山古墳の確認作業を通して墓制の変化がおぼろげながらとらえられはじめてきている。しかし方形周溝墓から方墳もしくは前方後方墳への変化が大筋としては正しいとしても、その変化が単純に行なわれたと見ることは出来ない。そのための内的条件と外的条件を整理しながら考えてみる必要がある。仙台平野における内的条件の問題として、今熊野遺跡の調査がもたらした成果は大きい。未だ調査資料の整理が完全に終っていないのではっきりしたことは言えないが、塩釜式期における集落と墓制の歴史的変化の過程を知る上で極めて示唆的である。今熊野遺跡では塩釜式期の住居跡群と方形周溝墓群が発見されている。方形周溝墓は住居跡群に近接しているものもあるが、その他は僅かに高い地点に位置している。住居跡群から離れているものは規模の大きいものが多い。弥生時代以降の墓制の変化は当時の政治的状況の変化を象徴的に表現するものであるが、そのような変化を経済的基盤となる集落とともに理解することが大事であることを教えてくれる。西野田遺跡の場合、2基の円形周溝と住居群が直接関連するものか否か明らかでない。しかし、古墳時代開始期における個別的な集落のあり方を検討することは時代の背景を考える時量要な意味をもつものと思われる。

（西野田遺跡の集落－住居と住居群）塩釜式期として一括された11軒の住居跡群は住居廃絶後の埋まり方によって3つの時期に細分される可能性がある。3つの時期に細分された時の住居の数を検討すると第Ⅰ（タイプ）期3軒、第Ⅱ（タイプ）期3＋1?軒、第Ⅲ（タイプ）期3＋1?軒となる。これを住居の構造上の変化としてとらえると、住居平面形および柱穴配置の形態が円形から形を基調としたものへという変化をたどっていることを指摘できる。また、住居内の施設として貯蔵穴状ピットの設置されないもの⟶浅い貯蔵穴状ピットの設置されるもの⟶深い貯蔵穴状ピットの設置されるものという変化も併せて指摘できそうである。次に、これらの住居跡について各々の形態差の他に大きさのちがいについて検討してみたい。第Ⅲ（タイプ）期の住居跡群の中で第1住居跡は僅かに時期が逆のぼる可能性があるため比較の対象から外し、第4、第5、第10住居跡について考えてみたい。これらはいずれも方形を基本とした住居跡であるが規模を比較すると第4住居跡が画然とした大きさをもっている。規模の面でこのような傾向が認められるのは第Ⅱ（タイプ）期の住居跡群である。第Ⅰ（タイプ）

期の住居跡群ではこのような規模の面で顕著なちがいは認められない。
現在の段階では住居跡群の同時存在について十分に説明できるような決め手がない。従って、ここでとった出土土器と埋り方を基準にした時期の細分という方法はこの点十分なものでない。それでも一つの傾向として次のことは言えそうである。

1、西野田遺跡で塩釜式期として一括された住居群は3つの時期に細分して考えることができる可能性がある。

2、3つの時期に細分した場合にも住居群は台地の南斜面には営まれず、いずれも中央部とその北側に占地している。

3、細分された立場で見ると各期における住居数はいずれも3〜4軒であり、小規模な集落であったと考えられる。

4、住居の形態は円形を基調としたものから、方形を基調としたものに変化する。

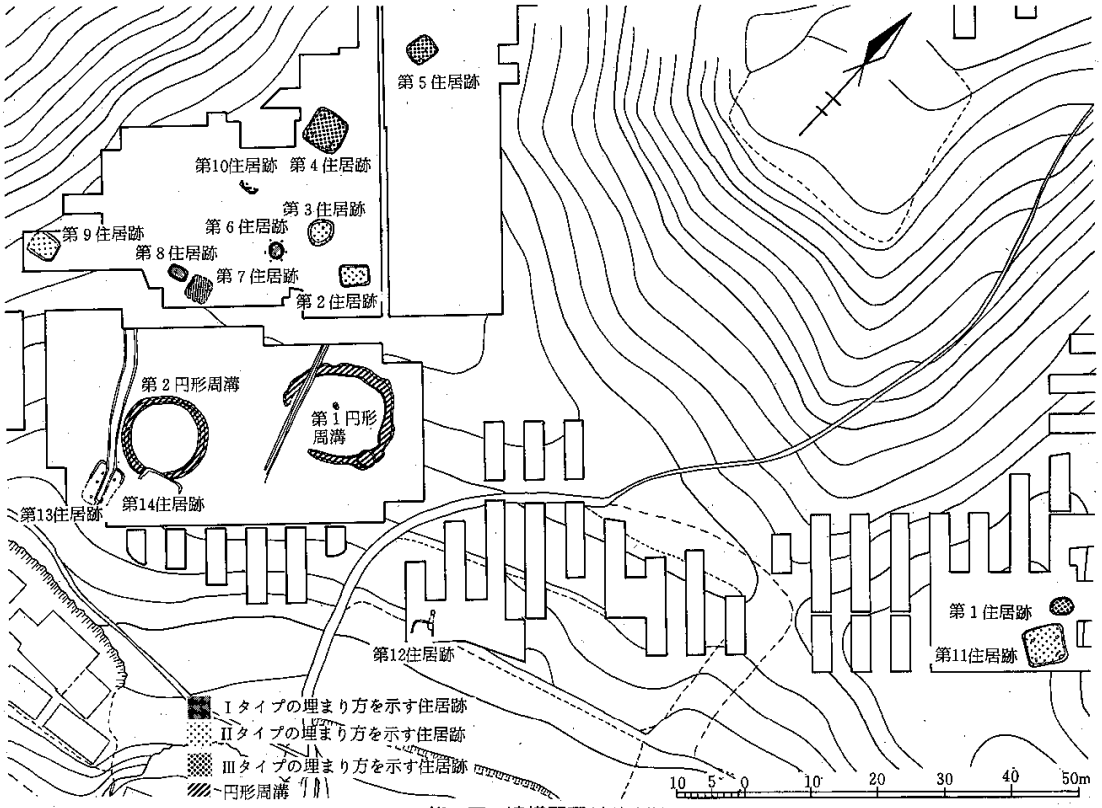
5、第Ⅱ（タイプ）期以降住居群の中で特に規模の大きい住居が出現する。

平安時代

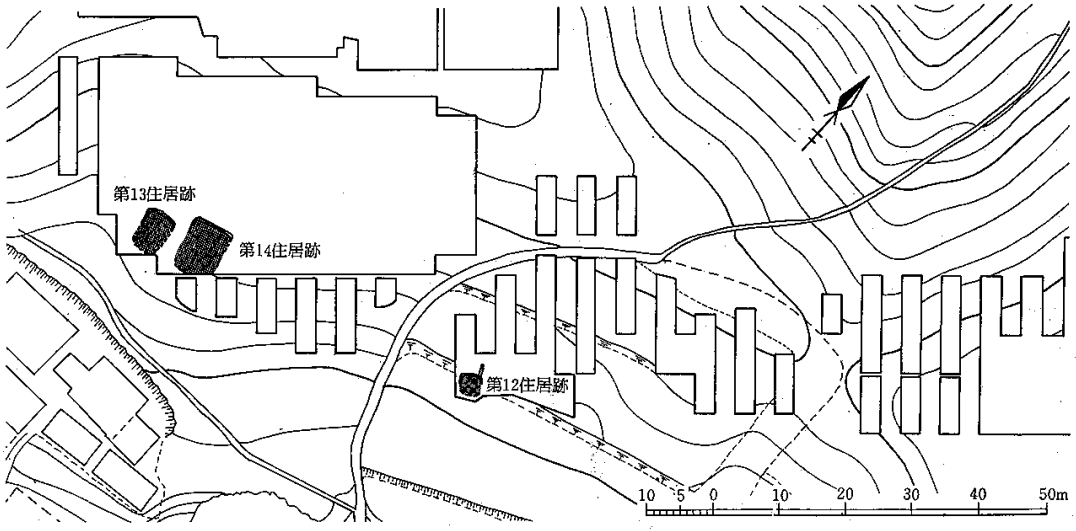
南小泉式から国分寺下層式までの土師器は検出されていない。この期間は台地上において人間の活動が中断されたものと思われる。再び西野田遺跡において活動が開始されたのは、土師器製作にロクロが導入された平安時代である。この時期の住居跡は3軒発見されただけであるが古墳時代のものと比較すると占地の上で極めて大きなちがいが認められる。古墳時代の住居跡が台地の中央部とその北側にのみ発見されたのに対し、平安時代のものはいずれも南側斜面につくられているのである。この階段で台地の中央部がどのように使用されたのか明らかでない。

平安時代の住居群は出土遺物によって前半のものと後半のものにわけられる可能性がある。

前半のものは平面形が隅丸方形で、堀り抜き式のカマドが設置され貼り床が行われている。規模も小さい。後半のものは規模の大きい長方形で、柱穴が長方形に配置されている。カマドは不明確で貼り床も行なわれていない。このように平安時代の住居群は台地上における占地の仕方という意味で前半と後半のものは一致するが、構造的には大きな変化を示すと考えられる。



第52図　遺構配図(古墳時代)



第53図　遺構配図(平安時代)

Ⅶ　まとめ

最後に今回の調査によって明らかとなったことをまとめておきたい。

1、西野田遺跡は高館山丘陵から東側にのびた野田山丘陵（台地）に立地している。この野田山丘陵は第三系鮮新統の竜ノ口層と増田礫層を基盤とし、その上が第四系の火山灰層におおわれている。

2、遺物包含層は確認できなかったが、旧石器がのもと推定されるナイフ形石器と石刃が各々1点づつ出土している。この付近が旧石器時代においても生活の舞台であったことが判明した。

3、縄文土器が2点出土している。

4、弥生時代の土器や石器が古墳時代の住居跡と低地の遺物包含層から出土している。周辺にこの時期の遺構が存在した可能性がある。

5、古墳時代の遺構として11軒の住居跡と2基の円形周溝が発見された。住居跡と円形周溝は台地上における占地の仕方に相違を示している。

6、古墳時代の住居跡は塩釜式期として一括されるが、出土土器と埋まり方の相違によって3つの時期に細分される可能性がある。

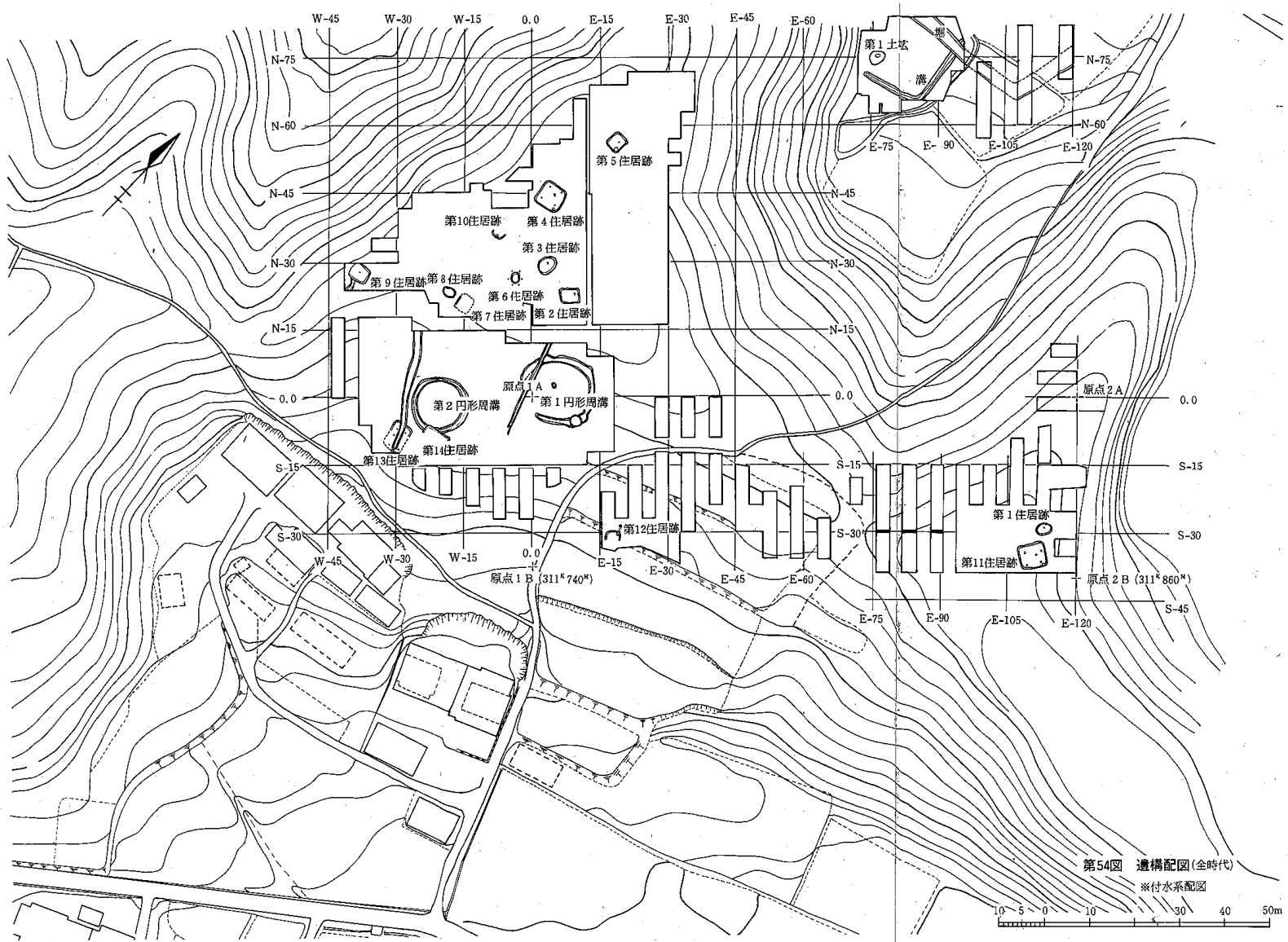
7、古墳時代の住居跡群を3期に細分した立場で考えると、1期3～4軒の小規模な集落であったと推定される。古墳時代開始期における集落のあり方を考える上で重要な資料となろう。

8、平安時代の住居跡が3軒発見された。平安時代の住居跡はいずれも南斜面に占地している。この点、台地中央部とその北側に立地している古墳時代の住居跡群との間に占地の上での相違を示している。

9、平安時代の住居跡は時期的に細分され、構造上の相違が認められる可能性がある。

10、中世に関しては不明であるが、近世と思われる遺構が低地を中心として認められた。

※今回の報告では10月20日に行なった現地説明会の資料と幾分くいちがう点がある。その点については本書が最終的な見解であることを付記したい。



第54図　遺構配図(全時代)
※付水系配図

西野田遺跡発掘調査参加･協力者名簿

1、調査協力員

宮城県名取高等学校:小野力　蔵王町立円田小学校:後藤利喜郎　多賀城市立多賀城東小学校:鈴木久夫　仙台市立上杉山通小学校:佐藤戌　丸森町立大内中学校:佐藤隆　矢本町立大曲小学校:鈴木惣之助

2：調査補助員

東北学院大学：阿部正光・高橋勇治・武山純一・門間俊彦・渋谷亨・掘込裕紀・奥山裕子
佐藤房枝・我妻智恵子・原志津・門馬敦子
宇 都 宮 大 学: 小山純
宮城県名取高等学校郷土クラブ

3、地元協力者（ア･イ･ウ･エ・オ順）

荒強・伊深治佐衛門・板橋重蔵・遠藤明・遠藤勝二・大内喜市・小野一夫・熊谷専蔵・小泉正男・昆野助三郎・佐伯吉蔵・佐伯四次郎・佐伯伝八・佐伯三男・佐藤勝則・佐藤剛・佐藤多稔夫・佐藤増吉・高橋房治・高橋義己・根深庄右エ門・松岡斉樹・板橋てるえ・板橋光子・岩崎文代・太田たけの・今野千賀・今野みつ江・松浦きよの

4、調査協力機関

名取市教育委員会･宮城県名取高等学校

以上の他、宿舎に関して板橋幸治氏御一家、その他調査に関する諸事について菅井善十郎･菅井舜治氏御一家の御協力をいただいた。厚く御礼申しあげたい。

引用･参考文献（ア･イ･ウ･エ･オ順）

ア伊東信雄（1950）：「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史』第3巻　仙台市

伊東信雄（1955）：「東北」『日本考古学考講座』第4巻　河出書房

伊東信雄（1960）：「古代史」『宮城県史』第1巻　宮城県

伊東信雄・伊藤玄三（1962）：「崎山囲洞窟遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第8集　宮城県教育委員会

伊東信雄・須藤　隆（1971）：『郡山市福楽沢遺跡発掘調査報告書』　郡山市教育委員会

伊東信雄・須藤　隆（1972）：『郡山市柏山遺跡発掘調査報告書』　郡山市教育委員会

伊藤玄三（1958）：「仙台市西台畑出土の弥生式土器」『考古学雑誌』第44巻第1号　日本考古学会

伊藤玄三（1967）：「東北」『日本の考古学』第3巻　河出書房

石川七郎（1962）：「弥生式遺物を出土した山形市七浦遺跡」『東北考古学』第3輯　東北考古学会

市川正己（1968）：「土壌調査法」『自然地理調査法』　朝倉書店

氏家和典（1957）：「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家和典（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『山形県の考古と歴史』柏倉亮吉教授還暦記念論文集刊行会

氏家和典（1972）：「南奥羽地域における古式師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号　北奥古代文化学会

尾崎・今井・松島（1968）：『石田川』「石田川」刊行会

小山正忠・竹原秀雄（1967）：『新版標準土色帖』　日本色研事業株式会社

カ加藤　孝（1954）：「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』Ⅴ　宮城学院女子大学

北村　信（1967）：『宮城県地質図』　宮城県

興野義一（1959）：「江合川流域の石器時代文化」『仙台郷土研究』第19巻第3号　仙台郷土研究会

興野義一（1970）：「宮城県玉造郡岩手山町の考古学遺跡」『岩手山町史』　岩手山町

工藤雅樹・桑原滋郎（1972）：「東北地方における古代土器生産の展開」『考古学雑誌』第57巻第3号　日本考古学会

桑原滋郎（1969）：「ロクロ土師器坏について」『歴史』第39輯　東北史学会

サ志間奏治（1971）：『鱸沼遺跡』　宮城県教育委員会・東北電力株式会社

塩野　博（1969）：「桶川町西台遺跡」『埼玉考古』第7号　埼玉県考古学会
静岡県教育委員会（1972）：『田方郡韮山遺跡』
下津谷達男（1972）：「中里遺跡」『土師式土器集成』Ⅰ　東京堂出版
白鳥良一（1971）：「持長地遺跡」『宮城県文化財調査報告書－東北白動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）』第24集　宮城県教育委員会
杉原荘介（1972）：「五領遺跡」『土師式土器集成』Ⅰ　東京堂出版
芹沢長介（1960）：『石器時代の日本』築地書館
芹沢長介（1969）：「先縄文文化」「新版考古学講座」第3巻　雄山閣
タ多賀城跡調査研究所（1971）：「多賀城跡－昭和45年度発掘調査概報－」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1970』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城跡調査研究所（1973）：「多賀城跡－昭和47年度発掘調査概報－」『宮城県多賀跡調査研究所年報1972』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所
台地研究会（1971）：「シンポジウム五領式土器について」『台地研究』第19号
玉口時雄（1972）：「土師器とその集落研究の現況と課題（下）」『日本歴史』第287号　吉川弘文館
坪井清足（1953）：「福島県天王山遺跡の弥生式土器－東日本弥生式文化の性格－」『史林第36巻第1号』　史学研究会
ナ中川・中村・大川原・穴沢・小滝（1973）：「塩川十九壇古墳群調査報告」『福島考古』第14号　福島県考古学会
中川久夫・小川貞子・鈴木養身（1960）：「仙台付近の第四系および地質」『第四紀研究』第1巻第6号　日本第四紀学会
ハ林　謙作（1970）：「第3地点第4文化層の出土遺物」『栃木市星野遺跡－第3次発掘調査報告』栃木市教育委員会
林　謙作・藤沼邦彦（1971）：「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書－東北自動車道関係遺跡調査概報（刈田郡蔵王町地区）』第24集　宮城県教育委員会
櫃本誠一（1971）：『川島・立岡遺跡』　太子町教育委員会
福島県（1964）：「考古資料」『福島県史』第6巻
藤沼邦彦（1971）：「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書－東北自動車道関係遺跡調査概報（刈田郡蔵王町地区）』第24集　宮城県教育委員会

マ増田逸郎（1969）：「桶川町入山遺跡」『埼玉考古』第7号　埼玉県考古学会
増田逸郎（1971）：「諏訪山遺跡」『埼玉県遺跡調査報告』第8集　埼玉県遺跡調査会
茂木雅博編（1972）：『常陸須和間遺跡』　雄山閣
宮城県教育委員会（1970）：『発掘された古代の歴史』
宮城県教育委員会（1973）：「金剛寺・今熊野遺跡調査概報」「宮城県文化財調査報告書」第33集
宮城県塩釜女子高等学校社会部（1969）：『平田原貝塚』
ヤ安田喜憲（1973）：「阿武隈川流域における縄文時代の自然環境の変遷と人類」『東北地理』第25巻第2号　東北地理学会